
SIGN **二章** - SeVeN's DoA -

WhiteEight

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S I G N 二 章 - S e v e n ' s D o A -

【Nコード】

N 3 2 3 8 I

【作者名】

W h i t e E i g h t

【あらすじ】

” 霊による死 ” が間近に迫っている ” サイン ” を知る事の出来る少女…優。彼女は霊のために霊を祓うことを決意する。長編アクションゴーストファンタジー！激戦の第二章！

第1話 転校生

S I G N 二章 - S e V e N ' s D O A -

第1話 転校生

「いつてきまあっす！」

9月1日(火)

今日から新学期。

夏休みは修行に明け暮れる日々であっという間だったなあ。

私の名前は白凧優。

地元の聖ヶ丘高校に通う1年生。

私には他の人にはない特別な”力”が備わっている。

一般的に言う”靈感”というものと…

さらに特殊な能力”霊による死を告げる刻印”を見ることが出来る
眼…”霊王眼”。

霊王眼は単に”死を告げる刻印”を見るだけでなく他にも特殊な能力を秘めているの。

まあ私には、他の4つの能力は100%の力を引き出せないみたいだけどね。

私の家系は代々霊と深く関わりあいがあったらしくて、こんな能力を持っているのだけれど…
どうやら一世代に一人しか受け継がないらしい。

私には亜子姉ちゃんがいるけど、この能力は持ってない。

ちなみに私の家と同様に霊と深く係わりのある家が日本各地に存在するの。

私達の住む日本は5つの土地で成り立っていて…

東部の久木、西部の飛鳥、中央部の暁に北部、奥里…最後に南部の天玖の5つ。

私達の住む地域は東部の久木になるわ。

ちなみに、

東部・久木は白凧家。
西部・飛鳥は緋土家。
中央部・暁は草馬家。
北部・奥里は九鬼家。
南部・天玖は相良家…

がそれぞれその土地の守人として今まで霊による災厄から代々守り続けてきたわけ。

聞く話によれば、この5家全部に霊王眼が伝わっていて、
霊王眼に備わっている5つの能力のうち、各家ごと特化する能力が
違うんだって。

私の家系は”霊による死を告げる刻印”を見る能力に特化してるそ
うよ。

だから他の4つの能力は本来の3割程度しか引き出せないんだって。

「やあねえ…新学期早々天気悪いなんて…これ降ってくるんじゃない
いでしょうね？」

優は曇り空を見ながら、急ぎ足で学校へ向かった。

「あら！巫女様おはよう！今日から新学期？頑張ってるね！」

商店街のオバチャンだ。

いい加減”巫女様”と呼ぶのはやめて欲しいのになあ。

照れるったらありゃしない…。

私は白凧神社の次女…

一度巫女服で神社の手伝いをしてからというものの…知ってる人は

私を巫女様と茶化すのよね…。

まあ…可愛がってもらってるから何も言えないわね…。

「よしつと…！今日も始業30分前！7時58分！」

この時間じゃ天城君はもう教室に向かったかな？

グラウンドを見ても人影はない。

まあ今日は始業式だし…初めからやってなかったのかもね。

優は教室へ向かった。

聖ヶ丘高校1 - B

「おはよー！」

久々の教室。

皆も元気そうだ。

「白風さんおはようございますー！」

「天城君おはよー！今日は朝の素振りはお休み？」

彼は天城勇。

同じクラスで、私の能力を知る数少ない人間の一人。

彼も靈感があり、霊を見ることが出来る。

この夏休みは共に修行した仲間でもある。

彼は家が元々剣術道場をやっていて、天城流の剣術の継承者でもある。

日課の素振りも、流石に今日はお休みなのかな。

「今日はちょっと、帰ってからにしようと思いましたが」

「優ー！そろそろ体育館に行くわよー！」

クラスメイトが呼んでいる。

そうだ。これから始業式だった。

それが終われば今日は終了！

雨も降ってきそうだし…今日は早めに帰りたいわ。

体育館・始業式

「…であるからして、本校の生徒らしく…」

あー…校長の話は毎度ながら長いわね…。
早く終わらないかしら。

それから10分…延々と校長は話続けた。
生徒も皆だれてしまっている。

「とにかく！健やかに明るく！新学期も頑張りましょうー！」

終わったあ…。

長すぎでしょ…。

生徒達はやっと解放され、安堵のため息をつきながら各自教室へ戻っていった。

「そういえば聞いた？うちのクラスに一人転校生が来るらしいわよ！」

「え！？そつなの！？」

教室に戻った優はクラスメイトから情報を得た。

転校生…男の子かな…女の子かな？

ガラッ！

担任の杉浦珠子先生だ。

「はい！皆席についてー！」

先生の一言で皆急いで自分の席についた。

「皆、まずは元気に出てこれて何よりよ！
夏休みは楽しめた？」

『はーいー！』

楽しめた…………。

んー…どうなんだろう私。

「今日は皆に新しい仲間を紹介するわ！
さ、入ってー！」

『おおー！』

教室がざわめいた。

「！！」

入ってきたのは見た事のある女の子だった。

「皆さん始めまして…鹿子流華^{かのこるか}…と言います。
仲良くしてくださいね」

夏祭りの日に見た少女だ…。
まさか同学年で…転校生だったとは。

近いうちに会いましょう…ってこついう意味だったのか…。

流華は優を見てニコッと微笑みかけた。

「んじゃ皆よろしくしてあげてな！

席はそうだな…とりあえず一番後ろでいいかな？」

「はい」

優の横を通って一番後ろの席に着いた。

彼女は一体…。

つい二日前…彼女に会った時言った言葉…

『気をつけてね…近いうち…この辺りは戦いの舞台になるかもしれない』

優はその言葉を思い出していた。

一体何を知っているのか…。

その後担任からの話、提出物などをして…この日は終わりとなった。

「さようならー！」

皆が下校していく。

「白風さん！一緒に帰りませんか？」

「あ、うん…」

天城君と帰りたいのは山々だけど…。
彼女のが気になる。

「ごめんなさい…ちょっといい？」

！

彼女の方からコンタクトを取ってきたか…。

「天城君…ごめん。」

今日は先に帰ってて

「え…？…あ、はい…わかりました」

勇は不思議そうな顔で教室をあとにした。

「…さて…あなたも話があるのかもしいけれど、私にも聞きたいことがあるわ」

「そうね…。ここには私とあなただけ…。でもどうせなら上で話をしない？」

上…？

「屋上」

彼女に言われるまま、優は流華と二人で屋上に向かった。

「さあ…「ここならもういいでしょ！あなたは何者なの！？」
なんで私を知ってたの？この辺りが戦いの舞台になるってどうい
う事なの？」

「ふふ…そう慌てないで…白風さん」

ゴロロ…

遠くで雷の音がしている。

どうやら雨が降ってくるようだ。

雨雲が漂っている。

「慌てるわよ。見てわかるでしょ？」

雨が降ってきちゃうわ」

「白凧さん…あなたが使える人材か…見極めさせてもらおう」

は!?

「じ、人材…？」

ザワツ!!

一瞬にして辺りに奇妙な雰囲気漂った。

「これは…霊気…」

しかも強い…!!

霊気が見えるようになって一層にそれが顕著にわかる…。
でも、邪悪な…禍々しい霊気ではない…。

つまり憑依されてるわけではないよね…。

この子…一体何者なの！？

「お手並み拝見」

ザッ！

流華は駆け出した！

迅い…ッ！

一瞬で間合いに入り込まれた！

「はッ！」

流華の回し蹴りだ！

ドガッ！！

優はそれをかわせないにしろ、なんとか腕でガードした。

「ぐっ…!」

重い…ッ!

これが…女の蹴りなの!?

今の動きも…普通じゃない速さだった。

!

見ると彼女がいた場所の地面に足型がついてる…!?
そこまでの脚力というの…!?

「いい反応ね…でも、あれくらいはかわしてほしかった…かな」

言ってくれるわ…!

ガードできたことすら奇跡的だったのに…。

てか…今の一撃で右腕が痺れた…!

「くッ…」

優は一旦引いて流華と間合いを取った。

相手は人間…霊撃じゃなくても物理攻撃で倒せる。
なら…!

「はあッ！」

「…」

肉体強化で十分ッ！！

優は流華に突進していった。

霊力を使えば、肉体の一部ないし全身を強化することも可能。しかし、永続的なものでもないし、力加減を誤ると逆に肉体を痛めつけることになる。

それゆえコントロールが難しい。

優のずば抜けたセンスで上手くこなしているだけである。

「せいやッ！！」

スカッ！

優の渾身の蹴りがかわされた！

「んなろッ！」

続け様に回し蹴りを放つ！

チッ！

今度は足先を掠めたようだ。

だが、こちらも今の2連撃で態勢が崩れた。

ここを狙われたらマズイ！

「…」

追い討ちをかけてこないで間合いを取った…？

「私の目的はあなたを倒す事ではないのよ。

あなたを試すこと…ね？」

こんの女あッ！！

なんて上から目線で嫌な事を言う奴！

「あつそ…んじゃ手加減してやんない」

優は両手に靈気を集中し始めた。

ボッ！

「これで勝負してあげる」

「へえ……炎を扱えるんだ……これはびっくり……」

両手には強力な狐火が揺らめいている。

だが靈気の充填をしていない今……恐らくこの2発を放てば、暫くは放てなくなる。

未熟な優は強力な靈撃を放ったあと、自身の靈気が酷く乱れる。

この状態では靈気を上手く練れず、強力な一撃がひねり出せないのだ。

靈気の充填をしてあれば、これは回避できる……。

が、それを行うには時間が掛かる上、集中力も要する。

動き回りながらでは、今の優には難しい。

「行くわよ!」

ドッ!

「!……」

(先ほどよりも速い……感情の高まりで能力が上がるタイプか……)

優は流華の間合いに入ると右ストレートを放った。

だが、流石に正面から殴らせてくれるような相手ではない。

攻撃を上手くはじいて受け流された。

「ハッ！！」

ドガッ！！

流華のカウンターの肘鉄が優の腹部を襲った。

「ガハッ……」

痛ッ……！

「せっかく肉体を強化しても……そんな直線的な攻撃じゃ当たりはしないわ」

「ハッ！！」

優は態勢を崩しながらも、流華に向けて狐火を放って応戦した！

「……！？」

ドッガン！

優の炎が飛んでくるとは予想していなかった流華は攻撃をかわすことは出来なかったようだ。

「ふん…馬鹿にするからよ…」

！…！？

「この程度の威力？」

「な…！？」

あの至近距離から…防御したというの！？

一瞬で…！？

「…」

（危なかった…まさかアレを飛ばしてくるなんて…）

防御が間に合わなかったら、危なかったかもしれないわね…」

流華は口ではああ言いつつも、実際はギリギリの所だったようだ。防御した自身の両手に、確かなダメージはあった。

「く…」

この子も相当に靈気の操作が上手いようね…。

それか：常に防御の靈気を纏っていたのかしら…。

靈気には2種類の属性が存在する。

攻撃属性の+と防御属性の-…と優たちは呼んでいる。

-属性の靈気を纏い、攻撃したところでそれは靈撃とはならず…靈的なダメージは与えることが出来ない。

逆に+属性の靈気を纏っていても、+の属性：つまり靈撃は防げない。

靈撃を防ぐには-の靈気属性に変化させ防ぐほかないのだ。

つまり靈撃戦ではこの2つの属性をいかに上手く…瞬時に使い分けが出来るかで勝敗が決まるというわけだ。

「あなたの力は大体わかったわ…」

「え？」

「合格よ…全てをお話しましょう」

第1話 完

NEXT SIGN…

第2話 戦いの序曲

S I G N 二章 - S e V e N ' s D O A -

第2話 戦いの序曲

「全てをお話しましょう…」

優も流華も構えを解いた。

「私は西部・飛鳥から”ある男”を捕らえるためにやってきた…緋土家の従者」

「!…なるほどね…だから私を知ってたわけね」

「ええ。本当なら直々にあなたの御自宅にお邪魔して頼みに行くのが筋ではあったのだけれど…」

「ごめんなさい…試させてもらったわ」

「別に気にしてないわ。…で、その”ある男”ってのはあなたの身内かなにかなの？」

言い方はあれだけど…どうでもいい話なら、久木を統治してるウチに一本電話して頼めば済む話…。

はるばる東部・久木まで…その家の従者が直に足を運んでくるってことは…、
つまりは自分の身内の後始末って考えるのが妥当…。

「察しいいわね。その通り…私の追っている男は緋土家の次期当
主…緋土京ひじち けい
霊王眼を有する者よ」

！

霊王眼…！？

「……まさか…」

「?…どうしたの?その顔…何か知っているの?」

優の脳裏には一人の候補が浮かんでいた。

「…その男って…背は170cmぐらいで…髪が肩ぐらいまである…
とても冷徹な眼をした男…?」

「!…特徴的にはそんな感じね…。
冷徹な眼っていうのは…主観だからなんとも言えないけど…
でもあの男の目を例えるなら…まさに冷徹な眼」

「2ヶ月ほど前に会ったのだけれど……」私と同じ眼を持つ者」と名乗っていたわ。

ふと……それを思い出してね……」

「2ヶ月前……失踪時期は大体3ヶ月前……十分可能性はあるわね……自ら霊王眼を匂わす発言をしたことも踏まえると……十中八九……緋土京……だと思っわ」

あの男……彼を捕まえる……？

あの尋常ならない強さ……思い出したくもないわね……。

「その緋土つて男は何かしたの？」

「緋土家に代々封印されし、呪物を持ち出したのだ。

一つに千人暫首センジンザンシュの呪い刀……紅雲……

これは斬殺された者の怨念や、それに引き寄せられ集まった数多の怨霊が今でも成仏することなく宿る呪い刀。

一度封印を解き放つと、周りの霊は怨霊化したり……また霊を引き寄せる効果もあるわ」

！

一時期、死を告げる刻印を大量に見ていた頃があっただけ……まさかその刀のせい……？

「もう一つ…：靈魂を封印する封呪の壺…。」

これは呪物ではないのだが、普通の靈魂から手に負えない悪靈や妖魔ですら

封ずる事の出来る特殊な壺…。」

「その二つを持ち出して失踪したわけかあ…
でも…それを何に使ったつもりなのかな？」

「彼は…人間を滅ぼそうと考えている…。」

詳しくは知らないけど…人間に失望し…

その感情はやがて怨みに変わり…次第に人類を滅ぼす事を考えるようになつていった…。」

その矢先の失踪だったわ」

随分と勝手な話ではあるわね…。」

それにしても…あの男の眼…。」

狂気の中にどこか悲しそうな光を宿した眼は…やはり何かあったんだ。

まあ何も無く滅亡願望なんて沸かないわよね…。」

「緋土京が持ち去った、二つの品…」

これがあれば彼自ら手を下す事無く、世界を混沌に導けるかもしれない。

紅雲で靈を狂気化させ、それに人をとり殺させる…。」

そうやって死ねば、また怨霊を生み…それを封呪の壺で回収…
新たな地では撒き、さらに狂気化…この繰り返しをすれば…人間を死滅に追いやる事が出来るだろうな」

「確かに…今のこの時代…負の感情が渦巻いてるから憑依もたやすいでしょうね…。」

にしても…とんでもない計画だわね…ソレ」

何が何でも阻止しなきゃ…本当に人類滅亡なんてことになりかねない…。
どんな理由があるにしろ、関係の無い人間にはいい迷惑以外のなものでもない！

「事の重大性に気づいてもらったなら話は早いわ。
私と共に緋土京の捕獲に力を貸してもらいたい」

「ええ…それはいいけど…。
でも…あなただけなの？彼を追っているのは」

「いや、素早く事を運べる人間が私だったただけだ。
時間は有するが、増援は来るから心配しないでほしい」

白凧神社

「…というわけよ」

優は亜子と茜に事情を全て語った。

亜子は優の姉で家事手伝いをしている。

強い霊気を持ち、被い師としての腕前も相当のものだ。

茜は優の祖母に当り、失踪中の優の両親に代わりこの家を支えている。

霊王眼を持ち、被い師としての腕前も亜子以上のものを持つ。

「…お願いします…白凧茜様…力を…」

流華は土下座の形で茜に頼み込んだ。

「流華殿…頭を上げてくだされ。」

我々は元は同じ血を持つ者同士…それほどに改まらずとも、困った時はお互い様じゃ。

それにこの地に危害が及ぶ可能性があるのであれば、元より黙ってはおねぬれ」

「では…！」

「うむ。私達も協力しよう。」

搜索・捕獲：全力で助力しますぞ」

「ありがとうございます！」

この子も必死なんだな。

でも…いくら能力はあるといってもこんな女の子に先陣を切って捜索させるなんて…。

「しかし…この久木の何処かにおける可能性はあったとしてじゃ…ある程度規模を狭めねば、闇雲に探してもしょうがない」

確かにそうね…。

「これは私の予想なのですが…恐らく向こうからコンタクトを取ってくるでしょうね…」

「…外れて欲しい予想じゃな…」

「…どういふこと？」

「つまり…奴が本格的に動き出せば…確実に死人は出るということよ…」

「ちょ…ッ！？そんなん待ってらんないわよ！…てか！それを阻止しなきゃいけないじゃない！」

優はいきり立って、流華の前に詰め寄った。

「…あなたの気持ちは百も承知…その上で言ってるのよ…可能性と
して」

「とにかくじゃ…ここで言い争っていても仕方が無い。

明日から探りを入れてみるさ…私と優であれば、刻印を見ることが出来るし、

手がかりに繋がるかもしれないし…死に瀕してるならば救えるかもしれない」

「…うん。そうだね…」

今は出来る事をしよう。

しかし、優たちの思惑はすぐに打ち砕かれることになる。

『男性は何か鋭利な刃物でバラバラに殺害されており、
現在身元を確認すると共に、凶器の判別と探索、目撃情報の聞き
込み、犯人の捜索を進めて行くとの事です』

「なによ…これ…聖ヶ丘って…ここじゃない…」

優は朝のニュースを見て愕然とした。

犯人はまだ見つかってない…現在も逃走中…。

「考えたくはないが…昨日の今日じゃ…。
案外敵は近くにおるのかもしれないのう」

「優…あなたも十分に注意するのよ…。
緋土京がこの殺人犯であるのか、別なのかはわからないけど、ど
ちらにしよ軽率な行為はやめなさい」

亜子がいつになく真剣に優に言った。

「わかった…」

今日も昨日の晩から降り続く雨のようだ。
かなり強く降っている。

「はあ…なんか天候も合わさって憂鬱な気持ちだわ」

もしかしたらこの辺りに殺人犯が隠れてたり…。
いやいや…考えすぎよ。

でも、細切れにして殺すなんて…とても普通には思えない…。
異常だわ…。

ポンッ

「ぎゃあああああああああッ！！」

「な、なんだよ…！？びっくりした…」

優の肩をそつと叩いたのは2年の須藤彰だ。
身長190cmもある長身で、喧嘩もめっぽう強い硬派な不良だ。

「須藤先輩か…驚かせないでくださいよッ!」

「お、怒るなよ…こっちがびっくりしたっての…。
どうしたんだよ？らしくないな。俺が近づくのわかんなかったの
か？」

「…うわ!？」

「いつの間にかもう学校ついてるじゃん!？」

「い、いえ…何でもないですよ」

「そか？」

「あ、そうだ。ニューズ見た？
なんか近くで殺人事件だったよ…物騒だよな」

「見ましたよ！私もその事考えて歩いてたから…
急に肩叩くからびっくりしたんですよ!」

「ああ…そういう事か。」

「まあ犯人は捕まってるらしいからな。十分用心しろよ!」

「そう言ってる須藤彰は校舎へ向かっていった。」

「用心しろ…か。」

「考え事して隙作ってちゃお話にならないわよね。」

「っし！気を引き締めなきゃ！」

優は教室に向かった。

教室でもやはり今朝のニュースで持ちきりのようだ。
皆多かれ少なかれ怖がっているようだ。

まあ無理もない…あんな猟奇的な殺人…しかも犯人は捕まっていな
いというんだから。
それは不安にもなる。

ちなみに学校側も緊急の集会を開いてその話があった。
どうやら犯人が捕まるまでの間はなるべく集団下校するようにとの
ことだ。

少なくとも一人には絶対にならないこと！…とのことだ。

放課後

「白凧さん」

「あ、流華……一ついいかな？」

「流華…な、なに？」

「彼ね、天城勇君…私と同じで霊を感じる事が出来る」

優は勇を流華に紹介した。

やはり今後の事も考えて戦力は多いほうがいいと考えたからだ。

「天城君…なるほど。確かに霊気を見る限り完全に目覚めているよ
うね。」

でも、いいのかしら？」

「え？」

「彼を巻き込む事になるかもしれないのよ？
彼はあなたの家系の従者でもなんでもないのでしょ？」

確かにそうだ…。

これは簡単に巻き込んでいい話ではないかもしれない。

彼はそもそも一度緋土京とやりあって負けているのだ。

「何の話かはわかりませんが僕は優さんの従者でもない…。でも友達です。彼女が困っていて、僕が必要であるならば…なんでも言つてください」

「死ぬ”」

「え…？」

「死ぬ…かもしれない。下手をすればね。それでも首を突っ込めるかしら？」

「突っ込めます。それほどの危険なら尚更です」

勇の眼は本気だった。

「…いいわ。優もそれで後悔ないのよね？」

「…うん。ありがとう…二人とも」

優は全てを勇に伝えた。

第2話 完

N E X T
S I G N
…

第3話 雨の惨劇

SIGN 二章 - SEVEN'S DOA -

第3話 雨の惨劇

優は勇に全てを話した。

「…」

流石にいきなりこんな話をされても戸惑うわよね。

「あの男が…もし本当にそんな恐ろしい計画を実行しようとしているなら…」

全力で阻止しなければ大変な事になる…」

「その通りよ…。だから私達白凧家も流華に協力する…。そしてそんな馬鹿げた計画は叩き潰すわ」

「勇み足は結構だけど…奴を侮ってはダメよ。
1対1で勝てる相手ではないのだから」

それは私も天城君も百も承知…。
いかに修行で多少強くなったといっても…あのレベルには到底追いついてはいない。

お姉ちゃんやお祖母ちゃんにどうにかしてもらわないといけないでしょうね…。

「私達は広範囲では無いにしろ強い靈気を感じることが出来るわ。奴を見つけたらすぐに茜さんに連絡…。自分でどうにか出来るなんて思わない事。

緊急事態を除いて交戦は控えるべき…。勝ち目はないでしょうからね」

「鹿子さんは…どうなんですか？」

もし、彼と戦って…やはり勝てる見込みはないんですか？」

この子は確かに強い…でも、それでも奴に近い力があるとは思えない。

何より一人で勝つ見込みがあるなら、私達に協力を頼みはしない…。

「見込みはないわね…。私がベストコンディションで彼がバッドコンディションであつても

勝率は1%に達するかどうか…。

それほどの実力差があるということよ…

でもこれが私一人ではなく…”誰か”と一緒にになれば違ってくるわ」

コンビネーションにより、勝率を上げる…か。

といつても、それほど変わるものなのかしら…？

「私、”補助系の能力”が得意だからね…まあいずれ拝ませてあげるわ」

補助系の能力…？

3人は話もそこそこに、帰宅することに。
先生の言いつけ通り3人一緒に帰宅することにした。

「流華も私達と同じ方面に家があるのね」

「ええ。それにしても殺人犯か…」

緋月京が関連してる可能性は0ではないわね…
むしろ可能性は高い気がしてならない…」

「十分に注意しないと…ですわね」

まあ…こんな明るい時間帯から人目のつく派手な行動はしないと思うけど…。

油断がそのまま死に直結するからね…。

優たちは各自無事に帰宅した。

お祖母ちゃんもお姉ちゃんも出かけてるか…。
早速捜査してるのかな…。

私には外出禁止を伝える置手紙とおやつのせんべいが用意されてい
た。

「はあ…なんだかなあ…」

私役に立てるのかしら…。

その頃…

P M 7 : 2 8

事件は起きていた。

ザアザア……

大雨が降る人気の少ない路地裏。

「あ……あ……」

一人の男が命を絶たれた。

血の海に倒れた男のそばに立つ男……。

「……脆いなあ……」

男は血に染まった自身の右手を見つめて、そう呟いた。

「動くなッ!!」

「？」

刑事らしき男が銃を構えて、威嚇している。

彼は朝霞警察署・刑事課の鈴木刑事。
たまたま通りがかり事件と遭遇。

「警察だッ！そこを動くなよ……！」

「へえ……警察か……。すごいじゃん」

男は拳銃を突き付けられているのに余裕の笑みを浮かべている。

「その男をやったのはお前か…？」

「そそ。俺が殺しちゃった」

「動くなよ…！動いたら撃つ…ッ」

「へいへい」

鈴木刑事は拳銃を突き付けたまま、倒れる男に近づいて、首筋を触った。

脈はない…絶命を確認…。

「お前を現行犯で逮捕する…！」

「あー…そいつは無理だろ」

「あ？…何を言っている…！」

「アンタはまず、俺を撃てない…俺ガキだしな。それに、あんたに逮捕も無理。ここで死ぬわけだし」

ザッ

少年は一步鈴木刑事に近づいた。

「動くなと言っているッ！」

「だからさあ…んなもん無駄だって。撃てないでしょ。どーせ」

少年は更に一步、また一步と鈴木刑事に近づいた。

「く…」

「だろ？…はあ…大人も大変だね。」

「こんな糞ガキがのさばっちゃってさ」

ブンッ！！

「へ？」

間合いに入った瞬間、鈴木刑事の上段蹴りが炸裂した。蹴りは少年の首筋にヒット！

物凄い勢いで吹き飛んでいった。

「つつつ……急に蹴るなんてひどいなあ……」

「はあ……はあ……」

少年は立ち上がった。

そして、ゆっくりと鈴木刑事に歩み寄る。

「ねえ。みるよ……血が出ただろ」

「力づくでねじ伏せる……ッ！」

得たいの知れない迫力に気圧されたのか、鈴木は焦って少年に飛び掛った。

「あー……一発は一発だから」

ドスッ！！

強烈な一打が鈴木刑事の胸を打った。

「カハッ……」

「はい終わり」

鈴木刑事はそのまま倒れ込んでしまった。

「さてと…トドメさしちゃおうか」

「鈴木ー！ーッ！何処だあッ！」

遠くから鈴木刑事を呼ぶ声が聞こえてきた。

「ちえ…お仲間かよ…」。

刑事さん運がよかつたね…」

少年は鈴木刑事をそのままに立ち去って行った。

「…鈴木 of 奴…晩飯買いに行ったつきり何処にいきやがった…。
携帯にも出やがらねえ……ん…？」

仲間の刑事…八坂真警部だ。

鈴木 of 直属の上司にあたる人物。

八坂警部は倒れる鈴木刑事に気づき、すぐに駆け寄った。

「おい！鈴木！しっかりしろ…！」

「……う……シン……さん……」

「何があった！？誰がやった？」

「……」

鈴木刑事はそのまま意識を失ってしまった。

「鈴木ッ！鈴木いいいいッ！！！！」

雨の中の惨事……。
八坂警部はすぐに救急車を呼んだ。

9月3日（木）
AM 7:00

雨は上がり……
青空が広がっている。

「今日はいい天気ね……」

結局昨日はあれから少ししてお姉ちゃんとお祖母ちゃんは何事もなく帰って来た。

雨という事もあり、早めに切り上げたそうさ。

お祖母ちゃんいわく、霊による死の刻印は見えなかったそうさ。

実際…流華の話は全て仮定の話…。

このまま…全て何も起きなければいいんだけど。

でも実際殺人事件が起きてるからな…まあ関連してると言い切れないし…。

考えすぎなのかもしれない…。

優はリビングへ向かった。

「おはよう…」

「…」

茜も亜子もテレビに釘付けになっている。

「どうしたの？…犯人でも捕まった？」

「逆よ…また犠牲者が出たそうよ」

！！

「また…聖ヶ丘じゃな…」。

しかもこの事件とは別に…他の地域でも3件殺人事件があったそうじゃ…」

「…そんな…！」

「警察官にも負傷者が出たそうじゃ…」。

なんとか一命は取り留めたそうじゃが意識はまだ戻っていないそうじゃ」

「そうなんだ…」

警察が振り返ちにあうって…」。

警察の油断か…はたまた…手に負えない相手…だったのか…」。

「とにかくコイツは面倒になってきたわ。」

もし仮にこの一連の事件が緋土京の仕業じゃとすると…奴はすでに単独犯ではない」

「え？…それってどういうこと？」

「事件が起きた大よその時間は昨夜の7時から8時の間…」

距離が離れたいろいろな場所で同時に事件が起きている以上…
この全ての殺人事件に関連性があるとすれば複数犯を想像するに
容易いわ…」

緋土京に協力者…。

「もしくは…霊に取り付かれた者が狂気化してやったのか…。
そちらの可能性も捨て切れんな」

「可能性はありますが…全て近い時間で行われている点には疑問が
残るわね…。

とにかく今は何もかもが想像の域を出ないことばかり…。
何か手がかりを掴まなければ！」

「亜子ねえちゃん…」

確かにこのまま放って置いていいわけがないわね…。

ピンポン

来客のチャイムが鳴った。

「?…こんな朝早くから誰だろう?」

優は急いで玄関に向かった。

「はい」

ガラッ

「おはよう」

「流華…どうしたの？こんな時間に」

「いや…今朝のニュースを聞いて…」

茜さんたちは大丈夫なのか心配になって」

「それなら大丈夫…」

でも手がかりも掴めていない状態よ」

「もしこの一連の犯行が奴の手によるものであるならば…やはり放つてはおけないわ。」

一刻も早く捕まえなければ…犠牲者は増える一方だ！」

「うん。でも…どうすれば」

「奴は夜動き出す…そう考えて間違いないと思う。」

さすがに昼間のうちから目立つ行動はしないだろうし…」

夜か…。

「流華さんか?」

「おはようございます。…早朝から押しかけてもうしわけありません…。」

心配になってしまって…。」

「なあに。心配はいらんよ…。」

私も亜子も、そんなに軟ではないのでな。

にしても、えらいことになってきた…緋土京の仕業か否かは別にしても

この事態はどうにかしないと…安心して眠れんわ」

「すみません…。」

「何を謝っておる。流華さんのせいではなかるう。

一緒に頑張ろう。出来ることをな。

まずは学校じゃ。おぬし等の本分を忘れちゃいけないぞ」

「うわっ！ほんとだ！もうこんな時間！

流華！話は学校でしょ！急がないと遅刻しちゃう！」

ドタドタドタッ！

優は慌てて部屋に戻って、カバンを取りに行った。

「…」

茜をじっと見つめる流華。

「ん？」

「あ、いえ…」

茜と眼があつとすぐに眼をそらした。

ドタドタ！

「おまたっ！急ごう！」

「わっ！ゆ、優！？引っ張らないで！」

優は流華の腕を引っ張って走って出かけていった。

「…出来ればあの子等を巻き込まず解決したいものじゃな…」

「はぁ…はぁ…！ふう！セーフ！」

「はっ…はっ……」

流華もやっぱ相当に鍛え込んでるんだな。
全力で走ってきたのに、全然余裕っぽいや。

「…茜さん…いいお祖母様ね」

「ん？どした？早く教室いこ！」

流華は何処か悲しそうな目をして言った。

「ん…そうね」

第3話 完

NEXT SIGN…

第4話 カウントダウン

SIGN 二章 - SEVEN'S DOA -

第4話 カウントダウン

とある地下室…

「…」

「どうしました…緋土さん」

机に向かい、浮かない顔をする緋土に声をかける謎の青年。

「超越(Transcendence/トランセンデンス)」か…。

いやね…皆それぞれ楽しんでるなと思ってね」

「皆あなたに頂いた力を試したくて仕方なかったですからね…。

ようやく試せるようになって嬉しいのでしょう」

「そういう君は楽しみにいかないのかい？」

「私は下等な連中の相手より…」

力を尽くし得るに相応しい…そういう相手に対して”この力”を

試してみたいのです。

雑魚を相手にしてもつまらないでしょう？」

冷徹な笑みを浮かべる超越と呼ばれる青年。

「このデモンストレーションで敵も俺の存在に気づくだろう。そろそろ本番に入ってもいいかもしれない」

「怨霊を解き放つのですね？」

「この怨霊共がさらなる狂気を導き…連鎖反応…止まることの無い負の連鎖ッ！」

これでこの街は一気に混沌と化すだろう！」

「…」

緋土京は狂気的笑みを浮かべて封呪の壺を撫でている。

「まあ…もう暫く奴等の動きを見てからでもいいか…。

パーティーは来週の月曜日…9月7日にしよう。

それまではSeven's DoAの好きにさせるぞ」

「ふわぁ…今日も一日ようやく終了ね…」

優たちは授業も終わり、下校の支度をしていた。

「優…天城君も、ちよつといい？」

流華に集合をかけられた二人は彼女の席まで移動した。

「何？…話なら帰りながら聞くわ」

「あなた達、この学校で強い靈気を感じたことはない？」

え？

「私は靈的な感知能力は、さほど高くないのだけど…コレを使っているの」

流華は人型の紙人形に細い鉄の杭がついた物を取り出した。

「なに…？それ」

「人の形をした…紙ですね」

「人型の裏を見て」

裏？

優は人型を裏返した。

すると呪印が書き込まれている。

「それはある一定以上の霊気を感じると下半身が切れ落ちる仕組みになってるの。」

ある一定というのは、それに込められた霊気以上を示すのだけど…この場合は作った私になる」

「ふむふむ。こんな物まで作れるのね」

「で、さっき体育の時間に校庭に仕込んでおいたコレが…見事に真つ二つ」

流華は切れた人型を取り出して見せた。

「私以上に強い霊気を持つ者が、校庭で一瞬にしろ強力な霊気を発した事になる。」

校舎にも3階、2階…1階と仕込んでおいたのだけど、2階、3階は異変なし…

でも、1階はこの通り…」

再び流華は切れた人型を取り出して見せた。

「…可能性はないと思って、ほんの試しに設置したのだけど…初日からこの有様よ」

「ちよつと待つて！」

これでわかるのって…流華より強い霊気を持つ”何者”かが、ソレ（人型）の感知範囲内で霊気を発したってことぐらいで…

緋土京…もしくはその仲間達だ…という事にはならないでしょ？
？」

「確証は持てない…でも、”可能性は十分にある”……でしょ？」

確かに流華の言うとおり…。

でもこの学校内で、少なくとも霊気を扱える人間は私達を除いても7人はいる。

2年の瀬那先輩、岡島先輩…日下部先輩、須藤先輩に片桐先輩。

1年の夕見司…椎名…。

皆私と一緒に修行して霊能力に覚醒した仲間達だ。

…可能性として高いとすれば司か。

「私の友達に私以上に強い霊気を持つ子がいるわ。

1年生…つまり1階校舎。

その子がやった可能性も十分に在り得るわ」

「そんな友達がいたのね。

でもあなた以上の能力を持ちながら協力を頼まないのはなぜ？

彼…天城君には頼んだのに」

「それは…。

あの子を巻き込むと…同時に巻き込んでしまう人が増えると思っ
たから」

「ミス研の皆さんですね…確かに皆さん部長である司さんを

心より慕っていますからね…危険な事であるなら、尚の事巻き込
んでしまうでしょうね」

「あなたが優にそうするように…その仲間達もその子についてくる
と言っわけね…。

そして恐らく、その子たちの能力では無駄に危険に陥る…」

流華の読みどおり…司はともかくとして、他の4人はまだ発展途上。
いかに霊気を使えるといっても、まだ自分の身を自分で守ることも
出来るかどうか…。

「とにかく、一度司にそれとなく聞いてみるわ」

「私にも紹介して欲しいわ」

「それは…」

「ううん。協力を求めるわけじゃないの…」

その子の靈気を直に感じてみたいだけ。心配しないで」

「わかった。」

でも…もし仮に司ではなく…別に強い靈気を持つ者がいるとしたら…」

「敵はこの聖ヶ丘高校の生徒にいる可能性が出てくる」

「教員の可能性もあると思います」

可能性を言い出していたらキリがないけど…」。

普通に考えて学内関係者であることは間違いない。

部外者がうるついでたら間違いなくわかるもの。」

殺人事件があったばかりでピリピリしてる今、それを学校側が見逃すはずもないしね。

「とりあえず、今日のところは帰りましょ」

3人はそのまま下校した。

校門の前には先生が立っていた。

やはり例の事件でピリピリしているのだろう。

もう9月…秋になる。

暗くなるのも早い…。

犯人が捕まっていない以上、不安なのは生徒だけではないだろう。

その夜、亜子と茜は9時近くまで帰ってこなかった。

成果は得られなかったようだが、二人が無事に帰って来た事は喜ばしいことだった。

翌日

聖ヶ丘高校1年D組

昼休み…優と流華…そして勇は司のクラスを訪れた。

「司ー！」

優の呼びかけにすぐ気づいた司は面倒な表情でやってきた。

「…珍しいわね、あなたがワザワザうちのクラスに出向くなんて。ん？そちらは？」

「私は2学期からこの学校に転校して来た鹿子流華と言います。優さんとは同じクラスで、友達になってくださったの。」

「そうなんだ。私は夕見司。この子とは小さい頃からの腐れ縁よ。よろしくね鹿子さん。」

流華と司は握手した。

「…」

「…なるほど」

二人は顔を合わせて笑みを浮かべた。

「んー校舎裏で話しましょうか」

司は何かを察したのか、3人と校舎裏へ移動した。

「…で、用件はなに？」

「さっきの握手でわかったと思うけど私には霊が見えます。

つまりあなたと同類…という事が一つ」

「ええ。あなたと握手する前から…なあーんとなくは解ってたけどね。

その霊気も見せ掛けでしょ？

一見覚醒していない…殻を破ってない普通の人間のように見えるけど…何処か不自然さを感じる」

「司さん、すごいわね。

其処まで見抜いてしまうなんて…思った以上だわ」

「で…本題に入りましょ。何かあるのでしょ」

「察しの通りよ。…あなた昨日靈気を異常に高めた事はある？」

優が質問した。

「靈気を？いえ…してないけど。

そんな必要性もないし…普段は靈気は極力抑えているわ」

「だよな…。流華、そういうわけよ。この子は白」

「そう見たいね」

「ごめんね司。お昼休みに」

「それはいいけど、一体何なの？」

当然よね。

いきなりこんな話切り出されて、疑問を持たないわけがない。

「んとな…それは…」

「優…彼女にも打ち明けるべきじゃない？」

「鹿子さん！それは…」

勇が咄嗟に止めに入る。

その静止を振り切り、流華は司に近づいた。

「私は彼女を巻き込もうと言つのではないは。
ただ、事実を話すだけ」

「流華！」

「いいですね。あなたの事実とやらを聞かせてもらいましょう」

「では…放課後1 - Bに来て下さい。」

昼休みでは落ち着いて話が出来ないからね」

「わかったわ」

もう…。
なんでこうなるのよ。

司は先に教室に戻っていった。

「ちょっと流華！どついつつもりよ！」

「彼女は優秀よ…出来れば力を借りたい」

「そんな我俣…私達だけにして!…あの子は関係ないの」

「わかっているわ。無理強いをするつもりはないの」

あの子の性格からして…事実を知れば絶対に放っておけない…。

優の予想は的中した。

放課後

「…」

流華は現状を全て話した。

私の家系の事や緋土京のことを。

「あなたの家の事は、お父さんやお母さんからそれとなくは聞いてたわ。

だから別に驚くこともない…。

それより、今起こっている事態…それをどうにかしないとじゃな

い！」

「はぁ…そういうと思ったから黙ってたのよ」

「水臭いじゃない！なんで天城君には言えて、私にはいえないの！？
一緒に修行した仲間でしょ！」

「あなたを巻き込めば、あなたを慕っている彼等もきつと巻き込む
事になる。」

私達はまだいいわよ…自分で自分の身を守るだけの力はあるもの！

でも…彼等はまだその域じゃない！巻き込めば、必ずタダでは済まない！」

「！…」

「修行の時の覚悟とは違うの…」。

本当に死ぬかもしれないの……相手はハッキリ言って強いわ。
誰かを守りながらなんて甘いことは言ってられないの……。

司……お願い。今回は私達に任せてくれないかな……」

司は黙ったまま俯いている。

「…わかった…」。

あなたが正しいわ。優…今回はあなた達に任せる」

「ありがとう…司」

「でも、もし…私の力が必要な時はちゃんと言うのよ…」

「うん。わかってる！」

二人は拳を合わせた。

「残念ね…あなたの力…欲しかったわ」

「流華さん…でしたわね。」

「ごめんなさい…力になれなくて……優をよろしくね」

司は去り際に流華にそつと告げて出て行った。

「ええ。任せて…この子は私が守る」

「んじゃ…今日は帰りますか」

「ですね」

3人も司を追って教室をあとにした。

そんな彼等を見つめる視線が一つ……今は誰もそれに気づいてはい
なかつた。

第4話 完

N E X T S I G N ……

第5話 "正義"と"復讐者";

SIGN 二章 - S E V E N ' s D O A -

第5話 ” 正義 ” と ” 復讐者 ”

とある廃墟

「あっはっはっはっは…！」

闇夜に響く男の笑い声。

警察官に囲まれ…逃げ場はない状況下。

絶望から来る笑いなのか…それとも余裕の笑みか…。

男の足元には何人もの屍が転がっている。

「…お前はもう終わりだ…」

この状況…言い逃れはきかないぞ！」

「あー…そうだな。

こいつ等は俺が殺したんだ…つってもこいつ等は社会のゴミ…。
見てみる、あんた等も手を焼くヤクザモノだ。
感謝して欲しいところだぜ」

男は足元の死体を足蹴にして言った。

「ふざけるなッ！…どんな人間だろうと…殺していい理由にはならないッ！」

「ヒュー…あなた警察官の鑑だね。

でも本当にそうか？…この世にはどうしようもないクズって奴はいるんだよ。

救いようのないクズがなッ！こいつらがそうだ。

弱いモンから、筆とり…寄生し、死ぬまで貪り喰う。

だが…あんたらからしたら…俺も救いようのない社会のゴミクズか…クク」

男は壁を背にし、余裕を見せる。

前方には銃を突き付ける警察官たち。

この状況下でこの圧倒的余裕…開き直ったのか。それとも打開策があるのか。

「俺達”が連日連夜、殺しを重ねるせいで…アンタ等も大変だねえ。

”警察の威信に賭けて殺人を止める”…上からも下からも期待され…

あんたのように正義のために、なんとしても止めるんだという…熱い正義感。

胸糞悪い…が、嫌いではない。

俺も自分の正義を貫いているだけだ…。
せつかく与えられたこの”力”…使わないのはもったいない」

「お前と正義感について論ずるつもりはない…ッ！
お前はここで終わるんだッ…！」

「いい覚悟だ。

…俺も俺自身を守らなきゃならんからな…悪いが死んでもらうぞ

「ふざけるなッ…！」

パンツ…！

この場で一番上の立場であろう、刑事の発砲！

「…ばかな……」

男は銃撃をいとも簡単に避けてかわした。

「俺には、いかなる攻撃も効きはしないさ……」

「う、撃てええッ…！」

刑事の一声で全員が一斉に発砲した。

パンパンッ!!!

「…え？」

目の前に確かに居た男の姿が消えていた。

「なるほど…こいつは便利な力だな。

意識を奪う…というより、まるで時間を止めた気分になるな」

「!?!」

男は刑事たちの包囲網をくぐりぬけ、背後に立っている。

「最後に教えてやる…俺は”正義（Justice/ジャスティス）”…裁きの雷帝なり」

バリバリッ!!

強力な雷鳴を轟かせ、一瞬に全員を黒焦げにしてしまった。

「…なんと、恐ろしい力だ…」

俺自身怖くなっちまう…」

ピピピ…

携帯の着信音が鳴った。

どうやら男にメールが来たようだ。

「あまり派手な動きは控えるように」…か。

まあ確かにこいつぁ…ちと派手だな」

廃墟の壁には今の雷で穴が開いたり、ヒビが入ったりしている。

ウーウー…

遠くからパトカーのサイレンが聞こえてくる。

「こいつの弱点は五月蠅いし派手な所か…。とっととズラかりますか」

「まったく…」正義”には困ったものだ。助かったよ”超越”」

「いえ…。許して上げて下さい。」

彼も自分の能力を直に知っておきたかったのでしょう」

緋土京と”超越”と呼ばれる男は相変わらず、何処かの暗い部屋にいた。

混沌という名のパーティ開催は9月7日(月)…。あと3日。

着々と準備は整っているようだ。

「くくく…思い知らせてやるぞ…」

9月4日(金) PM 9:20

「あれ?…メールだ」

優はお風呂を済ませ、自室に戻ってくると、携帯のメール着信を知らせるLED点灯に気づいた。

「！…流華からだ…」

” 敵を発見！至急応援頼む！場所は聖ヶ丘病院！”

「大変ッ…！メールは10分前に来てる！…急がなきゃ…！」

優は急いで祖母・茜の部屋に駆け込んだ。

「お祖母ちゃん…！」

！…いない…！

まだ二人とも帰ってきてない！？

「く…どうする…！」

あの子一人じゃ…くッ！」

優は急いで着替えて、家を飛び出した。

「はあ…はあッ！…待ってて…流華！」

聖ヶ丘病院・裏の公園

「…」

男が散歩している。

見た感じは高校生から大学生くらい…身長は170前後か。

流華はこっそり男をつけていた。

優からの連絡がなく、仕方なしの選択だった。

流華は一瞬強力な霊気を感じ…。

この男にヒットしたというわけだ。

強い霊気に…何処か禍々しさを感じたため、怪しいと判断。

霊気を感じた一瞬では相手の力量までは測り切れなかったが、慎重に事を運ぼうと、増援を頼んだ。

「…」

(この時間…流石に人気はない…。

やり合うならベストな場所だが…。優はまだか!?

メールに気づいてないのか…こちらに向かっているのか…く…く…!
どちらにせよ、場所を移動してしまった…ここは私一人でやり合

うしかないか」

「はあ…さっきから気になってるんですけど」

男が立ち止まって、急に咳いた。

「…！」

（バレた…か！）

ザッ…

「…」

「誰だ…アンタ」

姿を現したのは須藤彰だった。

「いや…なんでもない」

「なんでもない…？」

おいおい、ひっそりとあとつけてきて、なんでもないはないっしよ。

アンタでかいね…何？かつあげ？」

「…そんなつもりはない…。
はあ…なんて言えばいいんだ…」

「ああ？…男がモジモジ…きめえんだよ！はっきりしろよ！この木偶のぼう！」

男は須藤を挑発した。

「あ？」

「おー…こええ…。
だけどな…俺はもう昔の俺じゃないんだ。
ビビるかよ！」

須藤は飛び掛ろうとした瞬間、何か得体の知れない奇妙な感覚を感じ、踏みとどまった。

「んだよ！？かかってこいよ！この不良があッ！」

「…」

（なんだコイツは…やはり最初コイツを見たとき薄っすら見えた黒い陰…

あれが関係しているのか…？

何か嫌な予感がして踏み込めなかった…）

須藤は、この男から感じた不穏な気配をどうにかできないかと、あとをつけてきただけであった。

だが、須藤はともかく、この男はすでに臨戦態勢。

戦いは避けられない状況…！

「狩ってやる…そうさ…俺は銃を突き付けてきた刑事にも負けはしなかった。

やれる…そうだよ…やれる！」

この男…先日鈴木刑事に致命傷を与えた少年である。

「く…！…！…！…！…！…！…！」

あの男…このままでは殺されかねないぞ…！

（出て行くしかないか…ッ！）

「お前がやりたいと言っなら…相手になってやる」

「いいね…やっとその気になったか…」

バッ！！

須藤は一瞬にして前に出たかと思うと、長身を生かした超リーチの前蹴りを放った！

「ぐほっ…！」

少年はまともに喰らって悶絶する。

凄まじい一撃だったのか、その場に座り込んでしまった。

「？…」

（弱え…一瞬感じた違和感は気のせいだったのか…？）

あの黒い影…多分だけど霊に違いはない…。

だとすると霊撃が来るかもしれないから…十分に用心しなければ…）」

「はあ…はあ…いてえ…いてえよ…。

あの時と一緒に痛みだ…はは…」

少年はお腹を抑えたまま急に泣き出した。

「な、なんなの…？」

一撃でやられちゃったわよ…？」

私の勘違いだったのかしら…」

流華も予想が外れたのか困惑している。

「おい…もうわかっただろ…。」

「これからは喧嘩を売るなら相手を見てからにしろよ…。」

「るせえ…るせえるせえるせえるせえるせえるせえるせえるせえるせえるせえるせえ
せえ…るせえッ…!!！」

少年は鬼気迫る表情で立ち上がった。

「…まだやんのか?」

「…つたりめえだろがぁあぁあッ!!…このポケがッ!!…
蹴り逃げかッ!!…このゴミが!!…ぶっ殺すッ!!…」

ビュッ!!

一足飛びに須藤の懐に飛び込んだ!

「!」

「バカモノヴァアアアッ!!！」

長身の須藤に対しての顔面蹴り!
なんと…という速さと跳躍!

バキッ！！

「ぐあッ！！」

須藤は吹き飛ばされた。

「はあ…はあ…はあ…！！

死ねッ！！カス！！」

「すごい…今の動き…見えなかった…。

それにしても凄まじい靈気だな…。

今の一撃…激情に任せて撃ったからか、靈撃ではなかったが…

あの異様なまでに禍々しい気はなんなの？

あれだけの怨霊を抱え込んで正気を保っている…？

いや…どうなんだ？つて…そんな事考えてる場合じゃないわ！

とにかくこのままではマズイ…！！」

須藤はゆっくりと立ち上がった。

しかし額からは血が流れている。

「な…なんで立ってんだよ…なんで死なないんだよ…」

「悪いな…俺は体の頑丈さだけが自慢なんだ。

それによ、悪運も強い」

須藤はニツつと笑ってみせた。

「何笑ってんだ……お前……」

死ぬんだぞ……？ええ……？……死ぬのわかんないの？」

「ガタガタぬかしてんじゃねえよ……」

喧嘩に言葉はいらねえんだよ……”こいつ”で語れよッ」

須藤はパシツつと拳を手のひらに当てて言った。

「はあ……？なんだこいつ……マジ理解不能だつて……」

なんで怖がらないの……？馬鹿なのか……？

みんな……皆一発でビビッて逃げ出したじゃん……怖いはずだよ……俺は怖いんだ……」

なんでビビんないんだよ……」

少年は須藤の態度に相当の混乱を余儀なくされた。

バツ！！

須藤はその隙を見逃さず跳びこんだ。

「こいつぁ…おかえしだぜ！」

少年の胸倉を掴んだと同時に！

ドガッ！！

流血する頭による、渾身の頭突き！！

「ぐああ…ああああ…頭が…頭があッ！！」

「はぁ…はぁ…ざまあみろ…俺ぁ石頭なんだよッ！」

頭を抑えて転げまわる少年。

「うっ…俺は”復讐者（Avenger/アヴェンジャー）”……
だ…。

こんな…馬鹿に…またコケにされていいわけ…いいわけねえだろ
ッ…！！」

少年は立ち上がった。

先ほどの動揺も涙も何もない…。
雰囲気が変わったのだ。

ザワッ

「!…」

それを感じ取ったのか須藤も後ろに下がった。

「…遊びはおしまいだよ…」

第5話 完

NEXT SIGN…

第6話 アンチペイン

SIGN 二章 - S E V E N ' s D O A -

第6話 アンチペイン

「…」

(さきほどとは打って変わって落ち着き払ってやがる…)

用心したほうがいいな…。先ほどのとび蹴り…速さもそうだが、
相当な威力だ。

当たり所が悪きゃ…死ぬ…。そうでなくても、何度も喰らってや
れる攻撃じゃない)」

「…」

少年は無言で駆け出した。

「!」

一瞬で須藤との間合いを詰めるものの、須藤はすでに防御の態勢に
入っている。

だが少年はお構いなしに蹴りを放った!

ドガッ!

「クッ…！」

（重いッ…）「」

渾身の蹴りを受けたがなんとか踏みとどまる須藤。

しかし、今の蹴りを防いだ右腕は痺れてしまっていた。

「くく…」

「うおおッ…！」

不敵な笑みを浮かべる少年だったが、態勢は崩れている。

その一瞬の隙に合わせるようにカウンターの蹴りを放つ須藤！

ドガッ！

「！？…ッ…！！？」

蹴りがまともに入った少年は吹き飛んだ。

そして受身もとらず地面に激突！

しかし、蹴りを放った須藤のほうが、謎の苦痛に顔が歪む。

「…！？

（なんだ…今の全身を駆け巡る痛みは…？）「」

「くく…」

様子を物陰から覗く流華もその異変に気づいた。

「あの不良…どうしたのかしら？」

蹴りを放った直後、一瞬硬直したように感じたけど…。

それにしてもあの不良も靈気に覚醒してるようね…でもあの程度じゃ…恐らく勝ち目は薄い…。

やはり出て行くべきね」

少年は立ち上がった。

「くく…もう一つ行くよ」

ダッ！

またしても正面から突っ込む少年。

須藤は迎撃態勢で待ち構える。

リーチの差は歴然。

タイミングを合わせて蹴りを放つつもりだ。

「シッ！」

予想通り、須藤は自身の間合いに少年が入った瞬間にすごい蹴りを放つ！

利き腕である右腕は今もまだ痺れている。

となれば、武器はこの蹴りに頼らざるを得ない！

「ひいッ！」

この蹴りをギリギリで上に跳んでかわした少年。
しかし須藤は喧嘩に慣れている。

こんな状況は予想済みだ。

すぐに体を捻り、もう片方の足で回し蹴りを放った。

空中では身動きなど取れない。

この攻撃はまともに少年の腹部を貫いた。

「！！！！」

その瞬間倒れ込んだのは少年だけではなかった。

須藤もまた、同様に苦しみ、腹部を抱え…倒れ込んだ。

「が…はッ………」

(なん…だ…この痛みは…)

「くくく…そろそろ気づく頃かな」

少年は再び立ち上がると不敵な笑みを浮かべて須藤を見下ろしている。

「何を…したッ!？」

「あははっは!」

大口を開けて笑い飛ばす少年に、キレた須藤は立ち上がると同時に、痺れた右腕で思い切り顔面を殴った。

バキッ!!!

「……………うづ…ぐはっ!」

何故か殴りつけた須藤彰のほづが吐血をした。

少年は今の一撃をまともに喰らいながらも踏みとどまっている。

「…くく…最高だよ…。」

相当痛いでしょ…ねえ？」

「が……が……」

ドサッ！

須藤は膝から崩れ落ちた。

「はは！……は！？」

ドガッ！……！！

強烈なとび蹴りが少年の後頭部に突き刺さる！

鹿子流華の不意をついた強烈な一撃ッ！

少年は宙を舞い、地面に激突！

全身をこすりつけながら数メートルほど吹き飛んだ！

「大丈夫……？」

「あ、ああ……」

流華はダメージを負った須藤に駆け寄り、手を貸した。

須藤はなんとか立ち上がったものの、両足はガクガクと笑っている。

「待つて…すぐに治してあげる」

流華は須藤の体に手を当て、集中を始めた。

「これは…!？」

見る見るうちに須藤の傷が回復していく。

「これでいいはずよ」

「ありがとう…アンタは一体…その制服…うちの生徒か…」

「!…あなたもそんなのね。じゃあ白凧優とはお知り合い？」

「ああ。良く知ってる…。アンタ…アイツの友達か何かか？」

そつこつしているうちに少年が立ち上がった。

「悠長に話してる場合じゃなさそうだね。

話はアイツを倒してからにしましょう」

「…って…おい!?!…アイツって…あのガキと知り合いなのか？」

少年はこちらを振り返った。
顔面は傷だらけになっている。

「何だよ…お前…。」

横から何手出ししてんの？…殺すぞ」

ビリッ！ビリッ！

物凄い威圧感が二人に向けられる。

「知り合いではない…が、アレは敵だ。

あなたと彼のやりとりは少しみていたけれど…なぜ攻撃を加えた
あなた自身が苦しんでたの？」

「わからない…。」

アイツを殴ったり蹴ったり…とにかく攻撃する度に物凄い激痛が
全身に走るんだ」

「…なるほど…それがアイツの能力ってわけか…」

「男は後回しだ…まず女…お前を跪かせてやる…。」

泣いても許してやらない…ひひ…」

少年は駆け出した。

「ひゃっはああッ！！おせええええ！！」

迅い…ッ！

須藤と戦っていた時の速さを明らかに越えている。

あっという間に流華の間合いに入った。

「！…チッ！！」

流華は苦し紛れの蹴りを放つも、脚が上がりきる前に少年に抑えられてしまった。

「くく…行儀の悪い脚だぜ…」

ペロッ

少年は流華の太ももを舐めた。

ザワッ！

「ハッ！！」

バキッ！！

怒りの鉄拳が少年の顔面をえぐる！

「！！…なに！？」

ズキズキと、謎の痛みが流華を襲った。

「ひゃっはっはっはあ！！」

「…そうか…」 触られた” だけでダメなのか」

「ふふふ…種明かしとこのうか…」

俺の能力…” アンチペイン” …… 一種の呪いだ。

こいつを触った対象（生物に限る）につけることができる。

アンチペインを施した相手からの攻撃… 痛みを伴う全ての行為が
そいつにそっくりそのまま反される…

ダメージは反せないが… 痛みだけはそっくりそのまま反せる！」

「あなたは痛みを感じないわけね…」

「その通りッ！

俺の体は少なくともアンチペインを施した人間からは痛みを感じ
ないッ！

こいつはすげえんだぜ… 単に直の攻撃だけを認識するだけじゃない…。

その攻撃によって生じた痛みもそのまま反せるんだ…。
たとえば蹴りによって受けた痛み…そしてその衝撃で倒れ、地面に顔を強打したとする…。

その顔面の痛みも含めて反せるってわけだ」

「ふん…偉そうに…。

よくわからんが、反せるのは痛みだけ…ダメージは食らうんだろ？
だったら痛みは我慢して一発で気絶に追いこみやワケないだろ」

須藤は腕を鳴らして臨戦態勢をとった。

「理屈はそうだね。

でもオタクらにそんな覚悟あるの？

自分達で喰らってみてわかったでしょ…自分が相手に与える”痛み”ってやつを」

「確かに自分で自分に本気で殴りかかることなんて…滅多にあるもんじゃねえ…。

その点は貴重な体験が出来たぜ…。

だが、ためらいは無いね…全力でぶち抜く!!」

須藤は自信満々に言い放った。

「う、嘘だね…！口じゃ何とでも言えるさ…実際に体は正直だよ…。
絶対に力を抜くはずさ」

「何を怯えているんだ…？」

お前の言う事に自信があるなら怯えることはないだろう…。
痛みは感じないんだ。怯えることもないだろ」

須藤が一步少年に近づくと、合わせて少年も一步下がる。

明らかに動揺している。

「…ハッターだ…」

「遠慮せず行くぜ…」

ダッ！

須藤は駆け出した。

少年の服を掴むと、頭突きを一発！
その瞬間、激痛が須藤の体に走る！

が、お構いなしに、そのまま地面に少年を投げて叩き付けた！
先ほど以上の痛みが須藤を襲う！

だが、これにも動じる事無く、少年を立たせると。
下から突き上げる…全ツカツツの…アツパーを水月に繰り出した！

「……………!!」

須藤はその瞬間、少年と同時に倒れ込んだ。

見ると須藤は白目を剥いて気絶している。

少年もまた、ダメージ蓄積が限界を超えたのか、気絶をしている。

「この男…凄まじい精神力の持ち主だな…」

普通の人間なら、痛みを恐れ…無意識にも手加減してしまうものだろうに…。

優の仲間…恐るべきだわ…」

ザワツ…

「…だよね…。本番はこっから…か」

只ならぬ気配が辺りを包み込む。

「…ったく…糞ガキが…」

少年がゆっくりと立ち上がった。

「中の怨霊か…。さつきとはまるで次元の違う威圧感ね…
（ダメだ…私一人で太刀打ち出来る相手じゃない…。
最悪ね…。逃げることも出来るかどうか…）」

流華は気丈に振舞おうとするものの、体は正直だった。
両の足はガタガタと震えている。

「女…貴様、普通の人間ではないな…強力な”気”を感じる…。
そうか…お前が”アイツ”の言っていた敵か…」

「アイツ…？」

意味深な台詞で流華の興味を引いた。

「クク…知りたいか？」

「教える…とって、教えてくれるわけでもないのでしょう」

スッ

「その通り」

一瞬！

気づいたら少年の姿は目前に存在していた。

流華の体が動かない。

恐怖に縛られる流華…！

「…！」

バツ！

殺される…そう感じた瞬間、少年は一足飛びで流華の前方に飛んでいった。

”何か”が少年を狙って飛んできたのを、一瞬で感知し、かわしたのだ。

101

「流華…！」

「ゆ…優…！？」

現れたのは優だった。

すぐに流華の元に近寄る優。

「大丈夫…！？」

「ええ…って…あなた…まさか一人なの…！」

状況が把握できない…。

あの少年は誰…？

てか、なんで須藤先輩がこんなところに！？
き、気絶してるし！

「優…最悪の状況よ…！」

ゾワッ！

「…こねって…」

優はそこで初めて気づく。

獅子の檻に無防備で入り込んだことに。

「餌が増えたな…クク…殺してやるぞ…女ッ！」

第6話 完

NEXT SIGN…

第7話 痛みとの戦い

SIGN 二章 - SEVEN'S DOA -

第7話 痛みとの戦い

「復讐者（Avenger/アヴェンジャー）」：小守大成。

篠ヶ裏高等学校2年：現在登校拒否の17歳：「

彼はまだ若いが、この世界に絶望していましたね」

暗闇に包まれた冷たい地下室…。

緋土京は”超越（Transcendence/トランセンデンス）”と会話をしていた。

103

「彼は弱者…：強者であったが故に…：弱者の渦に飲み込まれた弱者。だがまさに崖っぷちまで追い詰められた彼は見事喰われる側から喰う側へと変貌を遂げた」

「確かに力を得た我々は常人を遥かに越えた存在です…。
しかし…：私の”ヴィジョン”で見る限り、交戦している相手も只者ではないようです」

”超越”は眼を閉じ、念じるように両手を組んでいる。

「大方、この地を統括している白風の一派だろう。
なに…恐るるに足らん相手だ。
奴等は計画の邪魔はするだろうが…それは我々にとっては余興に
すぎんさ」

「…優…。少しの間…奴を引き付けておいて」

「ちよつと待つて流華…」

そう言つと優は一步出て少年を指差した。

「あなたは誰！？その子の人格？それとも取り憑いている悪霊？…
どっち」

「優！？」

「くく…面白い女だな…」

状況がわかつてないのか…？まあいい…

俺は”コイツ”ではない。このガキは今眠っている」

「あなたはその子を殺す気？」

死を告げる刻印が見えていないから、そんな事はないと思うけど……。少なくとも私達にはめっちゃくちや敵意をむき出しなのはわかる……。

「こいつがどうなるうが知ったこつちやないな。

俺は”器”があればそれでいいんだからな。

だが、殺す必要性もない……だから俺自身が手を加える事もない」

「あなたの目的はなに？……何に怨みを持って現世にいるの？」

救えるならば……救いたい。

「何もだ」

「え？」

何も……ってどついつ事よ？

怨みがない……？

「いや、違うな。”全て”だ」

「全て……？」

「俺は…もう”個”の存在ではない…。」

様々な怨霊の集合体…何か特定のモノに対する恨みはない…全てを呪う存在だ。

くくく…。」

…。」

「優！そういう事なのよ…。」

霊を思っていることなら…私達で被うことが…何よりも救いになる」

「俺を被う…？お前らが？」

あっはっはっははははははははははは！笑わせるぜツ！！」

「どうやら流華の言うとおり…被うしか道がないようね」

「…出来るのか…自信はないけどね…。」

やれるだけの事はやってみましょう」

優と流華は臨戦態勢に入った。

目の前の少年は自然に佇んでいる。

「構えもしないで…余裕のつもり？」

優は強気だった。

確かに強力で禍々しい霊気を放ってはいる。

恐らく優や流華を越えるほどの靈気。

しかし、それを眼の前にしても自信を持てたのには理由があった。

”靈による死を告げる刻印”…サインが流華にも自分にも現れていないという事に裏づけされる。

勝敗は別として、今日の前の相手に殺される事はない。

そう踏んだ結果だ。

「来いよ…遊んでから殺してやる」

「にやろ…ッ！」

優は挑発に乗って、突っ込んでいった。

両の手には靈気こそ込められてはいたが、狐火は出ていない。

「優ーッ！不用意に近づいてはダメッ！！！！」

相手の攻撃に触れてしまったら終わりよ！！」

「え！？」

そんなこと言われたって…もう止まれないっての！

優は勢いをつけてとび蹴りを放った。

「ニッ！」

え！？なんで避けようとしないの！？

ドガッ！！

なんと少年は胸で優の跳び蹴りを受け止めた！

「軽いな…」

パンツ！！

優は少年の強烈なビンタを顔面に食らった。

「きゃあッ…！」

「…って…言ってるそばから食らってんじゃないわよッ！」

「いちち…」

痛いけど…それほど強力ってわけでもないのに…流華は何をそんな

に警戒してるのかしら？
にしても、今の一撃…霊撃じゃないわね。

そういえば今まで特に気にしてなかったけど、幾度と無く霊に取り憑かれた人間と戦ってきて、
霊撃らしい霊撃を食らった記憶がないわね…。

緒斗の森で戦った朔夜の水弾とかは多分モロだったんだろうけど…。

優の予想は半分正解だ。

実際に怨みの念がさほどでもない霊など、直に取り憑いての霊撃は出来ても、

そうでない相手に霊撃が出来ない…もしくは弱い霊は多い。

しかし、実際に霊撃を放つ相手ももちろん居る。

事実今対峙している少年…小守大成は今、憑依している霊が表に出てきている。

この状態での攻撃は+の霊気を帯びた紛れもない霊撃。

単純に込められた霊気・霊力と共に少なく、優の霊力のキャパシテイがかなり多いため、
気づかぬかつただけである。

霊力を霊撃によって削られる感覚は、眩暈や脱力…何かしらの体の変調で解るもの。

それが顕著に見られなかった場合、霊撃ではないと感じてしまう。

他に霊撃かどうかを見分ける方法として、纏っている霊気で判断す

る場合がある。
靈気の二つの性質…これは身に纏う靈気の流れから知ることが出来るのだ。

ただ、これは靈視能力が熟練されていなければ判別は難しい。
逆に熟練者であれば、どちらの属性なのか見破るのは容易い。

流華は熟練者…というより、視る能力に長けているといえる。
優はというと、まだ判別を瞬間的に出来るほどの力は持っていない。

「食らったな…俺の平手…」

「だから何だって言うのよ！」

「クク…口で説明するより、自分の体で体験してみなよ」

「?…だから…意味不明だって…言ってるのよッ!!」

優は苛立ちから再び突っ込んでいった。

「優ッ!…あの馬鹿…また突っ込んでいつてッ…!!」

「はぁ!…!」

バシッ！

跳び回し蹴りが華麗に小守の顔面に入った。
無防備、脱力…そして受身なしでの地面への衝突。

「！」

ズキンッ…！

「が…な…？」

「クク…どうだ？自分の蹴りの味は…」

どういうこと…？

急に激しい痛みが全身を駆け巡った…！？

「優ッ！そいつに触れられた者は呪われるのッ！

あなたはもう奴の術中にはまってるわ！

呪われたが最後…呪われた人間から受ける攻撃…それにより受けるであろう全ての痛みは

呪いをかけられた人間に全て帰る…！」

「な…！？…そういう事は早く言って欲しい所だわね…」

言う前に飛び込んでいった優には言われたくないと思う流華だった。

「優ッ！ 霊撃よッ！ 霊撃に痛みはないわ！

遠くから霊撃で攻撃するのよッ！！」

確かにその手は考えたわ。

でも実際、私が霊気を飛ばせるのは狐火だけ。

普通の霊気は未だに飛ばせない…。

狐火…効くのかな。

霊気の充填をしていない現状で撃てる狐火・大炎玉は2発が限界…。
霊気を下げて普通の炎弾を使えば手数は増やせるけど、威力に自信
はなくなるわね。

！

そうだった。

私にはまだ霊気の札があったんだ！

これでも恐らくダメージは期待できる。

手数はあるわね。

「！」

「悩み事の最中悪いな…こちらからも行かせてもらっせ？」

何時の間に間合いに入られたの!?

小守は優が戦略を練っているわずかの隙を見逃さず間合いに入り込んだ。

「本気で蹴るぞ」

「!」

ドウッ!!

蹴りは空ぶった…が、巻き上がる砂煙、生じる風圧！
そこから、威力の程は十分に推測できた。

「わ…わざと当てなかったわね…!」

「ククク…」

優に恐怖を植えつけるがための空振り。

「うあああ…!」

優は札を取り出して小守に向かっていった。

「！」

「食らえッ！」

バチバチッ！！

札に触れた小守に強力な霊撃が浴びせられた！

「ぐああッ！」

「きゃああッ！！！」

「優！？

（そうか……！生きてる人間に対しての霊撃に痛みはない……。
だけど、怨霊に対しての破邪の霊撃……痛みが生じるのか……！）

「はあ……はあ……全身を切り刻まれるような痛み……」

「貴様……！！おかしな真似をしゃがって！」

今の一撃、痛みは小守も感じていた。

どうやら霊撃は双方に痛みが通じるようだ。

ガタガタ…

優は両手で肩を抱きしめるように身を固めて震えている。
今だかつて体験したことのない痛みが全身を駆け巡ったのだ。
無理もない。

「優ッ！！おまたせッ！！」

『！！？』

優と小守は流華の一声に振り返った。

するとどうだろう。

地面が明るく輝きだしたのだ。

見ると、呪印のような光の印字が地面に描かれている。

「これは…！？…あれ…？」

優は何か体が軽くなるのを感じた。
暖かい光に包まれ…活力がみなぎるのを感じた。

「な、なんだ！？これは…これは一体？」

小守も突然の事に動揺しているようだ。

優はその一瞬を見逃さなかった！

「ハアツ！！炎連牙アツ！！」

ダダダダツ！！！！

優は両手に狐火を纏って拳撃の乱舞を繰り出した！

「……………！！！！」

優の表情が苦悶に歪む。

本来鍛った狐火が消えるまでラッシュを続ける所だが、痛みに耐えかねて崩れ落ちてしまった。

うっ……………

痛みは覚悟していれば耐えられる…そう思って勇気を出してやってみただけ…。

思った以上に…キツイ…！

「私の”陣”…半径20mほどの円陣内の指定した相手に、怪我の治癒、一時的な全身の筋力強化…

さらには靈気の底上げ等、補助的な効果を施す事が出来る。
…でも流石に呪いの解呪は出来なかったか…ッ！」

「…」

ゆっくりと小守は立ち上がった。
表情はうつろだ。

「く…！」

優はすぐに立ち上がり構えた。

怪我もない。

体力の消費も差ほどではない…痛みだけが優を蝕んでいる。

唯一の救いは痛みが継続しないということ。
しばらくすれば、徐々に引いていく。

「…痛かった…」

うつろな表情で小守はそう呟いた。

第7話 完

NEXT SIGN…

第8話 覚醒

SIGN 二章 - S E V E N ' S D O A -

第8話 覚醒

「うっ……ッ!!」

小守は肩を落としたまま、ガタガタと震え始めた。

「なに……?」

「解らないわ!優!一旦引くのよ!」

流華の声に従い、優は小守と距離を置き、流華の元へと下がった。

「あいつどうしたんだろ……私の炎連牙が予想以上に効いたのかしら?」

「わからない……でも、明らかに様子がおかしいわ。うかつに近づかないほうが得策よ!」

ポッ!

優の両手に狐火が灯った。

「なんだか知らないけど、隙だらけよ！

近づけないなら遠くから狙い撃ちさせてもらっわ！」

ガシッ！

優は両の手を合わせて突き出した。

「双炎玉…一人バージョン…いつけえッ！！！」

バシユッ！！

両手に灯る最大級の狐火を錬り合わせ、巨大な炎玉を作り出し勢いよく放つ！

優の持てる最大の必殺技！

ドッガーーン！！

炎玉は直撃！

小守は避ける素振りさえ見せなかった！

「はあああッ！！もいっばいっけえええ！！！」

なんと優は先ほど同様の大炎玉を再び放った！

ドッガーーン！！
再び直撃！

土煙で様子は伺えないが、強大な一撃を2発も受けた小守はタダではすまない。

「はあ…はあ…ふう」

「すごいわ…アレだけの攻撃を連発するなんて…」

「ううん。流華のおかげよ。

あなたのこの陣の効果で一瞬にして靈気が落ち着くの。

普段なら両手で1発ずつ撃つたら、靈気の乱れが落ち着くまでしばらくは使えないもの」

「靈気の絶対量もあなたは人一倍多いようね…羨ましい限りだわ。それにしても…敵に動きはないわね…」

あれだけの攻撃を受けて無事ではないと思うけど…。

…あれ…？

私…痛みを感じていない…？

どういう事…？

「流華…やっぱりかも…」

「…」

ザワザワ…

辺りの空気が張り詰める。

「う…う…う…！」

砂煙が一気に吹き飛んだ！

小守の気合によるものだ。

「無傷…通りで痛みを感じないわけね…」

「…優…一瞬も気を緩めてはだめよ…！！奴から眼を離しちゃだめ」

解っているわよ…。

あれは間違いなく”狂気化”…只でさえ巨大な霊気がさらに膨れ上がった…！

スッ！

『!!!』

流華と優は一瞬にして小守を見失った。

ドガッ!!

突如腹部に強烈な痛みが襲う!

優と流華…ともに何かを食らったようだ。

勢い良く後ろに飛ばされる!

ドッガッ!!

二人は受身も取れずに地面に衝突。

「く……」

「一体…何が……」

流華の作り出した陣が消えてしまった。
陣を作り出すには術者は常に集中をして陣の中心に居続けなければならないのだ。

つまりこれで術の効果は得られなくなった。

ザッ

耳に入った足音にすぐさま立ち上がる優と流華。

辺りを見回しても小守の姿がない。

「何処に……」

「……優……上……」

優の頭上に両手で作ったハンマーを今にも振り下ろさんと落下して
くる小守！

バシッ……ン……！！！！

強烈な一撃が振り下ろされた。

「きゃあああ……」

優の悲鳴が響く……が、それは小守の一撃によるものではない。
流華に蹴飛ばされ、吹き飛んだ際のものだった。

「いちち……何するのよッ…っ…流華!？」

「ぐぐ…!」

なんとあの強力な一撃を流華が両手を頭上でクロスさせガードしているではないか。

流華の足元は地面にめり込んでいる。

相当の衝撃が加わったに違いない。

「流華あッ…!」

優はすぐに流華の元に駆け寄った。

「どけえええッ…!」

優は右手に狐火を宿して攻撃態勢に入った。

そして全力の右ストレートを放った。

スカッ!

「!?!?」

避けられた!?

「優！後ろツ！！」

優は流華の声に合わせて目視する前に回し蹴りを放った。

ガシッ！

小守はそれを余裕で受け止める。

ザワッ…！

その瞬間優に死を告げる刻印が現れた。

「嘘ッ…!?!」

ギシギシッ！

小守は優の右足首を掴んで力を込め始めた。

「ああああッ…!!」

なんていう力なの…!?!?
まるで引きちぎられるかのような痛みッ!!

「はぁッ!?!」

ドッソッゴ!?!

「!?!」

流華の渾身のストレートが小守を吹き飛ばした。
だが同時に自身も苦悶の表情を浮かべる。

小守のアンチペインの能力はまだ流華にも生きていた。
攻撃すれば痛みは流華に戻る…。

しかし、今の一撃は霊撃…ダメージ+痛みは小守も同じ!

「ハアアアアッ!?!」

流華はさらに霊気を高めていく。

「流華…これは一体…」

流華が身に纏っている靈気が力強く輝きだす。
淡い赤…それは徐々に美しい黒髪も染めていく。

「陣と同じ要領よ…対象を私個人に向けただけ…。
この状態の維持は恐らく長くて2分…その間に倒す…！
優…もしそれで私が奴を倒せなかったら…あなたはすぐに逃げる
のよ…！」

「え…何を言ってるの…？」

「いい？私は2分後には靈力も空になって靈気も乱れっぱなしになる…。」

つまり普通の人間になるってことよ…いえ、それ以上に体もいう事を利かなくなる…。」

だから…もうその時は何も出来なくなる」

「だから…見捨てろって言うの…？」

「そうよ！…二人一緒に死ぬ事はないでしょう…！
私が何としても逃がす時間は稼いで見せるから…。
私の髪が黒く戻ったら…その時は躊躇わず逃げてね」

笑顔で優に告げた。

「ふざけないで！！そんな…そんな事出来るわけないじゃない！！」

「出来なくてもやりなさい！そしてすぐに茜さん達を呼んで…こいつを倒すの！」

「こんな化け物を野放しにしたら…どうなるかぐらいわかるでしょ！！」

「非情になりなさい！優！」

だからって…あなたを置いて…いけるわけ…

ないじゃない…。

「いいわね…！ハッ！！」

流華は飛び出していった。
物凄い速さだ。

流華に死を告げる刻印は出ていない…。
つまり死ぬことは無いと言ったことだ。

少なくとも、あの状態であれば。

「はぁッ！！」

バシッ！ドガッ！！！！

凄まじい攻防が繰り返されている。
両者とも尋常ではない戦闘能力なのであろう。

踏み込めば地面が抉れ、攻撃を当てれば、物凄い衝撃風と衝撃音が響く。

流華は相当な痛みを生じているはずだが、すでにそれを気合が凌駕してしまっただのか、
痛みで攻撃の手が休まることはなかった。

死を覚悟した時の力…。

「はぁ…はぁ……………うわあああッ！！！！」

渾身の上段蹴りが小守を地面に叩き付けた。
さらに追い討ちをかけるかのように流華は全力で踏みつけた。

ドッガーーン！！

土煙が勢い良く吹き上がる。

「はぁ……………はぁ……………」

流華の姿が土煙から出てきた。

「流華…？終わった？」

「かな…？はは…」

流華の髪色が黒く戻っていく。

ズズツ

「え…？」

突如流華に浮かぶ死を告げる刻印。

その時だった。

ズブツ！！

「！…カハツ……………」

流華の腹部を貫き、小守の手が見えた。
流華は吐血した。

「ゆ……う……逃げ……」

そう言つと流華は氣を失つた。

「流華……？……嘘……」

う……うわあああああああああッ！……！……！……！」

優の絶叫が辺りを包み込んだ。

ドサッ！

流華はそのまま地面に放り投げられた。

「……」

無表情で手についた流華の血を舐める小守。
狂気化し、すでに理性はないようだ。

「……許さない……お前だけは絶対に許さないッ……！」

優は全身に今までにない力強い靈氣が漲っているのを感じた。

だが、そこで優の理性は吹き飛ぶ！

「シッ…！」

一瞬にして小守の間合いに入ったかと思うと上段蹴りを顔面に叩き付けた。

さらに、崩れる小守に対して肘鉄を浴びせ、吹き飛び様に狐火・大炎玉を放って吹き飛ばした。
先ほどの流華と同等…いやそれ以上の能力を発揮している。

「…流華……はっ！…私…一体？」

我に返った優は急いで流華の元に駆け寄った。

「流華！！…死んじゃだめ…絶対に死んじゃだめなんだから！」

優は流華に治癒術をかける。

今までにない輝きが流華を包み込む。

「生きて…！お願い…生きてッ…！！！」

優の懸命な治療で徐々に傷口がふさがっていく。

「…ゴホツ…ゴホツ…!!」

流華が血を吐き出した。

「よかった…！意識を取り戻した！」

「…ゆ…う…?」

流華は薄っすらと眼を開けた。

「流華…大丈夫…もう大丈夫だから」

優は涙が零れた。

「泣かない…で…。お願い…早く…早く…逃げ…て」

「大丈夫よ…あんな奴…私があつ飛ばすんだから！」

ザッ！

「!……流華……ごめんね……。
もうちょっとだけ我慢してね……」

小守が現れた。

全身は傷だらけで恐らく骨折などもあるだろう。
人としてみたら、重症に値する。

しかし、中の靈魂が無事である以上、器である肉体のダメージは無
関係といったところだ。

「すぐに終わらせるから」

優は立ち上がり、再び気合を込めた。

「しつこい奴は嫌われるのよ……あんた」

キレてはいたが、優にも対峙する少年の重症は眼に見えてわかって
いた。

流華をあんな眼に合わせた相手……正直慈悲の心などかける必要もな
い……そう思っていた。

しかし、優にはそれを上回る”人の心”があった。
これ以上、傷つけられれば……彼は死んでしまふ。

優にとって彼を殺すという選択肢は最初からなかった。
それは今も変わらない。

「…ったく…これで終わらせるからね…」

優は両手共に拳を作ってそれを構えた。

まるで剣を構えるかのような、見せたことのない構え。
優は眼を瞑って精神集中を始めた。

辺りの木々がざわめき始めた。

第8話 完

N E X T S I G N …

第9話 決着

S I G N 二章 - S e V e N ' s D O A -

第9話 決着

私の中で、何かが変わるのを感じた。
だから出来るはずよ…私。

自分を信じて…きっと大丈夫。

そういえばアンチペインによる痛み…

我を忘れていたのか…理由はわからないが痛みの記憶がない。

いけるッ！

「はあああああああッ！！！！！！」

優の気合を込めた声が響く。

すると組んでいた手から、漆黒に揺らめく刃のようなものが現れた。

闇をも飲み込む漆黒の刃…これこそ霊王眼に秘められし第三の能力。

「出た…！！」

…霊を封印する霊気の刃を操る能力…。

私ではこの能力は本来の能力の三割程度しか扱えない。

その三割の能力限定は威力…？

封印できる限界？

わからない…。

でも、きつと今の弱りきってるあいつなら…倒せる！

シュッ！

小守が動き出した。

先ほどとは打って変わって動きに精彩さが無い。

どうやら確実に弱っているようだ。

「行くわよ…！」

優は両手で漆黒の刃を手に駆け出した。

「アアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！」

「終わりよ…！！」

二人は勢い良く交差する！
そしてそれぞれ勢いを落としつつ…静止…。

両者ともが動きを止める。

ドサッ

小守は倒れた。

「……………封印…完了」

優はすれ違い様にその漆黒の刃で小守を一刀両断していた。
肉体を斬らず…魂を斬る剣…。

優は倒れる小守に歩み寄った。

そして脈を確認する。

トクン…トクン…

「よかった…生きてる」

でも重症には違いない。

流華も傷は塞がったとはいえ、血は流れている。
このまま放っておけば危険かも知れない。

ウーーーーー…！

「！…ええ！？」

パトカーが公園の前に止まった。
流石にこのドタバタが五月蠅かったのか、通報されたようだ。

「やばっ…！…どうしよ…！…どうしよ…！」

慌てふためく優。
しかし時はすでに遅し。

警察はこちらにやってきている。

「！…あれ？…あの人」

見たことのある刑事が一人…。

「ん…？君は！」

「お久しぶりです八坂警部！」

朝霞警察署刑事課の警部、八坂真だ。

「この状況……厄介事…かな？」

あはは…。

八坂警部は私の母、雪と昔からの馴染みで…霊がらみの…
いわゆる一般的じゃない事件に対しても多々経験があるらしい。

だから彼には全てを話せる。

優は霊王眼については伏せたが、
親戚の能力者がこの久木を滅ぼそうと目論んでいる点を上手くまとめて話した。

「信じがたいが…恐らく事実なんだろうな…。
しかし…相手がそのような連中では、我々は余りに無力…」

「…シン警部…」

程なくして救急車が到着。

忘れられていた須藤彰と流華、小守の三人は運ばれていった。

「優さん…もしその男の計画が実行されたらどうなります?」

「悪霊を放たれば、取り憑かれる人間は多いでしょうね…。」

それだけじゃなく、邪悪な霊気にあてられて…今まで大人しかつた霊まで狂気化する恐れがあります」

「そして、人間同士の争いに発展…その負の感情が再び狂気を生む…。」

「悪循環…か」

「その通りです…。だから何としても計画を阻止しなければ…」

大変なことになる…!

「優さん、私等は戦えない…が、協力はおしまんつもりだ。

その男の顔写真、特徴などを教えてくれれば捜査する」

でも…いいのだろうか。
彼等を巻き込んだら、恐らく死人が出る。

優は俯いた。

「優さん…あなたの気持ちはなんとなくわかりますよ…。
我々の事を思ってくれているのでしよう？」

「…はい…。相手は常識を超えた化け物です…。
もし遭遇したら…正直警察でどうにかできるとは…」

「ありがとう…。
でもね…私等は霊が相手じゃなくても、死は常に隣り合わせなんですわ…
皆それを何処かしらで覚悟している…だから心配せんでください」

そう言ってシン警部はニコツと笑いかけた。

「シンさん…」

「私の部下で鈴木ってのがいるんですがね…先日何者かに襲われ、
重症を負いました」

「え!？」

「恐らくは…。」

だからこれは奴の弔い合戦でもあるんですわ…。」

…。

「わかりました…お教えしますので、後日家に来てください」

「ありがとうございます…優君」

そういうしかなかった…。

シンさんの目を見たら…。

そうよね…私だって仲間がやられたなら…きっとシンさんと同じ気持ちになる。

例えそれが危険だとしても…人には引けない時があるのよね…。

優はシンさんに送ってあげようとの誘いを受け、パトカーで帰宅した。

「ただいま」

「優！！こんな時間まで何処で何をしておった！！！」

玄関の扉を開けるや否や祖母・茜の怒号が飛んできた。

「あれほど出かけるなど言っておったの…に！？」

油は茜に飛びついた。

「優…？どうしたんじゃ」

「…っ…っ…」

優は茜の胸の中で涙をこぼした。

流華の事…シン警部のこと…無力な自分のこと…。

色んな気持ちが一気にあふれ出した。

「…」

「…なるほどの…そんな事があったのか…」

優は事の経緯等を話して聞かせた。

「…どうしよう…また人を巻き込んでしまう…」

「優…それほどに落ち込むでない…」。

お前はよくやったよ…」

「でも！…流華を危険に晒しちゃったし…警察まで巻き込もうとしてるのよ！？」

「彼等には彼等の覚悟と正義の使命感がある…」。
それを否定してはいけないよ」

だからって…」。

ああもっ…！

シンさんの気持ちもわかるし…でも危険に晒したくない気持ちもあるし…」。

「私が一緒に動く…それでよいじゃろ？」

「え？」

「私はシン殿とも面識があるし、彼等警察と動けば万が一の時も私
がなんとか出来る」

「確かに…でもお祖母ちゃん一人で大丈夫なの？」

ゴツン！

茜の鉄拳が優の頭上に落ちた。

「いったっあああ！何するのよ！」

「たわけッ！私を誰とっておる！」

「いっばしな事を言うには100年早いわっ！」

はは…

まあこの元気があればきつと大丈夫ね…。

「まあ相手がそれほどの実力となれば、用心に越したことはないが
の…」

「うん。

今までにないタイプの敵だったわ…アンチペインなんて…そんな
能力受けたことがない」

「妖魔に近いかもしれんな…能力的には…じゃが」

「妖魔ってそんな特殊な攻撃をするの？」

「うむ…。属性を操ったり…独自の特殊能力を持っておることが多い。

恐らく怨霊の合成なんかで、そういった突然変異を起こしておるのかもしれない」

そうなんだ…。

気づけばPM11:20。

優は風呂に入ってそのまま倒れ込むように眠りについた。

その頃…

「復讐者(Avenger/アヴェンジャー)」が倒されました
…」

「そう。。
思った以上に強いようだな…奴等」

暗く冷たい地下室で緋土京と超越は会話していた。

「彼をどうしますか？」

「小守大成か？…放っておけ」

「消さなくても…？」

「敗れはしたが、奴が人間に協力的に働きかけるはずはないさ…
それよりもパーティーまで時間もあまりない…皆に伝令頼むよ」

「はい…お任せを」

そう言って超越は部屋をあとにした。

ガンッ！！

緋土は机の上にあったペン立て等をなぎ払った。

「く…!! 奴等めッ…!!」

激昂する緋土京。

残るS e V e N ' s D o Aは6人…。

翌朝…

9月5日(土) AM 9:30

「ふにゃ…」

うう…よく寝た…。

ビシッ!

「痛ッ…!!」

嘘…全身筋肉痛!?

「はは…無理もないわね…」

昨日は無茶したからね…。
今日が休みでよかったあ…。

優はガクガクと、まるで老人のように立ち上がった。
そのままリビングへ。

「お、おはよう…」

「遅かったわね優」

「あはは…ごめんね…。」

あれ?お祖母ちゃんはいないの?」

「うん。朝早く警察へ行くって出て行ったわよ」

あ、シン警部の所にいったんだ。

わざわざこっちから出向くなんてお祖母ちゃんらしいわね。

「お姉ちゃん昨日は遅かったの?」

「うん。お祖母ちゃんを先に帰して、私は街を見て回ってたの。
はい」

優に朝ご飯のカツ丼が出された。

「うわああ！お姉ちゃん特性カツ丼じゃん！」

「くす…。」

相変わらず朝からよく食べれるわね…呆れちゃうわ」

ガツガツと駆け込む優。

「だってお腹すいてるんだもん！てか美味しいし！」

「はは！それはなによりでございませす」

「いやはや、わざわざご足労願いまして恐縮です」

「いえいえ。毎度孫がお世話になって、これと菓子です。つまらないものですが、皆さんで召し上がってください」

茜はシン警部に手土産の和菓子を渡した。

「緋土京…24歳…これが顔写真ですか」

「はい。身長は170前後らしいです。」

私も直に会った事はないので詳細は不明ですな」

茜はメールにて緋土京の写真を送ってもらっていた。

「他の情報は…」

「すみません…これ以上は下手に危険に晒すことになるゆえ…。協力はここまでしか出来ません…身勝手な話で申し訳ない」

茜は頭を下げた。

「いえいえ、十分です！頭を上げてください！」

「私が同行しますが、くれぐれも気をつけて行動してください…。」

相手は常識外ですからの」

「心得ています…こちらも、内容が内容なだけに大っぴらな動きは取れないうえに、

少人数の行動になります」

「むしろ少人数のほうがいいですな…。」

下手に群がるとかえって的確になりますからな」

「では…早速聞き込みに行きますか」

「ですな…」

茜と警察のタッグが動き出した。

第9話 完

NEXT SIGN…

第10話 新たな敵

S I G N 二 章 - S e V e N ' s D O A -

第10話 新たな敵

「さてと…お姉ちゃん、ちょっと出かけてくるね!」

「え?何処に行くの?」

朝食を平らげ、着替えを済ませた優はリビングを通りがかる際に亜子に伝えた。

「ちょっと病院にね!二人のお見舞い!」

流華と須藤先輩どうしてるかな…。

怪我事態は大したものじゃないと思うけど…。

優は聖ヶ丘病院へ向かった。

その頃…病院では…。

「まったくお前は…毎度毎度心配かけさせやがって！」

「うるせえな…俺は別に何でもないっての…」

巻き込まれただけだって言ってるんだろが！」

須藤彰とその親父が大声で揉めていた。

「あの、お二人とも病室では静かにしてくださいね」

『す、すみません』

親子揃って頭を下げた。

「とにかく俺は自分から絡んだりしてねえっての…」。

怪我也大したことないし、さっさと帰るぞ親父」

「まったくおめえって奴は…俺の若い頃にそっくりだ」

二人は病室をあとにした。

「ん？…あいつ…」

須藤は売店にいる流華を発見したようだ。

「…アンパン…ジャムパン…むう…」

「よし」

須藤の呼びかけにビクッ！とする流華だった。

「な、何してんだ？」

「べ、別に…朝食を選んでただけよ！」

ポロポロの衣服…。

どうやら流華も大した怪我ではなく、このまま退院するようだ。

「…あんだ…迎えとかは？」

「…。いないわ。」

私はここに一人で引っ越してきたの」

須藤は少し気まずい事を言ったな…と言葉に詰まった。

「おいアキラー！なんだよナンパか！？」
俺はもう帰るぞ！」

「ち、ちがわいッ！勝手に帰れ！糞親父！」

須藤の父はそのまま帰っていった。

「お父さん？」

「ま、まあな……。でさ……。ついだし色々聞きたいんだけどいいかな？」

「……。そうね。」

いいわ。裏の公園で話しましょう」

二人は病院を出た。

「あ！……優じゃないか？あれ」

「……ほんとだ」

優が向こうの方から走ってくる。

「!…あれ!? 流華と須藤先輩じゃん! おーい!」

優は二人に向けて手を振った。

それを見て二人も手を振り替えた。

「はあ…はあ…! ういっす!

もう二人とも体は大丈夫なの?」

「あなたのおかげで事無く終えたわ。ありがとう」

「俺は元々そんな怪我とかじゃないのに運ばれたからな…。
今丁度この子に色々聞こうと思ってたところなんだ」

三人は裏の公園へ移動した。

「なるほど…そんな事態になってんのかよ…」

「ごめんなさい…巻き込んでしまったのはタダで済まない…
そう思って皆には黙ってるの」

優は須藤に謝った。

「いや、いいんだ。

俺や片桐達じゃお前の考えるとおり戦力にはならないだろうさ。
実際問題この有様だしな…」

「そう言った意味では私も同じよ…」。

緋土京が相手じゃないというのに…一人で奴に勝てなかった」

落ち込む二人。

「ちょ…！そんな暗くないですよ！

皆の力あつての勝利だったんだからさ！」

優は慌ててフォローした。

「そつだ…優はアイツを倒したんだよね！？

一体何をしたのよ」

はむっ！

アンパンをぱくつきながら質問する流華。

「私にもよくわからないんだけど…流華が目の前でやられて…それから急に力があふれ出したっていうか…」
「ごめん…実はあんまりよく覚えてないんだ」

あの時のような感覚は今はない…。
感情の高ぶりによる一時的な作用だったのかな…。

「そう…。」
でも私達が組めば、そこそこやれることはわかったわ。
あと、奴の口ぶりからして緋土京はすでに仲間が複数いたと考えたほうがいいわね。

例の色んな場所での同時殺人…あれから察するにまだ仲間はある」
「今朝ね、お祖母ちゃんが警察の人と協力して緋土京を捜査するって出かけたそうよ」

「警察！？…警察が太刀打ちできる相手とは思えないが…」
「須藤さんだったかしら？…あなたの言うとおりだと思っわ。
警察でどうこう出来る相手じゃない…むしろ危険に晒すだけだと思っわ。」

何より、どうやって協力を求めるというの？」

「警部さんはお母さんと昔からの馴染みで、霊がらみの事件に昔から関わる機会が多かったの。」

だからそういった意味では一番の理解者でもあるの。」

それに危険は百も承知しているって…だからあくまで捜査の足として

お祖母ちゃんのサポートに徹すると思うわ」

心配なのは、お祖母ちゃんの事もそうだ。

口では大丈夫って言ってたし、私自身お祖母ちゃんの実力はよくわかってる。

だから心配ないとは思うけど…何処かしらで不安というか…。

「とりあえず、今朝のニュースで殺人のニュースは出てなかった。

ま、犯人逮捕の件も出てなかったけど」

「そつえば私達の事は？何か出てた？」

「いえ、出てないわ。

あなたが言った警部さんが上手く裏で動いてくれてるんでしょ？私達に事情聴取の話もきてないし」

「…そつえばそうだな。

てか、アイツもここに入院してんだろ？」

三人ともここに運ばれたのは間違いないから…そうだと思う。

「さっき受け付けで確認したけど、かなりの重症らしいわ。

命に別状はないそうだけど…詳しくは教えてもらえなかったわ」

「そうか…。思ったんだが、アイツが倒されて…仲間である緋土だっけ？」

そいつがここに訪れるとはかないのかな？」

！…可能性はあるかもしれないわね。

「緋土京の性格からして、それはないと思うわ…。使えるコマならいざ知らず…使い物にならないものに執着するよ。うな奴ではないと思うけど」

「そうなの？」

私は緋土京についてよく知らない。でも確かにあの冷徹な眼差しを見る限り…そんな印象を受けるのは仕方ないかもしれない。

「ふう…ご馳走様！」

アンパンを食べ終わった流華はおもむろに立ち上がった。

「私は一度帰るわ。」

いつまでもこんな恰好で居たくないし」

「そだよね、じゃあかえろっか」

「だな」

流華が振り返って優を見た。

「来てくれて…ありがとう」

そう言つてニコツと笑つた。
優も暖かい気持ちになつた。

三人は病院をあとにした。

その頃…茜たちは。

茜、シン警部、部下2名の4人にて街中で聞き込みをしていた。

「ダメですなあ…目撃者はいないようです」

「範囲を広げますか…」

(まあ…予想の範囲内…首謀者が明るい内から街中を堂々と歩くとも思えないしの…。)

聞き込みなら夜のほうがいいかもしれん…」

4人はパトカーに乗り込み、捜査範囲を広げること…。

少し走り出した所で茜は妙な気配を感じ、パトカーを止めさせた。

「どうしたんですか？」

「いえ…ちょっと強い靈気を感じたような気がしましてな…
(どこじゃ…? ……ふむ…あの雑居ビル…怪しいのう)」

茜は一人歩き出した。

それについていく3人。

「ここは…いかにもな廃ビルじゃな」

目の前に立つ古びたビルは4階建てだ。

元々は何かしらの会社なり店があったのか、各階に看板痕がある。

「茜さん…ここから何か感じるんですか？」

「いや…今は何も感じない…」。

周到に気配を消しているようじゃな…じゃが、あたって見る価値はあると思うぞい」

茜はニコツと笑った。

「じゃあ行くかの」

茜を先頭にビルに入っていく。

当然だが、人の気配はない。

階段を上り2階に到着。

扉のドアノブを回してみるも、カギが掛かっているようだ。

「ふむ…ここは違うようじゃ」

このペースで3階も確認。

しかし同様にカギは掛かっている。

「むー気のせいだったかの…？」

茜は最後の希望を胸に4階へ向かった。

ガチャ…

「！…回った…」

「茜さん…我々が先行しましょう」

「いや…大丈夫…」

皆は自分の身を第一に考えてくれ」

ギィ…。

ドアを開いた。

辺りを見渡す…どうやらフロア一体が空になっているようだ。

まだフロア外に体がある状態で見渡してはいないが、そのよ
うな印象を受けた。

「入りたまえ」

『！…』

突然の一声に4人に一気に緊張が高まった。
刑事たちは銃を構える。

「警戒しなくていい…さあ入りたまえ」

4人はゆっくりとフロアに足を踏み入れた。

「ようこそ…よくここに居るとわかったね」

『動くな!』

三人の刑事は一斉に男に銃を向けた。

距離は10mほどだろうか。

男は背広を着た20代〜30代…身長は170cmそこそこ…痩せ型だ。

緋土京ではない。

「いきなり部屋に入ってくるや否や、銃を突き付けるってどういう事？」

「僕が何かしたかい？」

「無許可で建物に入っている奴がいう台詞じゃないなあ…とにかく動くな…！」

「御婆さん…彼等に言ってくれないか？」

「君たちは無力…余計な真似はやめろ……」と」

この状況下で余裕の笑みを浮かべる辺り、自分の実力に相当な自信があると思受けられる。

「八坂警部…部下の方を連れて部屋を出てくれませんか…」

「あなたまで何を言うんですか…！シンさん！

ここは引き下がるべきじゃないですよ…！」

若い刑事がそう言った瞬間だった。

男はわずかに腕を振った。

バシユッ！

「え…」

怒鳴った刑事の右肩がスパッと…まるで鋭利な刃物で切られたかのような傷が出来た！

かろうじて腕は繋がっているが、かなり深い傷が出来て、血も大量に噴出している。

「うわあああああああああ！……！」

「佐藤ッ！……く……貴様ああッ！……！」

泣き叫ぶ佐藤刑事、それに激昂する若い刑事！

「落ちて着け宮本！……今は佐藤の命を優先しろ！」

「……！！……はい！」

宮本刑事は急いで自分のスーツで止血をはかる。

「急いで連れて行くんだね……出て行く口実を作ってやったんだ……ありがたいと思ってるね」

ニヤニヤしながら男は言った。

宮本刑事はキツッと睨んで佐藤刑事を連れて部屋をあとにした。

「八坂警部……早速すまんの……」

治療をしてやりたい所じゃが……今隙を見せるわけにはいかないので

な……」

「いえ……全ては覚悟の上です……。すみません……あなたにお任せする以外にないようだ……」

八坂警部は手が震えていた。

男に……そして自分に対して怒りに打ち震えていたのだろう。

八坂警部もゆっくりフロアを後にした。

「さて、邪魔も消えたことだし……話を始めようよ」

「話……？私からすることは何もないよ……お前が一方的に喋ればそれでいい」

「ふーん……やらせてみせてよ。まあやれればの話だけだね」

「ふふふ……いたぶりがいがありそうじゃわ……」

第10話 完

NEXT SIGN……

第11話 解剖

S I G N 二章 - S e V e N ' s D O A -

第11話 解剖

「…」

(まだ私自身に”死を告げる刻印”は出ておらん…)

少なくとも死ぬ事はない…。

しかし、実力的にはどうかのう…(」

「僕はね、たまに自身の”この力”を発していたんだ…遊び相手が欲しくてね。

普段なら彷徨ってる霊がやってくるんだけど、今日は君たちがやってきた…」

くく…これは今までにないことだよ」

男は禍々しい靈気を放ちながら不敵な笑みを浮かべている。

「ふん…何が可笑しいんじゃ…」

こちらとしては、手がかりを掴めて喜ばしい限りさ」

茜もニヤリと笑った。

「あー…やっぱり御婆さんは”あの人”の言っていた敵対勢力か…。
これは潰しておかなくちゃね」

”あの人”……緋土京のことかろう？」

「?…さあ…あの方はあの人さ」

男は表情を変えずに戦闘態勢に入った。

「名を聞かされておらんのか…はたまたとぼけておるのか…。
まあどちらにせよ…戦闘は回避できないようじゃな。
まずは動けなくさせてもらおう」

茜は咄嗟に手を前に出した。

「はっ!」

「!」

ビュンッ!!

突如、突風に吹き飛ばされるかの如く男は吹き飛び、壁に押し付けられた。

「ぐ…!!…なんだこれは!？」

「ただの気合じゃ…」

一足飛びで男に近づく茜。

男は未だに壁に張り付いた状態で身動きが取れないでいる。

「く…!!こ、こんなもの…!!」

「無理じゃ…落ちてもらうぞ」

茜の渾身の掌底突きを男の水月に打ち込んだ。

「ガハッ…!!!!!!」

吐血し、崩れ落ちる男。

霊気で筋力を増強された一撃は、老婆の一打とは思えぬ威力を発揮する。

「ふむ…あっけない」

ヒュッ!!

崩れ落ちた男が即座に立ち上がりながら手刀で反撃してきた。

茜はギリギリの所でソレをかわした。

が、肩には切り傷が生じている。

「…靈気の刃か…」

「あー…油断したわ…。」

マジで逝きかけた…なんて婆さんだよ…あなた」

右肩が斬られたとはいっても、薄皮一枚といったところ。戦闘になんら支障はない。

「…」

(ふむ…靈気の質が変わったな…より一層攻撃的…

同じ手は通用せんじゃろ…)」

先ほどの気合は男に内在する怨霊に対して発した破邪の気…。それゆえ気圧され、あのような状況を作り出す。

しかし、気合を上回る邪気を放っている現状、効果は望めないと踏んだのだ。

「自己紹介しておこう…僕は”解剖(Dissection)ノデイセクション)…」

あんたを切り刻み…解剖してやる」

「このド変態が…老婆を切り刻んでも面白くもなんともないじゃろ

が…」

シュツ！

男は駆け出した。
かなりの速さだ！

一瞬にして茜の間合いに踏み込んだ。

「まずはさっきの右腕ッ！！ちゃんと斬りおとさなきゃ！！！！」

「…！！」

男は茜とはまだ距離がある所で手刀を振り放った。

ピシッ！

「な…？」

「ふん…何を驚いとる！

霊気の刃を出せるのはお主だけではないわ」

茜は漆黒の刃を生み出し、それで男の霊気の刃をはじいたようだ。

「靈気を刃のように研ぎ澄まし…それを手刀に合わせて飛ばす…か。恐らくかなり強化し、見えない刃を演出しているのじゃろうが…私には見えておる。」

残念だったの」

「…じゃあ…見えても防げない奴をお見せしよう…」

男はゆっくり両腕を開いた。

「！…これは…」

男の両腕の下に無数の靈気の塊が現れる。それが徐々に形を変え…メスのような形状に変化した。

「行くよ…？これだけの刃…防げるかな！？」

「ち…！」

「はッ…！」

バシユッ…！

一気に茜目掛けてメスが発射された。かなりのスピードだ。

「守護霊壁!!」

茜は地面に手をつくると、そう叫んだ。

すると茜の前方に巨大な霊気の壁が生まれた。

この術は過去、緒斗の森（序章・14話）で夕見司が使った術である。

司は霊に抵抗力のない仲間たちのためにこの術を使い、霊気から守るために使った。

確かにそういう使い方も出来るが、このように霊気の壁を作ることや、自身のみを纏う様に使うことも出来る。

未熟な司では怨念の籠った霊気を和らげる事は出来ても、霊撃は防げない。

しかし茜のそれは、十分に霊撃を防ぐに値する技である。

全てのメスは霊気の壁の前に沈黙した。

「なんだと…!?!」

「残念じゃったな。」

（とはいえ…霊力の消費も大きいからの…

あまり容易に使えない技でもある…。

ここは一気にかたをつけ…縛り上げておくかの」

茜は靈気を高め始めた。

「はあああッ!」

「ぬ…!?…なんだ…?」

茜を纏う靈気が強く輝き出し、光がほとばしっている。

「はっ!」

「!」

茜の踏み込んだコンクリートの床が見事に割れた。
同時に男の間合いに入る。

男には一瞬にして茜が視界から消えたくらいにしかわかってはいなかった。

ヒュッ!

バシッ!!!

一瞬にして男の背後に回りこみ、中空からの手刀が男の首筋に見事にヒットした！

男はコンクリートの床に勢いよく叩き付けられた。

だが、茜はさらに追い討ちをかけるように倒れる男の背中目掛けて踏み込んだ。

あまりの威力に床が抜け、二人は3階へと落下していった。

「はっ…はっ…」

（筋力・霊力・霊気・動体視力に至るまで、全ての能力を一時的だが飛躍的に上昇させる…この”霊王化身”

霊王眼の5つの能力の中でも一番負担が大きい…。

出来れば使いたくはなかったが…他の技は余りに破壊範囲が広すぎるからのう…

こんな場所では流石に使えない…。まあこれでも十分に目立つ破壊になってしまったが…）

ビルの外では八坂警部が対処をしていた。

流石に大きな音に野次馬が集まってきていたからだ。

それ以前にも救急車が来たりで人だかりが出来ていたので尚更騒ぎになっている。

「茜さん…大丈夫なのか…!？」

「…」

男はピクリとも動かない。

全身うつ伏せでコンクリートの床にめり込んでいる。

「…下手な芝居はやめたらどうじゃ。

時間稼ぎは無駄じゃよ」

茜がそういうと男はゆっくりと起き上がった。

「全く…老人の力じゃないよ…。常人なら死んでるところだ」

「骨折もなしか…大したものだよ。

(あの速さからの攻撃に防御が追いついたというのか…?)

これは周りを気にしている余裕はないかもしれんな)」

「御婆さん…一つ取引しないかい？」

「？…取引じゃと…？」

いきなり取引を持ちかける男。

「僕はまだやりたいこともある…ここで終わりたいくないんだ。
あなたは僕等のボスの居所を知りたいんでしょ？」

「つまり、情報を得る代わりにお主を逃がせと…そういうことか？」

「？」名答」

「答えはNOじゃ…そんな取引に応じるはずなからうて」

茜がそう言つと、男はおもむろに背広を脱いだ。

「はぁ…せつかくの申し出を無碍にしたこと…後悔すればいいよ」

「最初から話はせんと言つたじゃろつ」

二人は同時に後ろに下がった。

男は先ほど同様に両腕を広げ、無数のメスを生み出した。

さらに両腕に長い刀のようなものを生み出した。

「死ねッ!!」

メスを飛ばすと同時に自分自身も飛び出してきた、

「この際、周りを気遣ってはおられんな!!」

碎竜…力を借りるぞ…!!はああああッ!!!!」

茜は両手を前に突き出して気合を込めた。

凄まじい靈気が両手に集まっていく!

「碎竜の咆哮!!」

ドウッ!!

茜がそう叫ぶと、一気に大砲のような靈気の波動が両手から溢れんばかりに飛び出した!

目前に迫っていたメスを飲み込みながら男に向かっていく!

「くっそおお!!」

男は両腕をクロスさせ、頭を低くしてガードの態勢をとるものの、波動の勢いに負け、吹き飛んでいった。

そして壁に激突し、勢いそのままに突き破って外に落ちていった。

「はあ……はあ……」

(いかん……思った以上に霊力の消耗が激しい……)

今の一撃で倒したと信じたいが……もしあれで倒せないようであれば……

ここは一旦引くしかないか……)」

霊王眼の”霊の能力を吸収し自分のものにする能力”で得た碎竜の能力……”竜気”。

かつて若かりし頃、妖魔碎竜と戦い、得た力。

その強大さ故に消耗もまた激しい。

「年は取りたくないものじゃな……」

茜は碎竜の咆哮で出来た壁の穴から下を覗きこんだ。
人だかりが出来ている。

「……いない!?!?」

茜は急いでビルを駆け下り、飛び出した。

「茜さん!？」

「おお!八坂殿!」

「無事でしたか!よかったです!…先ほどの地鳴りやら、ビルの崩壊で心配しておったんです」

「話はあとじゃ!今ビルから男が落ちてきたじゃろう!？」

「え…?こちらからは確認していませんが…」

茜は人だかりのほうへ駆け出して野次馬に聞いた。

「男?…ああさっき飛んできたぜ!

でも、別の男がすぐに連れて行ったよ」

「そうか…ありがとう…(逃げられた…か)」

「あの糞ババア!！」

「落ち着きなさい」解剖（Dissection/ディセクション）
”」

苛立つ男。

あの場から逃がし、救ったのは”超越（Transcendence/トランセンデンス）”だった。

「はあ…はあ…！クソツ！！」

「彼女が場所を省みず最初から全力で暴れていたら、恐らく今あなたは生きてはいない」

「僕だって本気は出していない！」

「それを差し引いても…という意味で言ったのですよ。
とにかくもうすぐパーティーは始まります。
今はまだ大暴れは控えてください」

冷徹な眼で男に言った。

苛立つ男をも一瞬にして黙らせる威圧感。

「ち…」

「さあ…戻りましょう」

第11話
完

N
E
X
T

S
I
G
N
·

第12話 まるで夜空を照らす満天の星空

S I G N 二章 - S e V e N ' s D O A -

第12話 まるで夜空を照らす満天の星空

9月5日(土) PM8:20
とある地下室

緋土京を中心に、6人が集まってきていた。

「皆集まったようだね…力は存分に試したかい？」

「…一人いないようだか？」

正義 (Justice/ジャスティス) が質問した。

「復讐者 (Avenger/アヴェンジャー) ……小守大成君は
敵に敗れ…

現在入院中だ」

「おいおい！まさか…警察にマークされてんじゃないだろうな!？」

大男が怒鳴り散らした。

「破壊（Destruction/デストラクション）…落ち着きなさい…。」

マークされたとしても、彼は我々を売る事はないでしょう。そうですよ？…ボス」

女性のような美しい顔立ちの青年が大男をなだめつつ言った。

「暴君（Tyrant/タイラント）」の言うとおりさ。

彼は絶望を知った人間だ。今更何かに縋るなんてありえないさ。万が一口を割ったとしても、別に構わないさ…返り討ちにしてやる」

コツコツ…

少女が前に出てきた。

「ボスの言っていた”白凧家”…言われたようにマークは続けますが、

正直それほど危惧するような存在には思えなかったわ」

「恐怖（Fear/ファイア）」…確かに奴等は俺達からしてみれば小さな存在かもしれん。

しかし、侮るのはいけないな…”復讐者（Avenger/アヴエンジャー）”のように油断して負けてもつまらんだろっ？」

少女は黙った。

「ボス…計画について」

「そうだったな…」

明後日の9月7日(月)…深夜0時を持って集めた怨霊を街に解き放つ。

君たちは”派手”に暴れてくれていい。

人達達の恐怖や怒り…そういつた負の感情が相乗効果で怨霊を育ててくれる。

ちなみに、”生ける者も、霊魂も生死を問わず喰らい尽くせ”この命は一度忘れてくれ…。

霊魂は吸収しないでくれ。君たちが強くなる事は間違いないが、今でも十分に戦力としては確立しているからね。

より一層広めるためにも、数は減らしたくないのだ。…いいね？」

皆はそれぞれ頷いた。

「よろしい。この腐った世の中に我々が終焉の幕を下ろそう…
そこから我々が作る新世界がはじまるのだ！」

『お———!!』

周りは一気に盛り上がっていた。

一人の男を除いて…。

「…」

「超越（Transcendence／トランセンデンス）…ちょっといいかい？」

解散後、大フロアにて立食パーティをしている中、
一人でいる超越に話しかけたのは暴君（Tyrant／タイラント）
だった。

190

「なんだい？…君から声をかけてくるなんて珍しいね」

「そうかな…。超越…君は明後日のパーティに乗り気じゃないのかい？」

「…いや。そうじゃない…ボスの言う新世界には興味がないと思ってね…。」

私は結局何処まで行っても人間は愚者であると思っている…。
だから…本当なら全て滅びるべきなんだ」

「…愚者…か。」

確かにそうだね…この世界で人間は偉くなりすぎた…。

全てを人間優先に考え、自然を当然のように壊し…弱者を蝕む。

”他種族だから別にいい”という勝手な理屈でね…。

人間にそれと同じようなことをすれば、群集は怒り…裁きを求め、
その他では罪悪感さえ薄いものだ。

こうやって僕等が食べている肉や魚…糧にしている者達へ同じよ
うな感情は持ち得ない」

「暴君は難しく考えているみたいだが…私にはもつと漠然敵に、

”滅ぶべき種”だと思っただけさ…」

そう言って超越は他の場所へ行ってしまった。

「超越…」

その頃…

白風家では…

「…と言つ訳で…取り逃がしてしもつたわ」

茜は優と亜子に今日の出来事を話して聞かせていた。

「お祖母ちゃんでも完全に倒せない相手なんて…」

「優、そうじゃないわ。」

戦った場所が悪かったのよ。お祖母ちゃんは場所を考えて強力な技は使わなかった…

そういうことよね？」

「まあ…それもあるが、予想以上に強いという事じゃな」

私が倒したあの子よりも強かったのかな…。

「敵は今の所…緋土京を除き、二人ないし三人か。そのうち一人は優たちが倒した…」

「なんで二人じゃなくて三人なの？他にいたっけ？」

「お祖母ちゃんを連れ去ったっていう男のことを入れて三人かも…という話よ。」

二人かもっていうのは男を連れ去ったのが緋土京本人だった場合
ね」

なるほど。
さすがお姉ちゃんね…。

「しかし、もし敵がまだ大勢いるのであれば…正直辛いかもしれんな」

「そうね…私や優…流華ちゃんや勇君だけじゃ…ちよっときついかも」

「他の四家に声をかけてみたらどうかかな？」

困った時はお互い様だもん。

助けてくれると思いたいわ…何しろ五家のうちの一つが首謀者なわけだしね…。

「実はもう声はかけてあるんじゃないよ。」

西部・飛鳥は緋土家…まあこちらは大本が大本なだけに…出来る限り早急に対応に来てくれるそうじゃ」

「そういえば流華も言ってたわね」

「あとは北部・奥里の九鬼家からは快諾してもらったよ…葵殿と和馬と由良葉が向かってくれるそうじゃ」

「そうなんだ！？またあの二人に会えるんだね」

石動和馬、神楽由良葉は夏休みに一緒に修行した仲だ。戦力としても十分に期待できる。

次期当主の九鬼葵さんはうちのお姉ちゃんと同い年の22歳。会ったことはないけど、どんな人なんだろう。

「うむ…しかし、他の二つの家からは協力を拒まれた…。

理由はあるのじやろうが…まあ仕方ない」

「むう！ほんと非協力的ね！」

それからあつという間に1日は過ぎ去り…

9月7日(月) AM0:00…

とあるビルの屋上に緋土京と6人は立っていた。

「さあ…パーティの幕開けだよ…解き放て！

悪しき彷徨える魂たちよ！！」

緋土京は封呪の壺の蓋を開け、中に閉じ込めていた魂たちを解放し

た！

「綺麗…。まるで夜空を照らす満天の星空ね」

赤黒い光が天を舞う。

漆黒の闇に光るそれは…ある種幻想的な光景を作り出している。

「さあ…君たちもいいよ…！」

存分に暴れてくるといい！！

行けッ！S e v e n · s D o A！人間達に恐怖と絶望を味合わせるのだ！！

あっはっはっは…！！」

緋土の合図と共に各自散っていった。

それぞれが派手に暴れまわっている。

見かけたそばから人を殺し…物を破壊する！

優たちは、そんな状態になっているとも知らず…心地よい眠りについていた。

そして夜は明ける…。

「…何よこれ…」

優たちは朝のニュースを見て愕然とした。
久木の都心部・神那^{かんな}がまるで戦争でもあったかのように焼け野原と化している…。
映像越しにも、その悲惨さは伝わってきた。

「酷いの…まるで戦争跡地じゃ…」

「許せない…ッ！」

こんな…こんな…！
優は握りこぶしを奮わせた。

「ニュースによれば、暴れまわっていた人間は何十、何百ではない
そうじゃ…。」

つまり…恐れていた予想が現実にもものになってしまったわけじゃ
…」

茜は頭を抱えて俯いてしまった。

怨霊に取り憑かれた人間達の暴走…それがさらなる狂気を生み、怨霊を強くする…。

さらに大人しかつた霊もそれに触発され狂気化…。

巻き添えを食った人間が死ねばそれも怨霊となる…。

とまらない負の悪循環。

「私達…結局止められなかったのね…」

「…優もお祖母ちゃんもすっかりしなさいよ！」

確かに私達は止められなかった！何百人の命を救えなかった！

…でも、これから救える命だってあるはずでしょ！

ここで立ち止まっても、犠牲者が増える一方だわ！！」

普段大人しい亜子の一喝。

二人は頭を上げた。

「亜子の言う通りじゃな…」。

救えなかったことを悔やむより…出来る事をするんじゃ。

これから起ころうとしている悲劇をなんとかしても止めるんじゃ！」

「そう…だよな！」

私達がくじけて何もしないでいたら、また同じように悲しい思いをする人が増えることになるんだもんね…。

やるう…出来る限りのことを！」

ピンポーン！

誰かが来たようだ。

誰かは大よそ検討はつく。

優は玄関に向かった。

ガチャ

「やっぱ流華か」

「その顔は今朝のニュース見たようね」

やはりその事か。

「ええ。見たわ…酷い有様だった…。

だからこそ…あんな悲劇を再び起こさせちゃいけない！」

「そうよ…何がなんでも阻止しなくちゃ…！」

現地に行かなきゃなんとも言えないけど…恐らく街を壊滅させたあと、靈魂を回収し…

次の街へ向かったはずよ」

なるほど…そうやって次々と…！
許せない…許せないわ！緋土京！

「優…流華殿…お前たちは学校に行きなさい。
幸い神那とは距離もあるから、こちらは普段通りじゃろ」

「でも！こんな時に！」

「そうです！私達も現地に！」

優と流華は納得いかないようだ。
心情としてはいてもたってもいられないのだろう。

「向こうは私と亜子が行く。

おぬし等は学生の本分を全うしなさい」

「お祖母ちゃん…」

「それに、万が一私等がいない時に、この聖ヶ丘に攻め入られたら
…誰かが守らねばなるまい？

優…流華殿…頼んだぞ」

茜は二人の肩をぎゅっと握った。

「…わかったわ…」

でも、もし敵を見つけたらすぐに呼んでね…」

「すぐに駆けつけますから」

「うむ。それはお互いへの」

優と流華は学校へ向かっていった。

「亜子！すぐに向かうぞ」

「ええ」

こうして緋土京の計画は本格的に動き出した。
この狂気の計画を食い止めることは出来るのか…。

その頃…

「なんだ…てめえ等…！」

登校途中の片桐亮は多くの不良に囲まれていた。
目つきが尋常ではない。

ここでも戦いが幕を開けようとしていた。

第12話 完

NEXT SIGN…

第13話 不破まりあ

SIGN 二章 - S E V E N ' s D O A -

第13話 不破まりあ

「おいおい…朝っぱらから勘弁しろよ…」

(この制服…聖ヶ丘北の白壁高校か…なんだってこんな場所にいるんだ。

それに目つきが尋常じゃない…薬でもやってるのか…?) 「

片桐亮の前方を塞ぐ様に白壁高校の男子生徒6人が異様な雰囲気以身構えている。

「ぐぐぐ…殺す…ぶつ殺すぞコラア!!!」

「俺はお前らに殺される理由がない…」。

これ以上絡むならこっちも容赦しねえぞコラ」

片桐は威嚇した。

が、全く効果がないようだ。

ジリジリと片桐に迫ってくる。

「はあ…。ついてないぜ…。ん？
(なんだ…。？この妙な感覚…)」

片桐は少し下がって、眼を凝らして彼等を見つめた。

「…マジかよ…」

禍々しい濁った靈気を見て取れた。

「こいつ等靈にとり憑かれてやがんのか！？
そいやあ…。白風のバアさんが言ってたな…。俺は靈媒体質だって…。
靈がよって来たのは…。そのせいだよ！」

「うがああ！！」

一人の生徒が片桐に襲い掛かった！

「！…にやるッ！！」

片桐はその長身から前蹴り繰り出した。

バシッ！

見事にヒットし、吹き飛ばした。
しかし、片桐は霊撃が放てない。
出来るのは - の性質の霊気を使う程度。

故に今の蹴りもタダの蹴りである。

「わかつたら...怪我しなくなつたら、もうやめとけ！」

「るせええええええええええ！」

今度は他の5名が同時に片桐に襲い掛かる！

「!」

流石にこの人数で襲い掛かれては片桐もどうしようもなかった。
一気に覆いかぶさる5人。

「痛ッ！誰だ噛みやがったの！って...何処触つてやがる!!
やめろ！どけっ!!」

片桐は全力で暴れるものの、流石に男5人に覆いかぶさってはなす術もない。

「やっと見つけたよ…姉貴」

「どいて彰人^{アキト}」

突如現れた白壁高校の制服を着た二人組み。
白髪の女子生徒と、男子生徒だ。

姉貴と呼ばれた女子生徒は一步前に出た。

「はああ…!!」

そして気合を込めつつ右足を振りかぶった。
目の前には重なり合う男達が居る。

「うりゃあああ!!」

彼女は思い切りそれを蹴散らした。
唸りを上げる豪蹴!

勢い良く男達を引っぺがした。

「!…あんだ…」

「痛つつ……一体今度はなんだ……ん？」

片桐は尻餅をついたまま目の前の少女と顔があった。すると驚きの表情を浮かべたまま固まってしまった。

「久しぶりね…亮」

「氷女…」

ドガツ!!

亮が氷女ひめと口にするや否や少女の蹴りが跳んできた。

「その名で呼ぶんじゃないよ!」

「まあまあ姉貴…懐かしの再会を楽しんでるところ悪いけど…まだ終わりじゃないみたい」

先ほど蹴散らした男達が起き上がってきた。

「…やはりこいつ等も何かに”とり憑かれて”いるようね」

「!?!…不破…なんでそれを!?!」

「話は後よ…アキト!やるわよ!」

「OK姉貴」

姉の不破まりあと、その弟アキトは片桐を尻目に、周りの男達へ次々と攻撃を浴びせていく。

不思議な事に、蹴りや拳打の一打により男達はいとも簡単に沈黙していく。

「どうなってやがる…いくら馬鹿力の氷女とはいえ…一撃で倒しただと!？」

ガツン!!

「ぐああッ…!!」

まりあの力カト落しが片桐の頭に落ちた。

「誰が馬鹿力じゃ!もっぺん言ってみろ!あああ!？」

「な、なんでもないです…(こええ…)(」

「ふう…片付いたね。」

よし…連れて帰るわよアキト!」

「って言っても流石に6人も運べないって…」

アキトがそう言うやいなや、片手に三人を掴んで引きずり出した。

「ん？平気だけど？」

「ちよいちよいちよー！」

結局片桐が手伝う事に。

二人をおぶる形になった。

「ったく…なんで俺まで付き合わされてんだ…」

「こりゃ完全に遅刻だぜ…」

「別にアンタの手を借りなくても引きずっていけばよかったのに」

結局今も2人引きずってはいるが…先ほどの異様な光景よりは幾分マシではある。

「…お前…さっき言ってたよな…何かを取り憑いているって…」

「…」

まりあは黙ってしまった。

「…その…なんだ…」

「こんな事…非常識かもしれないかもだけどよ…まりあ…お前”見える”のか？」

「…あんたと一緒。私もアキトも見えるし…倒せる」

「…そうか…。もしかして、中学時代からなのか？」

「いいえ。高校である人と出会い…それから身に付いた力よ。

亮…あんたは？」

「俺はつい最近さ。ちよいとゴタゴタに巻き込まれてから…霊を引き寄せる体質になっちまった。

もっとも俺はお前たちと違って倒す力までは持ってないがな」

「亮…一つ忠告しておくわ…」。

今朝のニュース見たかわからないけど…近いうちにこの聖ヶ丘も戦地になる」

「今朝のニュース…あれは酷い有様だったな…」。

「ここもあなるっていうのか？」

「何が原因かはわからない…でも強力な怨霊が蠢いているのは事実…。
心が弱っている…隙を見せた者はとりつかれ…さっきのように見境無しに人を襲うようになるわ。」

そうなれば結果はニユースの通り…ああなる…。

今朝私達の街に大量の怨霊が沸いて出た…私は仲間と共にそれを退治してただけど、

少し逃がしちゃってね。それを追ってここまで来たってわけ。

人に取り憑く前に発見出来てたから白壁は多分大丈夫だと思っ」

「白壁に出てたってことは、ようするに近くの聖ヶ丘も危ない…そういう意味で戦場になると？」

「ええ。私達が退治したもので全てならいいのだけれど…。違っていれば戦場になる可能性も出てくる。」

私達も出来る限り力を貸したいけど…まずは自分達の街をどうにかしなければいけないの…」

「わかってるさ…。」

それにこっちは心配するな…心強い仲間がいるのはお前だけじゃないんだ…。

あいつ等なら…白凧優なら…きっとどうにかしてくれる」

30分そこそこして、ようやく白壁の区域に入った。

「もう少しで学校につく…アキト踏ん張れ」

「俺は姉貴と違ってそこまで馬鹿力じゃないんだから勘弁してほしいよ…」

「お前も大変だな…怖い姉ちゃん持つと…」

ボソツと片桐は呟いた。

と同時に蹴りが跳んできた。

「……お前、ますます凶暴になったんじゃねえか…はは…」

「おだまり！お望みならさらにボコボコにしてあげるけど？」

「い、いや…遠慮しとく…ん？おい、向こうからくる生徒…ありやお前の知り合いか？」

「え？…あ！聖先輩…おーい！」

向こうからやってくるいかにも爽やかそうな高校生が笑顔で走ってくる。

「まりあ君、アキト君おかえり！」

遅かったから心配したよ…ん？こちらは？」

「こいつは私の旧友…片桐亮よ」

「片桐亮だ。こいつ等お宅の生徒だろ？…よいしょっと…はあ。重かった…」

片桐はおぶさっていた二人の生徒を下ろして言った。

「これはすまない…君には大変迷惑をかけたね。すまなかった…そして彼等を運んでくれてありがとう」

聖は深々と頭を下げた。

「お、おい…俺は別にだな…」

「僕は聖^{ひつが} 才雅^{さいが}…白壁高校3年で生徒会長をやっている。君の学校は聖ヶ丘高校みたいだね…遅刻の件は僕の方からどうにかしてみるつもりだ」

「いいよ。別に皆勤賞狙ってるわけでもないし、前々からサボる時もあったしな。

俺が遅れて登校しても誰もなんとも思わないさ」

「…そうか。わかった。それじゃあ僕等はもう学校に戻るよ。行こう。まりあ君、アキト君」

「じゃあ…そういうわけだから…亮…
気をつけるのよ」

「じゃあまたね！片桐さん」

「ああ。お前らも気をつけるよ」

片桐は3人と別れた。

「さてと…俺はどうするかな…」。

学校をサボりたい所だけど、妙な話を聞いちまったしな…。

白凧優に会いに行くか…。。と…なると学校か…」

片桐は渋々学校へ向かった。

聖ヶ丘高校1 - B

学校では今朝のニュースの話題でもちきりだった。
当然といえば当然…まさに前代未聞の事件だからだ。

1 限目は校長先生の話と、教師による会議が行われるため、自習に
なっていた。

「優さん…今朝のニュース…」

「うん…ついに緋土京が本格的に動き出したようなの…」

「今現地には茜さんと亜子さんが向かってくれてるそうよ」

優は勇と流華と三人で話していた。

「彼はきつとこれで終わりじゃないんでしょ…ね…」

「恐らく場所を移動して…同じことの繰り返しを行うはずよ。」

だからこそ、なんとしても阻止しなければ！…でも…一体次は何
処に……」

「案外私達の街かもしれないわよ…」

流華が言った。

「どうしてですか？鹿子さん」

「被害があつた神那は久木の都心部でしょ？」

私達の住む聖ヶ丘は都心部とはまだ離れているわよ?」

「確かにそうね…まあちょっとした勘よ。

気にしないで。茜さん達が何か成果を持ち帰ってくれるといいんだけど…」

手がかり…次に繋がる一歩…。

「はっ!…そうだ!流華!」

「どうしたの?」

「聖ヶ丘病院に行ってみない!?あの男の子に会いに!」

「男の子ですか?一体…」

「アイツか…。かなりの重症で意識はまだ戻ってなかったけど2日経ってるわけだものね…。

可能性は限りなく0に近いでしょうけど…何も出来ないでいるよりは賭けてみてもいいかも」

優は簡単に今日までの出来事を勇に話した。

「なるほど…それなら僕も行く価値はあると思います!」

「決まりね！学校終わりですぐに向かいますよー！」

優たちを見つめる視線…。

脅威はすぐそばに迫りつつあった。

第13話 完

NEXT SIGN…

第14話 恐怖との戦い

S I G N 二章 - S e V e N ' s D O A -

第14話 恐怖との戦い

キンコンカンコーン…

ようやく今日一日の授業が終わった。

ダラダラ居残らず、続々と下校するクラスメイト。
流石に今朝のニュースの事もあり、皆不安なんだろう。

「よしっと…二人とも早速病院にいきましょう！」

「ええ」

3人は教室を出た。
その時だった。

「しーらなーぎさん」

聞きなれない声に優は振り返った。
見知らぬ少女が立っている。

「誰…？天城君の知り合い？」

「いえ…白凧さんって呼んでいたから優さんの知り合いなんじゃ？」

私こんな子知らないわよ？

「はじめまして…白凧優さん…。」

「あなたに少しお話があるのだけど」

ズズ…！

『！！』

三人は一瞬にして彼女の発する禍々しい靈気に反応した。

「クス…話…聞いてくれますよね？」

ニヤリと笑う少女。

「く…ーどじする…どじすれば…。」

流華…どう思うっ？」

「畏…の可能性は否めないけど…。」

でもこれは逆に考えればチャンスかもしれないわ。
手がかりが向こうからやってきたんですからね」

確かにこの子を倒して口を割らせれば、大きなメリットになる。
畏と見るか、チャンスと見るか…。

だったらポジティブにチャンスと考えたほうがいいわね。

「いいわ…聞こうじゃない！」

「ふん…選択肢なんて最初からそれしかないんだから。
馬鹿みたいに考え込まないでよね」

「なんですって!?!？」

「断ればどうなるか…わかんないわけ？」

「だっさー。ほらみて、まだ学生はいっぱいいるんだよね？」

「ここ…戦場にしたい？」

「聞こ…！」

「わかったら着いて来て。」

屋上：人は入れないように細工しておいたから」

3人は女子生徒について屋上へと向かった。

「…ふう…いい風」

少女とは間合いを取る。

周りにも警戒を怠らない。

「そんな力まなくてもいいよ。

やる時はやるって言ってあげるから。

リラックス…リラックス…ね？」

「あなた…何者なの？」

「1-E…秋月里子……別名”恐怖（Fear/ファイア）”…
あなた達の敵にあたる存在よ」

「流華…学校に仕掛けた人型に反応したのは…多分この子ね」

「恐らくは…。それにしてもまさか本当に敵がこんな近くにいたと

はね…」

「んで、話に移るんだけどさ…」。

”復讐者（Avenger／アヴェンジャー）”をやったのあんた等の誰？」

「アヴェンジャー…？」

何のことだっけ。

「目つきの悪い、ちょっと変態入ってるガキンチョよ。

ガキンチョっていても、私より年上だけど。やったのあんた等じゃないの？」

「優…多分、公園で倒したあいつの事だわ」

ああ…なるほど。

「なんだ。やつぱ知ってるんじゃない。

私、学内ではあなた達見張ってたけど外の行動はサボって見てなかったのよねー」。

ふーん…でさ、誰がやったわけ？」

「私がやった！…倒すべき敵だから…やった！」

優は威勢良く正直に名乗り出た。

「うん。まあ…当然っちゃ当然よね。

私も別にあの子の敵討ちってわけじゃないんだけどさ。

知り合って間もないしね。

でも、一応仲良くしてもらったこともあって…黙ってられないわけ」

里子を纏う霊気が強くなった。
かなりの威圧感だ。

「勝手な事言わないで…。

散々人を傷つけ…命を奪ってきておいて…。

私こそ黙ってられないわ！

あなたもここで討つ！」

相対する様に優の霊気も強くなった。

「黙れ…お前たちに何がわかるッ!！」

ブワッ!！」

里子の霊気が更に膨れ上がった。

優たちは気圧されて一歩下がった。

「話は終わりだ…！」

お前がアイツを討つたのであれば…今度は私がお前を討つッ！」

「相手はしてやる…！でも討たれるわけにはいかないッ！」

「そうね…それにしても3人相手に勝てるつもりでいるの？
私達をなめすぎよ…あなた」

「お、女の子一人相手に3人がかりはちょっと卑怯な気がしますが…。
せめて刀は使わないでおきます」

優たち3人は構えた。

里子は構えずに不敵な笑みを浮かべている。

「なめてるのが…どっちか…。
すぐに判らせてやるよ…！くくく…！」

里子はゆっくりと両手を前に突き出した。

「！…皆油断しないでね！
相手は一人でも…相当の使い手よ…！」

「あの禍々しい靈気を見れば判るわ…。

さつきは挑発で3人相手になめすぎって言ったけど…。
裏を返せば、それだけ腕に自信があるってことだわ」

「女の子相手に戦うのは気が引けますが…。

そんな余裕を持てる相手ではなさそうですね…。」

「ブツブツ…。」

里子は両手を突き出したまま、何もしてこない。

一人でブツブツ何かを呟いているようだ。

「ハアアアツ!!」

「…。」

優は靈気を高め、両手に狐火を纏った。

流華は精神を集中している。

「優：私は補助に徹するから、あなたは先頭きって戦って。

天城君は私を守ることに全力を注いで。

攻撃は考えなくていい!」

「わかりました!僕もそのほうがありがたいです」

向こうが何を仕掛けてくるかわからない所に、不用意に飛び込むのは危険よね。
死を告げる刻印が皆に見えてないから…今のところは問題ないと思うけど…。

「くっくっく…ようし…。」できた”わ

なに？

出来た…？

「さあ…あなた達の”恐怖”に歪む顔が楽しみだわ…」

ズズズ…

里子の突き出した両手辺りに黒い霧のようなものが蠢き始めた。それは徐々に膨らんでいき、人間大の大きさまでに膨らんだ。

それが今度は分裂を初め…3つの塊が出来た。

「何…あれ…？」

「わからない…でも、凄まじい靈気を放っているわ…。
あんなものは初めて見る…」

「！…見てください！様子がおかしいです！」

勇の言うとおり、黒い霧は徐々に形作り始めている。

そして黒い霧が徐々に消えて…中から何かが姿を現した。

『！！』

三人はほぼ同時に驚愕の表情をした。

「なんで……うそ……」

「馬鹿なッ……何故お前が……！？」

「…どういつ…事…？」

優の目前にあつた黒い霧から姿を現したのは、笑顔の表情をする仮面を被った、

異様に腕が長い人間のような者だった。

明らかに人間ではない…何か。

優には見覚えがあるようだ。

流華の面前の霧から現れたのは白装束に身を包んだ顔のない女性……。髪はロングで、綺麗な黒髪だ。

そして勇の面前の霧から現れたのは厳しい表情の老人だった。手には木刀を握り締めている。

三人ともそれぞれに見覚えがあるようだ。最初は驚きの表情をしていた三人だったが、徐々に驚きから恐怖に変わりつつあった。

「…く…あなた…一体何をしたの!？」

「ふふ…特別に教えてあげる。

私の能力”ファイアーヴィジョン恐怖映像”…術をかける相手の記憶から最も恐怖に感じたものを

現実のように表現する能力…。
下手な幻術と思わないほうがいいわよ?…彼等は今、確実にここに存在している。

能力も同じくね…

(能力は同じ…それは嘘。恐怖が大きければ大きいほど、相手の能力は過大表現されるのが、

この能力の素晴らしいところ。たとえば小さなもの…ゴキブリなんかに最大の恐怖を感じた者が

ファイアーヴィジョンで実体化すると、巨大なゴキブリが出現する…。

恐怖の記憶により、さらなる恐怖が相手を襲う)」

里子の能力は霊による幻覚作用の強化版と言えるもので、かなり特異なもの。

「私は手を出すのは最後にしてあげる。

まずは各々、目の前の敵に集中することね」

手を出さないのではなく、手が出せないのが本当の所だった。

ファイアーヴィジョンは術者の集中力を使うほかに、多大の霊気・霊力を消費する。

一度に三人に術を使い、強力な霊気を纏っているといっても消耗は激しい。

今は霊気が乱れてしまっているのだ。

「…ヤア…アソボウ…サア…」

優の恐怖から生まれた謎の仮面の男。
その長い腕を優に向けて差し出した。

「い、いや……こないで……こないでよー」

恐怖におののき、後ずさりする優。

「優！どうしたの！？」

「優さん！！」

優は一目散に逃げ出した。

「余所見をされていていいの？あなた達」

シュツ！

里子がそう言った瞬間に、顔のない白装束の女が流華に襲い掛かった。

見た目からは想像もつかない、俊敏さ。そしてキレのある手刀。

「！…く！」

流華は攻撃を咄嗟にかわしたが頬に一筋の切り傷が滲んだ。どうやら鋭い爪を持っているようだ。

「鹿子さん！大丈夫ですか！？」

「いつから、その様に隙だらけになった？」

勇の背後に老人が立っている！

「！」

勇が気づいた時にはすでに老人の木刀による一打が勇の腹部をなぎ払っていた。

「ガハツ！！」

勇は態勢を崩し、その場に片足を着いてしまった。

「立て…勇…稽古をつけてやる…」

「…お祖父さん…」

「はぁ…はぁ…ッ」

優はパニックになっていた。
頭が真っ白になり、ただ逃げるのに精一杯になっていた。

「…あれ？」

我に返った頃には屋上ではなく理科室にいた。

「あいつ…なんで…!!」

大丈夫よ…これは幻…いるわけない!

もうあいつはいないの…大丈夫」

「アソボウヨ」

!!!

優が振り返ると先ほどの仮面の男が立っていた。

「くッ…うわあああ!!!!」

バキッ!

優は思わず全力で仮面の男の顔面を殴りつけた。
勢い良く吹っ飛び、黒板に激突した。

「はあ…はあッ…!!!!」

「…イタイ…ナア…」

男は立ち上がった。

「く…！」

落ち着くのよ…！

これはあの子の術！

あいつじゃないの！そう見えてるだけ！

惑わされちゃダメよ私！

「ニゲナイデネ…」

そう言って仮面の男はゆっくり両手を突き出した。

「…！」

すると目の前に青白く光る奴の手が体から離れて、優目掛けて飛んで来るではないか！

優はそれを上手く避けた。

「…アレ…？」

なるほど…あれで首を絞められたわけか…。

”あの頃”はまるでアイツの攻撃が見えなかったけど、今は見える…。

大丈夫、怖くなんかない…！

「オカシイナア…」

「はああああッ…！」

優は再び靈気を高め始めた！

第14話 完

NEXT SIGN…

第15話 過去との決別

S I G N 二章 - S e V e N ' s D O A -

第15話 過去との決別

「…ナニスルノ…？」

「あなたは怖くないわ…私はもうあの時の私じゃない。今は逃げている時ではないの…そこをどいて！」

仮面の男はその長い腕を頭上に振り上げた。
そして、徐々に腕を下ろして、仮面を両手で掴んだ。

「…ワスレタナラ…オモイダシテヨ…」

そう言うと男はゆっくり仮面を外した。

「！……」

仮面の下顔は悲惨なものとなっていた。

口は裂け…歯は牙のように研ぎ澄まされ…目は瞑れているといつより決れている。

目玉が存在せず暗い穴になっている。

顔色は蒼白とっていいほど青白く、不気味なほど痩せこけている。

優はガタガタと震えだした。

実力に対する恐怖というよりも、過去のトラウマから来る恐怖。

体が硬直する。

高めていた霊気が落ち着いていく。

「ヒッヒ…」

男は瞬間的に優の間合いに飛び込んだ。

「！」

バシッ！！

長い腕を撓らせて鞭のように優を弾いた！

「ぐはっ！」

優は勢い良く吹き飛ばされ、理科室の机に背中を強打した。

「く…!」

効いたアツ…!

やばい…ここじゃ戦い辛いかも…!

「は…ッ!?」

「ツウカマエタア…」

優が考えている隙に、男は追い討ちをかけるべく再び間合いに入ってきた。

そしてすぐさま優の首を捕まえると、途轍もない力で優を持ち上げた。

「く…!」

苦しい!

優はジタバタと足を動かすが、男は腕が長いので優の足は体まで届かずにいた。

「く…ッソ…!」

優は右手に咄嗟に狐火を出して、それで首を掴む手首を思い切り握

った。

「グ又ツ！！？」

男も驚いたのか、優の首を掴む手を緩めた。
優はすぐさま手を振り払い、間合いをとった。

「コホツ…コホツ…はあ…はあ…」

危なかった…もう一瞬遅れていたら落ちてた…。

優は息を整えつつ、後ずさりを始めた。
常に男を警戒し、不意打ちを食らわぬように注意深く行動する。

「…ニゲルノ？ムダダヨ…？」

ガラッ！！

カチャ…！

突如理科室のドアが閉まり、同時にカギの閉まる音がした。

「ここから出さない気…？」

「ニガサナイ…アソボウヨ…」

ジリジリと迫ってくる男。

「わかったわ…私も覚悟を決める…!!」

優は震える体をギュツと握り締めた。

「ハアアアアツ!!!!!!」

優は靈気を最大限に高め始めた。

「…コワイナ…コワイナ…」

「もう逃げない…私はアンタを…恐怖を…!
乗り越えてみせる!」

ポツ!

優は両手に狐火を灯した。

「ハツ!!」

優は一足飛びに男に飛び掛った。
そして跳び蹴りへと攻撃をつなげる！

バシッ！

「ウア…」

蹴りは見事に当たり、男はよろめいた。
態勢を崩したところへ優の容赦ない乱舞が放たれる！

「はあッ！！炎連牙ッ！！」

炎を纏った拳の弾幕！
顔面、腹部…滅多打ちだ！

「これで…ラッストオオオオオッ！！！！」

ドガッ！！

トドメの一撃、得意の右ストレートが顔面に決まった。
勢い良く男は吹き飛び、机に激突した。

「はあ…はあ…」

これで暫く狐火は使えない…。
霊撃も小技しか出来ないな……。

「…ウウ……」

男はダメージはあるようだが、それでも動き始めた。

やっぱり今の一撃じゃ倒せなかったか…。

霊王眼の封呪の刃はどうだろうか？

やってみる価値はあるか。

優は目を閉じ精神統一を始めた。

「出るッ！」

バシユッ！

優の右手の握りこぶしに黒い刃が出現した。

「短ッ！ほっそ！…こないだとせんっせん違うじゃん！」

やっぱり霊気が乱れてる状態だから！？

とにかくこんな剣じゃまるで期待できない…！

仕方ない…暫くは動き回って靈気が落ち着くのを待つしかないか！
優は刃を消した。

「…ユルサナイ……ゼツタイニユルサナイ…」

男はゆっくり立ち上がったかと思うと長い両腕を突き出した。

「”狂人の青い手”…」
マッドハンド

男がそう言うと、先ほど優を襲った青白い手が複数男の周りに現れた。

揺ら揺らと空を漂う青い手は非常に不気味だ。

「アア…サツジンシヨウドウガ…トマラナイ……イケ…！」

青い手が一斉に優目掛けて飛んできた！

「くー！」

かなり早い！

しかも数にして…5…6…！
いや8か！？

とにかくアレだけの数を避けきれないわけがない！

優はこの広いとは言えない理科室であの手数から逃げ切るのとは不可能と判断した。
すぐにドアの方へ走っていく。

ガシツガシツ！
ドアを開けようにも、やはり鍵がかかって開かない。

「ったく…もう！考えてる場合じゃないわね…！
はあッ…！」

優は全力でドアを蹴り飛ばした。

ドガンツ…！

勢い良くドアが外れ、思い切り倒れた。
その拍子にドアのガラスが割れてしまった。

「あーあ…ドア壊しちゃった。…絶対まずいよ…これ…」

てか、この音で人着ちゃうんじゃない？
と、とにかく後で謝るにしろなんにしろ、まずは教室を出なきゃ！

「はっ！」

背後にはもう青い手が迫ってきていた。

優は急いで理科室をあとにした。

とりあえず広い場所よ…！

校庭まで誘導するしかないか！

優は校庭目指して駆け出した。

その後を執拗に追いかける青い手。

「ニガスモンカ…」

その頃屋上では…。

「木刀を拾え…勇……稽古をつけてやる」

「お祖父さん…、あなたはもう亡くなったんです…」

勇はなんとか説得で解決しようと、攻撃の意思を示さない。

「聞こえぬか…体に直接伝えねば判らぬか」

スッ！

「！！」

老体にも関わらず、勇の目に映らぬ速さで間合いに踏み込む老人。

「天城流剣術…風天の舞、連…鳳仙花」

「！！」

老人は懐に入るや否や木刀で勇の左肩を突いた！

その力の余り、勇の体が地から離れ、ほんの僅か宙に浮いた。
その瞬間！目にも止まらぬ速さで細かい突きの乱打！

勇は全身を突かれ吹き飛んでいった。

「…立て。十二分に加減はしたぞ…」

「…間違いない…祖父の剣術だ…」

勇はゆっくりと立ち上がった。

「あの動き…そして剣筋…技…」。

祖父そのままだ…。あなたはどうかやら、ただのまやかしじゃないようだ。

(あれだけの乱打にも関わらず…全ての打撃がほぼ軽く当てる程度の芸当…。神業に近い域)「」

勇はゆっくりと足元にある木刀を拾った。

「あなたが祖父なのか…そうでないのかは判らない。でも邪魔をするなら…僕も本気で相手をします」

勇の目が本気になった。

「それでいい…。それでこそ剣の道を進む者！

それにしても…勇よ…殺気立っておるようじゃが、これは試合でもなければ死合でもない…稽古じゃ。

そのような鬼の形相を向けるでない」

「いいえ…これは稽古じゃありません…死合です」

ダッ！

勇は駆け出した。

「はぁッ！！」

一歩も動かぬどころか木刀を構えようもしない老人に対し、
全力の上段斬りを放つ勇！

そこに一切の躊躇いはなかった。
まさに手加減なしの生死に関わる一撃！

ドガッッ！！

勇の渾身の一振り、床のコンクリートへと叩き込まれた。

「な…！？」

「遅い…その上見え透いておるわ」

勇の背後で悠々と白髭をなぞる老人。

「残…像…!!?」

「風天の舞は…その独特にして変則的な微かな動きから目を奪い、惑わせる。」

そして瞬間的に動く。僅かな動きの緩急が残像となり…このように」

老人の姿が一瞬にして数人に分裂した！

「あたかも分身したかのように見せる事も可能…」

「く…!!」

勇は目を閉じて集中を始めた。

「正しい！実に正しい！

目に映る事、全てが真実にあらず…時に心の目で見極めることも必要！

…が！」

「…く…（見極められない…!）」

「未熟ゆえ…一瞬にして判断が付かぬ。」

「実戦であれば、一瞬で見極めねば…あるのは死…のみ」

スツと勇の背後から勇の首筋に木刀を当てていった。

「未熟も未熟！ワシを殺す気でおったところで可能性は0」

「く…っ…」

ガクガク…

勇の体が震えだした。

「死が…怖いか？…それともワシが怖いか？…くく…両方か」

「あなたは怖いです…」。

そう思わないでいようと…小さい時から思ってたけど…

こうして一番怖いものとしてあなたが出てきた…

ある意味、僕自身の最大の後悔かもしれない…

「祖父は怖かったけど…でも好きだったんだ…こんな形で再会な
んかしたくなかった」

勇は震えが収まった。

「僕はまだあなたの足元にも及ばない…それは十二分に判ってます。
でも…僕は負けるわけにはいかない…」

「それはなぜ？」

「守りたいものがあるから…だから僕はあなたを乗り越えるッ！」

「…いい目じゃ…。腕は未熟…じゃが心は認めてやらんでもない…。
いいじゃろう…来い…勇…。
言葉はもう要らぬ…我等は剣士…。」

「語るなら…」

「そう…」

『刀で語れ』

二人は共に木刀を構えた。

両者共に目を合わせたまま離さない。

微塵も動かぬまま、時が止まったかのように静寂が包み込む。

そんな静寂を邪魔するが如く、物音が一つ。
ほんの僅かなものだった。

本来なら聞き逃す程度の小さな物音。

だが、五感を研ぎ澄ませていた二人にはハッキリと聞こえていただろう。

「はッ！…！」

「ぬんッ！…！」

両者ほぼ同時に踏み込み、抜刀の形で木刀を振りぬいた。

今の一打…お互いの腹部を見事になぎ払うものだった。

「…！」

両者は無言で歩み寄り、そしてすれ違う。

すれ違ってから数歩だろうか。

勇は崩れ落ちるかのように地面に倒れ込んだ。

「…いい一撃じゃった…。」

まさに紙一重…たまたまワシに軍配が上がった…ただそれだけの事」

第15話
完

N
E
X
T

S
I
G
N
…

第16話 狂気の刃

S I G N 二章 - S e V e N ' s D O A -

第16話 狂気の刃

「…」

老人は腹部を抑えながら倒れる勇を見ていた。その瞳は何処となく切なさが滲んでいた。

「あつちは終わつたようね…くく。

さあ息の根を止めるのよ！」

秋月里子は勝負の結末を見てほくそ笑みながら言った。

彼女の生み出した天城勇の恐怖の存在。

彼に意思はある…が、術者の命令は絶対的なもの。

それがたとえ親族の間柄であつても命令には逆らえない。

「許せ…」

老人が木刀を構えたその時だった。

ズズツ…

不穏な気が勇の周りに集まってきた。

「ぬ…！？」

そして、確かに気を失ったはずの勇がゆっくり立ち上がった。

「…」

「只ならぬ気配…なんじゃ…？」

勇は木刀を徐に構えた。

抜刀術の構えだ。

「！」

「確か…こうだったな」

勇は一瞬にして老人の間合いに入り込んでいた！

戦闘開始時、老人が勇の懐に一瞬にして潜り込んだ、あの動きを再現するが如く！

「シッ」

さらに息をつく間もなく、勇は一度肩を突き、体を浮かせ、そこに天城流剣術・鳳仙花を放った！

ドドドドドドドド！

「ガハアツ！！」

老人は数メートル吹き飛んだ。

「な、なんと…！」

体を見ると怪我はなく、老人が勇に見せたままに技を返されたのだ。

「…ふん…。ジジイ…。てめえは殺すぞ」

「！…なんとという邪悪で…刺さるような殺気じゃ…
これは本当に勇なのか…」

「さっきお前が見せてた”アレ”…試してみるか…」

ユラッ…

勇が脱力したかのようにダラッと体を揺らした瞬間！
なんと8人もの姿に分裂した！

実際には8人ではなく、ただそう見える錯覚を起こしているに過ぎないが…。
それでも先ほど老人がやったそれよりも人数が多い。

「ふん…こんなものか…」

「な…なんじゃ…なんじゃお前は…」

「う・る・せえ…よ!!」

勇は全力で木刀を振った。
振った…が、それを目視出来た人間はその場にいなかった。

「!!!？」

「気づけよ…ばーか」

なんと老人の利き手である右手が木刀を持ったまま地べたに落ちて
いる！
勇が距離の離れた場所から振ったあの一振りで…腕を切り離したの
だ。

「あああ…ああ!!」

「おいおい。偽者が何痛がってんだよ。
次は何処がいい？足か？首か？くく…」

いかに里子の能力で生み出した仮初の命とはいえ、リアルに血を流している。

見た目には…まさに生きているのだ。

「な…なんなのアイツ…いきなり…」変わった”？…
目つき…口調…まるで別人じゃない…」

敵である里子も勇の豹変振りに驚きを隠せないでいた。

「…く！私は”恐怖（Fear/ファイア）”よ…！
なんで恐怖の象徴である私が恐怖しなくちゃなんなのよ…！」
「…ふ」

勇は一度里子の方を見ると、ニヤリと笑みを浮かべた。
だが、何をするでもなく、すぐさま視線を老人に戻すと、ゆっくり
彼に近づいていった。

「せめてもの情けだ。一瞬で消してやる」

「…勇…狂気の刃に活路はない…いずれ滅びの道を」

パシュツ！

「あ…ゆ…」

「うるせえよ…カスが」

老人の頭は宙を舞った。

そして地面に落下する前に胴体と共に姿を消した。
流れ出た血も同時に。

「…く…！」

里子は身構えた。

だが、彼女に脅威が迫ることはなかった。

勇は急に膝を折り、その場に倒れ込んだのだ。

「な…なんなんだ…こいつ…」

（気を失った振りをしているのか…？近づいたら一瞬で…死！？

ダメだ…コイツにはうかつに近づかないほうがいい…！

もう一人の…あの長髪の女がどうなったか見に行こう！）

里子は流華が戦っている方へ早歩きで向かった。

「はあ……はあ……」

「……」

流華は苦戦していた。

相手の黒髪の顔のない女…。

白一色の着物に身を包み顔には黒い霧が掛かっていて、本当に顔がないように見える。

肌は蒼白で、露出している手を見るとやせ細っているのがよくわかる。

爪は長く、研ぎ澄まされている。

この女、あの恰好では考えられないほどの俊敏さを持っているため、流華は常に霊力で全身の筋力を強化し、対応にあたっていた。

しかし、それでようやく互角。

霊気操作に長けてはいる流華ではあったが、肉体強化＋霊撃を即座に打ち込むのは

今の乱れた精神状態では難しいようだ。

「怖くない…あんなものに屈するか！…むしろこれは仇を討つチャンス…」。

決して実現できなかった…私の手で葬り去るチャンスが巡ってきたのよ！

家族全員を殺したこいつを…私の手で…！！」

流華は10年ほど前にこの女の霊に家族を目の前で皆殺しにされる経緯を持つ。

救ったのは緋土京の父親だった…。

以後、彼に引き取られ…我が子のようにとまで行かなくとも、よくして貰い…育てられてきた。

従者として仕えるのもその恩があるからである。

「はああああッ！！」

流華は覚悟を決めたようだ。

一か八かの賭け…自らに放つ補助効果の陣。

霊気が異様に高まり、淡い赤の光を放つ。

髪の毛も黒から赤へと変貌を遂げる。

この状態は2分程度の維持が限度。
それを越えると無力化する。

単なる人間…もしくはそれ以下になる。

故に、本当にどうしようもない場合を除き使うべき手段ではない。つまり、そこまで切羽詰った状況といえる。

確かに現状のまま、どちらもダメージを食らわない状態を維持していれば、
時間は稼げるだろうが、いつか体力と霊力を使い果たし…”死”が待っただけ。

それよりも一か八か倒せる方を選択したのは正しいといえる。

「いくぞッ！！！」

ビュッ！！

流華は一足飛びに女の懐へ飛び込んだ。
というより、そのまま体当たりをした！

女は吹き飛び仰向けに転んだ。

そこへ上空からの襲撃！

流華は女の腹部を両足で踏みつけた！

コンクリートの床が割れるほどの威力！

「…」

女は声を発さないのもダメージがあるのか今ひとつ判り辛いかな効果はあるようだ。

流華は続いて横たわる女を全力で蹴り上げた。女の力とは思えないほどの威力！

女は空を舞った！

「ハアアアアッ！！！」

流華の合わせた両手に靈気が集中していく。

「ふつとべえええッ！！！」

声に合わせて両手を女目掛けて突き出した！その瞬間光の波動が勢い良く噴出した！！

ドーンッ！！！！

女はかわす間もなく光の波動を全身に浴びた。

「はぁッ…！！はぁ…ッ！！！」

2分を経たずして、流華の霊力は底をついた。
纏っていた強力な霊気は静まり、髪も黒色に戻った。

「…終わった…」

「終わってないわよ？」

「!?!」

突然の背後からの声に振り返った！
その瞬間流華に激しい痛みが走った。

「ざあんねん」

里子の上段蹴りが振り向いた瞬間にヒットした。
流華は勢い良く吹き飛んで行った。

「あなたたちをナメてたのは認めるわ。
まさか恐怖を克服するなんてね。
でも、どうぞやらごこまでみたいね」

「く…」

里子は倒れる流華のお腹に片足を乗せて言った。

「足をどける力も残ってないか。
じゃあ、そろそろ楽になる？」

里子は流華の首にそつと両手をかけた。

「ばあいばあい……」

里子が力を入れようとしたその瞬間だった。

バチバチッ！！

強烈な痛みが里子を襲った！

「きゃあああー！！」

余りのことに里子はその場で転げまわった。

「ゆ……優………？」

朦朧とする意識の中、うつろな目で前に立つ誰かにそう尋ねた。

「優じゃなくてごめんなさい」

「あなたは…!？」

目の前に現れたのは夕見司だった。

「大丈夫?…優は?天城君もいるの?」

「わからない…別々に戦っていたから…」

司はゆっくり彼女を起こして傷を見た。

「傷自体は浅いわ。そこで安静に…すぐに終わらせませすわ」

「…誰だ…お前…」

里子が立ち上がった。

「あら、結構本気で打ち込んだのに、割と平気みたいね」

「誰だって聞いているんだよ!!この巨乳女アアッ!!」

「女のヒステリーは見苦しいわね。」

それにその台詞は罵倒？褒め言葉？…あなたは小さいわね」

「く……!!このふざけた女め…ぶっ殺してやる!!」

いきり立つ里子。

禍々しい靈気が彼女を包む。

「狂気化なんてさせませんわ…行くわよ”ポチ”」

「むう！ボクは犬じゃないってのに!!」

司の背後からヒョコヒョコと現れたのは犬のぬいぐるみだ。

「犬…の…ぬいぐるみ？…司さん…？」

「ふふふ…さあ、行きましようか」

「このメス豚がああッ！ふざけやがって!!」

その頃…

「ふう…ここなら思い切り暴れられるわね！」

「…ソレガドウシタ…コレダケノテカズ…ニゲラレナイヨ…」

優は校庭までなんとか逃げ切っていた。

8つの青白い手から襲われつつも、ギリギリで逃げ切ったのだ。

これもひとえに夏休みの修行のおかげと言っていい。

「ようは捕まる前に倒しちゃえばいいんでしょ」

もう靈気の乱れはおさまったのよ！

倒させて貰う！

あれだけ怖かったのに、今はさほどでもない。

やれる！

でも待てよ…霊王眼の能力に、霊の能力を奪うというものがある。
私の狐火も、一度狐の魂を体内に入れて手に入れたんだっけ。

あいつの青白い手…。

正直不気味だけど、単純に能力としてみたら…。

結構いい能力なんじゃない！？

どうしよう…。

ていうか、そもそもどうやって霊の能力を奪うんだろ？

前みたいに体内に取り込まなきゃ無理なのかな？

色んな意味でリスクーね…。

上の皆も気がかりだし…。

ここは諦めるか…。

「スキダラケダヨ」

「はっ！しまっ！」

優の悪い癖が出てしまった。

考え事をしていると周りが見えなくなる！

優は青白い手に両足を捕まれてしまった！

第16話 完

NEXT SIGN…

第17話 新たな力

S I G N 二章 - S e V e N ' s D O A -

第17話 新たな力

「きゃあッ!!」

優は青白い宙を浮く手に両足を掴まれ、思い切り引っ張られた。両足が地を離れ、そのまま勢い良く地面に頭から激突してしまった!

「痛ッ!...つちよ!?!」

今度は足を持ったまま中空に上がっていく。

優は完全に逆さま状態だ。

「きゃあ!もうこのド変態!!スカートめくれるだろッ!!!
変態幽霊!!」

優は必死にめくれるスカートを抑えていた。

「アハハ...オモシロイコトカンガエタ」

「！……ちよ……え！？」

男は優の足を掴んでいる二つの青白い手以外の、周りに漂う他の手を消した。

そして宙吊りのまま徐々に高度を上げていく。

1 m…2 m…………ついには10 m…20 m…

ビルにして6階分ほどの高さだ。

「嘘でしょ……！馬鹿な真似はやめてよ……」

こんな高さから地面に叩きつけられて無事で済むわけじゃない！

怖い……！

ヤバイ……！！

「アハハ…オチロ………！」

男が上を見上げながらそう言うと、優の両足を掴んでいた青白い手を消した。

「！……ちよ………！！！」

落下を始める優！

徐々に加速がはじまり、地面に近づく！

優は恐怖のあまり、頭が真っ白になっていた。

そして地面が近づくにつれて、周りの景色がスローモーションのよう

ゆっくりと流れていくように感じていた。

ああ…死ぬんだ……。

こんな所で……私は終わるの……？

「どっせいッ！……！！！」

ドッ……ン……！！

…

え……ここは天国……？

「く……じ……」

「……！！……岡島先輩……！！？」

なんと岡島大樹は地面すれすれで優を受け止めたのだ！
彼は夏休み優と共に修行をしたミステリー研究部の一人。

ずんぐりむっくりした体系で、確かに力持ちといったイメージは否
めないが、

余りに無茶！自分の腕もタダでは済まないはず！

「白凧さん…大丈夫かい…？」

「な、なんで！？…なんで先輩がここに…！？
それより腕、大丈夫！？」

岡島大樹の両腕は、紫色に鬱血している。
見るからに痛々しい。

「俺は…いつも皆の足を引っ張ってるから…こんなことでも役に
立てたなら…
よかった…」

ガクガクと足が震えている。
腕だけでなく足腰もやられたようだ。

「先輩は足を引っ張ってなんかないですよ…！
いつだって皆を明るく楽しい雰囲気にしてきてくれたじゃないで

すか！

待っててください…すぐに治療するから！」

優は大樹の両腕に手を当てて集中を始めた。

「白凧さん…俺は大丈夫…！」

それよりアイツをどうにかしてください…新二の奴が押さえ込んでるんですッ！」

「え！？…日下部先輩が！？」

見ると日下部新二が男の青白い手に捕まってジタバタと足掻いている。

「まずい！首を絞められてる…！」

岡島先輩…すみません！必ず治療しますから！」

優は岡島の治療を中断して、男のほうへ駆け出した！

あの…野郎ッ…！！

優は走りながら激しい狐火を生み出していた！

両手ではなく、片手に全ての靈気を集中している！

「くううつらあッ！！ええッツイ！！特大火炎玉！！」

怒りもあいまって、今までにない巨大な火炎玉を生み出した！
両手で放つ双炎玉と同じかそれ以上の大火玉！！

優は走りながら振りかぶって、男目掛けて投げた。

男は優に背を向けていたため、攻撃に気づいていないようだ！

ドッガーーン！！

勢い良く、飛んで行った火炎玉は見事に男にヒットした！
同時に青白い手も消えて、掴まれていた日下部新二も解放されたよ
うだ。

「カハッ……はあ……はあ…………助かった……」

地面に手をつき、生を実感する日下部新二。
彼も優と共に修行した一人。

岡島大樹とは同級生かつミス研部員。

「大丈夫ですか？日下部先輩」

「あ、ああ…助かったようだね…よかった…
助けてくれてありがとね」

「それはこっちの台詞です…日下部先輩ありがとうございました。
岡島先輩にもちゃんとお礼言わなきゃ…。
それにしても、なんでお二人はまだ学校に…？」

「いや…部長が、なんだか胸騒ぎがするって学校へ向かって走って
行っちゃったんですよ。
で、俺と大樹が追っかけてきたら、白凧さんが空中に上って行っ
てて…。」

何をしようとするのかはなんとなく予想できたから、各自適材適
所で動いたって感じ」

そうだったんだ。

「日下部先輩すみません、私岡島先輩の怪我見なきゃなんで」

「あいよー！」

優は岡島の下に駆け寄った。

「岡島先輩すみません、治療始めますね」

「あ、ああ。ありがとう」

「いえ、命を救ってくれて…本当にありがとうございました…。
岡島先輩は命の恩人ですよ」

「そ、そんな…照れるじゃないか」

ズズツ…

「！…なんか嫌な気を感じるわね…」

優は先ほど男を吹き飛ばした方向を見てみた。
するとボロボロではあるが、立ち上がっているではないか。

相当の執念か…。

「だけど、もう瀕死ね…。

岡島先輩、度々すみません…今度こそ終わらせてきます」

優は治療を再び中断し、男の元へ歩み寄っていった。

「ア…アア…ニク…イ…クルシ…イ…」

「…私のせいで、勝手に作られてごめんね…。

せめて楽にしてあげる…」

優は漆黒の靈気の刃を生み出した。

靈気の乱れもない…ちゃんとした刃だ。

「封呪の刃よ…彷徨える魂に安らぎを…」

バシユツ!!

優は男目掛けて渾身の一振りを放った!

男の体に縦に一閃、黒い切り傷のような物が現れている!

しばらくして、中央から真っ二つに切り離された。

まさに一刀両断!

そのまま男の体は黒い切り傷に飲み込まれていった。

そしてその黒い一閃は優の刃に戻っていった。

「封呪…完了」

優も恐怖を克服した。

ほっと一息つく優を大樹と新二がガッツポーズで出迎えてくれた。
優もそれに笑顔で答えた。

その頃…

屋上では夕見司と秋月里子の死闘が繰り広げられていた。

「はあ……はあ……」

「どうしたの？あなたその程度？」

司は里子を圧倒していた。

元々里子の強みはファイアーヴィジョンの能力にある。

が、それでも十二分に強大な靈気を身に纏い、決して弱い存在ではない。

身体能力も人並み以上。

それでも司は圧倒的に勝っていた。

「強い…！まさかここまでの実力者だったなんて…」

夕見司…大した子だわ」

「ポチの電撃鞭かなり効果的ですね」

「ポチっていうな！」ライト”って名前のほうがよかったもん！」

犬のぬいぐるみがぴよんぴよん跳ねながら答えた。

「あの犬のぬいぐるみ…恐らく強力な霊を封じ込めてあるみたいだけど…。」

属性の霊気まで使えるなんて妖魔か精霊クラスの力ね
もっとも威力は然程でもないようだけど…。」

故意なのか…力を上手く使いこなせてないのかはわからないけど
ね…。」

「で、お宅まだやるんですの？」

私の電撃鞭の前に手も足も出ないでしょ？」

「ぶざけなさいよ…こんなクソ女に…」

私はこんなもんじゃないのよ…恐怖的な存在じゃなきゃ…。」

「…いけない！夕見さん！！狂気化が始まったわ！！
早く倒して！！」

「ええ！！」

司は鞭を置き、左手を突き出した。
その構えはまるで矢を射るような…弓を構えるポーズだ。

「雷光印よ…力を！」

「むい！」

司の右手の甲に光り輝く陣のような呪印が浮き出た！
犬のぬいぐるみの体が突如光りだした。

まるで電気を放っているようだ。

するとどうだろう、司の右手の指先から光の矢が生まれた。
そして左の指先からバツと一瞬にして光が放たれ、光の弓が完成した。

「雷光の矢を受ける！！ハッ！！」

司は光の矢を里子目掛けて放った！
稲光を放ちながら勢い良く飛んでいく！

パシッ！！

「！…ち…」

里子は飛んでくる雷光の矢を見もしないで右手で掴んだ。

「間に合わなかった…」

「…殺す…殺す…」

里子は立ち上がった。

と同時に右手に掴んだ雷光の矢をへし折り、消滅させた。

「完全に狂気化したようですね…」

威圧感に加え…この禍々しい霊気…」

「夕見さん…逃げるわよ！」

勝ち目はないわ！」

流華も立てるまでに回復していた。

立ち上がり様に出口を確認する。

「逃げる必要はないですわよ？鹿子さん…」。

シロ出番よ！」

司がそう叫ぶと、ポシエットからマゼラシのぬいぐるみがひょいっ

と顔を出した。

「ふん！こんな時だけ呼んで！

そのの小汚らしい犬にでも頼めばよからう！

わらわは乗り気じゃないわ！」

「な！誰が小汚いぬらあ！このフワモコあざらしめ！」

ぬいぐるみ同士で暴れだした。

「もう！！何喧嘩してんのよ！！

相手は向こうの女よ！」

その瞬間だった！

シュッ！

パパンツ！！！！

突風の如く二人と二匹の間を何かがすり抜けた！
強烈な拳打を浴びせながら。

ドサッ！！

4人は一気に吹き飛ばされ地面に倒れた。

「ぐ……」

「な、なんなのよ……もう……!!」

「ぐぬう……なんだ今は……」

「わらわを殴るとはいい度胸だ！」

流華はすでに立ち上がる力も残っていないようだ。

寝転んだまま、立ち上がらない。

司は今の攻撃がはじめて受けた攻撃になるので、まだまだ余裕のようだ。

ポチとシロも同様のようだ。

「……殺す」

「ちょっと……白目剥いてるんですけど……大丈夫なのかしら彼女。

ね、鹿子さん。……鹿子さん!？」

流華は気絶はしていないが、もう喋る余力もないほど消耗しているようだ。

「く…！だめか…！シロ！冗談言ってる場合じゃなくなってきたわよ！」

「ちい！わらわを殴りつけた分はお返ししてやるわよ！」

ボンッ！

シロはぬいぐるみの姿から人間の姿に変化した。

「女…覚悟するがよい…」。

「全力を持って叩き潰してくれるわ」

「殺す…！」

第17話 完

NEXT SIGN…

第18話 苦い勝利

SIGN 二章 - S e V e N ' s D O A -

第18話 苦い勝利

屋上にて人間化したシロと狂気化した秋月里子の死闘が繰り広げられていた。

鹿子流華は気絶…夕見司とポチは二人の激闘を傍観していた。

「あのシロが苦戦している…。」

やはりまともにもやりあって勝てる相手じゃなさそうね…。」

「あの女から流れ出てくる霊気…物凄い邪悪だよ…。
妖魔の霊気に凄く似てる…。」

「ふん…なかなかやるではないか…」

（想像以上じゃな…元のわらわならこのよつな屈辱…味わう事無く葬れるものを…）」

「ぐぐぐ…！…！」

里子の体はすでに限界のようだ。
霊により無理やり酷使されているため、体の耐久力は限界を超えて
いる。

シロに彼女をいたわる気持ちはなかった。
する余裕すらないと言える。

まさに互角。

一瞬の気の緩みが勝敗をきつする。

「ポチッ!」

「ぬ!?!」

シロがポチを呼んだ。

ひよこひよこことシロの元へ駆け寄る。

「なんじゃ! □悪女め!」

「…煩いわ!… □惜しいがわらわ一人では奴を始末できないようじ
ゃ」

「…まあ見てればわかるよ。」

「アイツ器の人間の事なんか気にも留めなくて全力で暴れてるもん」

「わらわの水を浴びれば、お前の雷も効果が上がるじゃろう」

「なるほど…君の水属性の攻撃で水浸しにするわけね」

「そうだ。正直…先ほどからの戦いでかなり霊力を消耗した…。
もう何発も撃てはせん…頼んだぞ」

シロはゆっくり前に出て行った。

「うー…でもいいのかな…下手すれば器の肉体…
死ぬかもだよ？」

「構わん…奴は敵なのだろう」

「ダメよ！…！」

司が大声で言った。

「司…この期に及んで何を甘いことを言っている？」

「こやつ等はすでに何人もの命を奪っておるのだろう？」

「それでも…殺すのはだめよ！」

私達まで…こいつ等と同じようになってはダメ！」

「…」

シロは黙ったまま司に背を向け、再び里子のほうへ歩みを進めた。

「シロッ！」

「ええい！ガタガタ言っな！司！」

わかっておるわ！…ったく…おぬし等と過ごして…わらわも甘くなつたものだ…。

犬っころ！さっきの作戦はなしじゃ…。

わらわが出来るところまでやってみるわ…お前は万が一の時…司を守ってやれ…」

「シロ…」

「…わかったよ。司はボクが守る」

ポチはひよこひよここと司の元に戻っていった。

「頼んだよッ！はぁッ！…！」

シロの全力の巨大水弾による不意打ち！

だがそれを素早く上空へ跳び、かわす里子。

「ラスト一発じゃッ！！！！はあああッ！！！！！！」

さらに上空に向けてシロは巨大水弾を放った。

「空じゃ避けれんじゃろ！！終わってしまえ！！！！」

ドッガーーン！！

シロの言うとおり、流石の里子でも上空では身動きは取れなかった！ガードするようなモーシヨンはあったが、あの一瞬では間に合ったかどうか……。

ドサッ！

受身も取らずに上空から地面に激突する里子。

「終わったか……。いや……かすかに邪悪な靈気を感じるな……。

司！

「ええ……。ご苦労様シロちゃん……あとは私がやるわ」

どつやらもつ虫の息といった感じだろうか。
肉体も相当なダメージを受けているようだ。

「今樂にしてあげますわ…！」

司は倒れる里子の体に手をかざし、靈気を集中し始めた。

その瞬間だった。

「！」

突如突風に吹き飛ばされるように司の体が後ろに吹き飛ばされた！
勢い良く柵に激突する司！

「司！？…一体何事……ぬ！？」

シロは一瞬、吹き飛ばされる司へ視線を送った後、里子の方へ視線を戻した。
するとどうだろう。

今の今まで横たわっていた里子の姿がないではないか。

「シロツ！あそこみてっ！！」

ポチの指差す方向を見ると、柵の上に立つ一人の青年がいた。両腕には里子の姿があった。

「く…一体…あなたは何者なの…？」

司は背中を押さえながらシロの隣にフラフラと質問しながら歩いてきた。

「答える義務はありません…素敵なお嬢様」

「その子をどうする気なの…！？」

「治療をします…死なせるわけにはいかないのです」

「つまりあなたも…その子の仲間ってわけ…」

「そうなりますね…」

「だったら逃がすわけには行きませんかね」

司は鞭を拾って構えた。

「ふふ…やる気満々といった表情ですね…。

でも強がりには辞めたほうがいい…見たところ、あなた方はすでに戦う力が残ってないようだ。

大人しく見逃した方が身のためですよ？」

「司…悔しいがその男の言う通りじゃ…。

あの気を感じておるだろう…あの女を上回る強さじゃ…。」

「…判ってるわよ…恐らく万全であっても勝てるかどうか…。

でもそんな事を言ってもらえない…ここで逃がせば、また犠牲者が出るかもしれないのよ…。」

ハムッ！

「…ポチ…何してるの…！」

ポチは司の右足首に噛み付いている。

「らめ…いかせないよ…！」

「…ポチ…。」

「君のペットの方が状況をよくわかっているようだ。

大人しく言う事を聞いたほうがいい…私としても、強い君たちを

倒したいからね…。
もっともっと強くなってくれ…」

フワッ

男の姿が消えた。

「き、消えた!?!」

「それでは…また会おうお嬢さん…」

『!?!』

なんと男は一瞬にして司の横に姿を現した！
全員その動きを目で追う事はできなかった。

一体何をしたのか…。

「そくだ…私の名は”超越”(Transcendence/トラン
センデンス)」

「トランセンデンス…」

「ではまた…」

そう言うと男は再び姿を消した。

「神出鬼没……？

一体なんなの……あの男……。

そもそもどうやってここに現れたの……」

「わからぬが……とりあえず命が助かった……それだけで十分じゃ……」

ポンッ！

シロはアザラシのぬいぐるみに姿を変えた。

「ふう……疲れたわ」

「……そうね……」

優たちは勝利した。

いや……とてもじゃないが誰一人としてそんな気持ちにはなれなかった。

むしろ、残ったのは敗北感。

敵の強大さ……、自分達の未熟さ……。

優達は司達と合流した。

屋上

「そんな事が……」

優は司に屋上であつた出来事を聞いた。

「みすみす手がかりを逃してしまつたか……」

「ごめんなさい……私達がもっと強ければ……」

「うん。司のせいじゃないよ。」

むしろ流華を助けてくれてありがとう……」

「うん……」

ここに来て更なる強敵の存在か……。私達だけで本当に勝てるのかな……。。

「…あんな化け物みたいな奴等があと何人いるのかしらね。
早いところ戦力が欲しいわ」

「もうここまで来たら、あなた達だけの話じゃないですわ…。
私達も戦う！」

「うんうん！何が起きてるのか…まだよくわかんないけど。
俺達も何か出来るならやるよ！な！大樹」

「おう！俺達は共に修行した仲間だしな！」

夕見司、岡島大樹、日下部新一…三人とも真面目な目をしている。

「止めても無駄なようね…」

「優…心配しないで…。」

皆には無茶をさせるつもりはないわ。
無理だと判断すれば、引き際はわきまえるつもり。
あくまで仲間として…気持ちを共有したい…」

「皆…ありがとう」

優は司達に知っていること全てを話した。

「そう…そんな事態になってるの…」

「とんでもない奴等だな…」

「早く何とかしなければ、この街も同じ目に…」

三人は動揺を隠せないでいるようだ。

無理もない…。

「そついえば、この犬のぬいぐるみ…何？」

さつきから気にはなってたけど…。

また精霊をとっつかまえてきたのか…。

「この子は土日でゲットしてきたの。」

私のサイトにそれっぽいわれ込みがあつてね。

眉唾だったけど…行ってみたらビンゴッ！

この子は協力的で然程苦労はなかつたわ…ね？ポチ」

「ポチって言うな！…うう…。」

ボクは元々雷兎かみなりうさぎの精霊だったのに…。

こんな犬のぬいぐるみに封印されて…名前だって、ボウシがつ

けてくれた”ライト”がよかったのに！」

「ボウシ…、ああ！瀬那先輩！……ってそう言えば瀬那先輩と一の姿がないわね。

どうしたの？」

「みのりんと一はちょっと休養中！…色々あったからね」

そうなんだ…。

しかし、ライトってのは何処から来たのかしら…。

あ…雷鬼…”らい”と”と”で…ライトか…はは…。

まあポチよりはそっちの方がいいのは確かかも…。

「うっ…」

「あ！天城君目が覚めた？」

「僕は一体……そういえば…お祖父さんに」

「無事でよかった…」

優は勇の手を握って言った。

「あ…う…！」

照れる勇。

「…まったく…起きて早々いちゃつくのはやめて欲しいものね……」

「流華！目が覚めたの！？」

横たわったまま、薄目を開けて皮肉を言う流華。

「さつきからずっと起きてたわ…」。

しんどいから聞いてただけよ……」

「そう…でも流華も無事でよかったわ…」

「お互いに…ね」

流華はクスッと笑みを浮かべて言った。

「さてと…皆起きたことだし…帰りますかっ！」

皆一斉に頷いた。

こうして学校での激闘は終わった。
しかし、戦いはまだ始まったばかり…。

地下室…

「やあ”超越(Transcendence/トランセンデンス)
”…ご苦労だったね」

「いえ…たまたま近くにいたから助けたまでです」

「そう…。まあいいや、で…まだ使えそう？彼女」

「いえ…霊体は再び怨霊を入れてやればいいですが…
器のほうは相当負担が掛かっています…正直戦闘は厳しいと思
います」

「そうか。まあいいよ。」

それよりも次の予定地を変更だ」

「聖ヶ丘は後に回す…と？」

「ああ。次は聖ヶ丘…って思ってたけど、北の白壁にどつやら面白
そう連中がいるみたいなんだ。

ちよっと遊んでみたくなってるね…二人ほど差し向けておいた」

「…そうですね」

また…戦いの狼煙が上がるうとしていた。

第18話 完

NEXT SIGN…

第19話 迫る脅威

S I G N 二章 - S e V e N ' s D O A -

第19話 迫る脅威

9月8日(火) AM7:20

「おはよう…」

優は疲れた様子でリビングに現れた。

「優！昨日は一体何があったのよ！」

「ん…ちよつと色々あって…」

実は昨日…学校から帰宅してすぐに眠っちゃったんだよね…。
帰った時はお姉ちゃんもお祖母ちゃんも帰ってきてなくて、話もしてないし…聞いてもないんだよねあ。

「こっちは神那を見てきたけど…酷い有様だったわ…」

「そうなんだ…。」

それで…何か手がかりは掴めたの？」

「いえ…目ぼしい成果は何もなかったわ。

優の方は？何かあったって…どうかしたの？」

「敵に襲われたわ…」

「！…敵って…緋土京に！？」

「うん…ハッキリはわかんないけど、緋土京の仲間だと思う。

聖ヶ丘高校の1年生で、顔は知らなかったんだけど普通っぽい女の子だった」

「で、どうしたの？…無事な所を見ると勝ったの？」

「…うん…。勝った…のかな…。

とてもじゃないけどそんな気持ちにはなれないわ。

逃げられちゃったし…実力じゃ全然敵わなかった…」

優は俯いてしまった。

「そう…。でもよかったじゃない。

生きてれば…それでいいのよ…」

「うん…。ところで今朝のニュースで何かやってた？」

「ううん。暴動のニュースは各地で少なからず出てたけど、死者が出るような大規模な事件はなかったわ。安心して」

「そっか。…そういえばお祖母ちゃんの姿が見当たらないけど?」

「ああ。今出迎えに行ってるわ。

本当は昨夜に到着予定だったんだけど、なんか色々あって遅くなっただって」

「迎え…?」

「和馬さんたち、奥里の3人よ!」

「!!…そうだった!和馬さんも由良葉も!それと葵さんも来てくれるんだね!」

これは嬉しい情報だわ!

何しろ三人ともかなりの実力を持ってるんですものね!

これで戦える!

「それより優!早く学校行かないと!遅刻しちゃうよ!」

「あ!!もうこんな時間!?いつけね!

んじゃ行ってくる!」

優はパンを片手に急いで家を飛び出していった。

「全くあの子は…女の子らしくないわね…」

キーンコーンカーンコーン…

優はなんとか滑り込みセーフで間に合ったようだ。

「はぁ…はぁ…朝っぱらからきつー…」

あれ…流華来てない…。

昨日のダメージがまだ抜けてないのかな…。

天城君は来てるみたいね。

帰りに流華のお見舞いに行くかな。

「はぁーい！授業始めるわよー！」

担任の杉浦珠子先生の授業が始まった。
国語の時間というのは…暇だなあ…。

そんなこんなで1時限目が終わった…

「巫女巫女ゆうゆうー！」

「う…なんて呼び方すんのよ…」

クラスメートの女子がドアのところで呼んでいる。
ニヤニヤしながら手招きをしている。

「な、なによ…」

優はドアの方へむかった。

「なに？」

「それじゃ、私はお邪魔になるんでこれで！」

そういうと女子生徒はニヤニヤしながら女子の溜まり場へ向かっていった。

「なんだってのよ……ん？」

「よっ……」

片桐先輩だ……。

どうしたんだろう、珍しい。

「どうしたんですか？」

「ちょっと話があつてさ。昼休み時間あるか？」

え？…なんだろ？

「別に空いてますけど……」

「じゃあ屋上で待ってるから。よろしくな」

そう言つとさつさと去つていつてしまった。

なんだったんだ？

「巫女りんモテますのう！ひひひ！」

「ちょ！そんなんじゃないって！」

もう…女の子ってほんと噂好きよね…。

時間は流れて昼休み…

屋上

「ようっ！こっちだ」

片桐は奥のほうで手を振っている。
優は小走りで向かった。

「悪かったな…呼び出しちゃって」

「それはいいんですけど、話ってなんなんですか？」

片桐は周りをキョロキョロと見渡し、誰もいないことを確認して口を開いた。

「実は昨日…悪霊らしきものに取り憑かれた奴等に襲われたんだ」

「え！？片桐先輩大丈夫だったんですか！？」

「ああ…昔の知り合いに助けられてな…」

そいつ、霊術を使えるようになって…。まあそれはいいんだ。そんな事を伝えるに呼んだんじゃないんだ。

昨日のニューズ見たか？神那が戦場跡のように酷い有様になった…あれだ」

「ええ…」

私も先輩に話したほうがいいわね…。話をするだけでもしておこう。

「どうやら…この街…聖ヶ丘も近いうちあんな状態に陥るかもしれない…」。

あくまで可能性としてだが…」

「どういうことですか!?!」

「俺を助けた知り合いってのが、聖ヶ丘の北にある白壁高校の奴なんだが…」

どうやら白壁に大量の怨霊が現れたそうなんだ。

そいつとそいつの知り合いで、なんとか退治はしているそうなんだけど、

もしこれ以上増えた場合近くの街である聖ヶ丘も危ないんじゃないかって…

つまりそついう事なんだ」

「…可能性はくないですね…」。

そんな近くに怨霊たちが迫ってたなんて…!」

「まあ…あくまで可能性だ…」。

でもよ、そんな時は何が何でも止めなきゃな…」。

俺達の街を…神那のような酷い有様にしてたまるか…!」

「先輩…実は、先輩に話しておかなきゃならない事があるんです」

優は今起きてる事態の元凶について語りだした。

これまでの戦いについても…知ってる情報を話した。

「…そうだったのか…」

「ごめんなさい…出来ればこんな大事になる前に解決したかった…」

「お前が謝ることじゃないさ…」。

その緋土京つて野郎がそもその元凶なんだ。

しかし…そんなとんでもねー奴等にどう立ち向かうかな…」

「正直、敵は今までにない強敵です…」。

皆にも言ったことだけど、絶対に深追いはしないでください…」。

ハッキリ言つて先輩が敵う相手じゃないです…」

「…わかつてるぞ。」

ただの喧嘩ならともかく…相手が化け物じゃな…」

「でも、こちらとしては心強い味方も来る手はずになってるから。」

きつと大丈夫…！何としても悲劇は繰り返させない！」

キンコーンカンコーン

予鈴が鳴っている。

「いつけない！もう昼休み終わりジャン！」

「なんか悪かったな。昨日授業終わってから行ったんだけど、帰っちゃまってたからさ」

「いえ。それじゃあまた！」

あ、先輩くれぐれも気をつけてくださいね！」

「優！お前もあんま無茶すんなよ！」

優はガッツポーズをして走って行った。

「…なんか曇り空になってきたな…」

その頃…

白壁高校

P i P i …

「…！…！…授業中だったのに…ッ！メール送ってくるの誰だよ…！…」

不破まりあの携帯にメールが届いた事を知らせる着信音が小さく鳴った。

「…！…聖先輩…」

”至急校門に集合！非常事態発生！”

その一文のみが書かれたメールだった。
只ならぬ事態を予感させる。

「先生！…ちよつと具合が悪いので…保健室行つて来ます…」

「またか？あんま体調悪いなら一回病院行ってきたほうがいいぞ？」

「はい…失礼します…」

不破は教室を出るや否や駆け出した。

1階・玄関

「姉貴ー！」

「アキト!…会長からの呼び出し?」

「聞くまでもねえって…!」

「また怨霊騒ぎかな」

二人は揃って校門へ駆け出した。

すでに門前で生徒会長・聖才雅が待っていた。

「すまない…二人とも…」

神谷さんから連絡をもらったんだ。

「どうやら”社ヶ崎”やしろがさきに不穏な霊気を感じたそうだ」

「あの人…ほんと他力本願というか…なんというか…」

「そんだけ強力な霊能力持ってるなら自分でどうにかしろってのよ! 私達学生なのよ!？」

「まあまあ姉貴…そんな目くじら立てないで…」

「神谷さんは引きこもりな上、ものすごい人見知りなんだから…。外出自体かなりのレアなんだから…仕方ないって」

「菅谷さんが先に行ってるそうなんだ。」

「急いで僕らも合流しよう」

「てか、菅谷さん一人で十分じゃない？」

「そんな強力な霊気だっというの?」

3人は駆け足で社ヶ崎へ向かった。

「菅谷さんは昨日の一件でかなり霊力を消耗したし…。
疲れも溜まつてる…。一人じゃ不安だと僕が判断した」

「あの人相変わらずバイト三昧なんだ…。
いい加減学業に専念したほうがいいと思うんだけどね…。
大学3年生何回目よ…」

「まあとにかく、急ごう！…なんか嫌な予感がするよ」

社ヶ崎・森林公園

「…こんな爽やかな場所から始めるのかよ」

「”破壊（Destruction）/デストラクション（…お前
さんは相変わらずイラついてんな…。
血の気が多すぎんだよ…。」

「てめえが言う台詞かよ」正義（Justice / ジャスティス）
”。
知ってんだぞ。お前ヤクザモンとか片っ端から殺してるんだって
「？」

「ふん…奴等はゴミだからな。
俺はゴミ掃除してるだけだ。お前さんみたいに片っ端から破壊は
しないさ」

長身の男と、それを上回る巨漢の男…。
二人には余りにも似つかわしい自然溢れる公園。

かなり不自然な光景である。

そんな二人を陰から覗く男がいた。

男の名は菅谷 浩介。

24歳、大学3年生。

ちなみに…3浪している。

幼い頃の事故が原因で霊能力に目覚め、それ以降、身内の霊的な事
件を幾度と解決をしてきた。

そんな男は二人の男を見て震えていた。

「…なんだ…あの禍々しい霊気は…」

暗くて…重くて…冷たくて…刺々しくて…それでいて纏わり付く
ような…。

とにかくヤバイって…あんなの二人も相手に出来るわけない…！
早く来てくれよ才雅君…！！」

第19話 完

NEXT SIGN…

第20話 守るために命を賭して

SIGN 二章 - SEVEN'S DOA -

第20話 守るために命を賭して

「さてと…。じゃあコイツをばら撒くとするか」

”正義（Justice/ジャスティス）”は両手に壺の様な物を抱えている。

どうやら蓋を開けるようだ。

カパッ…

「！！…なんだあれは…」

茂みからその様子を見ているのは菅谷浩介。

目の前に凶悪かつ強力な霊気を放つ二人組み。

さらに一人が開けた壺の中から黒い影が続々と空に舞っていく。

どうやらかなりの霊気を放つ怨霊のようだ。

それを見た菅谷は更なる恐怖を感じていた。

自分でどうにか出来る範疇を大きく上回る事態。

そもそも彼は、これほどの相手が待ち受けているなどとは微塵も思っていないかったのだ。
友人である神谷一騎かみやいつきから”禍々しく強い靈気を感じる”…と、連絡をもらい、やってきたにすぎない。

予想外！その一言につきる気持ちだろう。

先日、怨霊が大量に発生したという事件：菅谷は解決に一役買っていた。
力量も然程でもなく、今日の呼び出しも”大体昨日程度の相手だろう”ぐらいの気持ちだったのだ。

上空に飛んでいった霊たちはともかく、目の前の二人は相手にしてはダメだ。

そう悟るには十分すぎる靈気を放っている。

「ふう…結構飛んでつたな…。
見るよ、雷雲みたいだぜ…：…これでまた街が一つ無くなっちまうな」

「騒ぎがおき始めたら、俺は暴れるぜ！
ウズウズしてんだよ！！暴れてえ！！」

少し切なそうな表情を見せる”正義（Justice）/ジャスティ

ス）とは違い、
気分が高揚している”破壊（Destruction/デストラク
ション）”。

今にも暴れだしそうな雰囲気だ。

「どうする…。」

俺一人出て行った所で何も出来ないぞ…。

だが、才雅君たちが来てくれれば………どうにかなるのか？
むしろ呼んだらやばいかもしれないんじゃないか…？」

その聖才雅はもうすぐそばまで来ていた。

不破まりあ、不破彰人、聖才雅は社ヶ崎に到着していた。
ターゲットを探しつつ、走っている最中だ。

「聖先輩…なんかやっぱい気を感じないっすか？」

「そうだな…森林公園の方から…嫌な気配を感じる……二人とも急
ごう…」

聖才雅はスピードを上げようとしたその時だった。

「待って！あれを見て！！」

不破まりあが上空を指さして叫んだ。

「あれは…雨雲………？」

「いや…怨霊の群れだ………！まずいぞ！あの量………！！
昨日とは桁違いに多い！」

「どうするんですか！？ここで叩くにしても……あんな上空じゃ手が
出ないわ！」

才雅は少し考え込んだ。

「…今飛んでいる霊気より、遥かに強い霊気を森林公園から感じる
……。何かしらの元凶がそこにいると考えて間違いない……」

「元凶か…昨日の件も含めて、何者かが怨霊を故意に放つてるとし
たら、

そっちの方がほっといたらまずい気がするよ……！聖先輩！叩くな
らそっちじゃ！」

「確かに元を断たなければ、同じことの繰り返しになるのは眼に見えてるわね…。」

でもそちらに向かえば確実に怨霊にとりこまれる人間が出てくるわ！」

「…」

「でも両方どうにかなんかできないっしょ！
姉貴…ここは…見捨てるしかないよ…」

「アキトツ！！あんたよくそんな簡単に！！」

まりあは彰人の胸倉を掴んだ。

「簡単じゃないって！！…俺だって助けれるもんなら助けたいんだ…ッ」

「く…！ごめん…」

まりあは胸倉から手を離れた。

「二人とも落ち着くんだ…。僕に策がある」

「策！？」

「まりあ君…先日会った旧友…片桐君と言ったか。
君が昨日昔話ついでに、言ってたが…
確か彼は僕たちと同じような力を持った友人がいると言ってたね
？」

「ええ。私はそう聞きました」

「一つ彼等に協力を頼めないだろうか？
彼等と協力して、君たちはあの怨霊をどうにかしてほしい」

「それは構わないけど…先輩はどうするんですか…？
まさか…一人で向かうって言うんじゃない？」

聖は黙った。

「ダメよ！！あの靈気…いくら先輩が強いといっても、レベルが違
う！」

「わかっている…。
だが、今はそうするほかない…わかってくれ」

聖は強い意志の目で語った。

「……絶対に無理をしないと約束できますか？」

「お、おい姉貴ッ！」

「約束する…大丈夫…僕はまだまだやるべき仕事がある…。死にはしないさ。それに、向こうには菅谷さんもいるし、二人でかかればなんとかなるかもしれないさ」

「…わかったわ…」

「いいのかよ！？姉貴！」

「アキト君…心配してくれてありがとう。」

大丈夫…無茶はしないさ」

「んな事言ったって！説得力まるでないっすよ！！」

「はは…。確かにそうかもしれないな。」

でも、いつだって大丈夫だったろ？」

アキトは俯いてしまった。

ポンッ

才雅はアキトの頭に手をあてた。

「！」

「まりあ君を頼んだよ」

「ご武運を…」

「ああ。君たちも無茶はしないでくれよ？
じゃあ…行ってくる！」

聖は駆け出した。

「行っちゃった…。先輩大丈夫なのか…」

「アキト！私達は私達の仕事をするわよ！急ぎなさいッ！」

まりあとアキトの二人は怨霊の群れを追って駆け出した。

タッタッタッタ…

「ん…？誰か走ってくるな…」

「ああ？…ほんとだぜ…学生服…ガキか」

聖才雅到着

「ああッ！才雅君ッ！…ってなんで一人なんだ！？」

「こ、殺されるぞッ！！」

「…」

「おい、何ガンたれてんだ…クソガキ」

「おい！やめとけよ…相手は子供だぞ」

目が逢うや否や、”破壊（Destruction/デストラクシ
ョン）”が絡みにいく。
それを静止する”正義（Justice/ジャスティス）”。

「あなた達か…。その妙な壺が怪しいな…」

「ああ！！？なんつった！？」

「落ち着けよ！！…おいお前！コイツは気が立ってる上に、
短気なんだ…痛い目にあいたくなきゃとつと消える！」

怯むどころか、才雅は大男の”破壊（Destruction/デストラクション）”に近づいた。

「…どけ”正義（Justice/ジャスティス）”！

こいつやる気満々ってツラしてやがる！ひひひ！美味そうだ！」

「っ…はぁ…俺は止めたからな…小僧…。

どうなっても俺はしらねえぞ…」

そう言つて”正義（Justice/ジャスティス）”は二人から離れてベンチに腰掛けた。

「一対一かい？」

「当たり前だろ？アリ相手に一人でもおつりがくらあ！」

「そうか」

聖才雅の身長は177cm…対する”破壊（Destruction/デストラクション）”はゆうに2mを超える巨漢。

「ありゃ勝負にもなんねえだろ…最近のガキは怖いもの知らずか…」

当然菅谷も同じことを考えていた。
だが、一瞬にしてその思いは杞憂に変わる事となる。

バシッ！！

巨漢が宙を舞った。

そして勢い良く地面に激突した。

「！！！」

”正義（Justice/ジャスティス）”は思わず身を乗り出した。

「見掛け倒しかい？」

「今…あいつ…何をした？…あの”破壊（Destruction/デストラクション）”を吹っ飛ばした…だと？
あの体格差でか…？」

「…てめえ…！調子に乗るなよ…！！！」

”破壊（Destruction/デストラクション）”は起き上がった。

驚きはしたものの、ダメージは無さそうだ。

「僕を余りなめないほうがいいよ…おじさん」

「おじ…!!殺す!!」

巨漢を揺らしながら一直線に突進してくる！その迫力と来たら、まるで闘牛のようである。

「はっ！」

「速いッ!!」

一瞬で攻撃をかわし、破壊の背後に回った。

「ぬ!?何処いった!?」

どうやら破壊には彼が突然に消えたぐらいにしか見えていないようだ。

「後ろです」

「何!？」

バシッ!

才雅の声に振り返った瞬間!
破壊の顔面に衝撃が走った!

才雅の跳び上段蹴りがもろ入ったのだ。

「ぐあ……」

「……なるほど……タフさはそのナリの通りと言う訳か……」

破壊の体は揺らぎはしたが、倒れるには至らなかった。
やはり体格差は否めない。

「くっくっく……久しぶりに骨のある奴じゃないか!」

「!……おい!破壊!……ここで”それ”をやる気か!?!やめる!……!」

「関係ねえよ!……ふっとベッ!……!……!……!」

「!……!」

破壊は才雅との距離があるにも関わらず、その巨大な腕を天高くから振り下ろした！

ドッガーーーーーーッ！！！！

巨大な爆発音！！

そして爆風！辺りを包む砂煙！

まさに”爆発”！

「なんて奴だ…爆弾でも投げたのか…？」

何にしても…才雅君は無事なのか！？」

まともに食らったように見えたけど…………」

「おいこの馬鹿野郎！！あれだけ派手な事はやめろって言っただろ
うが！！」

「そう怒んなよ正義ちゃんよ！！…どうせあと数時間で騒ぎは起きる
んだ。

「ちょっと早まっただけだろ？」

「まったく…暴れるのは俺等じゃねえだろうが…！！

とつととズラかるぞ！この騒ぎで野次馬や警察がすぐに駆けつけ

る！」

「警察う！？野次馬あ！？…んなもん木っ端微塵にしてやりゃいいじゃねえか！」

てめえは甘いんだよ正義！」

「あ…？今なんつったコラ？」

険悪なムードが二人を包み込む。

「何かよくわからないけど…揉めだしたぞ…あの二人…。」

うまくいけば同士討ち…！これは運が向いてきたかもしれないぞ
！」

その頃…

「…ん？着信…誰だ？はい…片桐」

『亮！大変なの！あなた達の力を借りたい！』

学校を早退して帰宅途中の片桐亮に不破まりあからの着信があった。

「おいおい、急にどうしたんだよ？何かあったのか？」

『詳しいことは会って話す！』

『靈気を操れる仲間を連れて、すぐに白壁に来て欲しいの！』

「…つつても、まだ授業中で仲間なんて呼び出せないぞ…。」

「！…いや、心当たりはあるか…わかった！すぐにいく！」

『頼んだわよ！』

慌しく戦いの幕は上がった。

第20話 完

NEXT SIGN…

第21話 助っ人到着

S I G N 二章 - S e V e N ' s D O A -

第21話 助っ人到着

「はあ…はあッ……」

片桐亮は全力で走っていた。
向かう先は白凧神社…。

不破まりあからの助っ人要請…これに応えるべく、
戦力を集めるために向かっている。

現在は授業中なため、優たちは呼び出せない。
そこで考えたのが修行をつけてくれた白凧茜だ。

彼女ならなんとか力になってくれると信じて。

「見えた！」

ピンポン！ピンポン！！ピンポン！！！！

片桐は呼び鈴を連打した。

「早く出てくれっ…！」

ガチャッ！

「っだよウツセエなッ！！勧誘はお断りだぞ！！…っ…っ…」

「な、なんでアンタがここに…！」

出迎えたのは白風茜ではなく、石動和馬だった。

「優の奴から聞いてるかわかんねえけど…今こっちでヤバイ事態になってるらしくてな。」

俺等は助っ人で呼ばれたんだよ」

「俺等”って…もしかして」

「片桐の兄ちゃんおひさッ！」

走って出てきたのは和馬と一緒にいつてきた神楽由良葉だ。

「よ。相変わらず元気そうだな。」

っと、のんびり話してる場合じゃなかったんだ！

茜さんはいるか？…急ぎで頼みたい事があるんだ！」

「バアさんならいないぞ？」

ちなみに亜子さんも一緒に出て行った。

俺等は留守番だ」

「ちっ…タイミング悪すぎだろっ…！！」

でも…ある意味ラッキーか！二人とも俺についてきてくれ！」

「ああ！？俺等は留守番だって言っただろ！」

「んなこと言ってる場合じゃないんだ！」

とにかくヤバイことなんだ！走りながら話すから！」

「…わかったよ。おめえがそこまで焦るってのは相当な事態ってことだろうしな。」

おいガキ！留守番してろ！」

「いや、出来れば由良葉にも来て欲しいんだ！」

「俺だけじゃ不服なのか？」

「そうじゃない！単純に人手がいるんだ…霊を倒せる人手が」

「わかった…でも鍵はどうすっかな…。」

俺は預かってないんだが…」

モタモタ考え込む和馬。

「ああもう！んなもんほつとけよ！

どうせ盗るもんなんてないだろ！」

「お前…さりげなく凄い事いうな…。」

とりあえず急ぐか。走りながら電話する！」

三人は駆け出した。

その頃…社ヶ崎森林公園では…

「お前、俺にまで喧嘩売ろうつてのか…ああ！？」

「いいねえいいねえ！！俺とまともにやりあえんのは、俺等の中に
しかいねえもんなあ！！」

”正義（Justice/ジャスティス）”と”破壊（Destruction/デストラクション）”は今にも殴り合いに入りそうな雰囲気では語っている。お互いの距離も1mも離れていない。

一触即発の距離！

「てめえは少し頭を冷やした方がいいな…破壊！」

「ごちゃごちゃゴタクはいいんだよツ！！」

男は黙って拳を振り上げりやそれでいいんだ…よツ！！！！」

先に手を出したのは破壊だった！

その豪腕を正義の顔面に向けて放った！

ブンッ！

正義は余裕でそれをかわすと、巨体の懐に入った。

「痺れやがれツ！！雷打ツ！！」

ドゴツ！！

バチバチツ！！！！

正義はがら空きの懐に、雷撃を纏った拳を放った！

「ぐは…！」

破壊は腹を押さえながら、後ずさりした。
どうやらそれなりのダメージがあったようだ。

「ちったあ頭の血は下がったか、筋肉馬鹿ッ」

「ああ…？ちよつとピリつてした程度だろ？
何粹がつてんだてめえ！ひっひっ！」

何事もなかったようにお腹を叩いて挑発する破壊。

「人が手加減してりや図に乗りやがって…！」

「てめえの全力を見せてみるよ！正義ちゃん…！」

二人はそのまま激突！
激しい肉弾戦が始まった。

「…なんなんだ…あの二人…急に殴りあいになったぞ…！」

それにしても恐ろしい…なんて動きをしてやがる…！
人間業じゃないな…。
でも、これで二人とも潰しあえば生き延びれるかも！」

茂みの中から相変わらず様子を見ている菅谷浩介。

ガサツ…

「そんな所で傍観とは…いい趣味ですね」

「ぎゃあああああああ！！！」

菅谷の背後に現れたのは全身ホコリまみれの聖才雅だった。
突然喋りかけられたのにビックリした菅谷は大声で叫んでしまった。

「ああもう…！！バレたらどうするんですかッ！」

「お、驚かさないでくれよ…才雅君！」

どうやら戦いに夢中で今の叫び声は聞こえなかったようだ。
いまだに激しい戦いを繰り広げている。

「ああやって潰しあってくれば楽なんです…」

「うん…。とてもじゃないけど、あんな化け物相手に戦うなんて無謀だよ！」

いくら君でも勝ち目はないよ！」

「確かに…霊気も身体能力も彼等が上でしよう…。」

でも、彼等が冷静を取り戻し…何かしようというなら…その時は…！」

「やるって言うのかい！？」

「冗談じゃないよ…そんなの俺はゴメンだよ！」

その時だった！

バキバキバキッ！！

細かい枝を折りながら、茂みの方に何かが飛んできた！

「！…！」

「…これって…やばい…雰囲気？」

なんと飛んできたのは巨体の男ではなく、もう一人の男…正義だった。

聖と菅谷は完全に男と目があつた。

そして男はおもむろに立ち上がると、二人を黙って見ている。

「菅谷さん…逃げて…！」

「に、逃げるって…」

聖と菅谷は構えるも、相手の威圧感に押され、じりじりと後退していった。

たとえ二人で相手をして、勝機が薄いことを察した聖は菅谷に逃げるように指示したのだ。

「早くッ！…！」

「ひいッ！…！」

なかなか動かない菅谷に語気を強めて叫んだ。
これでようやく菅谷は駆け出した。

聖はすぐに道を塞ぐべく男の前に立ちふさがった。

「彼は追わせないぞ…」

「ハナから追う気はねえよ。

つつか、外に出てったらアイツにやられるだけだ…。

つまり今の選択はハズレだったわけさ」

「…どうかな？」

彼をあまりなめないほうがいいよ…。あれでやる時はやる男だからね…」

「それにも限度はある…相手が俺達じゃ望みは薄い。薄いどころか、可能性なんて0だ」

男の言ってる事は正しかった。

それだけの戦力差…。

奇跡でも起きない限り…勝ち目は無い。

それは菅谷だけでなく、聖にも言えることだった。

「で…おじさんは僕を殺すつもりですか…？」

「そのつもりはなかったんだがな…色々と面倒になりそうだな。お前には悪いが死んでもらうぜ？」

バチバチッ！

男の両手に電撃が走っている。

「怖いな…」

「安心しろ…なぶる趣味はない…一瞬で楽にしてやる」

ダッ！！

聖は敵に背を向け、全力で駆け出した！

茂みを抜け、もう一人の男…破壊が待つ場所へ走った！

もちろん意図して破壊のほうへ走っていくわけではなかった。

無我夢中…逃げることに意識が集中していた。

ザザッ！

茂みを抜けた！

「！…そんな…」

聖が見た光景は目を疑うものだった。

巨漢の男の足の下に菅谷の姿が横たわっている。

「才…雅…く…逃げ…る…ん…」

「まだ何かほざいてんのか？雑魚」

ググッ!

破壊は踏みつける足に体重をかけた!

メキメキと音を立てると同時に菅谷の叫び声が公園に響いた!

「あっはっはっは!! 死ね死ね!!」

スッ

「…その汚い足をどける…」

「…ああ？」

(いつの間に関合いに入った…?)

「聞こえなかったか?…その薄汚い足をどけると言ったんだ」

「ふん…! いいだろう!」

破壊は踏みつけていた足を一瞬浮かすと、続いて勢い良く踏み込もうとした!

ドガッ!…!

「!?!?!」

男が菅谷を踏みつける前に、聖才雅の強烈な蹴りが男を吹き飛ばした。

相変わらず、何が起こったのかわからず、きよとんとする破壊。

「なるほど…怒りで強くなるタイプか」

茂みからゆつくり歩いてくる正義。

破壊も立ち上がった。

二人ともダメージはあるが、それを差し引いても聖に勝機は薄いと
言える。

「才雅君…逃げるんだ…君一人でも…」

「大丈夫ですか…菅谷さん…」。

残念ですが逃げられません…あなたを置いては逃げれない。

かといって担いで逃がしてくれる相手じゃない…。

ならば…」

「ならばなんだ？…俺達を倒すとも言うのか？」

ヒュッ！！

「そのつもりだッ！！」

一瞬で正義の背後に回りこみ、拳打を繰り出した。

パシッ！

「…あめえよ。」

その程度の動きじゃ俺等には勝てない。

あの筋肉馬鹿には通じて俺には無理だとわかつたろ」

才雅の拳打はあっさり掴まれてしまった。

やはり一筋縄に行く相手ではない！

「この状態で…俺が雷撃を全力で放てば、それで終いだ…」

最後の忠告だ…。抵抗をやめ…：大人しく死ぬと言え。

そうすれば苦しまず殺してやる」

「結局殺すのに変わりがないなら…好きにすればいいだろ！

僕は何があっても悪には屈しない！…それが僕の正義だ！」

「それがお前の正義か……悪くない。
俺はお前みたいな奴が好きだ……それだけに残念だぜ……」

聖は目を閉じた。

「死ね」

その時だった。

「ぎゃあああああ……!!」

けたたましい叫び声が響いた。
それは聖才雅の叫び声ではなかった。

正義は才雅を一本背負いで投げ飛ばすと、茂みを抜け広場に向かった。

「……!!」

破壊の巨体が横たわっている。

そしてすぐその傍には見知らぬ猫背の男が、ボリボリと頭をかきな

がら突っ立っている。

「誰だ…てめえ…。」

お前が破壊をやったのか…。」

「破壊（Destruction/デストラクション）？…は
て…誰ですか？

あー…もしかしてこのでっかい人ですか？

はて…デストラクション…名前じゃないですよ…確か破壊っ
て意味でしたっけ？

じゃあ呼び名かな？…あー確かにそのまんまですね…。

納得です…。」

一人でブツブツと小声で話す男。

「なめてんのか…てめえ…ッ…！」

「いえ。別になめてませんとも。」

男はボリボリと頭をかきながら、ぼーっとした顔で言った。
この男は一体…。

第21話 完

NEXT SIGN…

第22話 激闘の末に…

S I G N 二章 - S e V e N ' s D O A -

第22話 激闘の末に…

突如現れた猫背の男。

年は25、6だろうか…。

ボサボサの頭をボリボリとかいている。

まるで緊張感のないぼけつとした表情で、”正義（Justice
ノジャステイス）”を見つめている。

「お前がその木偶のぼうをやったのは間違いないようだな…。
何をしたか想像できねえが…只者じゃないようだ」

正義は攻撃態勢に入った。

両手には雷撃がほとばしっている。

「タイム！」

「は!？」

突然タイムと言い出した猫背の男。
倒れる菅谷浩介の元に歩み寄った。

「ありゃ…菅谷っち…ボロボロじゃないか…」

「だ…誰のせいだよ…かみゃん…」

猫背の男はしゃがんで、菅谷の体に両手をかざした。

すると淡い光が彼を包み込み、徐々に傷を癒していく。

「これで動けるでしょ？」

「あ…ああ。ありがとう」

菅谷は立ち上がった。

かなりの重症を負っていたはずだったが、見事に回復している。

「待っていてくれてありがとう…あなたいい人だね」

「…。お前が普通じゃないのはわかった。

どうやらタダの雑魚ではないようだ…本気で行くぞ」

ダッ！！

正義は駆け出した！

かなりの速さで猫背の男の間合いに入り込んだ！

入るや否や、右の手刀を放つ！

「わつと…!!」

紙一重で手刀をかわされた正義だが、何故か不敵な笑みを浮かべている。

「!!!」

バチバチッ!!

猫背の男は突然膝を折って崩れた。

「かみやん!？」

「し、しびれた……」

「俺の手刀をかわしたことは褒めてやるが、流石に”こいつ”まで
はかわせなかったようだな」

正義は右の手刀の電撃を見せながら笑みを浮かべた。

「…どうやら僕はここまでのようです…」

菅谷つち…あとは頼むよ…」

「ふん…偉く諦めの早い奴だな。

もつとも…賢い選択だとは思うがな…抗えば抗うだけ、苦痛を伴う事になるからな」

ザッ

迫る正義…動けない猫背の男…神谷。

そこに割って入った男がいた。

「なんの真似だ？」

菅谷浩介だ。

不安そうな表情ながら、猫背の男を守らんと仁王立ちになった。

「かみゃんはやらせない…」

どうしても戦うつていうなら俺と戦えっ!」

「ふん…さっき”破壊(Destruction/デストラクショ

ン）”にやられてた奴が、何を粹がつてやがる。
自分と俺達の実力の差はわかってんだろ？」

「ああ…俺一人だったら天地がひっくり返っても勝てやしなかったさ…。」

でも、かみやんがここに来た…！」

「ああ！？その猫背が来たから勝てるってのか？」

「かみやんはなあ…虚弱体質だし、引きこもりだし、人見知りだし、オタクだし、おまけに自分勝手に薄情物だ！
でもな…勇気を…力をくれるんだ！」

「意味がわからんわ…まあいいさ。やる気ってんならかかってこいよ…！」

「物凄い言われようで腹立たしいですが…ほとんど凶星で言い返す言葉もないですね…」

んじゃま、はじめましようか菅谷っち…！」

そう言っと、神谷はポンツと菅谷の背中を押した。

「出番だよ…」葉月」

「…」

菅谷は黙ったまま顔を伏せて立っている。

「なんだ…？」

（空気が変わった…？）

ドンッ！！

菅谷が一気に駆け出した！

正義の間合いに入るや、すぐに攻撃を放つ！
拳打と蹴りの乱打だ！

だが、一発もカスる事もなく、ことごとく避けられている！

「っし…準備運動はこんなもんか…」

「何を…した？」

（最初からこの程度の力はあつたのか？）

いや…ここまで動けるなら、あのノロマの破壊にああはやらね
い…！！

やはり、あの猫背が何かしたんだ…。相手を強化する能力か何か？（「」

「はあああッ！！」

菅谷は再びまっすぐ突っ込んで行った！

同じように乱打を繰り返すも、先ほど同様に全てかわされてしまう！

正義は相当の運動神経を持っているようだ。

菅谷もそれなりに速いが、正義はそれを勝る速さ。

だが、実のところ速さの差というより、正義には相手の動きを見て取る、動体視力が優れていると言える。

「ちえ…：当たらないか」

「…。」

（なんだ…？…：動き自体は大したことはない…。

だが、今だかつてない不安感を感じる…：なんだ？）

「あんだ強いな」

「…お前…：急にキャラ変わってないか…？」

「葉月君…：遊んでないで本気でやってください…。」

君が負けたら僕も菅谷君も殺されちゃいます」

「るせえよ！こちらら久々に体使ってた…：本調子には程遠いんだ
よー」

「ほう…まだ本調子じゃないか。
だったら今度はこっちから攻めてやるよ！
せいぜい本調子とやらを取り戻すんだな！！」

ビュッ！！

更に動きが速くなった！

「！！」

ドスッ！！

葉月は動きに反応できなかった！

電撃を纏った手刀が腹部に突き刺さる！！

「はぁッ！！」

続けて雷打を顔面に食らわせる正義！

葉月は勢い良く吹き飛んでいった！

「まだまだあああ！！」

さらに追い討ちをかけるが如く、雷撃波を葉月目掛けて放った！！

ドッガーーン!!

轟音と共に激しい爆発音と砂煙が舞い上がった。

「あーあ…死んじゃったかな…」

「はあ…はあ……………」。

(俺は何を焦っているんだ…?)

ここまでする相手じゃなかったらう…」

ザッ…

砂煙の中に人影が見えた!

「く…あれで立てるといのか!?!」

「痛つてえ…」

血まみれの菅谷が現れた。

「!…ふん…しっかり食らってやがるじゃないか…!
脅かしやがって…!」

「お前人間の癖に洒落にならん力を持ってやがるな。危うく逝きかけたぞ」

「葉月君…もしや…全力でやってます…?」

「そのまさかだよ…俺が出てきても、意味なかったかもしれんぜ? マジで強いんだよこいつ」

葉月の額に冷や汗が滲んでいる。

「くく…!どうだ?大人しく死ぬ気になったか?

(何も恐れる必要はない!…コイツは十分俺より弱い!)」

「は?なんでそうなんだよ。余裕ぶっこいて笑ってんじゃねえよ。俺は単なる”時間稼ぎ”だ。十分役目は果たしたぜ?

なあ神谷」

「…なん…だと?」

「どうも…葉月君。眠っていいよ…後は僕がやりますから」

猫背男、神谷が立ち上がって葉月とすれ違い様に肩をポンと叩いた。

すると、菅谷はその場で後ろに思い切りぶっ倒れた。

どうやら気を失っているようだ。

「は…？お前明らかにその男より弱いじゃねえか！
マジで意味がわからんわ」

「何を…」

「あ？」

「何をそんなに怯えているんですか？あなた」

「誰が怯えるだ！？ふざけんなッ！！」

「だって…ほら。」

「その汗…すごいですよ？」

「！…！！」

正義は額に物凄い汗をかいていた。
違う！と言わんばかりに拭い去った。

「それに、さっきからあなた後ずさってますよ？」

「！…！！」

地面を見ると、確かに後ずさりした後が残っていた。

「あなた…本能ではとっくに判ってるはずですよ？」

目の前の脅威に」

「…黙れッ！！」

「なぜ、あの大男が倒れていたのか…判りますよね？」

「煩い…黙らないとぶっ殺すぞ…！！」

正義は酷く怯えた表情で叫んだ。

トンッ

「…！！」

「終わりです」

距離も離れていた。

別に目を離したわけでもない。

だが、神谷は今正義の背後に立ち、肩に手を置いている。

「邪魂！滅！戒！！破ああああッ！！」

神谷がそう叫ぶと凄まじい光が辺りを包みこんだ！

光がおさまると、正義は意識が朦朧としながら、その場に倒れ込んだ。

「はあ…はあ……………終わった……………」

神谷もその場に崩れ落ちた。

「神谷さん……………」

「あ！…聖君……………頼むよおお！

僕を駆りだすなんて…もう10年分ぐらいの気疲れがどっと出たよ」

「すみません…自分の力が及びませんでした…。

それにしても神谷さん…誰から呼び出しを？」

「不破彰人君だよ…嫌だつて言ったんだけどね…。

行かなきゃ絶交とまで言うんだもん！…仕方なく助けに来たよ…」

「そっか…彰人君が…」

「って菅谷さん！？血まみれじゃないですか！

さっきより全然怪我が酷い！」

「あ、忘れてた…」

「忘れてたって！早く治療しないと！！」

聖は倒れている菅谷に駆け寄って治療を始めた。

「出来れば手伝ってください！」

「無理無理！邪魂滅戒破を2度も使ったんだもん！
もう霊力ないない」

「菅谷さんは…もしかして、また”守護霊転身”を使っただけですね？」

「そそ。あの大男倒したのはいいけど、邪魂滅戒破使ったばかりで
さ。

「霊気も乱れてたから、どうしても時間稼ぎが欲しかったんだよ。
葉月君なら、倒せるかなーって思ってたんだけど、無理だったみたいね」

「はあ…。
…でも助かりました…神谷さん。
ありがとうございます」

その頃…。

「なるほど…そいつは一大事だな」

片桐亮、石動和馬、神楽由良葉は白壁に向かって走っていた。
走りながら、片桐は二人に事情を説明していた。

「とにかく、着いてみないと実際どうなのかはわからないが…
急ぐに越したことはないからな」

「優姉ちゃん達には伝えたいの？」

「あいつ等はまだ学校だ。
一応携帯の留守電にメッセージは残しておいたが、どちらにしろ
あと1時間近くは学校だ」

「まあ俺等だけでなんとかする気持ちで行くぞ！
片桐！お前靈撃は出来るようになったのか？」

「いや…まだ…の属性しか上手く錬れない…」

「…そうか。じゃあガキと俺が頑張るしかないな！」

「すまない…」

「気にするな！お前にはお前にしか出来ないこともあるさ。
それに、その友達との繋がりがあつたから救えるかもしれないんだろ？」

和馬は下手なりに片桐を励ました。

その気遣いに片桐は小さく笑みで応えた。

3人は白壁目指し全力で走る！

第22話 完

NEXT SIGN…

第23話 それぞれの戦い

S I G N 二章 - S e V e N ' s D O A -

第23話 それぞれの戦い

白壁

片桐亮、石動和馬、神楽由良葉の三人は、ようやく白壁に到着した。目の前に広がる光景は凄まじい状態だった。

交差点では自動車がひっくり返り、そこ等じゅうで煙があがっている。

事故車に警察…暴れる人々。

まさに混沌としている。

「ひでえ有様だな…こいつは……」

「電話してみる…」

片桐は不破まりあに電話をした。

『もしもし！亮？』

「まりあか！今到着した！…なんなんだ？この有様は！
やっぱり霊の仕業なのか！？」

『うん。物凄い量の悪霊が白壁に放たれたみたいなの！

今、彰人と二人でバラバラに対処してるんだけど…数が多すぎて！
あなたも眼に見える範囲で助けてあげて！』

「合流は難しそうだな…わかった！こっちはこっちで片付ける！
無理だけはするなよ！」

『ええ！片付いたら電話するわ！

あなたもある程度片がついたら電話して！
じゃあもう行くわ！また！』

そう言つとまりあは電話を切った。

「おい片桐！」

「和馬…由良葉！お前ら…」

なんと、片桐が電話している間に目の前で暴れていた数名をすでに片付けたようだ。

「次行くぞ！」

「あ、ああ…お前ら、やっぱすげえな…」

「あ？別にこいつ等がんで弱かったただけだ。

被ったら気を失っちまった。とりあえず数は多そうだが、力自体はそうでもない。

さっさと片付けるぜ！」

「片桐の兄ちゃんもいこう！」

「あ、ああ…」

三人は別の騒ぎが起きている場所へ向かって走り出した。

「さてと…亮たちがどれ程やってくれるのか…。

とにかく一刻も早く片付けて、聖先輩のところに向かわないと！」

不破まりあは、その場をあらかた片付け一息ついていた。

「うっうっ…ぶっ殺すすうっうっうっうっうっうっすすうっ…！」

狂気に満ちたサラリーマンが立ち上がった。

白目を剥いて、自我は失っているように思える。

「狂気化したか…。」

「これは厄介かもね…。」

「うああああっらああ…！」

サラリーマンは走り出した。

動きはさほどでもない。

「ふん…遅いわよッ！」

まりあはダツシュと共に跳んだ！

かなりの跳躍だ！

一気に男の前に繰り出すと、落下と同時に蹴りを放った！

蹴りは男の腹部に突き刺さった！

「ぎじー…？」

「ぐぐぐ…！」

「一撃じゃ無理か…！」

「がああ…！」

男はまりあを吹き飛ばした！

「く…！力は相当なものね…！」

腕でガードはしたものの、左腕に痺れが走った。

「このまま、狂気化する奴が増えたら、私の霊力が何処まで持つかわかんないわね…。」

後のこともそうだけど…まずはこいつを叩き潰さないと…。」

「があああああ…！」

よだれを撒き散らしながら両手を振り上げ、走ってくる。
不気味の一言に尽きる。

「ったく…うざったいのよ…！」

向かってくる勢いに合わせ、まりあの渾身の拳による一撃を放った！
まりあの拳は顔面に突き刺さり、見事に男の顔はへしゃげている！

「あ…あべべ……」

「全力の霊撃よ…！眠りなさい！」

ガシッ！

「！…こいつ！」

男はまりあの腕を両手で掴んだ！

そして、そのまま力任せにぶん投げた！！

ドッガーッ！！

まりあはコンクリートの塀に思い切り衝突した。

「痛っ…！！！」

「ぐるる…殺す……」

まりあにじりじりと迫る男。

「なめんじゃないわよ…!!」

まりあはすぐに立ち上がると、気合を高め始めた。
霊気が全身を包み込んでいく。

「全力の全力で…ぶちかますわよッ!!はあああああ!!」

「がああああ!!」

覆いかぶさるように飛び掛る男!
それを待ち構えるまりあ。

そして射程距離に入った瞬間!
大砲のように強力な一打を男の腹部に放った!

霊気を纏い、光り輝く拳は男の腹部に突き刺さり、同時に激しく体を吹き飛ばした。

10m以上も吹き飛ばす凄まじい勢い!

「…これで終わりよ」

「…」

男は完全に沈黙した。

「ち……！靈力をかなり使ったかもね……」。

もうどれだけ戦えるか……って、くじけてる場合じゃないわね！
他に行こう！」

まりあは騒ぎの音がするほうへ駆け出した。

「しんど……一体どれ位減ったんだよ……」

愚痴を零すのは不破まりあの弟、不破彰人。
かなりの数の人の山が築かれている。

「うっ……」

「はいはい……次から次へと……ご苦労様ですよ！」

休憩する彰人の前に現れたのは老人だ。

「げえ…じいちゃんかよ…。
こういうのが一番やっかいなんだよな…。肉体的なダメージは極力なして方向で倒さないと…」

ビュンッ！！

「ええ…うつそ…」

バキッ！！

老人とは思えない俊敏な動きで、一瞬にして彰人の間合いまで踏み込むと、
これまた老人とは思えない俊敏な一打を顔面に打ち放った！

彰人はその場に倒れ込んだ。

「痛たた…マジパンチじゃん…。
じいちゃん…ちよつとタンマ…」

「金ええええええええッ！！」

ドガッ！！

寝転ぶ彰人へ上から放つ拳打！
彰人はギリギリでそれをかわすも、老人の細い拳はコンクリートへ

激突した。
なんとコンクリートが割れている。

「嘘だろ…！これって狂気化…？」

「ぐるる…」

「！…じいちゃん……」

老人の右腕は完全に骨折していた。
あらぬ方向へ曲がり、ぷらんぷらんと揺れている。

「……ぜってえ許せないな…」

「があああ！！」

飛び掛る老人！

「ごめんな…じいちゃん…！はあああッ！！」

老人とはまだ距離がある段階で、彰人は手を突き出し、気合を放った。
そして勢いはそのままに彰人の胸の中に飛び込んだ。

どうやら今の気合で取り憑いていた霊は完全に消滅したようだ。

「…。じいちゃん…。しばらくここで眠っててくれな…。

「こんな…こんな真似しやがる奴は許せない…!!」

彰人は怒りの感情を抱えながら次の場所へと向かっていった。

その頃…

社ヶ崎森林公園では…。

「さて…ある程度回復しましたね」

「ええ。菅谷さんも立てるぐらいには回復しました」

「はあ…もう絶対ごめんだよ…こんな死ぬ思い…」

神谷、菅谷、聖の三名は回復に努めていた。

聖の治癒術で、瀕死だった菅谷も立てるまでには回復したようだ。

「さて…じゃあ僕はもう帰りますね…」

「神谷さん…出来れば、白壁のほうに向かった悪霊の対処も手伝ってはくれませんか？」

「…遠慮しときます。」

「僕はもう霊力使い果たしてますし…これ以上の労働は勘弁ですよ…聖君」

「そう…ですか。残念です」

「まあまあ才雅君。」

「かみやんがここまで協力してくれただけでもありがたいと思わないとね。」

「ゆっくり休んで頂戴な」

菅谷が手を振ると、神谷も小さく手を振り替えし、猫背で帰っていった。

「さてと…この二人はどうしようか…」

「ほっときなよ…」

取り憑いていた怨霊は消えたから、以前のような力はもうないはず。

それに、霊気で酷使していた体は恐らくボロボロさ。

すぐにはまともに動けないだろうよ」「

「……ですね。」

「じゃあ、一刻も早く白壁に向かいますよ！
まりあ君も、彰人君も戦っているはずです！」

「ええ！？まだ戦う気なの！？

少し休もうよ………」

「ダメですよ。ホラいきますよ！」

「とほほ………！あ……そくだ……！」

菅谷は突然何かを思い出したかのように、来た道に戻り始めた。

「どうしたんです！？」

「思い出したんだよ！あいつ等が怨霊を放った時持ってた壺……！」

「え！？」

菅谷は茂みを探し始めた。

「あつた！この壺……！」

「すごい…呪札が張り巡らされている…。
これに霊を封じ込めて持ち運べると言うわけか…」

「どうする…?」

「これがなければ色んな場所で怨霊を解き放てなくなるよ!」

「そうですね…。」

「これは危険な代物だ…やはりここで割ってしまったほうがいいかもしれない」

その時だった。

「その壺を渡してもらおう」

”超越(Transcendence)トランセンデンス(…登場。”

「誰だ…!」

「この二人の仲間か…」

ザッ

『！』

男が一步迫ると二人に緊張感が走った。

「大人しくそれを渡せば危害は加えない…。
さあ渡すんだ」

「嫌だと言ったら…?」

「殺してでも奪うことになる」

ゾクツ!!

二人は物凄い威圧感に押しつぶされるような感覚を覚えた。

ああ。この男には間違っても敵わない。

そう…一瞬で理解できるほどの圧倒的な威圧感。

「才雅君……ここは彼の言うとおりにすべきじゃないかな?」

「いや……彼が僕らを生かして返すとは思えないですよ…。
渡した途端殺されるかもしれない…!」

「くく…心配しなくていいよ。」

私は無駄な殺生は好まないのね…強者とは戦いたいと思うが…。
君たちはその域ではないようなのね。
大人しく渡してもらえば、本当に危害は加えない…約束しよう」

「わかった…どうやらそれ以外に道は無さそうだ。

菅谷さん…渡してください」

聖の指示で、菅谷はゆっくり男に近づいていった。

「ほらよ…」

「確かに…」

菅谷は壺を渡すや否や、一目散に聖の元へ駆け出した。

「ふふ…何もしないと云っているのに…」

男は立ち去ろうと背を向けた。

「待って！」

「何か？」

「その二人は連れて行かないのか…？」

「ああ。彼等は今も使い物にならないゴミでしょう？
もういません」

「もう一つ！……お前たちの目的はなんだ…」

「ふふ……さあ？

私達は人間が嫌い……それ以外に共通点はない。
目的も…手段も……人それぞれ…。
まあせいぜい頑張ることだね…弱き者たちよ」

そう言って男は去っていった。

「く……なんだっていうんだ……！」

「よくわかんないけど…やばい組織っぽいな…」

第23話 完

NEXT SIGN…

第24話 暴君

S I G N 二章 - S e V e N ' s D O A -

第24話 暴君

「はは…！」

「どうしたの？才雅君」

突然笑い出す聖才雅。

「今頃震えが…足が動かないですよ」

「あはは！君ともあろう者がねえ。

ま…よっぱどの相手だったんだ…仕方ないよ！」

「菅谷さんはいつも明るくて助かります。

よし！動けそうだ！…行きましょう！」

「ほんとに嫌だけど、そうも言ってもらえないわよね！

二人を助けに行きますか！」

二人は白壁に向かった。

その頃白壁では…

不破まりあ、不破彰人、片桐亮、石動和馬、神楽由良葉の5人がバラバラに動き、
白壁の街の騒ぎを解決していた。

すでにいくつもの騒ぎを沈め、悪霊のほとんどが片付いたかに思えた。
被害は出たものの、それでも死者が出るような事態は知る限り出ていない。

「ふう…とりあえずここら一体は落ち着いたか…。
おいガキー！そっちはどうよ！」

「ガキっていうな！こっちもあらかた片付いたよ！
狂気化もしてないし、割と楽勝だったね！」

「二人ともありがとうな…俺はあんまりやることなかったぜ」

「友達に連絡して見るよ。苦戦してるようなら助けに行こうぜ」

「そうだな」

片桐は不破まりあに電話した。

『もしもし』

「まりあか？こっちはあらかた片付いたんだが…そっちはどうだ？」

『こっちも大体おさまったわ。』

あとは警察に任せておくわね。彰人のほうも大丈夫だと思うし。なんとかなったわね。ありがとう』

「いや…礼を言われるほどの事はしてないさ…。それよりどうする？一度合流するか？」

『私と彰人は合流して、社ヶ崎森林公園に向かうわ！仲間が危機に陥っているかもしれないの！もしよければ、あなた達も合流してくれるとありがたいわ！』

「わかった。俺達も合流する！」

『じゃあ社ヶ崎森林公園で落ち合いましょう！じゃあね』

電話が切れた。

「社ヶ崎森林公園に向かうぞ」

「そこが何処かしらねえけど、近いのか？」

「そんなに離れてはいないさ。

走れば15分くらいだ！急ごう！」

「15分って…結構しんどいな…。はあ」

「和馬にはもうほんとオッサンだね！」

「だ！誰がオッサンだって！？あああ！？」

和馬は由良葉を追って走っていった。

「はは…元気だな…」

各自合流するために動き出した。

地下室…

「ただいま戻りました…」

「…「やあ」超越 (Transcendence / トランセンデンス)
” ”

穏やかな表情の裏に怒りを隠した緋土京が出迎えた。

「 ”正義 (Justice / ジャスティス) ” と ”破壊 (Destruction / デストラクション) ” が敗れました。
怨霊を祓われ…完全なる無力化状態でした」

「白壁にも有能な能力者がいたようだね…。
正義と破壊はやられたか。…まあ雑魚はもういらないけどね」

「封呪の壺はこの通り回収してきたのでご安心を…」

「当たり前さ…。それを持ち帰らなかつたらいくら君とてタダじゃ
済まさないからね」

緋土京のプレッシャーに気圧される超越。

「まあいいや。」

でもせつかく溜め込んだ怨霊たちを一気に掃除されたのは予想外だね。

今使える駒は……解剖(Disection/ディセクション)と”暴君(Tyrant/タイラント)”……そして君か」

「ええ。”恐怖(Fear/ファイア)”はまだ使えるほどに回復していませんからね」

「暴君に白壁を潰してもらっかな」

「!……そうですか」

緋土京は電話をかけた。

『もしもし』

「あ、暴君かい？少し頼みたいことがあるんだ。白壁を任せた二人がやられちゃってね。君に潰して欲しいんだ」

『いいんですね？ボス』

「気兼ねなく暴れてくれたまえ……」

緋土京は電話を切った。

「まあこれであそこも神那の二の舞になる。くくく…あーっはっはっはっは！」

社ヶ崎交差点

「あれ…？あいつ等…」

片桐亮は何かに気づいた。
どうやら道路を挟んで向こう側に不破まりあ、彰人の姿を見つけた
ようだ。

「おーい！」

片桐は大声と共に手を振った。

「あ。あそこ！片桐さんじゃない？姉貴」

「ほんとね！おーい！」

二組は合流した。

「はじめまして。不破まりあよ。

こっちは弟の彰人」

「ちーっす！」

「このオッサンは夏休みに一緒に修行した石動和馬」

「誰がオッサンだコラ！」

「で、こっちのちっこいのが神楽由良葉。

同じく修行した仲間だ」

「ちびっつて言うな！」

和気藹々と打ち解ける二組。

「つと…こんな話をしてる場合じゃないの！
聖先輩が…やばいのよ…！…！…！？」

まりあが深刻な顔で話していたら、徐々に驚きの表情をした。

「どうした？」

「あれ…」

まりあが指差す方を見ると、遠くで手を振っている二人が見えた。

「おい、あれもしかして」

「聖先輩と菅谷さんだわ！おーーい！」

まりあは二人のほうに駆け出した。

「どうやら問題解決みてえだな片桐」

「そうみたいだな」

再び合流…。

「神谷さんが助けてくれたんだ」

「あの引きこもりの神谷さんが…出てきてくれたなんて…」

「うん。彰人君のおかげだね。

ありがとう」

「彰人が！？何か言ったの？」

「俺がちよーっと脅したのが効いたみたいだね」

彰人はニヤニヤしながら言った。

「まあ何にせよ、皆無事で全部解決してよかったよかった！
さあて帰りましょうぜ！」

菅谷が明るく言った。

「そうね。あとは警察がどうにかしてくれるわ。
みんなもありがとう。この借りはきつと返すわ」

まりあは片桐たち3人にお礼を言った。

「いってことよ！困った時はお互い様だ！

んじゃ、俺等も家に帰るか」

「だね！でも…ばあちゃん、電話でカンカンに怒ってたんでしょ？」

「あ、ああ…そうだった。留守番ほったらかしにしてきたもんな…。
カギもかけずに…。これも全部片桐のせいだぞ！」

「な！？なんでそうなるんだよ！」

みんな一斉に笑い出した。

「とにもかくにもありがとう。

皆さんが困った時はいつでも連絡くださいね」

「おう！頼りにしてるよ！」

聖と片桐は握手をした。

「皆さんおそろいでよかった」

突如、聞きなれない女性のように美しい声がした。

一同一斉に声のほうを見ると、そこには女性のような美しい顔立ちで、スラックとした青年が立っていた。

長髪にスーツの恰好：スタイルは華奢で一見すると女性のようにである。

「誰だ？誰かの知り合いか？」

片桐の問いに皆首を横に振った。

「はじめまして。僕は”暴君（Tyrant/タイラント）”…君たちの敵です」

『！』

一同は構えた。

「皆さんかなり疲弊してますね。」

あなたたちには悪いけど、潰させてもらいますね」

笑顔で暴君はそういった。

「どっ…思っ…和馬」

「ハツタリじゃ…ねえな。」

全然強そうな風体じゃない上、霊気もほとんど感じない…。
だが、それが逆に不気味だ。皆気を抜くなよ…！」

「あ！そつだ。場所変えますか？」

こんな道路付近で暴れるのもどつかと思っし…。
そつだなあ。近くの公園…」

ウー…ウー…

パトカーが森林公園に向かって走っていった。

「あつちやあ…あれじゃ無理っばいね」

「ゴチャゴチャ言ってんなよ！男女！」

和馬がズカズカと暴君に歩み寄った。

「なんです？あなたが一番手？」

「俺で最後だ！馬鹿野郎ッ！」

ブンッ！！

至近距離からの全力パンチ！

バシッ！！

「！！！！！！……馬鹿な……！！」

「すごいパンチだね」

人差し指。

人差し指1本で和馬の豪拳を受け止めている！

「ふふ……」

和馬は後ろに飛んで間合いをとった。

「馬鹿な…俺は靈力で筋力を増強した拳を放ったんだぞ…？
同じように奴も強化して受け止めたにしたら…指一本で防げる
レベルか！？」

あんな華奢な奴が…」

「人を見かけで判断するのはよくないよ？」

『!!!』

一瞬にして和馬の背後に回った暴君。

「うらああ!!」

裏拳を放つ和馬!

だが、それもあっさり避けられた。

「僕は霊を倒せない…。そういう力が備わってないんだ。でも僕の中の”彼”は代わりに圧倒的な力をくれた…。それだけで十分過ぎるよ」

「はああああああッ!!!!」

和馬は霊気を全開にした!

「すげえ…。あれが和馬の全力…。ッ!
バアさんより凄くないか…。あれ?」

「修行前にもそれは確認済みだったけど…。和馬にいはやっぱ強いよ
…!」

大丈夫!あんなねえちゃんみたいな奴に負けないよ!」

ダッ!!

和馬は駆け出した。

全身に凄まじい靈気を纏っている!

「おお!!速くなったね!!」

「るせええッ!!」

凄まじいスピードでの攻防が繰り広げられている!

ハッキリ二人の動きを見れている人間はこの場にいなかった。

「君の知り合いはとんでもない人だね…」

動きがまるで見えない…」

「だが…あの女男もそれに食らい付いている…。
奴もとんでもないってことだ」

ギャラリィは息を飲んでいた。

「はあ…はあ……この!ちょこまかと…!」

「はあ…はあ……あなたもしつこいですね…」

お互い息を切らしながら、一時休憩といった感じで動きを止めた。

「ち…！」

(この野郎…霊撃はない代わりに徹底した…の霊気で、内も外もガードしてやがる…！)

このまま戦ってもラチがあかねえ…()

「…。」

(この方…かなり腕が立つ上戦い慣れている…。

舐めてかかれれば、先に倒れた方々と同じ目に合いますね…。

ここはやはり全力で叩き潰す)」

暴君を包む霊気が禍々しく膨らみ始めた。

「…なんだ!？」

「あなたは強い…今まで相手にした誰よりも!

敬意を表して全力でお相手します」

第24話 完

NEXT SIGN…

第25話 命を賭した決戦

S I G N 二章 - S e V e N ' s D O A -

第25話 命を賭した決戦

「やばくないか…あれ」

片桐達は目の前の強大かつ禍々しい靈気を見て震えが起きていた。

「僕らが行っても足を引っ張るだけかもしれないが…。
助けに行こう」

「そうね…。あれは一人でどうこう出来る相手じゃないわ！
行くわよ彰人！」

「おう！」

聖才雅と不破まりあ、彰人の三人は暴君目掛けて駆け出した！

「お、おい待てお前ら！！」

片桐の静止も聞かず飛び込んでいく三人！

「はぁあああッ!!！」

聖才雅と不破彰人の二人は同時に靈気の波動を放った！
エネルギー波のように暴君目掛けて飛んでいく波動！

「…」

バシユッ！

直撃…否！

暴君を包み込む禍々しい靈気の前にかき消された！

「馬鹿な！」

「嘘でしょ!!!?!？」

シユッ！

「お前ら後ろだ!!！」

和馬の叫びに聖才雅と不破彰人は同時振り返った！

目の前には暴君の姿が！

先ほどと打って変わって、笑みはなく、冷たい表情をしている。

バギッ！！

一瞬にして二人の体は地面に埋まった！
物凄い力で地面にねじ込んだのだ！

「き、貴様ああッ！！」

怒りをあらわに全力で暴君を蹴り上げるまりあ！
しかし蹴りは軽々と受け止められている。

「く……」

「……」

パンツ！！

拳ではなく平手打ち！
まりあの体は宙を舞い、雑木林に吹っ飛んでいった。

一瞬にして3人がやられた。

一撃のもとに…！

「てめえの相手は俺だろうがッ！！」

和馬の全力にして怒りの拳！

だが、それすらも暴君の前にはただのパンチとなんら変わりはない。
軽々と受け止めて見せた。

「それで全力ですか？

だとしたら期待はずれですね…」

ギョツ！！

暴君は受け止めた拳を握りつぶすほどの力で握った！

「ぎゃああー！！」

「はぁッ！！」

バシッ！！

暴君は何者かに蹴散らされ吹き飛んでいった！

「大丈夫！？和馬にい！！」

「はあ……はあ……由良葉……助かった！」

「なかなかいい蹴りだったよ？」

「……ダメージはなしか……」

「華奢なくせになんてパワーだ……。おい由良葉！」

「……」

ドサッ！

由良葉が急に倒れた。

「おい！？」

「僕がただ蹴飛ばされたと思ったんですか？」

「飛ばされぎわに手刀を軽く叩いておきました」

暴君はこちらに向かいながら解説をした。

「ち……！片桐ッ！」

「……」

片桐をじつと見る和馬。

和馬は何かを感じ取ったのか急に駆け出した。

「逃げるのですか…！そうはさせませんよ！」

「そうは問屋がおろさんぜ！」

追おうとする暴君、行かせまいと立ちはだかる和馬！

「ち……まあこの際雑魚には興味ありません…。
あなたを潰します…そして白壁を神那のようにする…それが僕の
仕事だ」

「させるかよ…！」

ダダッ！！

再び打ち合いが始まるが、勝敗はこの時点で決していた。
明らかに暴君のほうが格上である。

攻撃がまるで通用していない！

「畜生ッ…！」

「もう十分に楽しみました！
終わりです！！」

ドッガーーーーン！！！！

空中から勢い良く地面に叩きつけられた和馬。
コンクリートの地面が見事に抉れている。

「あれで死なないなんて…やはりあなたは想像以上だ」

「…ちくしょう…こんなところで終わるのかよ…ッ」

「名を聞きましょう…」

暴君は地に降りると、ゆっくり和馬に近づいて質問した。

「お前に名乗る名なんてねえよ…殺るんならさっさと殺るんだな
……」

「そうですか…残念です」

暴君が倒れる和馬にとどめを刺そうと、手刀を構えた、その時だっ
た！

「！」

ボウツ！

ドツガーーン！

白い炎が暴君目掛けて飛んできた。

暴君はすぐにそれを察知すると、上空に跳んで避けた。

「…なんだ？」

「由良葉か…助かったぜ……」

そういつと和馬は気を失った。

「少年の様子が先ほどとは違う……」

「…ふむ。人間とは思えぬ敏捷さじゃな。

久々に全力で戦えるか」

由良葉の体には二つの魂が宿っている。

一つは由良葉本人の魂。

そしてもう一つは精霊化しつつある狐の魂。

今はその狐の魂が表に現れている状態。

名は銀…白狐の銀。

「では参るぞ…」

ビュッ！！

物凄い速さで上空に飛び上がった！

暴君のさらに上を行く高さだ！

「なに！？」

「はぁッ！…」

ドッガーーン！！

オーバーヘッドキックのような態勢で由良葉は暴君を蹴り落した！
素早く反応し、頭上で腕をクロスさせ、ガードの態勢をとった暴君も流石と言える。

暴君は態勢を崩さず着地した！

コンクリートの道路が着地と同時に割れた！

「くう…！」

(なんとという重みだ…手が痺れた!)

「ふむ…アレを受け止めるか…。」

なかなかのものだな…だがこれならどうじゃ?」

由良葉の両腕に白い炎が猛っている!

「はあああッ!」

炎弾の乱舞!!

物凄い速さで炎の弾を打ち出し続ける由良葉!
暴君はかわすだけで精一杯のようだ!

「!」

ドガンッ!!

死角からの一発をついに食らった暴君!

「ふふふ!手は緩めんぞ!!はああああッ!」

ドガガガガガーン!!

炎の乱打が暴君を包み込む！

「…さて…本番はこれからかな？」

「…す…ろす…殺すッ！！」

今までの穏やかな表情とは打って変わって、物凄い形相で由良葉を睨みつけている！
どうやら狂気化したようだ！

「ふん、これで面白くなるわ！」

ヒュッ！

ドガッ！！

暴君の華奢な両腕が地面に突き刺さった！

「があああッ！！」

「なんと！？」

暴君は突き刺した両腕で地面を思い切りひっぺがした！
地面が波打つように上空目指してはがれていく！
地面に立っていた由良葉は態勢を崩した。

「はっあああッ!!」

「!」

ドッガン!!

由良葉は顔面を全力で打ち抜かれた!

雑木林の方向へ猛スピードで飛んでいく由良葉!

「くく…!」

それを追って走りだす暴君!

片桐は走っていた。

和馬のあの目は…増援要請の意味だと汲み取ったのだ。

「出る…出るッ!」

『もしもし…!』

片桐は優に電話した。

「優か！今何処だ！？」

『もうすぐ白壁につくわ！片桐先輩は今何処なんですか！？』

「今ヤバイことになっててな…問題は白壁じゃなくて社ヶ崎ってところなんだ。」

とりあえず今白壁高校に向かっているから、そこで落ち合おうぞ！」

『わかったわ』

電話を切って、全力で駆け出す片桐…間に合うのか！？

「優さん、片桐さんはなんて？」

「なんだかよくわからないけど、ヤバイ事態らしいわ…！
急ぐわよ！天城君！」

優と勇のコンビは白壁へ向かって走り出した！

「く…なかなか重い一撃だったな…」

「はぁッ！はぁッ！！」

息も荒々しく、暴君は追ってきた。

「まるで獣…力は上がったかもしれないが、動きが直線的すぎるな…」

バシッ！

突進してくる暴君を足をひっかけて、転ばせた！

「がっ！」

「ふん！愚か者め！狂気などに飲み込まれおつてからに」

ガシッ！！

由良葉は暴君の首根っこを掴むと、一気に持ち上げた。自分よりも身長の高い男を軽々しく持ち上げる！

ジタバタともがく、暴君！

「ふん…苦しいか？……今楽にしてやる」

ドスッ！！

由良葉の手刀が暴君の腹を貫いた！

「が…がは…ッ…」

「ふん…人とはなんと脆弱な生き物か」

暴君の血が由良葉の腕を伝い、滴り落ちていく。

バシユッ！

由良葉は腕を抜いて血をぬぐった。

「ひゅー…ひゅー………」

「虫の息か…。悪く思つなよ」

由良葉が立ち去ろうとした。
その時だった。

禍々しい気が膨れ上がるのを感じた！

由良葉が振り返ると、暴君がゆらゆらしながら立ち上がっているではないか！

「なに…？」

そして腹部に空いた穴が徐々に塞がっていく！

「くくく…すばらしい……」

「こやつ…」

（狂気をも飲み込みおったのか…？）

「君は人間じゃないのかな？」

「まあ人間ではないな…じゃが、器は人間じゃでな…。
あまり派手な真似は出来ん」

「そう…僕と君は似ているのかもしれないね」

「一緒にするな小童……。お前は危険な存在ゆえ……
ここで死んでもらうぞ」

「くく……出来るのかな？」

「出来るさ」

白壁高校・校門前

「！……おーい！」

校門で待っていた片桐は白凧優と天城勇の姿を見て手を振った。

「あ！片桐先輩だ！」

三人は合流した。

「お前ら二人だけなのか？」

「ええ。他の面子は昨日の戦いで消耗してて…。
まともに動けるのは私と天城君だけだったの」

「そうか…まあしょうがない！俺達だけでも行くぞ！
こっちだ！」

「ええ。行きましよう天城君！」

「うん！」

三人は社ヶ崎へと向かった。

十数分後…

「何よ…これ…」

辺りは荒れ果てていた。

道路のアスファルトは剥がされ、見るも無残な有様だ。

「片桐くん！」

「あ…あんだ！無事だったんだ！」

片桐を呼んだのは一人、何もしてなかった菅谷だった。地面に埋まった聖才雅、不破彰人、雑木林に吹っ飛ばされた不破まりあ、そして倒された石動和馬の四人を木陰で介抱している。

「和馬まで…こんなボロボロになるなんて…」

「アイツは悪魔だよ…」

あの巨漢たち二人も相当な化け物だったけど…あの女男はそれ以上の化け物だ…

由良葉君だったっけ…あの子が必死に戦ってたけど…静かになってもう10分は経つ…」

「おい！アンタはそこで黙って見てたっつていうのかよ！！」

片桐は菅谷の胸倉を掴んで叫んだ。

「しょうがないだろ！！俺が出て行った所で何も出来やしなかったさー！！」

「！……すまねえ……ついイラだっちゃまった…」

片桐は手を離れた。

「とにかく見に行きましょ。…由良葉君がどつなつたのか…気が
かりだわ！」

第25話 完

NEXT

SIGN
…

第26話 小さな幸せ

S I G N 二章 - S e V e N ' s D O A -

第26話 小さな幸せ

「酷い有様ね…」

白凧優、天城勇、片桐亮の三人は神楽由良葉と敵の様子を確かめるため、荒れ果てた道路脇を探索していた。

道路は割れ、見る影もない。

道路脇の雑木林も激しい戦いがあったのを物語るかのように荒れ果てている。

419

「この先…」

優が指差した方向は地面が抉れながら、遠くの方まで続いている。

「行ってみるか…」

三人は長く続く抉れた道を進むことにした。

しばらく歩いた先に、小さい体が横たわっている！

三人はそれを見るや否や駆け出した。

「由良葉だ！急ごう！」

「うっ…」

「目が覚めた？」

由良葉を見つけたとき、気を失い…全身に打ち身はあったものの、致命的な傷はなかった。

そして、敵の姿もなかった。

片桐亮は由良葉を担ぎ、菅谷の元へ向かった。

そして30分が経過…

由良葉は目を覚ましたのだった。

「皆…オイラ…」

「ゆっくり休んでろよ…怪我は大したことないけど気絶してたんだ」

片桐は起き上がるつとする由良葉を気遣った。

「うん……オイラ記憶がないや…。」

「一体何があつたんだろ…あいつは…あの長髪の兄ちゃんはどうなつたの？」

「俺達が行つた時にはもういなかった…。」

「お前が無意識に倒したのか…逃げたか…。」

「いずれにしても、死人が出なくてよかった。」

「アイツは今までの相手でも桁外れに強い…余りにも…。」

和馬がやられ…、この面々を倒したのを見れば…それなりに力量は想像がつく…。

私達が加勢したところで結果は変わらなかっただろうな…。

「とりあえずどうします？」

「茂みに隠れてはいますが…表はかなりの騒ぎになってきてますよ…。」

「この惨事だ。」

警察やら野次馬、マスコミが集まってきてるようだ。

「裏からこっそり抜けるとして…。」

「今白壁に戻るのも騒ぎが起きててまずいかもなあ…。」

「聖ヶ丘に運ぶか…」

「そうね。えっと…」

優は菅谷の方を見て口ごもった。

「菅谷だよ。菅谷浩介」

「菅谷さん。そちらの三人…運んでもいいですか？」

「片桐君の言うとおり、聖ヶ丘に一時避難したほうがいいかもしれない…。」

「俺達を聖ヶ丘に連れて行ってほしい」

こうして4人は傷ついた5人を聖ヶ丘まで運ぶ事にした。

優は由良葉を担ぎ、長身の片桐は不破まりあ、彰人を両肩で組み、勇は和馬を…そして聖才雅は菅谷が運ぶことに。

人数が少ない場所を選びながら歩き、約1時間…。
ようやく白凧神社までたどりついた。

「はあ…はあ…。」

「やっとついたわ…ここが私の家よ」

「神社か…とりあえず、彼等を何処かで寝かせてやりたいんだけど…」

菅谷は物珍しそうに眺めている。

「OK。すぐに準備する！」

由良葉君…ちよつと我慢しててね」

優は由良葉を背から下ろすと、玄関に駆け寄った。

ガチャッ！

「コリアアッ！！！！」

「！！…お、お祖母ちゃん……」

玄関のドアを開けた瞬間、祖母・茜の怒号が飛んできた。

「鍵もかけんで出かける留守番が何処におるんじゃ！！

…って…どうしたんじゃ！？」

茜はようやく場の状況に気づいた。

そしてすぐに、部屋に運ぶように昏に指示をした。

客間…

「なるほど…そんな事が…」

茜は神妙な面持ちで呟いた。

由良葉たち、傷を負った5人は別室で寝かせ、
亜子、茜、優をはじめ、勇、片桐、菅谷…そして九鬼葵の7人は客
間にて会談。

片桐と菅谷が今まで起きた事を話して聞かせていた。

「俺の予想が正しければ…恐らくその敵は倒せてないと思う…。
由良葉君も強かったけど…奴はそれをも越えていた…」

「菅谷君と言ったかの…。
恐らくその予想は当っておる可能性が高い…」

「!…どういふ事？お祖母ちゃん」

優が質問した。

「さつき由良葉の体を見たが…」

銀の靈気がかなり小さくなっていた…相当に消耗したんじやろう」

「それって…銀が出ても勝てなかったってこと!？」

「勝敗は別にしても、互角ないし…格上か…」

とにかく今だかつてない強大な敵じゃな」

「おばあ様…和馬や由良葉君までもが全力を賭してあの結果だとすれは…」

正直私達だけの戦力で太刀打ち出来るか…」

奥里から和馬、由良葉と共にやってきた九鬼家の次期頭首…九鬼葵。彼女もかなりの実力者ではあるが、とはいえ銀を解放した由良葉の力には及ばない。

「事態は私等が想像した以上にまずいかもしれんな。

かといって…対抗できるだけの戦力か……うーむ……」

「まだ諦めるには早いわよ!

何かしらの対策を練って…由良葉君のサポートをするなりなんなり…」

きつとまだやれるよ!」

優は立ち上がって、暗い顔をする皆を鼓舞した。

「優の言う通りじゃな…。」

私等が悲観してても事態がよくなるわけじゃないしな。
出来る事をしようか」

「あの…。」

菅谷が口を開いた。

「どうしたの？菅谷さん」

「皆さんの役に立てるか…それはわかりませんが、
強力な霊能力者を一人知っています」

「え！？」

「かみちゃん…いや神谷一騎…彼ならあるいは…」

「その人は本当に凄いの？」

「ええ。実際、物凄い化け物を2人倒してますし…。
戦力にはなると思いますが…ただ…」

「ただ？」

「彼はその…人見知りで、引きこもりで…。
とにかく面倒くさがりなんです。余程のことがないと、まず部屋から出ません」

「はあ…とんでもない人ね…。
でもこの際戦力になるのであれば、四の五の言ってられないわ！
菅谷さん！その人に会わせて！」

優は菅谷の元のにじり寄った。

「あう…はい。」

とりあえず俺の方から話はしてみます…彼等を救ってくれた恩も
ありますから。

出来るだけ力になってみます」

「頼りにしてるわよ！菅谷さん！」

その頃…

「まあね…。今までもそれなりに大きな力だとは思っていたが…。それ以上の力を手に入れたからね」

暴君は握りこぶしを見ながらニヤリと笑った。

「それはよかった…。さあここからは私の仕事だ」

「怨霊を集めるのですね？…。ふ…。もういいんじゃないんですか？」

「もういい？…。それはどういう意味？」

「僕やあなたが全力で暴れば済む話じゃないですか。そう思いませんか？超越」

「結果を見れば、あなたの言う事は正しいかもしれない。しかしあまり調子に乗ると足元をすくわれるかもしれないよ」

「それは忠告かい？」

「さあ…。とにかく私は私の仕事をする。

君の邪魔をする気はないが、私の邪魔をするのであれば…。わかるね？」

「ふふ…。底が知れないな…。君もボスも。

圧倒的な強さを手に入れたというのに…。君やボスには勝てる気が

しない。

わかったよ。邪魔はしない……存分に回収するといい」

暴君はそういって、ビルからビルへと飛び移って何処かへ消えた。

「ふん……」

9月8日(火) PM 8:10

「うっ……あれ……」

聖才雅は目覚めた。

横を見ると空いた布団が三つ並んでいる。

隣の部屋からは何やら騒ぎ声が聞こえる。

才雅はゆっくり立ち上がると、隣の部屋へ足を運んだ。

「おま！それは俺の肉だろッ！」

「和馬にい！！さつきから肉食いすぎ！！」

「ほんとよ！！このボウズ！！飯の恨みは怖いんだからね！！」

優と和馬と由良葉による、すき焼きの肉の争奪戦が繰り広げられていた。

ゴツン！ゴツン！！ゴツン！！！！

茜の鉄拳が頭上に落ちてきた。

「ええい！！大人しく喰えんのか！」

「あ！聖先輩！目が覚めたっすか！」

不破彰人がポカーンとしている才雅に気づいた。

「先輩体は大丈夫ですか！？」

まりあはイスから立ち上がると才雅の元に駆け寄った。

「い、いや…僕は大丈夫。」

それよりこれは…ここは何処なんだい？」

まりあはこれまでの事を話した。

「手当てに加え、晩御飯まで…感謝の言葉しか浮かびません…。
ありがとうございます！」

才雅は席から立ち上がると深々と頭を下げた。

「いやいや、構わんよ。そんなにかしこまらないと早く食べなさい」

「しかし…白壁の様子が気になります！ここで暢気に食べているわけには！」

「落ち着いて先輩。私達の家族も、先輩の家族もちゃんと無事。
さっき連絡がとれたから心配しないで」

「そう…か。
すみません…取り乱しました」

自分の土地が酷い目にあって…家族がどうなってるのかもわからず

に、
すき焼きなんか暢気に食べてられないわよね…。

やっぱり許せないよ…。

どんな理由があってこんな事をするのか知らないけど、
他人の幸せを踏みにじる権利なんて…誰にもないんだ。

「聖さん…肉食べて！」

んでもって早く元気になってね！」

優は才雅に肉をよそって言った。

「…そうだね。

ありがとう。いただくよ」

そう言っつて肉を受け取ると、一口パクツと食べた。

「…おいしい！」

「でしょ！どんどんあるから皆精つけてね！」

激戦の間のひと時。

幸せな時間…こんな時だからこそ大切にすべき時間。

守るべき小さな幸せ。
当たり前前であって…当たり前前すぎて、その幸せに気づかない小さな
幸せ。

必ず守ってみせる！

第26話 完 N E X T S I G N …

第27話 密告者

S I G N 二章 - S e V e N ' s D O A -

第27話 密告者

9月9日(水) AM7:12

「おはよう…」

優は寝ぼけ眼でリビングへやってきた。
皆目の前のテレビに釘付けになっている。

「酷いわね…」

焼け野原になっている白壁の映像。
地元に住んでいた不破まりあと彰人…そして聖才雅は、
怒りと悲しみに打ち震えて画面を見つめていた。

「僕たちは自分の住む町を守れなかったんだな…」

「先輩…自分を責めないでください。
どつにもならなかったのよ…」

悔やむ才雅を慰めるまりあ。

「申し訳ない…」

そんな二人を見て茜は頭を下げた。

「白凧さん！そんな…頭を上げてください！
あなたのせいではないですよ！」

「しかし…私等と深く関わりのある連中が招いた惨事じゃ…。
こうなる前に止めたかった…。謝って済む問題ではないが…申し
訳ない」

「…お願いです頭を…上げてください」

才雅の言葉にゆっくり頭を上げた。

「白壁を潰した今となっては…今度はここが狙われる可能性があり
ます…。」

白凧さん。どうか…どうかここを白壁と同じ目には合わせないで
あげてください…。」

「こんな悲劇…もう終わらせなければ」

「先輩…」

「聖君の言う通りじゃな…何が何でも敵を潰す…！」

「これ以上の悲劇は何としても止める！」

そうね…。

そのためにも、問題点は二つ。

敵が何処にいるのか？

そして、圧倒的な強さに対する戦力…。

出来れば敵が動き出す前にこちらから出向き…叩きたい所だ。

だが、それにしても戦力が足りない…。

残る敵の数はわからないけど、圧倒的な力を持つ敵がいることはわかっている。

そういえば…

「まずは、菅谷さんが言っていた神谷さんって人に会わない？
力になってくれるなら心強いし」

「そうだね…。かみやんには事前に電話しておいたんだけど、
予想外に会ってくれるそうなんだ。

俺はこれからかみやんを連れてくるけど…皆はそれぞれ仕事や学校だよな？」

菅谷が応えた。

そうだった。

今日はまだ水曜日。

学校かあ…。

聖先輩達はどうなるんだろ？

「僕らはしばらく休校だそうだよ」

「先輩：一度白壁に戻ってみませんか？

親や友人等も心配してるだろうし」

「まりあ君の言う通りだな。

ここは一度帰るか：彰人君もそれでいいかい？」

「俺はそれで構わないツスよ！姉貴も帰るんならついていくし…

菅谷さんもこれから神谷さんに会うなら一緒に行きますか」

「そうだね。美味しい朝食ありがとうございました」

4人はお辞儀をした。

「いえいえ。お粗末様です」

エプロン姿の亜子が応えた。

4人が家を出ようとした…その時だった。

ピンポーン

「白凧さん、お客さんのようだよ？」

「はぁーい！」

優は急いで玄関に向かった。

「多分流華か誰かでしょ」

ガチャッ

「…」

見知らぬ男が無言で立っている。

「…どちら様…ですか？」

「…！！！！」

聖才雅と菅谷浩介の表情が変わった。

「優さん離れて！！そいつは敵ですッ！！」

「え！？」

スッ！

男は玄関に上がってきた。

「な、なによアンタ！」

「警戒しなくていい。」

俺にはもうお前らと戦う理由もないし…戦う力も残っちゃいないからな」

突如現れた男は”正義（Justice/ジャスティス）”だった。

「何が目的でここにきた…！返答次第ではタダじゃすまない！」

聖は警戒を解かず、構えたまま叫んだ。

「聖君…構わんよ。話を聞こうかの？」

茜が玄関に赴き、男を招き入れた。

客間

「まず名を聞こうか？」

「俺は一条岳…コードネームは”正義（Justice/ジャスティス）”だ」

「コードネーム…」

「そつだ。ボスが俺達7人：S e V e N ' s D o Aに名づけた名前だ」

「ふむ…お主のボスとはこやつか？」

茜は写真を見せた。

「そつだ。コイツが俺達のボスだ」

「…なるほどな。これで戦力は拵めたな。」

敵は緋土京を含め8人…そのうち現戦力はいくつになるのじゃ？」

442

「俺が知ってる情報で言えば、今動ける人間は4人…」

ボス、そして片腕である超越（Transcendence／トランセンデンス）。

暴君（Tyrant／タイラント）に解剖（Dissection／ディセクション）だな。

俺と一緒にいた巨漢の男…破壊（Destruction／デストラクション）は倒れ、

復讐者（Avenger／アヴェンジャー）、恐怖（Fear／ファイア）も戦闘不能状態だ」

「暴君…！めちゃくちや強かった女男野郎だ…。」

あの強さで奴の片腕じゃないのか！？」

和馬が口を挟んだ。

「ボスに代わり…実際動き回っていたのは超越だ。

奴が実質Seven's DoAのリーダーってわけだ」

「ってことは…その野郎もあの暴君って奴と同格かそれ以上の力を
持つてるってことかよ…ッ！」

「そうなるな。他に質問は？」

「聞きたいことは色々あるが、敵の能力を知りたいな。

強力な怨念をその身にわざと宿し…力を得る…。

恐らく色々”かき混ぜた”怨霊…特殊な力を有していても不思議ではない」

「そうね…現に私も何人かと戦ってきたけど、
不思議な能力を持っていたわ…」

「悪いが特殊な能力に関しては本人以外知らないと思っぜ。

知ってもボスや片腕の超越ぐらいだ。

俺は知らない」

「じゃあ別の質問じゃ…。奴等は何処にいる？」

茜は核心に触れた。

「まあそいつを知りたいと思ってきたわけだがな。
俺が案内してやる」

「…あなた、緋土京とは仲間だったんでしょ？
それなのに急に敵である私達に協力するなんておかしいじゃない
！」

「優さんの言う通りだな。畏である可能性も十分に考えられる」

優と才雅が食い下がった。

「ふん。信じられないなら勝手にすればいい。
俺は頭を下げてまで教えるつもりはないからな。
それじゃあな」

男は立ち上がった。

「待ちなさい…お主についていこう」

「お祖母ちゃん！？この人の言う事信じるの！？」

「お主…何故私等に話す気になった？」

「……………俺は人間が嫌いだ。

信用もできねえし…心底腐ってやがる奴もいる」

「お前が言つな…ッ！」

聖がいきり立って怒鳴った。

「…ふん。お前の正義が俺を許せないように…

俺の中の正義で許せないものもある……………」

「それで？」

茜は聖を手を沿え、落ち着かせて聞いた。

「俺は奴等に自分の正義を貫く力をもらった…。

その恩もあり…俺は奴等に協力した。

だが、俺は敗れ…力を失い、そして捨てられた。

もう義理立てする必要もない…そして何より…

奴のやるうとしていいる事は俺の正義に反するんだ…もう目を瞑る
必要もない。

だから今度は俺の正義を貫くため、お前らに協力する…それだけ
だ」

「…そうか」

「随分と勝手な理屈だ…。」

手がかかりでなければ、僕がここでぶっ飛ばしたいよ…。」

「全てに片がつけば…そんな時相手になつてやるぞ。」

俺はお前が嫌いじゃない」

ニツと笑う一条。

「で、どうするの？本当にこの人信用しちゃうの！？」

「今は可能性が少しでもあるならば、それに賭けるべきだと思う…。それに、こやつ正義に対する思いだけは真っ直ぐなように思う。正しい…正しくないかは別にしてもな」

…。

「場所は教えるが、俺はそこまでだ。」

後のことは勝手にやればいい」

「構わんよ。元々は私等と緋土京の問題じゃからな」

「一つ疑問なんだけどいいかな？」

優は一条に質問した。

「なんだ？」

「なんで家がわかったの？」

「そもそも敵として認識されてたの？」

至極当然の疑問だった。

「詳しくは知らない…が、お前らを敵として認識はしていたようだ。

そしてお前らの監視役が恐怖（Fear/ファイア）だった。

丁度お前の着ている制服の女子高生だ」

「あの子か…」

「俺はそいつから敵の名前は聞いていたからな。

あとは住所を調べてやってきただけだ」

「なるほど…」

「質問はもういいか？ だったらさっさと案内するぞ」

「ふむ…どうするかな…」

茜が急に考え出した。

「どうしたのお祖母ちゃん！行くんでしょ！？」

「ああ。行くは行く…。だが問題は戦力じゃ。

下手に大勢で行っても逆に不利になる場合もある。

敵は4人…か」

「ハッキリ言っぞ…」

お前たちに勝ち目は薄い」

あんたに言われなくてもわかってるわよ…！

「俺は行くぞ…！あの野郎にリベンジかましてやる！」

「オイラもやるよ！銀も回復したと思っし！」

和馬と由良葉が立ち上がった。

「正直、子供を戦力として認めたくはない…。

じゃが、そもも言っておれんか…」

由良葉…絶対に無理をせんと誓えるな？」

「うん！」

お祖母ちゃん、和馬に由良葉君…これで3人か。

「亜子、お主も来てくれるな？」

「もちろんよ。やっと出番って感じで腕がなるわ！」

「それと…葵殿…よいかな？」

「もちろんです茜様！そのために来たのですから！」

亜子と葵もやる気は十分といった感じだ。

「私は？私も連れて行ってくれるんでしょ？」

「ダメじゃ」

！！

「なんでよ…」

「ハッキリ言おう…足手まといじゃ」

足手まとい…。

「優は万が一に備え…菅谷殿と一緒に神谷殿に会うのじゃ」

「…」

優は顔を伏せた。

「優…わかってくれ…。」

これはもはや命に関わる戦い…半端者のお主がゆけば、死は免れんのじゃ」

「わかってるわよ…。」

ポンッ

亜子は優の頭に手をあてた。

「亜子ねえ…。」

「あなたはこの街を守って。」

何かあったとき、誰もいなかったら…この街を一体誰が守るの？」

「…わかった…。」

私は私の出来る事をやるわ」

「お願いね！優」

頭を撫でて亜子は言った。

「聖殿：あなた達の無念はわかるが…」

「気遣いありがとうございます。」

わかってます…：僕らの力では足手まといだということとは…。
優さんではないですが、僕らも僕らに出来ることを精一杯頑張ります」

「うむ…頼みましたよ聖殿」

こうして戦いは一気に加速する事となる。
決戦へ向けて…。

第27話 完

NEXT SIGN…

第28話 潜入

S I G N 二章 - S e V e N ' s D O A -

第28話 潜入

聖ヶ丘高校・1 - B

ガラッ！

優は落ち込んだ面持ちで教室に入った。

「優さん！」

天城勇と鹿子流華が優の席に駆け寄ってきた。

「どうしたんですか？一限目休んで…」

何かあったんですか？」

「うん…色々あってね。」

学校が終わったら一度皆で集まりたいわね。
そこで現状を全て話すわ」

そこでは何も語らず、話は終えた。

そして時間は経ち…放課後。

白凧家・客間

「皆良く集まってくれたわね」

天城勇、鹿子流華、片桐亮、須藤彰、
夕見司、瀬那稔、日下部新一、岡島大樹、椎名一、
シロにポチ…11人が優の元に集まった。

彼等と一緒に修行を潜り抜けてきた大切な仲間たち。

「連日のニュースで被害地域が近づいてる…。
優の言っていた敵の仕業なんでしょ？」

司が質問した。

「ええ。そして…その敵の居場所がわかったわ」

『！！』

全員驚きの表情をした。

「だったらすぐに戦いに行きましょう！

これ以上街を破壊されちゃ敵わないです！」

「落ち着け勇…もう対処に動いているんだろ？」

片桐は勇を静止させ、優に質問を投げかけた。

「ええ。お祖母ちゃんやお姉ちゃん…和馬たちが敵の本拠地へ出発したわ。

今朝早く…」

「なるほど。姿が見えなかったのはそういうことか。

片桐、察しがいいじゃねえか」

「別に驚く話じゃないさ。んで、もう夕方なわけだが連絡は何かあったのか？」

片桐が質問した。

「うん。携帯のメールも電話も連絡がないわ。今どうしているのか、全然掴めない」

「…心配なのね？」

流華が言った。

「…うん。敵は相当な力を持っているようなの。私じゃ足手まといとも言われたわ…」

「優…」

「でもどうして敵の本拠地が判ったんだ？」

瀬那稔が聞いた。

「敵の一人が私の家にやってきて、話してくれたのよ」

「…！…それって信用できる話なのか？
畏って可能性もあるんじゃない…」

「瀬那先輩の言う通り、私もそう言ったんだけどね。」

お祖母ちゃんは少しの可能性でも今は賭けるべきだって…」

「…連絡がないってのも気になるぜ…。」

畏にはまって捕まったとか…」

「瀬那！縁起でもない事を言つなよ！」

優は俯いてしまった。

「わ、悪い…俺はそんなつもりじゃなかったんスよ…。」

優さん、元気出してください」

「うん…。せめて私も場所が判れば確かめにいけるんだけど」

「聞いてないってわけね…。」

まあ落ち込んでいてもしょうがないですわ。

私達はお祖母様の無事を願って待つ以外にないのですから」

司は気丈に振舞った。

「万が一の事があったとき…私達にこの地を守ってくれと…
そう託されたわ」

「おいおい、お前もそんな悪い方に考えるなよ…優」

「うつん。そうじゃないの須藤先輩。」

託された以上…私はこの地を守るわ。
命を賭けてね…！皆は…一緒に戦ってくれろ？」

「愚問だな。ここは俺達の住む街だぜ？」

よそ者に好き勝手やられてたまるかつての！」

「だな！こういう時のために修行したんだし…な！」

須藤と片桐は握りこぶしをコツツと当てて言った。

「須藤先輩、片桐先輩…」

「僕は元より優さんを全力で守るために強くなったんです！」

優さんも守るし、この街も守って見せます！」

「まあ…私を戦力から除外したのがすんごく納得いかないけど…
今更グチグチ言っても始まらないわね。」

降りかかる火の粉は全力で振り払ってやるわ！」

「勇君…流華…」

「私もやらない理由はないですし、力を貸してあげてもよくってよ
？」

「ふん。相変わらず素直じゃないのう司は。」

わらわはそなたについていく他ないでな…ま、その身の二つや二

つ守ってやるわ。
なあ犬っころ」

「ふわもこのお前が言うなあ！僕は司ちゃんをサポートぐらいしか
出来ないけど…
頑張るよ！」

「司…シロ…ポチ…」

「もちろん俺達も部長を守る使命があるからな」

「おうよ！俺達じゃ心もとないかもしれないけどさ、
ちったあ役に立てるように努力してきたつもりだもんな！新一！」

「ああ！俺達もやるときゃやるって皆に見せてやろうぜ大樹！
お前もその気なんだろ！？ー！」

「僕は別にそんな暑苦しい気持ちなんてないし…
しんどいのも痛いのも嫌だよ………まあどうしてもっていうなら
力かしてやらんでもないけどね」

「瀬那先輩…日下部先輩、岡島先輩…それに一まで…
みんなありがとう…私皆と出会えてよかった…」

優の瞳に涙が浮かんだ。

「まあそんなわけだ。肩の力抜こうぜ？」

一人でなんでも解決しようって思わないでさ」

「そうそう！僕らの力をもっと頼ってくださいね！優さん！」

須藤と勇が言った。

「うん！」

時は遡ること4時間ほど前…

9月9日（水） 12時25分…

白風茜一行は、敵であった一条岳に連れられ聖ヶ丘の最南に位置する音羽町に来ていた。

「あそこに見えるビルがあるだろうか？」

一階に隠し部屋があり…地下に進む階段がある。

地下は三階まであって…恐らくボスは三階にいる」

「あの廃ビルに居やがるのか…！
とつとと乗り込もうぜ！」

バコンッ！

茜の鉄拳が和馬に落ちた。

「落ち着け！たわけ者め！」

一条…これが最後の質問じゃ…信じてもいいんじゃない？」

茜は真つ直ぐ一条の眼を見た。

「…ああ。嘘じゃないさ」

「よし…じゃあ乗り込むかの」

茜たちは古びた4階建てのビルへ向かった。
人通りも少なく、寂れた感じがする通り道だ。

「俺はここまでだ。隠し部屋に関してはこのメモに書いてあるから
あとは好きにしてくれ」

茜はメモを受け取った。

「これからどうするんじゃ？」

「俺は社会からして見たら、悪党も悪党…クズと言ってもいい存在
さ。」

「この手は血で染まりすぎた…だからといって縄につく気はない。
俺はまだ遣り残した事があるからな…。」

それが終われば…自らの幕は自らで下ろすさ
「

一条は皆に背を向けて去ろうとした。

その時だった。

「おい！」

和馬が彼を呼んだ。

「…死ぬなよ…」

「…ふッ」

和馬のその言葉に、一条岳の背中

”あはよ”

…と、無言の挨拶を感じさせるものだった。
罪を背負い、歩む男の背中に一同は複雑な思いを感じていた。

人を殺すという行為は何物にも変えがたい罪だ。

それが例え、どんな悪であつても…

人が人の命を奪つていい事にはならない。

何をしようとも、その罪は消えることはなく、一生背負つていくもの…。

あとは自分自身が、どのようにその罪と向き合い…これから償っていくか。

罪の重みに耐えかね死を選べば…それは逃げになるのだろう。

彼がどの道を行くのか…それは彼にしかわからない。

「さあ…行くぞ！」

茜たちはビルに入った。

1階に人気はなく、掃除もしていないホコリまみれの机が並んでいる。

「じつちじゃな…」

見ると新しい感じがするパーテーションがある。
横にスライドすると、人一人程度歩けるスペースで10mほどの通路が現れた。

「ふむ…私が先頭きつて行くわ」

茜はスペースの最後まで行くと、足元を見る。
すると小さな扉がある。

茜はそれを開けてみた。
なんと地下に通じる梯子が現れた。

「どうやら一条の言った事は本当らしいのう…」

茜はゆっくりと降りた。
不意打ちがないか、非常に用心深く、慎重に降りる。

顔を出せる部分までくると、降りる前に顔を出して地下室の状態を確認した。

「…これは…」

茜が見たのは一人の男だった。
状況を把握した上で茜は一気に地下に下りた。

地下の状況は何もない無機質な明るい部屋。
広さは何もないこともありかなりのスペースに感じた。
学校の教室か、それ以上に感じた。

そこにスーツに身を固め、中心でイスに座って、こちらを見ている
男が一人。

「おい、どうした…！？バアさん」

「お出迎えがいるようじゃ」

茜の誘導の元、他の4人…石動和馬、九鬼葵、神楽由良葉、白凧亜
子も地下室に降り立った。

「ようこそ。皆さん」

「あの野郎…やっぱハメやがったな！」

「そのボウズ君…それは違うよ。
君たちは気づかなかったかもしれないが、監視ビデオが1階に忍
ばせてあってね。」

おまけにここに通じるパーテーションね。あれ開ければ防犯ブザ
ーが鳴る仕組みなんだ」

「…ち。教えるならそこんどこまで教えとけってんだ…！」

「はは。それにしても、まさか裏切り者が出るとは思わなかったな。一体誰だろうねえ」

「それにしても…お前さんとうとうしてまた会えるとはね…」

「バアさん、あいつ知ってるのか!?!」

「ああ…以前やりあつた相手じゃ…。」

「確か”解剖(Di s s e c t i o n / デイセクション)”と言つたかな…」

「覚えていてくれて光栄だよ。今度こそ切り刻んでやるさ…!!」

男はイスから立ち上がると、イスを蹴飛ばして構えた。

「やれやれ…やる気満々か…」

「バアさん、こいつ強いのか?」

「弱いな…。」

私から見れば十分に強い部類じゃが、奴等4人の中じゃ下つ端程度の実力じゃろ。

「ここは私に任せておぬし等は下に行け」

「弱い…という言葉は聞き捨てならないが…
先に行ってくれるのはありがたいね…」

「！…意外だな。普通先に行かせないために、待ち構えてるもんだ
けどな」

「ボウズ君。僕はその御婆さんを切り刻めればいいんだよ…ひっひ」

「…なるほど…ド変態ってわけか…」

「んじゃバアさん…任せても大丈夫なんだな？」

「誰に物を言うとするんじゃ！私の心配をしとる暇があったら、さっ
さと倒して連れて来い！」

「だな！…お前ら先に行くぞ！」

和馬と3人は更に地下に降りる梯子へ向かって走った。

解剖はそれを見向きもせず、茜を見ている。

和馬は3人を先に降りさせると最後に降り始めた。

「バアさん…死ぬなよ！」

「さっさと行きな！」

茜が叫ぶと和馬は降りていった。

「さあ…一人きりだよ。切り刻んでやる…」

「はあ……最低な気分だよ。とつとと終わらせるぞ」

第28話 完 N E X T S I G N ……

第29話 絶体絶命

SIGN 二章 - SEVEN'S DOA -

第29話 絶体絶命

対峙する白凧茜と”解剖(Dissection/ディセクション)”。

以前の戦いから判るように、実力的には白凧茜に分があると考えていい。

だが茜は油断せず慎重に佇んでいる。

そんならみ合いが1分ほど続いて、先に動いたのは茜だった。

コンコン

茜は床を叩いた。

続いて近くの壁を叩く。

「ふむ…かなり頑丈なようだ」

「全力で暴れてくれていいよ？」

それと…一つ言っておくがこないだの勝負…あれで勝った気にならない事だよ」

「別に勝ったとは想っておらんよ」

「そうかい…それならいいんだ。」

「僕は全力じゃなかったんだからね」

解剖は両手を広げた。
ジャキッ！

靈気の刃が両手に…そして男の周りに靈気で作られたナイフが無数に現れた。

「相変わらず、それが好きだな…以前通用しなかったのがわからないのかい？」

「誰も真つ向勝負で放つとは言っていないさ！
これでどうかな？」

男は靈気のナイフを弧を描くように左右から放った！

「む…？」

茜はあっという間に全方位ナイフに囲まれてしまった。

「どうだい？あの靈気の壁…確か一方向に対してしか出せなかったよね。」

これを一斉に放つたら…どうなるかな…くくく」

「はあ…。その”してやったり”って顔は、成功してからするもんじゃ…。」

御託はいいからさっさとやってみなされ」

「ふん…負け惜しみを…！！」

いちいち生意気なババアだ！喰らえッ！！」

解剖がそう叫ぶと、無数の刃が茜目掛けて猛烈なスピードで飛んできた！

バチッ！！

「…何…？」

「何をそんなに驚いておる？」

ただのハツタリに聞こえたか？」

無数の刃は茜を包む靈気の壁に防がれている。

「一方向に出せるなら、全身を包むのもわけなからう？」

「く…!!ほざけええ!!」

今度は解剖自ら突進していく。

両の手にそれぞれ靈気の刃がほとばしっている!

「接近戦か…それもいいじやろう!」

茜も応戦するべく、全力で解剖目掛けて駆け出した!

「死ね!!」

茜が間合いに入るや否や解剖は右の刃を全力で振り放つ!
しかしそれを素早く上空にかわす茜。

「見え見えだろツ!!馬鹿野郎!!」

解剖は避けられるのを前提に考えていたようだ。
すぐさまもっ片方の刃を上空の茜目掛けて投げ放った。

「はぁッ!…!」

刃が茜の目前まで来た瞬間、何のモーションもせず、ただ一喝の気合を放った。
すると刃がバチンツと消滅した。

「!!!…馬鹿な」

スタツ！

「靈気を物質化し、それを研ぎ澄まし放つ…この一連の流れの速さはかなりのものじゃ。」

しかし、その分よく練られていない。
切れ味は良くても非常に脆いんじゃないよ

「ほう…やってみるか…」

男が茜から目を放し集中を始めた。

ドガッ！！

「へブシツ…」

解剖の顔面に茜の跳び膝蹴りが放たれた。

「馬鹿か…誰が待つと言った！」

「き、貴様あッ…卑怯だぞ…ッ…！」

顔面を押さえながら怒鳴り散らす解剖。

「私はお前と遊んでる場合じゃないのじゃ。

とつと勝負を決めるぞ…！！はあああああッ…！」

茜は気合を入れ始めた。

全身を纏う霊気は激しい光を放ち、ほとばしっている！

「くう…！」

ドンッ…！

茜が物凄い勢いで男の間合いに入った。

そして拳による弾幕を近距離で全身に浴びせると、トドメの蹴りを放ち、壁際に吹き飛ばした。

さらにそれで終わりではなく、霊気砲を乱打した！

「はあああッ…！！沈めえええッ…！」

茜の全力だった。
瞬殺の勢いで放った霊王化身による波状攻撃。

「……」

解剖はなす術もなく、壁に打ち付けられている。
どうやら気を失ったのか、ピクリとも動かない。

「はぁ……はぁ……」。

流石にキツイわ……」

ドクン……

「む……？まだ動けるか……？」

男はゆっくり打ち付けられた壁から這い出ると、首を「キキキ」と
鳴らして茜を見た。

「……驚くほどのタフさじゃな」

「頭がやけにスッキリするな……」

スッ

「！」

突如茜の服に切れ目が走った。

「何…！？」

「余所見してていいのか？」

一瞬に服に目を奪われた茜は、解剖の声にすぐ視線を戻したが、目の前にはすでに解剖の姿はない！

「ここだよ」

ドガッ！！

茜は解剖の全力の蹴りに吹き飛ばされた。

間合いは十分にあった。

一瞬にして背後に…死角に潜り込まれたのだ。

「ぐ…がはっ…！…はあ…はあ…」

茜は吐血した。

不意打ちの蹴りで相当のダメージを受けてしまったようだ。

「どうしたんだ…僕は。」

力が…力が湧いて来る」

茜はフラフラと立ち上がった。
蹴られた腹部を押さえている。

「…く…」

（急に強くなりおった…狂気化でもないというのに…）

まさか狂気を飲み込みおったのか…？）

「まだ立てるのか。」

「じゃあこっからは拷問タイムだ」

スッ！

あまりにも素早いモーションで、何が行われたのかすら見えない。
実際には男が手を振り、そこから靈気の刃が放たれている。

スパッ！

「ぐッ……！」

突如茜の右肩から血が噴出した。

「あはは！どうしたんだい？よけるか、ガードするかしてみなよ」

「く……！」

茜は全身を守護霊壁で覆った。

「いいね。じゃあどっちが勝つか勝負だ」

スッ！

再び解剖が腕を振る。

そして凄まじい速さで見えない霊気の刃は茜目掛け飛んでいく！

スパッ！！

解剖の刃は霊気の壁を簡単に破り、体を切り裂いた！

「ああッ………！！！」

茜の悲痛な叫びが部屋に響いた。
今度は左肩から血が噴出したのだ。

茜は両肩を抱くようにしながら、その場に崩れ落ちた。

「つまらないね。こつも簡単に勝負がつくと」

「…ふん…もう勝ったつもりか…気の早いことだ…」

「そんな状態で強がってみても、虚勢にしか見えないよ。

まあ…もし、まだ何かやれるなら早くやることだよ」

「…」

（時間を稼ぐしかないのう…。両肩の傷も塞がった。

体力も戻りつつある。霊気も落ち着いた…。だが、血を流しすぎたわ…。

目が霞んできた…。いかな…死を告げる刻印が見えとる…。

”彼女”の到着も期待できんか…ふふ。現実はそう都合よく運ばんわな…）」

「何をニヤニヤしてるんだい？秘策があるなら使ってくれ」

「そうするわ…ッ！！砕竜！！」

ドッ！

一瞬にして茜を纏う靈気が爆発的に上昇した。

「はぁッ！！」

以前同じ技を解剖は見たことがあった。
そう。碎竜の咆哮という巨大な靈気砲。

ガードしても、その勢いに吹き飛ばされる、必殺の技。

「…」

しかし、解剖はひどく落ち着き払っていた。
まるで目前に迫る、それを”防げないわけがない”と思っているようだ。

そして、解剖はおもむろに片手を波動の前に突き出した。

バガンッ！

腕に当たるや否や、波動は別方向にその軌道をかえ…飛んでいった！

ドッガーン！

波動は壁に激突…地下室が激しく揺れ動く。
壁に穴が開くほどの威力…。

「馬鹿な…弾き飛ばした…？」

「かなり痛いな…」

「く…ならば！！はああああッ！！！！」

最後の力を振り絞り、茜は”竜気”を高めていく！

「喰らえッ！！碎竜の爪ええええッ！！」

茜は解剖と距離があるにも関わらず頭上から腕を振り下ろした。

すると巨大な霊気の爪あとにも見える三閃の巨大な光の波動が解剖を襲う！

「ふん」

ガキンッ！！

「な………」

解剖はその攻撃を自らの光の刃で完全に防ぎきっている。
茜は呆然と立ち尽くしている。

恐らく相当の自信があった一撃だったのである。

「どうやら今ので力は出し尽くしたようだね」

「…まさか…このような結果になるとはな………」

茜は観念したのか、その場に崩れ落ちた。

「終わりだね」

時はほんの少し遡る…。

地下1階からさらに下に降りた石動和馬、白凧亜子、九鬼葵、神楽
由良葉の4人は、
男と対峙していた。

「君たちか。侵入者ってのは」

「出やがったな…女男！」

「和馬にい…」暴君（Tyrant/タイラント）「だよ」

先ほど同様に何も無い白い空間。

暴君は中央に一人で佇んでいる。

「一応聞くが、そこを通してくれねえか？」

「それは出来ません。僕の仕事は君たちの排除ですから。上の解剖と僕を一緒にしないでくださいね」

「やっぱそう簡単に通しちゃくれないわな…。だったら力ずくで通してもらうしかないぜ」

スッ

「ああ！？…おい亜子…」

亜子が和馬達を差し置いて一步前に出た。

「私が彼を引き付けますから、3人は下へ行ってください」

「はあ！？何言ってるんだよ！あいつはめっちゃくちゃ強いんだ！俺達全員でかかっても勝てるかどうか…」

「大丈夫…私があんたかして見せますから」

「…自信あるのか？」

「ええ。任せてください」

「和馬…ここは彼女に任せましょう…。
それでいいのよね？亜子ちゃん」

「ええ。お願い葵さん」

「さつきから好きに言うてくれますけど、僕は通さないと
言ったでしょ？」

ビュッ！

亜子が一足飛びで暴君に飛び掛った！

「へえ…」

「今のうちに行ってください！」

亜子は暴君の進行を妨げるように立ちふさがる。
和馬達は亜子の合図と共に全力で駆け出した！

「行かせるものかッ…！」

暴君は亜子を見殺し、サイドから抜いて和馬達を追った！
が、その瞬間！

「！」

急に何かに引っ張られる感じで暴君は動きを止められた。
それどころか、次の瞬間には目の前は天井が映っている。

ドガンッ！！

暴君は亜子の背負い投げを喰らったのだ。

「く…！」

「流石に不意打ちの背負い投げは効きましたか」

背中を押さえ、悶絶する暴君。

「どつやら…ただの女の子じゃないようだね…」

「ええ。よろしくね」

亜子はニコツと笑顔でいった。

第29話 完

NEXT
SIGN…

第30話 綾芽

S I G N 二章 - S e V e N ' s D O A -

第30話 綾芽

「三人は無事に降りたみたいね」

「僕としたことが…。」

「この責任は君の命で償ってもらおうよ」

対峙する白凧亜子と暴君（Tyrant/タイラント）。

「なるほど…確かに凄まじい靈気を内に秘めていますわね」

「…先ほどからあなたは、余裕綽々といった面持ちですが、すぐに恐怖と絶望の表情にしてあげますよ」

ビュッ！

一瞬にして暴君の姿が亜子の視界から消えた。

ドガッ！！

「…！…ッ！…」

一瞬にして亜子の隣に移動するや否や、鋭い手刀を亜子の首筋目掛けて放った。

が、それをいとも簡単に片腕でガードして見せる亜子。

腕が衝突する際物凄い衝撃波が起こった。

「どうしました？私の華奢な腕で止められたのが不思議ですか？」

バツ！

得たいの知れない自信に、警戒したのか、暴君は亜子と間合いをとった。

「…」

「答えは至極単純ですよ。

私は物凄い強いだけです。純粹に」

そう言ってニコッと笑う亜子。

先ほどの暴君のように一瞬で姿を消し、暴君の背後に立った。

「…動き見えました？美男子さん」

「…いや…。凄いな…まるで見えなかったよ」

背中合わせで語る二人。

「はぁッ!?!」

すぐに振り向き様手刀を放つも、亜子の姿はすでになく、空を切るだけだ。

「…先に行った三人が心配なので、早々に倒させてもらいますね」

「…いいでしょう…なめて掛かるのはやめにします…。
本気でやりましょうかッ!?!」

ビュッ!?!

凄まじい速さで亜子目掛け跳んでいく暴君!

「!」

ビュッ!

亜子は暴君の拳打をガードするでもなく、体を捻り、ギリギリの所でかわした。

「シッ!!」

続いて暴君の上段蹴りが放たれる。

これも先ほど同様にガードではなく、避けている。
突然の二連撃に亜子は態勢を崩した。

「もらった!!」

暴君の回転正面蹴りが亜子の腹部に突き刺さった。

ドンッ!!

物凄い衝撃音と共に壁際まで吹き飛ばされた。
亜子の体は勢い良く壁に激突した。

「ガハッ…」

「やるね…蹴りが腹に突き刺さる前に両手で腹を守ったか」

「どうします？今ので単純な肉弾戦では勝ち目がないことがわかったでしょう？」

スピード、破壊力…共に僕のほうが上なはずだ」

「そうね…」

亜子は立ち上がった。

「何…？」

（瞬間的に回復した…？）

「あなたのように体内にわざと強力な霊魂を入れ…力を得る術は、本来外法とされている。

術者の命を削るだけでなく、異常なまでの殺意や悪意をもち、体に乗っ取られることや、破壊衝動が抑えきれなくなる等…ハイリスクが多いからね」

「…急に何の話をしているんだい？」

「過去にも似た事例は私達、被い師の歴史上幾度とあったそうなの」

「…？」

「その圧倒的な力の前に敗れていく被い師たち…。どうすれば対抗出来るのかを考えた…」

喋りながら亜子は右手の中指に指輪をはめた。見ると、左手の中指にも指輪がはめてある。

「そして答えは自ずといきついた…目には目を…ってね」

ドンッ！！

亜子の姿が衝撃音と共に消えた。
その瞬間暴君の体は激しく吹き飛んだ！！

「ガハッ…！！」

亜子は一瞬で間合いに入ると、正拳突きを一発放つたのだ。
壁際まで吹き飛んだ暴君の腹部には、くっきり亜子の拳のあとが残っている。

「…外法には外法を…」

そうする以外に、その時は方法がなかったそうなの。

現に今もその状況…

だから使わざるを得なかった」

「一体…何をしたんだ？」

「この指輪には妖魔が封じられていてね。

身に着けることで、妖魔の能力を借りる事が出来るの。

もちろんリスクは同じ…。今も正直辛い状態よ…なんていったっ

て…2個つけてるし…ね」

亜子の顔が苦悶に歪む。

「それでその能力という事が…納得だよ…。
まさか先に行かせた三人も…？」

「そのくらいの覚悟はしないとあなた達を止めることは出来そうにないからね…。
さあ…おしゃべりはここまでです…速攻で倒させてもらおうわ！」

その瞬間だった。

ドーンッ！

物凄い音と共に、少し部屋が揺れた！

「何…？」

亜子が見せた一瞬の隙。

そこを暴君は見逃さなかった！

ジュッ！

一足飛びで油断する亜子に近づくと暴君！
そして鋭い手刀による突きが心臓目掛けて放たれる！

ズボツ！！

「がはっ……！！」

「ちい……！！」

亜子は一瞬早く体を反らし、心臓への一撃はなんとか避けた。
だが、暴君の手刀は腹部に突き刺さった！

亜子の左脇腹から出血している。

「く……」

亜子が手を当てると見る見るうちに傷が塞がっていく。

「うわああああッ……！！」

「！」

暴君は苦しむ亜子に攻撃の手を緩める事無く間合いをつめ、乱打を

浴びせる。

亜子は反撃は出来ないものの、攻撃を避け続けている。

「ちい…！素早い…！！」

「甘い…よっ…！」

ドガッ！

亜子の蹴りが暴君を吹き飛ばした。

「はあ…はあ……」

（やばい…意識がもっていかれそうだ……やっぱり指輪二つは危険すぎる…！

だからといって一つじゃ倒せない…）」

『女あ…諦めて我を解放しろ……そうすれば、あんな小僧一瞬で塵にしてやるぞ』

「黙りなさいッ！！私は亜子よ……！」

誰にもこの体を譲らない…私は私なの…！」

「ふう…よくも！よくもおお…！」

再び向かってくる暴君！
激しい乱舞だが、今の亜子にはまるで無意味。
全ての動きが遅く感じるほどだ。

「はあああッ！！」

「ガフッ！！」

ドッガーーン！！

亜子は暴君の髪を掴むと、思い切り地面に顔面を叩き付けた。

「はあ…はあ……ッ！！」

『くくく……どうだ？今の攻撃お前の意志じゃないだろうか？』

「黙れ…黙れッ！！」

亜子はつづくまる暴君を蹴り上げた！

「がは…！！」

血反吐を吐き散らし、転がる暴君。

「はあ……はあ……あああああああああッ！……！」

カラン…カラン…ッ！

亜子は両手の指輪を外して投げ捨てた。

「はあ……はあ……！！」

（危なかった……あと一歩遅れてたら完全に意識を奪われていた……）

「

指輪は転がる。

より力を求める者へ。

指輪は転がる。

より邪悪なる者へ。

「……」

「ニッ」

座り込む亜子の目の前に暴君は仁王立ちしている。
不気味な笑みを浮かべて。

「あ……ああ……」

「頂きましたよ？この素晴らしい力！」

ドガッ！！

亜子の意識はここで断たれてしまった。

その頃、上では……

「……なんだ……てめえ……？」

突如現れた冷たい瞳をした女性。

”解剖（Dissection/ディセクション）”が茜にとどめを刺そうとした

ジャストタイミングで、彼女は部屋に降り立った。

「……」

「誰だ？つて聞いてんだよカスが」

スッ

解剖は凄まじい速さで腕を振った。
そして飛ばされる霊気の刃。

カキンッ！

「へ…？」

「…何か？」

超高速で飛ばされた見えない刃を女性は弾いた。

「間に合った…か」

「茜さん…なんと詫びたらいいかわかりません…。
許してくれなんて…とても言えた立場じゃないです…」

「いいんじゃない…来てくれて助かった」

「”来てくれて助かった”…？
何寝ぼけてんだ…ババアッ！！てめえはもう死ッ！決定！死ッ決

定!！」

茜の顔を蹴り飛ばして言った。

「茜さん…この男やってしまっただ構いませんか？」

「…頼む…情けないが…もう何も出来ん」

地に伏せた茜がうつろな目で言った。

「どいつもこいつも…女って奴はああああッ!!!!
出来もしねえ事をペラペラペラペラ…ぶっ殺すぞああああ!!!?」

スパッ

「黙れ…耳が腐る」

解剖の右耳がそぎ落とされた。

「はあ…?…おい…何してくれちゃってんだよ…おめえ…
僕の…僕の耳があああああッ!!!」

右耳を押さえながら落ちた耳を拾う解剖。

「あんたの十八番をそのまま返してあげたのよ？
ありがたく思っことね」

「くく…気をつけることだよ…。
その子は冷徹にして最強……。天才の中の天才……
緋土綾芽^{ひつち あやめ}…京の双子の妹じゃ……」

「はああ…緋土京！？…誰だそいつあ……。
…ん……お前…。
その顔…その眼……その髪の色……！！
まさかボスの…？」

「私は優しくないわよ？
ム力つく野郎には特だね。
あの馬鹿兄貴を知ってるなら、素直に居場所を吐く事ね。
息があるうちにね」

物凄く無表情に近い冷徹な表情をして脅す綾芽。

「ひ、ひいいい…！
(なんなんだ…こいつ…！
絶対にヤバイ……眼が尋常じゃない…！

本気で殺す眼をしてやがる…！」

「どつすんの？言うの？言わないの？」

「し、知らないんだよ！僕は上から来て、ここに待機してただけで…ボスの居場所なんて知らないんだよ！」

「そう」

「そうそう！だからもう許してくれ！な？な！？」

「そうね…許してあげる」

そう言うと一瞬で男の間合いに踏み込んだ。走るモーションすら解剖には見えていなかった。

ドガッ！！

そして近づくや否や、解剖の顔面を地面にねじ込んだ！そして、髪を掴んで持ち上げた。

「ぶはっ……はぁ……はぁ……や……やめ……」

ドガッ！！

更にねじ込み、持ち上げねじ込み…

何度も何度も無表情でやり続けた。

「…」

「ふん。少しは痛みがわかったか…下衆が」

解剖が気絶をした時点で髪を掴み持ち上げると、そのまま壁まで投げつけた。

「噂に聞いてはいたが…す、凄まじいのう…」

「…DSですから」

地下3階

「…こいつはまずいな…」

「君たちにはそうなるだろうね」

地下3階…つまり最下層。
そこには緋土京の姿はなかった。

「やっぱあの兄ちゃんにハメられたんじゃないの?」

「それは違うよ君。正義（Justice/ジャスティス）は知らなかっただけさ。」

「ボスがここにいないことをね」

第30話 完

NEXT SIGN…

第31話 人を超越した能力

S I G N 二章 - S e V e N ' s D o A -

第31話 人を超越した能力

「…察するにあんたは緋土京の片腕ってわけだ…」

(この威圧感に加え、あの余裕っぷり…間違いのないわな)「

「緋土京…彼はそういう名なのか。

いかにも私が彼の片腕であり、S e V e N ' s D o A のリーダーだ」

今までの何もなかった部屋と違い、ソファや机などが設置されている。

おまけに一面黒い壁紙だ。

「奴がないのならここに長居する必要はないな…」

「くっく…面白い事を言うね」

超越(Transcendence)ノトランセンデンス)が笑い出した。

「ああ！？何が可笑しいんだ…てめえ…！」

「逃げれるわけがない…そう思わないか？」

ドンッ！

「く…ッ…！」

（なんて威圧感だ…体が一気に硬直しやがった…！
冷や汗まで…クソったれ…！）

「戦う以外に道は無さそうね…和馬」

葵は指輪を取り出した。

「馬鹿！…お前は引つ込んでいろ…」

「和馬…何を言ってるの！？」

「私は覚悟ならとっくに出来てる！」

「わりいな…葵…。」

「俺は覚悟出来てねえんだ…お前を失う覚悟はな…。
ここは俺に任せてくれよ…頼む」

「和馬…」

「葵ねえちゃん…ここは和馬兄に任せよう」

由良葉の言葉に黙って頷く葵。

二人は一步下がり、和馬は指輪をはめながら前に出た。

「覚悟しろよ…てめえ！」

「その指輪は秘策かい？」

なんでもいいから最善を尽くすことだ」

スッ！

和馬の姿が視界から消えた。

「！

（疾い…かなりのスピードだ）

ヒュッ！！

背後から放たれた上段蹴りが超越を凄まじい勢いで弾いた！
勢い良く飛んでいくと机に頭から衝突していった。

「すごい…！あそこまで身体能力が上がるものなの…？」

「はぁ…はぁ…ッ…

(冗談じゃねえよ…なんだこの吐き気は…。
ドス黒いもんが俺の中に流れ込んできやがる…ッ)「

ガラッ…

超越は気を失う事もなく立ち上がった。
見ると頭から血を流している。

「強いな…君は」

「…あれで気を失わないのかよ…！」

「私は正義 (Justice / ジャスティス) のように雷を操る能力はない。

復讐者 (Avenger / アヴェンジャー) のように特殊な呪いを扱えるわけでもない。

破壊 (Destruction / デストラクション) のように爆発を引き起こすことも敵わないだろう。

暴君 (Tyrant / タイラント) のような圧倒的な身体能力も持ち合わせていないし、

恐怖 (Fear / フィア) のような幻術も使えない。

そして解剖 (Dissection / ディセクション) のように霊気をあそこまで鋭利な刃に変えることも出来ない」

「…？」

「だが私は”これ”が使える」

超越が右手を突き出した瞬間に和馬の体が勢い良く吹き飛んだ！

ドガツ！！

そのまま壁に激突すると、波紋が広がる水面のように、壁に亀裂が走った。

「…！？一体何が起きた…？」

「和馬！見て！」

葵の掛け声に佇む超越を見た。

「なんだ…？あいつの靈気…」

超越の体を纏う靈気は明らかに異質な波動を放っている。

「聞くところによると私のこのオーラですか？

これは両属性を一度に有するそうですよ」

「それってつまり、+と-って事かよ…」。

んな靈気があるなんて聞いたこともねえぞ…」

「らしいね。ボスも大変驚いていた…。

だがね、問題はそこじゃないんだよ…問題なのは私の能力だ」

再び右手を突き出す超越。

「！」

それを見るや否や、すぐさまガードの態勢をとる和馬。

しかし先ほどのような吹き飛ばされる気配がない。

「あれ…？」

「くく！さあ来たまえ…！」

超越が手をクイッと自分の方へ折り曲げると、その瞬間和馬の体が宙を舞って、

勢い良く超越の元に引き寄せられていく！

「な、なんだこれ！？」

「くくく！面白いでしょう？」

宙にぶかぶかと浮かされる和馬。

「お前…何なんだ？」

「靈気による身体の強化…」。

非常に興味深かった。だが私は別の部分に興味があったね。体を強化できるなら…”ここ”も出来るのでは？とね…」

超越は頭を人差し指で突付きながら言った。

「頭…？」

「そう。私は専門化ではないが、人間の脳にはまだまだ神秘と可能性がある。

その中でも前々より興味深かった”超能力”といった分野がある。もちろん、各種メディアで取り上げられる、そのほとんどが嘘やトリックだろう。

しかし、常識や科学では証明できない事例もあるのだ…」

「それで思いついたってわけか…このサイコ野郎！」

「もちろん最初から出来る筈がないと、冗談のつもりでやってみた事だったさ。」

だが結果はご覧の通りだ…想像を越え、この能力を得た…」

「…ぐ…！なんだ！？…体が動かなく…ッ！」

宙でジタバタしていた和馬が石の様に固まって身動きが取れない。

「これで何故私が超越などと呼ばれているかわかっただろうか？
いや…君たちに名乗った事はなかったかな？くく」

「超能力だなんて…そんな馬鹿な！」

シュンッ！

「現実を見たまえ」

「！」

距離はあつたはずだ。

にも関わらず超越は葵の隣に突如出現した。

「いつの間…！？」

「これも私の能力の一つさ。

見えてる範囲であれば一瞬に空間を移動出来る」

シュツ！

再び先ほどの位置に戻る超越。

「いかに力があっても、速くても…こうしてしまえば無力。それと先ほど言った点で、実は嘘が色々あるんだ」

空中で固まっている和馬に向けて超越は右手をかざした。人差し指と中指をさして、まるで指で銃を形作っている。

「な、何をする気だ…!？」

「こっする気ぢ」

バチバチバチツ！

超越の指先に稲妻のようなものがほとばしっている！

「食らえ…スパークショット雷撃銃！」

バシュツ…!!

か細い電気の波動が勢い良く放たれた！
そして和馬の左肩を軽々と貫通し、天井にも穴が開いた！

「この通り、正義の雷撃など、お手のものだ」

「ああ…ッ…」

痛みに和馬の顔は歪む。

「はあああッ！！」

「！…おっと」

由良葉が超越に突進していったが、それを楽々とかわす。

「く…！！よけんなよおッ！！」

「いいだろう。全力で攻撃してみたまえ」

「なツめツ！んなツ！！よッ！！！！」

由良葉の両手に激しい狐火が揺らめいている！

「白い火か…霊気とは実に興味深いな」

「はあああッ！！双！炎玉！！」

巨大な白炎の玉が超越目掛けて飛んでいく！

「…」

ドッガーーン！！

「…まともに食らった…？」

由良葉自身も疑問の表情を浮かべた。
避けるモーシヨンはおろか、ガードする様子もなかったのだ。

辺りに立ち込めた煙が消えていく。

「！」

「つまらん技だな…まるで痛くも痒くもない」

なんと無傷だ。

「うおおおおおッ!!」

「!…く…!!」

和馬は超越の金縛りと空中に浮かす術を解いて、地に降り立った。

「はあ…はあ…舐めた真似しやがって…」

「私の縛りから抜けたのは君が始めてだ。
何をした？非常に興味深い」

「ふん!…ただの気合だ!!馬鹿野郎!!」

和馬はすぐさま飛び掛った!

バシッ!

「!…く…!!」

跳んだ勢いで放った拳が軽々と受け止められている。

「怪力はない…と言ったが、この程度の筋力操作ならわけではない。
はあああッ…！」

メキメキッ！

和馬の拳が握りつぶされそうになっている！
物凄い握力だ！

「うああ…！！」

「和馬にいを放せええッ…！」

再び由良葉が突進していく！

「試してみるか…！」

由良葉に向けて左腕を伸ばした。

「ゆ、由良葉気をつける…！何かしてくるぞ…！」

「熱…炎…イメージだ…。熱くなれ…もっとだ…もっとッ…！」

超越の左手が急に発火し始めた！
徐々に勢いを増していく！

「！あいつが炎出した！！？」

「素晴らしい…！焼き尽くせ…！！」

バシユツ！

由良葉目掛けて炎が飛んでいく！

由良葉の火炎玉のように綺麗な形ではないが、炎の塊が尾を引きながら
妙な軌道で飛んでいく！

一直線ではなく、揺ら揺らと酷く不安定だ。

「でかッ！」

由良葉の体長の半分ほどの炎の塊は由良葉のすぐそこまで来ていた。

「ついでだ…爆発のイメージだ…集中しろ」

「やっぱ…！」

ドッガーーン…！！！！

物凄い爆音と共に由良葉の体を吹き飛ばした！

「爆炎弾：バーストブリッドでも名づけるか。」

形状と軌道が雑だが…まあ初めてにしては上出来か」

「何でもありかよ…この野郎!!」

和馬は掴まれている状態から蹴りを放った！

その瞬間、拳を放された感覚を感じながら蹴りは空を切った。

「つく…消えやがった！」

「…さて、遊びもそろそろ終わりにするか」

超越は机に腰掛けて言った。

「和馬、由良葉君…三人で全力でやりましょう。」

多分勝機はある」

「勝機はある…って、葵…何かわかったのか？」

「超能力って思うから翻弄されるのよ。」

あれは霊能力の範疇にすぎない。さっきの金縛りだって、あなた

の高めた靈気で無効化できたじゃない。

私も指輪をつけて全力で掛かる、由良葉君は出来れば銀ちゃんに変身して。

あなたも本気でぶつかってね和馬…頼りにしてるんだから」

「はあ…俺だけでどうにかできたらって思ったんだけどな…。

俺が指輪二つ付ければいいんだけど、冷静に考えてリスクのほうが高いのは明白だからな…。」

「そうそう。和馬に今まで敵に回ったら収集つかなくなっちゃうからやめてよね！」

「うるっせえな！このクソガキ！」

「なんだよ！馬鹿ハゲ！」

いつも通りな二人のやり取りを見て葵は笑った。

「な、なんだよ」

「うっん。絶対生きて帰ろっね」

葵はニニツと微笑んでいった。

「あつたりまえだ！」

「話し合いは終わったかい？」

「ああーやろつぜ…最終ラウンド…！」

第31話 完

NEXT SIGN…

第32話 化物VS化物

SIGN 二章 - SEVEN'S DOA -

第32話 化物VS化物

「いける？銀…」

『問題ない…だが勝敗はわからぬぞ…』

「うん…！はあああッ！」

「！…変わった…？」

由良葉は銀へと変身した。
霊気値がグンッと跳ね上がった。

「私も覚悟を決めるッ！」

葵も右手中指に妖魔の指輪をつけた。

「ぐ…！！…なにこれ…」

「気を強く持てよ…葵！気を抜いた瞬間意識も体も持っていられるぞ…！」

「本気の三人が相手か…これは油断しないほうがよさそうだな」

さっきまで余裕の表情だった超越（Transcendence）トランセンデンスも、ようやく真面目な顔になった。

「はああああッ！！やるぞ…！！」

ドンッ！

和馬と由良葉の左右からの突進！

「ふん…正面から来ても無駄だッ！！ハアッ！！」

超越はそれぞれに手をかざし気合を入れた！
得意の衝撃波だ！

バチッ！！

「何！？」

なんと突進してくる二人に対して技が発動しない超越。
発動しないというよりも、当る直前でかき消されたというのが正しいか。

そのまま二人は距離を縮める！

「チイツ！」

二人の拳と蹴りが超越に触れる寸前で、瞬間移動による回避を行った超越！

一瞬にして二人の背後に回る！

「はぁッ！」

『！…！』

和馬、由良葉の体が急に硬直した！
またしても金縛りというわけだ。

「はぁあぁッ！…！」

「うぉおぉおッ！…！」

バチンッ!!

二人は気合により金縛りを解いた!

「こちらも効かないか…ッ!」

「余所見しない事ね」

超越のすぐ背後には葵が漆黒の刃を構えている!

「!」

「遅い!」

全力で振りぬいた漆黒の刃は超越を見事に切り裂いた!

「ぐあああッ!!」

霊を封印する霊気の刃!

白凧家のそれとは違い、九鬼家の特化能力であるそれは、十分な殺傷能力も秘めている!

「!…
（浅い…!この人を纏ってる靈氣にガードされてほとんど切り込めてない…!）」

とはいっても左肩から右腹部まで斜めに切り傷が走り、血も出ている!

「おのれええッ!!はあああッ!!…!!…!!」

ドンッ!!

超越を中心に全方位に衝撃波が発生!
先ほどとは段違いの衝撃だ!

和馬も由良葉も葵も吹き飛ばされた!

「ぐぐぐぐぐ!!…うおおおおおおお!!」

超越の合わせた両手に凄まじい炎の玉が揺らめいている!!
その玉は徐々に膨らみあがっていく!

「あの野郎…あれをぶつけてくるつもりか!?!」

「和馬！葵！…お前たちは下がれ！」

「由良葉…いや、銀！何を言ってるんだ！？」

「あの手の技は主等には受け切れん。

たとえ力が上がっている現状でもちと厳しいわ。
それに目には目を…炎には炎をとということだ」

由良葉は靈気を高め始めた。

そして一瞬にして巨大な白い炎玉を片手に一つずつ生み出した。

「すげえ…由良葉の奴が両手で作った炎玉よりも倍近くでけえ…！」

「打ち合いになりそうね…和馬！一旦下がらなう！」

葵に言われるまま二人は由良葉の後方に移動した！

「はあああッ！！」

はっ…はあ…はああッ！…出来たぞ…くく」

「ふん、何が可笑しい？」

大きさで言えばワシの炎のほうがデカいだろう」

「だったら力比べと行こうじゃないか…私のこの灼熱の火玉と
どちらが上かを…」

「望むところだ…後悔するがいい!!」

由良葉が炎玉を纏った両手を合わせると、二つの炎玉が一つとなり
巨大な炎玉へと姿を変えた!

そして勢い良く撃ち放った!!

「!…何故撃つてこん…?」

ニヤリ…

不敵な笑みを浮かべる超越。

由良葉の巨大な炎玉が超越に届く、その一瞬だった。

姿を消し…

一瞬にして由良葉の背後にいた和馬と葵の近くに姿を現した!

「しま…ッ!」

「ぐ…ああッ…!!」

「ガール…!!」

完全に怒りで我を忘れる由良葉。

「う…腕が…!!」

「貴様は殺すぞ…!!」

凄まじい…圧倒的な威圧感の前に超越は恐怖していた。
ついさつき勝利の高笑いをしていたとは思えない…死に恐怖する表情で地に這いつくばっている。

「獣め…!!」

ブンッ!

超越は瞬間移動で和馬達が吹き飛んだ場所へ移動した!

「!」

由良葉はすぐにそれを追う!

「…」

「あれを食らって二人とも生きてるとはな…。
もつともこの男は虫の息と言った感じだな…。
！…来たか」

超越は和馬の指から指輪を外して口に啜えりと、左手の中指に差し込んだ。

「生きていたか…二人とも…」

「はぁッ！！」

由良葉が安堵を見せたその瞬間！
超越が突き出した左手から物凄い衝撃波が放たれた！

「ぬ！？」

由良葉は一気に飛ばされていった。

「素晴らしい…力が満ちてくる」

ブンッ！

超越は切り離された自らの腕の元に移動すると、腕を拾い上げた。

「出来るというのか…？私にそんなことが…」

ゆっくりと切れた根元に腕を持っていく超越。

「元通りにするんだ…出来る…」

「く！…うがあああッ！！」

（なんだ…この押さえ込まれる衝撃は…！体がいう事をきかないッ
！…！）」

由良葉は壁際に押さえ込まれて身動きが取れないようだ。

「出来る…出来る…！！」

集中する超越。

するとどうだろう、千切れた右腕の傷口が離れた二つを繋いでいく
ではないか。

見る見るうちに元通りになっていく！

「はは…素晴らしい！これではまるで神ではないか！くく…！」

「がああああッ…！」

「なんだ。襲ってこないから可笑しいと思ったら、まだそこにいたのか。」

獣の子供よ

「く…くそッ…！」

ユラッ…

「…！」

由良葉は驚きの表情をした。

それに気づいた超越は後ろを振り返ろうとした…その時だった。

ズブッ…

「…なに…？」

超越のどてっ腹を腕が貫いている。

「和馬…なのか…?」

「くっくっく…」

超越を貫いたのは、今まで虫の息だった石動和馬だった。見ると、全身に焼け跡が残っている。先ほどの超越の炎に焼かれたためだ。

「気分がいいぞ…」

そう呟いた和馬の手元を見ると、先ほどまで葵がつけていた指輪をしているではないか。

「和馬…お前!」

「和馬…? 誰だそいつは…俺は和馬ではない…。
おい貴様…俺を解放しろ」

膝をつく超越を見下しながら和馬は言った。

「俺を…解放する…だと?」

「貴様が持っている指輪だ…それを渡せと言っている。

自我はこの人間に潜り込んでいたが、力は全てその指輪にある…。あの女のつけていた指輪を奪い、”中の奴”の自我は喰い殺し、

力だけ拝借したが…

やはり俺は俺の力を取り戻したいのだ。

だから…とつとよこせ。そうすれば命は奪わんでおいてやる。

俺は今、表に出られてご機嫌なんだ。さっさと言う通りにしたほうがいいぞ人間」

「べらべらとよく喋る奴だ…。

この程度の傷を負わせた位で勝った気にでもなっているのか？

貴様の体はボロボロだが、私の体は…」

超越が風穴の開いた腹部に手をあて集中すると、見る見るうちに傷が塞がっていく。

「この通り、なんともない」

「あーっはっはっは！…！」

突如笑い出す和馬。

「何が可笑的い…！」

「…くくく」

和馬の焼け焦げた体から傷が消えていく。
擦り傷や、痣、火傷にいたるまで回復していく。

「俺の力を得て、いい気になっている所悪いが、後ろに気をつけた
ほうがいいぜ？」

「何？」

シュツッ！！

由良葉の全力の蹴りが無防備な超越の首筋に入った！

勢い良く飛んでいく超越！

着地するや、由良葉は和馬に迫って問い質した。

「…お前…和馬をどうした…!!？」

「さあな…死んだんじゃないのか？くく…!!」

「まあいい…。今はこの場をどう乗り切るかじゃな…。
気づいているんじゃない？あの男がお前以上の力を持っている事に」

「ふん…元々は俺の力だ。その強さくらい把握しているわ。」

この器の男…我に体を奪われたくない一心で、力をほとんど引き

出さぬから負けることになるんだ。

はじめから全力の力を出していれば、指輪をつけていない、あ奴など瞬殺だと言うのに。

もつとも、それをすれば器は我のものになっていたがな！くつくく
「く」

「…とりあえずだ…ワシは和馬が死んだとは思っておらん。

だからその体を死なすわけにはいかんだ。

ここはワシに協力しろ」

「何を上から物を言うておるのだ？狐風情がこの我に命令するな…
殺すぞ」

「ならば、貴様に協力してやる…。まずは奴を倒すぞ」

「ふん…狐が。何を企んでおるのか知らんが、我はあの指輪が手に
入ればそれでいい」

「ごちゃごちゃと…煩い奴等だ…！」

貴様等まとめてあの世に送ってやるよ…」

這い出てきた超越の目は血走っている。

相当に頭に来ているようだ。

「邪魔だけはするなよ…狐」

「…ふん」

ドンッ！

和馬が飛び出した！

踏み込みと同時に床に大きな穴が開く！

凄まじい力だ。

「！」

バキッ！！

和馬の豪腕が超越の体を壁際まで跳ね飛ばした！

「ぐ！！？」

（は、速すぎる…ッ！瞬間移動が間に合わない…！）

「どうやら貴様は、力をうまくコントロール出来てないようだな。

これは早々に決着だな」

和馬は超越の首根っこを掴み持ち上げると、壁に体ごとめり込ませた！

「ガハッ!!」

「つまらんな…」

かなりのダメージを負ったのか、超越は身動きが取れないでいる。和馬は超越の首から手を放すと、左手の指輪に触れようとした。

その瞬間!

狙っていたかのように、超越の強烈な前蹴りが和馬を跳ね飛ばした。

「…抵抗するだけ無駄だぞ」

「力の使い方か…わかってきたかもな…」

不敵な笑みを浮かべる超越。

第32話 完

NEXT SIGN…

第33話 天才

SIGN 二章 - S e V e N ' s D O A -

第33話 天才

超越と和馬達が戦っている…その時。

地下2階でも戦いは始まるうとしていた。

「…誰だ？」

白凧亜子を気絶させ、トドメを刺そうとしていた瞬間だった。

緋土綾芽と白凧茜が降り立ったのは。

地下1階で勝利を得た緋土京の双子の妹、緋土綾芽。
そしてすでに満身創痍の茜。

対するは指輪を二つ付けた”暴君（Tyrant/タイラント）”。

「亜子！」

「茜さんダメよ」

亜子の方に走り出そうとする茜を止める綾芽。

「解剖(Disssection/ディセクション)」が敗れたか……。
まあいいですよ。あなた達をちゃっちゃと片付けて、下にいったお馬鹿さんを始末にいきます」

「どうやらあなた、見た目によらず…かなりの実力者みたいね。
その指輪…妖魔の力を封じたものでしょ？二つもつけて正気を保てるなんて、
敵ながら天晴れね」

「それはどうも。元々僕は闇に堕ち、それを飲み込んだ人間ですから。
心地よい感情しかありません」

「茜さん…どうですか？
正直二つの指輪を支配している上にもう一つ内なる禍々しい靈気を感じるんですけど」

「…」

茜の顔は曇っている。

「やっぱり見えますか…」

「嘘をついてもしょうがないの…ハッキリ言おう…」

綾芽殿も亜子も私も…三人に”死を告げる刻印”が出とるわ…」

「本気でやるに相応しいってわけですね。久々に燃えるわ」

屈伸を始める綾芽。

「茜さん十分に離れていてくださいね」

「あなたは戦う気満々ですが…後悔はないですか？」

「後悔？」

「多分、あなた死にますよ…？」

今引き返すなら、見逃します…どうですか？」

「うーん…」

「まだ若いんだ…自ら死に急ぐこともないでしょう？」

「なにそれ？神様気取り？」

私の人生は私のものよ。何をするもそれは私自身が決めること。誰にも決める権利なんてないわ」

「はあ…。話し合いは無理のようですね。

わかりました。全力であなたを倒します」

「出来れば少し手を抜いてもらえるとありがたいけどね」

ダッ！

綾芽は真っ向から攻めるのではなく、一番近い、左隅に走った。それは地上に上る梯子のあるほうだ。

「はっ！」

地面に手を付くと気合を込める！

すると掌サイズの輝く円が床に現れた。

円の中には複雑な呪印が刻まれている。

「？…」

暴君は何をしているのかわからず傍観している。

続いて右側へ走り、またしても隅で陣を作る。

暴君は余裕なのか、彼女の行動に何も干渉せずに傍観している。

結局四隅で陣を作り終わると、暴君の正面に立った。
もちろん距離は十分にとっている。

「何のまじりですか？」

「まともにやっても勝てそうにないから、特殊な陣を使わせてもらったわ」

「へえ…それで具体的には何が変わるんですか？」

「んー…試してみようか？」

スッ！

「！」

突如暴君は目の前の綾芽の姿を見失った。

「はぁッ!!!」

ドガッ!!

綾芽の豪拳が暴君の顔面に入った！
勢い良く壁に激突する暴君。

その隙に亜子を救い出すと、茜の元に運んだ。

「茜さん…出来れば上で避難していてください」

「わかった…。すまん綾芽殿」

笑顔で返す綾芽。

「…一体何が起こった？」…そんな顔をしてるわね」

「…何をした…」

「一つ…この陣は一つ一つじゃ効果を発しない。

陣同士を繋げ…面を形作った時、面内に効果を及ぼすもの。

今、この部屋の四隅に陣を作った。つまり、今この部屋全体が私の陣内ということ」

「それで？」

「二つ…この陣内の効果について。
まず第一に、術者に対して治癒効果、身体向上効果、さらに靈気の安定の三大効果を齎す。

さらに加えて、術者の思い通りに陣内の人間に効果を寄与する事も出来るスペシヤル仕様。

第二に、中の邪気を抑える効果。これであなた自身の禍々しい靈気は半減している。

これにより、私の靈気があなたを上回った。

私のスローな動きに意識がいかなくなったことで、それは明白」

「スローな動き…だと？」

「あなたにとっては消えたように感じたかもしれないわね。

靈術において初歩よ？意識を奪うなんてね」

「くつく…まったくなんと言うセンスじゃ。

軽々しく説明しておるが、あれほどの効果を持つ陣を一瞬で生み出すのは、

熟練者でも厳しい。あの小さな陣に複雑な呪印を一瞬で施す…。

天才としか言いようがない…。

意識を奪う術…確かに初歩かもしれんが、口で言うほど簡単なものではない。

まったく未恐ろしい子じゃ…。

だが一安心じゃ…サインが消えとる」

上の階から聞き耳を立てている茜だった。

「…」

暴君は駆け出した！

綾芽ではなく、陣に向かって隅に走り出したのだ！

「消えるッ！！」

ドッガーーン！！

暴君の全力の拳で床を割った！

だが、そんなもので陣が消えるはずもなく。

「残念。たとえ床がなくなっても、その陣は存在し続ける。

そういう風に作ったんだもの。

ちなみに霊気による破壊も今となっては無理」

「…」

「諦めることね。」

私が知りたいのは、あんたたちのボスが何処に居るかってことだ
け。

さっさと答えれば苦しまずに倒してあげる。

悪い条件じゃないでしょう?」

「うおおおおおおおおお!!」

暴君は急に天に向かって吼えた。

「…こんな、こんな所で…終わってたまるかあああッ!!」

綾芽に突進していく暴君! 間合いに入るや否や、拳打や蹴りの乱舞
を放つ!

しかし、綾芽に攻撃が通じるはずもなく、すべてかわされていく!

「はあッ!!」

ドゴッ!!

水月に強力な一打が放たれる!

悶絶する暴君!

「が…が……」

「どつするの？言つたの？言わないの？
次はもっとキツいのイクけど…どつ？」

「フガッ！！」

苦し紛れの拳打！

パシッ！

軽々と受け止められる暴君。

「はあ…！」

ポキッ！！

綾芽は冷静な顔のまま、握った腕を捻り、無造作に骨を折った。

「ぐ…ぐあああッ！」

「うっわー…いったそ…。
あんたもしかしてマゾ？」

「ぶざけるな…！」

「これ以上は…あなたの綺麗な顔が台無しになるけど…
それでもいいの？」

しばしの無言が続いてから、暴君は口を開いた。

「…わかった…言うよ」

「言っちゃうんだ…」

「ボスはここにはいない…すでに聖ヶ丘に出向いている」

「聖ヶ丘の何処？」

「そこまでは聞いてない…」

「そう…。とりあえずここにいっても無駄ってことは理解したわ」

「話したんだ…。もういいだろう…」

「うん」

ドガンッ…！

綾芽は暴君の頭を押さえると、そのまま地面にねじ込んだ。
物凄い力で床が割れるほどだ！

「ごめん…私、ドSだから」

「…そんな…」

ガクッ！

暴君は気絶した。

「さて…状況はまずい方向に進んでるわね…。
さっさと向かわないと…。その前に…」

綾芽は暴君の指輪を二つ回収した。

「よじつと…」

その瞬間だった！

「何…？この感じ？下から…？」

妙な圧迫感を察知した、その瞬間だった。
下から何かが突き上げてくる！
なんと地下2階の床が盛り上がっていく！

「な、なに!？」

ドッガーーンッ!!!

突如起こった爆音爆風!そして凄まじい光!

地下2階は床が崩れ、そのまま地下3階へと落下していった!

「な、なんじゃ…これは…」

地下1階から覗く茜。

下は見るも無残に瓦礫の山になっている。

「はあ…はあ…くそつたねが…」

「くく…いい勝負だ…最高に面白いぞ…」

和馬と超越が瓦礫の上で対峙している。

すでに両者共にかかりの疲弊を強いられているようだ。周りには倒れる由良葉の姿、葵の姿がある。

「いつつ…一体なんだったっていうのよ…？」

「誰だてめえ…！」

和馬のすぐ傍に落下した綾芽は無事だったようだ。

「…なんて禍々しい気なの…？あんたも敵か！？
じゃあ…こっちは…？敵…？…じゃないわね…。一体どういう
状況なの？」

「綾芽殿——ッ！！」

上から茜が呼んでいる。

「うっわ…たっかー…コレどうやって地上に戻るのよ…！
茜さぁー…ん！こいつらどっちが敵ですかぁーっ！」

「ボウズは味方じゃ！」

「え…まじ…？どう見ても敵の顔なんですけど…」

「黙れ人間の女…俺の勝負の邪魔をしたら命がないと思え」

「はぁ？お前、何様だよ？」

「私に意見してんじやないわよ…殺すぞ」

ドンッ！！

超越は飛び出した！

狙いは、和馬ではなく、綾芽！

「！」

「チイツ！！」

ドスッ！！

綾芽に放たれた手刀！

だが、それは綾芽を貫くことはなかった。

和馬が、綾芽の間に一瞬早く飛び込んだからだ。

「ち…馬鹿野郎…ッ！…なんで助けやがった…ッ！！」

和馬がそう口走った。

「助けやがった…って…、助けられたのは私じゃ…」

「そうじゃねえ！！…この器の魂に言ってるんだ…！
完全に消えたと思っていたのに…まだしぶとく生きてやがるとは
な…」

ドサッ

和馬から手刀を抜くと、超越は下がった。
同時に膝から崩れ落ちる和馬。

「おい…！大丈夫か？」

「…大丈夫なわけあるか…心臓付近を貫かれたんだぞ…。
すこしばかり外れていたから助かったが…くそ…回復がはじま
らねえ…」

血がドンドン溢れていく和馬。

「はぁッ！…！」

綾芽はすぐに回復を図る！

「お前…！」

「一応命の恩人だからね…傷口ぐらいは塞いでやるさ」

「…！」

超越は追い討ちをかけず、自身の回復に努めているようだ。

「く…！奴が回復をはじめた…！」

俺に構うんじゃないやねえ…！奴を討て…！そして指輪を取り返せ…！！
そうすればこんな傷、すぐに回復できる…！」

「あんた…やっぱり指輪に閉じ込められていた妖魔の人格なのね…！」

「そうだ…残念な話、人格だけで、力はすべて奴の元にあるんだ…。
頼む！取り返してくれ…！」

「残念だけど、それは飲めないわ。でも心配しないで…奴は私が倒す」

第33話 完

N E X T
S I G N
…

第34話 百紙

SIGN 二章 - SEVEN'S DOA -

第34話 百紙

「私を倒す?…笑えない冗談だな」

「別に冗談じゃないわ。大マジよ。

正直そんな事してる暇はないんだけど、このまま野放しにもできないからね…」

超越(Transcendence)ノトランセンデンス)と対峙する緋土綾芽。

557

「君はボスによく似ているな…まさか血縁者か?」

「認めたくない事実だけど、その通りよ」

フッ!!

「消えた!?!」

「馬鹿後ろだツ!!避ける女ツ!!!!」

和馬の掛け声に素早く反応した綾芽だったが、まともに蹴りを食らってしまった！

吹き飛ばされる綾芽！

「く…ッ！何今の…！初動すら捉えれなかった…！」

「奴はおかしな術を使う！

速さで移動しているんじゃない！空間で移動しているんだ！」

「なにそれ…そんなデタラメな能力が存在するっていつの？」

スパークショット

「雷撃銃！」

綾芽が動揺しているところを狙い、貫通力の高い電撃銃を放つ超越！

「つぶなッ…！」

ギリギリでかわす綾芽。

瓦礫を軽々と貫通している。

「くく…素早いな」

ブンッ！

「だがこれで避けれまい」

超越は綾芽の背後に瞬間移動した！

同時に電撃銃を首筋に狙い定めている。

パンッ！

「ぐはっ!?!」

綾芽は背後も確認せずに裏拳を放った！

拳は見事に超越の鼻筋にヒットした！

顔面を押さえ、後ずさりする超越。

「瞬間移動が怖いのは、こちらの攻撃がかわされる時よ。

攻撃で間合いに入ってくるなら、あなたの性格上後ろからつてのはなんとなくわかった。

もちろんそれ以外だった場合の対応も頭に入れながらの一発よ。
残念でした」

「…まぐれ当りでいい気になるなよッ!」

「別にいい気になんてなってないわ」

「フンッ!」

超越は綾芽に向けて手をかざすと得意の衝撃波を放った!

「!」

予備知識がない、綾芽はもろにその攻撃を受け吹き飛ばされた!
そして、そのまま壁に激突した!

「生意気な女だ…すぐに殺してやる…」

「なによ…これ…!体がいうことを利かない…ッ!」

凄まじい圧力で壁に押し付けられるかのように、綾芽は壁際に張り付いたまま、
身動きが取れないでいる。

「これで好きに撃ち放題だな」

超越は電撃銃の構えを取った。

パシユツ！！

「うああッ…！」

身動きのとれない綾芽の左ももを電撃銃が貫いた。

「くくく！次は何処がいい？」

バシユツ！

答えを待つ事もなく再び放つ超越！

「ああッ…く…！」

次は左腕を電撃銃が貫通した！

「…悪かったな。

聞く前に撃ってしまった」

「…百紙ひゃくし出るッ…！」

綾芽がそう叫ぶと、胸元から人型の紙が飛び出した！
そしてヒラヒラと舞い落ちながら数が1枚から2枚…2枚から3枚
と無数に舞いだした。

「なんだ…？」

「百紙まで使う羽目になるとはね…。

出来れば力は極力温存しておきたかったんだけどね…」

人型の紙は綾芽の前方に静止している。

もちろん綾芽の視界は塞がずにだ。

数にして百の人型。

内、二枚ほどは貫かれた腕と足に巻きついている。

どうやら回復効果と包帯の役割を担っているようだ。

「何かしらんが、その様な薄っぺらい紙に何が防げるんだ？」

バシユバシユツ！！

超越は雷撃銃を乱射した。

綾芽に向かって凄まじい速さで跳ぶ雷撃の矢！

しかし、雷撃が間合いに入るや否や、百紙が盾になり、雷撃銃を無効化した！

「何…？無効化した…だと？」

「ご馳走様」

「馬鹿な…コンクリートをも貫通する電撃銃だぞ…？
そのような紙を貫けぬはずがない！！」

再び電撃銃を乱射するも、結果は同じだ。

「馬鹿な…！」

「馬鹿はあんたよ。」

あんたのその変な能力…恐らく妖魔によるものだと思うけど、
靈気に違いはないでしょ？

この子達は靈撃を無効化するだけでなく、吸収することも、反射
することも出来る。

ちなみにご馳走様って言ったのは吸収させてもらった事を意味し
てる。

この子達が吸収して得た靈力は、もちろん術者である私に還元さ
れる仕組み。

素晴らしいでしょ」

「ならばこれならどうだ？」

超越は両手をかざし、靈氣を高め始めた！
すると巨大な炎の玉が姿を現した。

「あのねー一言忠告してあげる。

紙だから燃えるって発想だと思っけど、それも元は靈氣によるもの。

どんな属性能力でも、この子達の前では無効化されるから。
そのつもりで撃ってねー」

「なめやがって…！！そんなハツタリ誰が信じるか！！
死んで後悔しろッ！！食らえッ！！灼熱の火玉！！！」
バーニングファイア

ドウッ！！

巨大な炎は綾芽に向けて放たれた！

勢いは先ほどの雷撃に比べ劣るが、巨大さはまるで違う！
綾芽の体など、ひと飲みするほどの大きさだ。

「四方より集いて、盾となれ」

綾芽がそういうと、無駄な範囲に散らばっていた百紙を中央に集め、
巨大な盾と変化させた。

ドッガーーンッ！！

「…はは…やった!!」

黒い煙があたりを包む。

そして徐々に煙が消え…現れたのは…

「!…ば、馬鹿な!!」

「だから言ったじゃん」

無傷の緋土綾芽の姿だった。

「私の百紙は半端な攻撃じゃ破れないわよ？
ちなみにもう一つ教えてあげる。

百紙は単なる防御術じゃない…攻撃手段でもあるってことをね」

「何…!？」

「ふふ。百紙よ…その身を刃と成して敵を撃て…。

敵は…あいつだ!」

綾芽がそういうと半分ほどの人型の紙がその姿をナイフのように形

造り、超越に向かって飛び出していった！

「ちいッ！！そのようなこけおどし！！」

超越は飛んで来る百紙に向けて衝撃波を放った！

勢いに負け、押し戻される百紙たち！

「あっはっはっは！やはり紙だな！
無力無力！」

「お、体楽になった！」

綾芽を縛る金縛りが解かれた！

「しまった…術が解けてしまったか！」

「百紙よ！敵を包み込め！」

刃の形状から、正方形のただの紙へと姿を変えると、一斉に超越に向けて飛んでいく！

「だから、何度やっても無駄だと…言っている！！」

再び襲い掛かる百紙に衝撃波を放つ超越！

その瞬間綾芽は叫んだ！

「散ッ！」

すると一斉に百紙は左右へと散開した！

そしてそのままサイドから超越に襲い掛かる！

「ちいッ！！」

ブンッ！

流石の超越も咄嗟のことに対応出来なかったのか瞬間移動でその場を脱した。

「ラッキーーッ！！」

「何！？」

ドガッ！！

綾芽の強力な膝蹴りが超越の顔面に突き刺さる！

どうやら瞬間移動で逃げることを予め予想していたようだ。

綾芽は”散ッ”と叫んだ時にはすでに動き出していた。

ただ、何処に逃げるかまではわからない。

ヤマをはったに過ぎなかったが、運良く狙った場所に現れたというわけだ。

「ぐはっ…！」

「まだまだいくぞ！はぁッ！」

ふらつく超越に対して上段蹴りを放つ綾芽！

ガシッ！

「調子に乗るな…！」

超越は綾芽の蹴りを片手でガッチリとガードすると、そのまま足を
掴み、
地面へ勢い良く叩き付けた！

「くはッ…！」

「はぁ…はぁ…！殺すッ！」

ドガッ!!

倒れる綾芽の顔面を全力で踏み潰そうとする超越。
それをギリギリでかわす綾芽。

「ち…！ちよつと舐めすぎてたか…。

危うく死ぬとこだった…」

「くく…お前を殺す方法がわかった!」

「!…」

(まずいわね…気づかれたか…。

今のやりとりで接近戦がこちらに分がないことに…!

私自身…霊気ですでに強化している…。

にも拘らず、蹴りに反応し、軽々防がれた…。

つまり単純な肉弾戦では勝機はないということだ。

さらにまずい事がある…霊力が残り少なくなってきたということだ。

先の戦いに加え、百紙のコントロール…いくら奴の霊力を吸収したとはいえ、

発動している限り、常に消耗しているわけだからね…。

このままチマチマやっててもラチがあかない…どうする…(」

「いくぞ…!」

「！」

(来た…！考えてる場合じゃない。
使わせてもらっわよ…!!！)「」

ドガンッ！！

「グハアアッ！！」

襲い掛かった超越が逆に吹き飛ばされた。

「残念…でした！」

「な、何故だ…？何処に…こんな力が…はっ！？」

超越は何かに気づいた。

「じゃんじゃじゃーん…これなあんだ？」

綾芽が見せたのは左手だった。

薬指と人差し指には指輪がはまっている。

先ほど亜子と戦っていた暴君から回収したものだ。

「これで勝負は見えたわね。百紙！戻れ！」

綾芽がそういつと綾芽の元に向かいながら、無数の百紙が重なりながら一つになっていく。手元に戻るとそれを胸元にしまった。

「…く…！」

「あなたもわかるでしょ？もう何をやっても無駄ってこと」

「はあッ…！」

超越は衝撃波を放った！

が、1mmも吹き飛ぶ気配がない。

「くう…！！ならばあッ…！」

「なにか？」

涼しい顔で笑みを浮かべる綾芽。
金縛りもなんのその、一步、また一步と超越に近づいていく。

「く、くそつたれ……」

「もう終わりだ」

ドスッ！！

強烈な拳打が超越の水月に突き刺さった。
拳打であると同時に渾身の霊撃。

すでに消耗していた、超越にはかなり堪える一撃だ。

「ぐ……」

「まだ意識があるのか……」

地に蹲る超越は綾芽の足をつかまんと、手を伸ばす。

そして手が足に届きそうになった瞬間。

綾芽は足を上げ、そして勢い良く踏み込んだ！

バキッ！！

「ぎゃあああッ……！！」

超越の左手は骨折したようだ。

そして綾芽は左手を踏んだまま、ゆっくりとかがむと、超越の左手の指輪を外した。

そして、自身の二つの指輪も外した。

「はぁ……疲れた……」

(マジでやばい代物ね……こんなん10分もつけてらんないわ)

「か、かえせ……それを……」

「あなたはもう終わりと言ったはずよ……
眠りなさい!!」

ドガッ!!

背中に放たれた強烈な掌底突き!

「……」

今度こそ本当に沈黙したようだ。

「終わった……」

「女…さっさと指輪を渡せッ…!!」

和馬が立ち上がり、歩み寄ってきた。

「あなた…やれるの？」

「ああ！？何がだ！」

「あんたじゃない…!!…!!」 あなた”に聞いているのよ…ボウズ君

「何を意味のわからない事を言っただが…!!さっさとよこせ!!」

綾芽は無言で和馬の指輪を渡した。

「くくく！素直じゃないか。それでいいんだ!!」

和馬は葵の指輪を外すと、受け取った指輪をはめた。

「これで俺は自由だ!!」

「根性見せなさい!!ボウズ君!!」

「だから、さっきから何を……!? ……なんだ…これは…」

ガタガタと震えだす和馬。

「お、俺は……ボウズ……君じゃ……ねえ…ッ!」

「…」

「俺は…違っッ!…貴様は死ぬ…!…俺に体をよこ…せ…ぐう…!
うあああ…俺は…俺は和馬だ…こんな雑魚に…誰が…体をく
れてやる…か…!」

「負けるな和馬!男だろ!」

「るっせええええええッ!!!!俺は俺だあああああッ!」

その瞬間物凄い光と波動が辺りを包み込んだ。

第34話 完

NEXT SIGN…

第35話 勇気

SIGN 二章 - S E V E N ' S D O A -

第35話 勇気

「…」

「…さて…どっちが勝ったのかしらね」

沈黙したまま立ち尽くす和馬。

それを見守る綾芽。

パキッ！

和馬の指輪が突如割れて、床に落ちた。

「！…やったか！」

「…俺は…一体…」

どつやら正気を取り戻したのは紛れもなく和馬本人のようだ。

「お疲れさん！」

「あ、あんた…！その顔…！」

警戒する和馬。

どつやら記憶が飛んでいるようだ。

「落ち着きなさい。私は京じゃない。
妹の綾芽だ。ボウズ君」

「お、女か…！」

和馬の視線が顔から胸に移動する。

ドガッ！！

「へブシッ…！」

「胸が小さくて悪かったなクソ坊主…！」

綾芽の蹴りが和馬の顔面に突き刺さった！

「お、俺…こんなんばっか…！」

「なるほど…状況は飲み込んだぜ…」

綾芽はこれまでの状況を話して聞かせた。

「とりあえず、いつまでもここにいるのはよろしくないわ。
早いところ聖ヶ丘に戻らないと大変な事になる」

「だな。んで、どうやって上に上がるんだ？」

上を見上げる二人。

10mはあるだろうか。

「待たせたの！」

見上げていると、白風茜が顔を出して言った。

どうやらロープを手に入れてきてくれたようだ。
下まで垂らしてくれている。

「これでなんとかなるな！綾芽だったか…助けてくれてありがとう

な

「別にあなたのためにやったわけじゃないわ。
まだ何の解決にもなっていないしね…馬鹿兄貴にこれ以上好きに
させるものか！」

「うう…」

九鬼葵が目覚めた。

「葵！目が覚めたか！
とりあえず戦いは一区切りだ。これから聖ヶ丘に向かう！」

「何かあったの…？あれ…傷が癒えてる…」

「私が治しておいたわ。葵」

「！…綾芽さん！どうしてここに！？」

「話はあとだ！とにかく上ってくれ！
俺は由良葉を担いで最後に行く！皆は俺たちを待たずに向かって
くれー！」

その頃…

白風家では…

「連絡も来ないし…今出来る事って言ったたら”神谷”さんに会うことよね。」

でも、何処にいるのかわからないし…菅谷さんも戻ってこないのよねー」

その時だった。

ピンポーン！

「！…お祖母ちゃんたちかな！？」

「いや、自宅に帰ってくるのに呼び鈴は鳴らさないだろ？」

菅谷って人じゃないか？」

須藤がつっこみんだ。

「とにかく出てみる！」

優は走って玄関にむかった。

ガチャ

「！…菅谷さん！それに聖先輩たちも！」

聖才雅、不破まりあ、彰人、それに加え菅谷浩介に見慣れない人間が一人。

「えっと…そちらは？」

猫背の男は視線を逸らしながら頭をボリボリとかいている。

「彼がかみちゃん…ほら自己紹介して！」

「えっと…神谷一騎かみや いっきです…25歳無職…引きこもりです…」

えーっと…。

ほんとにこんな人がめっちゃくちゃ強いのかしら？

「…ま、まあ…彼はその人見知りだし、シャイなところあるから。女の子は特に苦手なんだ。勘弁してあげてね優ちゃん」

「菅谷つち…なんかム力つく…帰っちゃおうかな…」

子供かッ！

ますます怪しいわね。

「と、とりあえずこんな所で立ち話もあれですから…
中に入ってください」

『おじゃましてーす』

5人は優に連れられ、皆の待つ客間へ向かった。

「…」

「なんなのよ！この重苦しい雰囲気は！」

黙りこくる面々に優の苛立ちが爆発した！

「と、とりあえず自己紹介をします。」

僕たちは白壁高校の人間で、自分は3年の聖才雅です。
皆さんよろしく」

「私は白壁高校2年、不破まりあです。
で、こっちが弟の彰人」

「白壁校1年！彰人です！姉貴共々よろしく！」

「はは…まさかこんな形で氷女に会うことになるなんてね…」

「それはこっちの台詞よ瀬那。
四天王勢ぞろいなんてね…」

須藤彰、片桐亮、瀬那稔、不破まりあの四人は中学時代地元では有名な不良で、
四天王と呼ばれていた。

「自分は浪人生の菅谷浩介です…一応大学3年生…24歳。
みんなよろしくね」

「神谷一騎です…25歳にもなつて職にもつかず引きこもってる…
そんなダメ野郎ですが…できれば仲良くしてください…」

一同思った。

『暗ッ！！』

もちろん心の中だ。

「かみやん…事情は話した通りだよ。

力を貸して欲しいんだ…！」

彼等の町を…白壁と同じ目には合わせたくないんだ…！」

この気持ち…わかるだろ？」

「…。」

力を貸してあげたいのは山々だけど…僕が直に戦うのは遠慮しないな…。」

僕は生まれつき強い霊気を持ってた…でも肉体的にも運動神経的にも並以下だよ。

正直そこまで恐ろしい連中と渡り合えるとは思えない…！」

「…なあアンタ…逃げるのか？」

「逃げる？」

須藤が突っかった。

「怖いのは皆一緒だ…。」

だけど、皆逃げずに立ち向かっているんだ…何故かわかるか？」

「…。」

「皆守りたいものがあるんだ…。
大切な家族や友達…家やこの街を…！
力があるのに、何もしないで見てみぬふりをするのは逃げだって
言ってるんだ！」

「…守りたいものか…。
僕にはないよ…。この街も僕の街じゃない…。
友達も、家族も…ここにはいない」

「かみやん！」

須藤はため息をついた。

「わかった…もういいよ。
あなたの言う事は確かにごもつともだ。
よそ者のために命張るってのは確かに無茶だわな」

「俺達の街だ…俺達でどうにかしよう」

須藤と片桐が言った。

「…じゃあ…」

神谷が立ち上がり部屋を出ようとした。

「かみやん!! 待てよ!

悔しくないのかよ! こんな事言われて!」

「悔しさ…か。…どうだろうな…。

僕にはそんな感情…はじめからないのかもしれないな。

それとも何処かで失くしたのか…とにかく、今の僕には何も感情がわからない」

神谷が出て行こうとするのを止めようと、菅谷は立ち上がり、回り込んだ。

「そんな事ないよ! かみやん…!

君は僕らがピンチになったら来てくれたじゃないか!」

「それは…彰人君が絶交なんて言うから…」

「違うね! かみやんは本当にどうにもならない時、

本心で助けたいって思ったはずだ! だから危険なのを承知で来てくれた!」

「…」

神谷は黙って俯いた。

「みんな！かみやんは感情表現が上手くないんだ…。
心の中じゃ、どうにかしたいって思ってるんだよ！」

「菅谷さん…。」

私ね、無理やり神谷さんに助けを請うつもりはないんだ。

やっぱり私達の街の事だし、なにより命の危険に晒せないわ」

「優さん…」

優は立ち上がって言った。

「お嬢さん……一つ聞いてもいいかな？」

「…優です。白凧優…。」

「ゆ、優…さん。」

あなたは、自分が死ぬかもしれないのに…誰かのために…。
守るために命を賭けて戦えるのかい？」

「…私には人より少し、戦える力があります…。」

その力で一つでも救えるものがあるなら…たとえ危険だとしても
戦います。

大切なものを守りたいから」

真っ直ぐな目で、神谷の目を見て言った。

「怖いと思ったことはないのかい？」

「ありますよ…いつだって戦う時は怖い…」

でも、何もしないで失うのはもっと怖いわ…」

「そうか…。ありがとう…」

「…!!…なんだ!？」

急に神谷の顔色が変わった。

そして、そのまま部屋を飛び出し、玄関に向かった。

それを見て優たちもそれに続く。

「…」

空を見上げる神谷。

「どうしたんですか？」

「感じるんだ…物凄い邪悪な靈気を…」

こちらに向かってくるよ…」

私には何も感じない…。
他の皆もそうだ。

演技や嘘じゃなさそうだ…表情でわかる。

つまり、この人はかなり広範囲にわたって靈気を感じることが出来るんだ。

「優さん…僕は弱い臆病だ。

危険も嫌だし、痛いのも嫌だ…心も体も弱い。

逃げ癖もついている…。嫌なことから目を逸らし、逃げっぱなしな人生だった。

こんな僕でも変わるなら変わってみたい…。

そして、今がそのチャンスなのかもしれないね」

「神谷さん…」

「かみちゃん！それでこそ俺の親友だよ！

俺も全力でサポートするから頑張ろう！」

菅谷が神谷に抱きついて言った。

「ちょ…離れてください！照れるじゃないですか！」

「優さんありがとう。彼を立ち上がらせてくれて」

「聖さん…。ううん、私は何も。」

きつとあのまま、ここを去っていても、いざと言う時は来てくれたと思います。

多分そういう優しい人なんだと思います」

「ええ。でなければ、僕たちは彼と一緒にいませんよ。」

いざと言う時には男を見せてくれる…。それが彼…。神谷一騎なんです」

「それに須藤先輩がたきつけてくれた部分もあると思いますし…。ね？
須藤先輩」

「お、俺は別に…」

須藤は照れているのかすぐにそっぽを向いた。

神谷は皆を裏庭に集めた。

「これから皆さんを審査します」

「審査…？」

神谷は皆の前に立って言った。

「何者かは判りませんが、こちらに向かってくる邪悪な靈気…
これに対抗し得るか、そしてもう一つ…打開できる可能性を探ら
せてください」

「基本的にどうすればいいんだ？」

「えっと、須藤君でしたね。」

皆さん包み隠さず靈気を全力で発してください」

「それはいいけどよ…どちらにしても戦うつもりだぜ？俺達」

片桐が言った。

「…わかりました。とりあえず靈気を全快にしてください。
時間がありません！どうぞぞー！」

皆は言われるままに靈気を放出した。

「…ふむ…」

しばらく皆を眺める神谷。

「……！……うーむ！」

はい！わかりました！皆さん靈気を抑えてくださって結構です」

皆は靈気を抑えた。

「素晴らしい可能性を持つ人が数名います。

残念ながら時間がないので、その中の二名を今回選ばせてもらいます」

「どついう事ですか？可能性とは？」

「ハッキリ言います。

単純に靈気だけ比べて、邪悪な靈気に太刀打ち出来る人はこの中に一人もいません。僕も含めて」

『……』

全員その一言に驚きを隠せなかった。

第35話 完

NEXT SIGN…

第36話 守護霊転身

SIGN 二章 - S E V E N ' S D O A -

第36話 守護霊転身

「誰も太刀打ち出来ないって…。」

「そこまでの相手なの？」

「はい。あくまで靈気を比べて…という意味ですが」

困惑する優に冷静に答える神谷。

「それでもやるぜ…俺は！

何も出来ないにしろ…ハナからやろうともせず負けを認めるのは俺の性分じゃないんでな！」

「須藤の言う通りだな。俺もそんな事で諦めてたまるか！」

須藤と片桐はかなり熱くなっているようだ。

「落ち着いてください！」

いいですか？冷静に事を運びましょう…。」

皆さんの気持ちは判る…命を賭してでも守りたい。

その気持ちは大切ですが、それでも死者を出すのは好ましくないです。当然ながら！

だから皆さんは別の形で協力してもらいたいんです」

「別の形？」

優が問いかけた。

「まず白壁の件を見る限り、敵は怨霊を街全体に放つでしょう。そうなった場合、各地で対処してもらいたいんですよ。

争いの火種を広げさせないためにも逐次解決していかなければなりません。

その役目を皆さんにやってもらいたいんです」

「確かに：相手は一人じゃない場合もあるし、神谷さんが言った事も一理あるわね」

司が納得しながら言った。

「で、大ボスとは結局誰が戦うツスか？」

「ボウシ君の言う通り、大本のボスがいるわけで。誰が相手をするのか：そこが問題です。

正直霊気だけで判断した場合、皆さん全員に言える事ですが、差が開きすぎています」

皆、表情が曇った。

「ですが、太刀打ち出来るかもしれない。

最初に言った打開できる可能性という奴です」

「この中から二人を選ぶって言ってたわね。
誰と誰なの？」

優が聞いた。

「ずばり…あなたですよ優さん。

そしてツンツン頭の君！」

「私！？…と天城君！？」

「僕が…？」

チヨイチヨイツと驚く二人を前に呼び出す神谷。

「打開策…それは、彼等自身の力というよりも、
彼等に憑いている霊の力を借ります」

「！…守護霊転身の術か！」

「菅谷つち正解！ここには二人だけじゃなく、他にも素晴らしい守護霊を宿している方がいます。で、今回時間も限られてるし、一番やれそうな二人ということで選ばせて頂きました」

「ちょ！ちょっと待って！二人で納得してないで、私達にもわかるように説明してよ！」

優がつつこんだ。

「これは失礼。

僕の能力というか…他の霊能者にはあまり見られない能力が備わって…」

簡単に言々と守護霊を見ること、話すことが出来るんです。

そして、守護霊を守護している人間に一時的に転身させることも出来るのです。

これを守護霊転身と呼んでいます。…まんまナーミングですが…」

「そんな事が出来るんだ…」

守護霊：そんなものが憑いてるなんて今まで考えもしなかった。

私と天城君に…強力な守護霊が憑いている…。

「まあ…出来る人は自分以外見たことはないですが、

世界規模で見たら結構いるかもしれませんがね。とりあえず今はその話は置いておきましょう。守護霊転身を行う際に問題があるんです」

「問題？」

「そう。守護霊は本来陰ながら支える存在。大きな振る舞いは許されないものらしいのです。だから契約をする必要があります」

「契約？」

「はい。守護霊と会話し…お互いに信頼関係を築き…了承を得て初めて力を借りれると言う訳です。ですので交渉次第では無理な場合もあるということは予め理解しておいてください」

「だから二人って言ってたんだ」

「これは大まかな計算で…僕の予想にすぎません。二人以上時間内に可能かもしれないですが、逆に一人しかできないかもしれない。そういう事だとつとと始めましょう！敵は待ってくれないでしょうからね」

「そうね…！皆…ゴメンね。」

皆の思いも一緒に戦うから」

「気にするなよ優！命は賭けるといったけど、何も捨てるための軽々しいもんじゃないことはわかってるつもりだ。」

出来ることをやる！皆もそれでいいだろ？」

須藤の意見に皆頷いた。

「神谷さん…さっきは逃げるとか、失礼なこと言って悪かったな。許してください」

須藤は神谷に対して深く頭を下げた。

「ちょ！やめておくれよ！

僕は気にしていないよ…それに君の言う事は何一つ間違いはなかったんだからね。

頑張ろう。一緒に」

神谷は須藤の肩に手を当てて言った。

「はい…！二人をよろしく願います…！」

「ああ。君たちも…絶対に死ぬんじゃないよ」

無言で頷く須藤。

「敵は南から近づいているようだ。

頼んだよ！万が一ボスと出くわしても、どうにかしようと思わないことだよ！

いいね！」

優と勇、そして神谷の三人を残し、皆神社をあとにした。

「さてと…時間がない。はじめようか」

三人は御堂へと向かった。

「ここいらで、一つ打ち上げるとするかな…漆黒の花火を！」

緋土京はビルの屋上にいた。

京は刀を抜き天に翳した（かざした）。

「くく！なんと重々しい！

地獄谷：その名に相応しく、これまでにない凶悪で禍々しい怨霊どもを集めてくれたわ！！」

天に翳した刃には怨霊の黒い影が蠢いている。

「さあ…打ち上げるぞ…！終焉の幕開けを告げるッ！！

唸れ！！紅囊へにみそれ！！！！」

ドウッ！！

京が叫んだ瞬間、刃から勢いよく巨大な漆黒の波動が解き放たれた！物凄い速さで天に向かい、漆黒の波動が走る！

そして天高く舞い上がった波動は徐々に見えなくなった。

その瞬間！爆発するように一気に四方八方へ漆黒の波動が広がった！

天は黒い霧に覆われていく！

「くく…さあ…襲え！…皆闇を抱え生きている…。」

お前たちの餌はそこ等中にいるぞ…喰え…そして暴れる！！

この世界を闇と狂気に満ちた混沌なる世界に染め上げるッ！！

しょうか？」

「それは無理じゃ…。」

元来守護霊として転じた者の助力を得るには相応の器が必要…。
私の力を得るには、この娘はまだ余りにも若く、そして未熟…。
器ではない」

「…」

(裏を返せば、それだけの力を持ち合わせているという事だ…。
なんとしても力を借りたい…。)

「莉都：あなたが力を貸さなくても…恐らく彼女は戦地に赴くでしょう。」

「さすれば…今の彼女では待つのは死のみ…それでもあなたは構わないとおっしゃるのですか？」

「…殺させはせぬ…。今までも幾度となく死に直面する事態はあった。」

「流石にその時は力を貸さざるを得なかった…この者はまだ死ぬべき時ではないからな…」

「今も似たような事態なのです…莉都…」

「我が本来の力をこの者に貸せば死ぬ可能性が有る以上、その申し出を受けるわけにはいかん。」

「この者にかせられた”天命”を成すためにも…死なすわけにはいかんのだ」

「ですが、このまま戦ったのであれば死は免れません！」

「逃げよ」

「な…！逃げろと！？」

「貴様達ではない…この者を逃がせ…。」

力をつけ…それからでも遅くはないだろう」

「この地を見捨てるというのですか？」

「やむをえん…この者の命には代えられん」

！

優の顔が突如歪んだ。

「！！？…莉都…どうしました？」

「…じゃないわ…よ」

「えっ？」

「勝手な事ぬかしてくれてんじゃないわよ!」

「…莉…都…じゃない…」

「これは優さん自身か…!」

「さっきから聞いてたら…天命だとか逃げるとか…
訳のわからない事言ってるんで助けなさいよ!!
あんた私の守護霊なんですよ!」

『まさかこれほど早く主と接触出来るとは思わなかったな…。
話を聞いていたならば判るだろう。答えは言うまでもなく却下だ』

「却下って…いいわよ!あんたが力を貸さないっていうなら、
私は私として戦ってやる!」

「…?あの、優さん、莉都と会話をしているんですか!?

(僕には声が聞こえていない…。まあ優さんとして喋ってるから当然だけど。

つまり頭の中…というか、なんとはいいかわかりませんが、
とにかく今、彼女は莉都と喋っている…。

こんな事は今まで経験がない…)(

『聞き分けのない困った主じゃ…。

ほんと”王”にそっくり…』

「私の前世が王様だかなんだか知らないけど、
私は私なの!白凧優なの!…私はこの街が好きだ。

「護りたいの！力を貸して！莉都」

『…負けたよ。』

優…君の覚悟を信じよう…力を貸す』

「ありがとう…莉都。感謝するよ！」

『でも…それによつてどんな副作用があつても私は知らないよ？

下手をすれば死ぬかもしれない…それでもいいんだね？

（もちろん、いざという時はこの娘の命を最優先に行動するけどね

…）』

「うん！後のことは後で考える！

今は力がどうしてもいるの！お願い！」

『はあ…本当にわかつてるのかしらね…

でも、あなたを見てると何とかかなりそつな気持ちになる。

不思議なものだ』

「あはは。前向きだかね」

「どうやら優さんのほうで説得できたみたいですね」

心配そうに見守っていた神谷も安堵の表情を浮かべた。

「うん！莉都のOKは貰ったわ！
んでどうするの？」

「あとは私が術を使えばそれで、完全に莉都が優さんの体を操る事になります」

「私の意識はどうなっちゃうの？
やっぱ飛んじやうのかな？」

「それはその人それぞれですね。
守護霊が本人の意識を飛ばしたい場合は飛ばすし、
そうでないならお互いの意識を共有できたりもします」

そういうものなんだ。

「守護霊転身は僕が術をかけない限り出来ません。当たり前ですが。」

「ですが解除は守護霊自身の判断になります。
なので危ないと感じたらすぐに術を解いてくださいね…莉都」

「了解した」

うっわ気持ち悪い！

私が喋ってるのに、思ったことが口から出なかった！

つまり転身してる間はこういう感覚ってことかあ…。

「それじゃあ早速転身を行いましょ」

第36話 完

N E X T
S I G N
…

第37話 最終決戦・開幕

S I G N 二章 - S e V e N ' s D O A -

第37話 最終決戦・開幕

「思ったよりスムーズに契約出来ましたね。

天城君、君のほうもすぐに取り掛かるから、もうしばらく待ってね」

「はい！…優さん、絶対に無理はしないでくださいね。

優さんは一人じゃないんですからね」

「勇君…うん！わかってる」

「それじゃ行きますよ！守護霊…轉身ッ！…」

トンッ！

神谷は優の背後から彼女の背中をポンと軽く押した。

「…！動く…。私の意識で体が動く…」

優から莉都へと意識が変わったようだ。

「莉都、靈気や靈力はあなたの力がそのままリンクされています。ですが、身体能力等は白凧優さん自身のものです。くれぐれもそこを誤らないでくださいね…」

「リンク…？」

ようは靈気や靈力以外はこの娘のままという事でいいのじゃな？
構わんよ、大体の状況はこの娘を通して把握しておるからな。
靈気で圧倒すれば、打ち合う必要もないしな」

『ちよつと莉都！この娘この娘って！』

私は優だつての！ゆ・う！！』

頭の中で優が叫んでいる。

「ふん…なるほど、気味が悪いものじゃな」

『とにかく、急いで！』

優にせかされるまま、莉都は御堂をあとにした。

「…大丈夫かな…彼女」

「きつと大丈夫ですよ！それよりも僕のほうもお願いします！」

神谷さん!」

焦る様子で、神谷に言う勇。

「そつだね。天城君のほうも始めよつ」

南に向けて走る須藤たち。

「!…あれは…!!?
皆!あれ見ろ!」

先頭を走る須藤が天を指差している。

「なんだ…あの黒い雲…」

「あれは…!!
恐らく凄まじいの怨霊だろうな…!白壁の時もそつだった…!」

聖才雅が言った。

「だけど規模は全然違うよ!…あれほど大量じゃなかったもん!」

「彰人の言うとおりね。結構ヤバイかも…!」

神谷さんの言う通りにして正解かもしれないわ」

「皆ちよつと止まって!」

流華が皆を止めた。

「どうしたんだ?」

「あれだけの量よ…チームに分けてバラバラに対処しましょう」

「そうだな。その方が合理的だ…」

「この場合霊撃が出来る面子が一人でもいないとまずいな」

今この場所にいるのは

鹿子流華、夕見司、須藤彰、片桐亮、瀬那稔、日下部新一、岡島大樹、椎名一、

菅谷浩介、聖才雅、不破まりあ、不破彰人、それに加えてシロとポチがいる。

「12人と…2匹か…」

『匹っていうな!』

シロとポチが言った。

「このうち…霊撃が使えないのは…俺、片桐、新二と大樹、それに
一もか…」

こんな時に力になれない人間がこんなにいるのかよ…」

「須藤、今ここで後悔してる場合じゃないだろ。」

「今やるべきことを出来る範囲でやろうぜ」

「瀬那…。そうだな…!」

それに戦ってる間に何か掴めるかもしれないしな!」

「だな。前向きに考えようぜ!

ネガティブ思考じゃ怨霊に取り憑かれちまうかもしれないしな!」

片桐が冗談めかして言った。

「ともかく、何人にわかるかですわね…」

私はポチとシロと動きますわ。だから他の面子は結構よ」

「俺は新二と大樹と一の4人で動くッス」

司と瀬那が言った。

「瀬那君、君のチームに菅谷さんを入れてください。

これで大分違うはずだ。

「まりあ君は昔馴染みということもあるし、須藤君と片桐君と一緒に行動してくれ。」

「彰人君は鹿子さんと組んでくれ。」

「私は一人で大丈夫よ。そこまでヤワじゃないのでね。」

「わ！つれないっすね…俺嫌われてるのかな…」

流華の一言にショックを受ける彰人。

「んー…困ったなあ…出来れば単独行動は控えて欲しいんだけど。」

「そういうあなたは一人の計算になってるじゃない？」

「聖先輩？」

流華がつっこんだ。

「僕かい？僕は大丈夫だから。」

「なら私だつて大丈夫よ」

モメだす二人。

「あーもう！いいじゃねえか！

流華は一人でいいって言ってるんだろ！？
任せようぜ先輩！言い合ってる時間がもつたいない！」

「仕方ありませんね…。じゃあ僕と鹿子さんは単独で動きます。

彰人君…君はどうします？」

「ど、どうしますって…俺一人はちょっとキツいんですけど…」

「…私を見ないで。私は一人で十分！」

彰人は見事に見捨てられてしまった。

「彰人君…君も男だ！大丈夫！

一人できつと上手くやれる！」

「ちょ！先輩！？本気で言ってるの！？」

ポンスと肩に手を当てて真顔で言う才雅。

「彰人！あんたも男ならキチつと決めるところは決めなさい！」

「姉貴まで…！うう…いいもん！！やってやるっつーの…！」

彰人は開き直ってしまったようだ。

「とにかくにもこれでもこれでチームはバラけたな。

Aチームは司・シロ・ポチ。

Bチームは瀬那・新一・大樹・一・それに菅谷さん。

Cチームは俺・片桐・まりあ。

Dチーム…チームと言っていていいかわかんないけど流華の単独チーム。

Eも同じく単独で聖先輩。

最後にFで彰人の単独チーム。

こんな所だな」

「チームは決まったが、バラけかたはどうする？
皆同じ方向に行っても仕方ないだろ？」

瀬那が質問した。

「とりあえず、被害状況を見て判断しよう。
被害が拡大しそうな所から先に潰していく方がいい」

聖才雅の指示に皆頷いた。

「最後に一つ言わせてくれ。
みんな生きてまた会おう。
犠牲の上の勝利は…心から喜べない…。
だから絶対に無理をしないでくれ。
いいね？」

聖の言葉に皆無言で頷いた。

「それじゃあ行こう！」

皆、とりあえず漆黒の雲の中心地へ向かい走り出した。

その頃白風神社では…

「…」

勇は目を閉じ、正座をしている。

「…なかなか問いかけに答えませんね…。
見た感じ、それほど頑固には見えなかったのですが…」

「…ダメなんでしょうか？
僕に問題があるなら言ってください！」

「いえ、大丈夫ですから落ち着いてください…。

（なんだ…？何か違和感を覚える…。

交渉自体がなかなか進まないのは、むしろよくある事。

それよりも気になるのは、初めて彼の守護霊を目にした時、上手くいくように感じたのに

今ではそのような雰囲気がるでない…。

こんな妙な感覚は今まで感じたことがない…）」

神谷にしか守護霊の表情はつかめない。

神谷の目前にいる霊は酷くもどかしい表情をしている。

「どうしたんです…？何か言いたいのですか？」

「…」

神谷は問いかける。

「何か訴えたい事があるならば、言ってください。」

出来る限り力になってみますよ？」

「…我の名は戒^{かい}」

「!…（しゃべった…）」

「すまない…このような経験がないので…少し戸惑っていた…」

「そう…ですか。」

いえ、いいんです。戒…あなたの力を借りたいのです」

「話は大体聞いていた…。大変な事態のようですね…。」

我で力になれるならば力をたくしましよう」

「…」

（一転して素直な反応だ…。）

本当に単に戸惑っていただけだったのか…？）

「神谷殿…確かそうだったかな？」

「はい…神谷です。何か？」

「いや、不穏な気配が濃く感じられておりますので…」

出来れば早々に解放願いたい…この地を護るために」

「そうですね。わかりました。」

「急ぎましょう！それでは一度彼に…天城君に代わってください
(やはり単なる僕の杞憂にすぎないか…)」

「…………あれ？意識が…………」

「ちゃんと交信出来ましたよ。」

「君の守護霊…戒といます」

「どうやら会話中の意識が優と違い残っていないようだ。」

「戒…それが僕の守護霊…………！」

「で、どうだったんですか！？協力してくれるんですか！？？」

「お、落ち着いて！大丈夫！」

「彼も君に協力的だよ」

「よかった…戒さん…ありがとうございます！」

『…………』

「…………って、返事がないや…優さんと違って、彼は僕に心を開いていないのかな？」

「彼、すごい照れ屋っぽいから、そのせいかもね。」

とりあえず、急いでるんだよね？早速やろう」

「ですね！お願いします！」

勇と神谷は立ち上がり、勇は神谷に背を向けた。

そして、神谷は勇の背にポンと手を当てる。

「いきますよッ！守護霊…！転身ッ…！」

そう言いながらトンと軽く背を押し出した。

「！……」

戒はおもむろに手を握ったり閉じたりして、感覚を確かめている。

「気分はいかがですか？」

「素晴らしい…！」

「優さんを…この地をよろしくお願いします」

「うむ…我に全て任せておけ」

ニヤツと笑う戒。

「一応言っておきますが…」

神谷が喋ろうとした瞬間、戒は神谷の口元に人差し指を持っていった。

『それ以上は言わなくていい』

そついう意味合いだろう。

軽く頷くと、神谷も答えるように頷いた。

そしてそのまま御堂を飛び出していった。

「これで戦力としては五分になったかな…」

僕はどうするか…このまま戦うか…ガラにもなく熱くなってる自分がいるな…。

いつからだろうな…こんな想いを失くしてしまったのは…」

とある闇医者者の病室

「ひひ…殺す…！
あいつ等殺してやる…」

病室で目覚める”恐怖（Fear/ファイア）”。
その恨みの念が狂気を呼び覚ます。

そして狂気は膨れ上がり、動かぬ体をも動かそうとしていた。

パリンッ！！

病室の窓を破り、2階から飛び降りた少女・恐怖。
戦闘態勢万全といったところだ。

「ひひ…あっちだ…！
あっちからいい匂いがする…血の匂いだ…！ひひッ…！」

恐怖は駆け出した！

その頃優は…

物凄い速さで屋根伝いに走っていた。

「ふむ…かなり濃い瘴気だ。

あれに触れたら、普通の人間など間をおかずして狂気に支配されるだろうな」

『涼しい顔で言っていないで！

元凶を探しなさい！多分あの黒い雲の中心にいるわ！』

「まあそこから、格段に大きい靈気を感じるから間違いはないじゃろうな」

急いで…！

出来れば被害は出したくない！

お祖母ちゃんたちも気がかりだけど、きっと大丈夫よね…！

第37話
完

N
E
X
T

S
I
G
N
…

第38話 対峙

S I G N 二 章 - S e v e n ' s D O A -

第38話 対峙

「…優、この上空が一番瘴気が強い…。
だが、少々高いな。どうやって上ればよい？」

『ビルの屋上か…。』

とりあえずその入り口から入って、階段を上って行って！』

先に向かった須藤達をあっという間に追い抜き、漆黒の雲の中心地にやってきた優。

体を操る莉都に頭の中から指示を与えている。

急いでビルを駆け上がる優。

『ここ、普通にオフィスビルじゃない…！
しかも10階もあるわね…』

「おふいす？なんじゃそれは。
とりあえず一番上に行けばいいのだろう？」

ビュンッ！

身体能力は優自身のままだが、霊力で身体能力をある程度強化しているのか、

普段とは比べ物にならない動きだ。

『…こんなフルで動いて…』

絶対筋肉痛間違いないわね…』

「細かいことを気にするな。

今は一大事なのだろう？筋肉痛くらいで済むなら安いものじゃ」

笑っていう莉都。

626

あなたは元に戻るからそれでいいけど、私はあの痛みと格闘だつての！

まったく…。

でも、あっという間に屋上まで着いたわね。

屋上へ出るドアまで来ると、ドアノブを回した。

ガチャ！

「む…？開かぬぞ？」

『鍵が掛かっているの?…んー無理やりこじ開けられない?』

「いいのか?出来ない事はないぞ」

『んじゃやっちゃって!バレないバレない!』

「大事の前の小事か…その策乗ったぞ」

ニヤツと笑って言う莉都。

ガチャン!

物凄い握力でドアノブを引きちぎった!

そしてドアを思い切り蹴り飛ばした。

勢い良くドアが破れた…その瞬間だった。

「…!?!」

突如目に飛び込んでくる物凄い光!

ドッガー——————ン!!!!!!

突如あたり一面を吹き飛ばすほどの爆発が起こった！

「くくく…」

緋土京の放った波動だった。

爆煙が巻き起こる。

屋上へ続く階段が瓦礫で閉ざされている。

「…随分と手洗い挨拶じゃな」

「！……ほう」

爆煙から無傷で現れた優。

「おい、優…この者が主の敵で間違いないのか？」

『ええ。間違いないわ！やっと見つけた…！』

「何をしたのか判らないが、しばらく見ないうちに随分と靈気を上げたじゃないか」

「なるほど…私の靈気を感じて待ち伏せていたというわけか」

「ああ。君ほどの強い靈気を見逃すはずもないだろう。ここに迫ってきてるのは十分に把握していた…。話は変わるが、場所を変えないか？今の爆発でギャラリーが集まってくる。どうせやりあうなら、邪魔されたくないからね」

「…と、言っているがいいか？」

『ええ。出来れば周りに人がいない所を選んで』

「人がいない所が望ましい」

「まあ、お互いそっちのほうがいいだろうな。ついてこい」

そう言つとビルの端に移動する京。

「?…何をする気じゃ？」

「ふふ…」

バツ！

京はなんと両腕を広げビルから飛び降りた！

「な!!!?!」

「くく…さあ…付いて来い…霊王の一族よ!」

なんと飛び降りた京は空を舞っている!

「成る程な…」

『な、何が成る程なのよ!!
空を飛んでるのよ!?!ありえない!』

「主の目は節穴か…よく見てみよ。
奴は霊気の翼を用いて飛んでいる」

『え…』

優は莉都を通してじっと京を見つめた。

『!…ほんとだ!背にうつすら翼が…見える!』

「あれも霊王の血を引き継いでおるようだな…。
”気”の質でわかるわ…。そして”あれ”はおそらく、
何処ぞの妖魔の能力の一つだろうな」

『そんな事まで可能なの…!?!』

「くく!…笑わせるのう」

莉都が笑い出した。

『な、何が可笑しいのよ!』

「あのような妖術紛いに頼らずとも、
靈気の手で空を舞う事くらい私にも出来るわ」

そう言うと莉都までピルの端に移動した。

『じよ…冗談でしょ…?ね…ねえ…やめよう?ね?』

「何を恐れている?私を信じろ優。
行くぞ!」

バツ!

優の静止を振り切って、空に飛び出す莉都!

『ぎゃあああああああああああああああ!…!』

馬鹿女ああああ！！！！！』

「頭の中でぎゃあぎゃあ騒ぐな！

集中力が乱れるじゃろ！…く！はああッ！」

暫く落下した頃、ようやくその身が浮き上がった。

「…！…まさか、飛べるとはな…」

後ろを振り返り驚く京。

『あ、あんた…なんで飛べてるのよ！？

それよりも、寿命が10年は縮んだわよ！どうしてくれるのよ！』

「ははは！大丈夫、そのくらいで済んだならよいことではないか」

『ははは！…じゃない！

でも、どうして空飛べるのよ…未だに信じられない』

「2000年ほど前…我等の時代では、そう珍しい事ではなかったがな…」。

そうか、今ではそついった技術は鎖されておるのか」

優の体が徐々に降下を始めた。

『え？どうしたの？』

「ずーっと空など飛べる訳がなかつ。

鳥ではないのだから。あくまでも自身の靈氣と大氣の靈氣との絶妙な調整からなる妙技。

長時間空に留まるには、かなりの靈氣操作能力に加え靈氣、靈力とも絶對量が

かなり必要になる」

『むう！なんか悔しい』

「ふん、駆け足なら負けはせんさー！」

確かに走りでも十分京についていている。

『何処まで行くのかな…まさか…

これって…』

「どづした？」

『うつん…緒斗の森って靈地があるんだけど、進行方向がそつちの方角なんだ。もしかして…と思って』

「ほう…そこは人氣が少ないのか？」

『朔夜の一件以来行ってないけど、元よりの”噂”もあるから…多分人氣はないと思うよ。それに、もう日も沈み始めたし』

「うむ…そうか。」

何にしても、今のうちから奴との戦いの対策を練らねばな」

『対策？』

「…思った以上に厄介かもしれん」

莉都の表情が険しくなった。

『どづいづいと？』

「今、奴から感じる靈氣は参考にならんという事だ」

『え？…どづいづいという意味？詳しく話してよ』

「奴は靈王の眼を持っておるじゃろ？それは知っているだろう」

『ええ。同じ靈王眼を持つてるわよ』

「で、問題は奴の属性は靈王化身という事じゃ」

『靈王化身…？』

はっ！！

思い出した…。

以前お祖母ちゃんが話してくれた…。

『ついでだから5家のどれがどの能力に特化しているか教えてやろう。』

西部・飛鳥の緋土家…これは5つ目の”身体能力、靈能力を大幅に上昇させる能力”に特化してある。

中央部・暁の草馬家…これは4つ目の”他人の靈力を回復させる能力”に特化してある。

北部・奥里の九鬼家…これは3つ目の”靈を封印する靈氣の刃を操る能力”に特化してある。

南部・天玖の相良家…これは2つ目の”靈の能力を吸収し…自分ものにする能力”に特化してある』

『身体能力…霊能力を大幅に上昇させる能力に特化している…。
確かそんな能力よね?』

「そう…霊王化身に特化した奴の実力はあの程度に収まらないじゃろっな…。」

まず身体能力で奴を上回るのは厳しいじゃろう。
だとすれば骨を切らせ、肉を断つ意外にないだろうな…。」

『一発逆転を狙うってことね…』

「まあ、そうなる事は覚悟したほうがいいな。
主の力が上手く覚醒すれば、あるいは…。」

『え?今なんて?』

「いや、なんでもない」

ブブブ…

「あ…」

『何、脈絡もなく卑猥な声出してるよアンタ!』

「う、煩い！急にモゾモゾとしたのじゃ！」

ゴソゴソと胸元をまさぐる莉都。

「なんじゃこれは？」

『！…携帯！着信かも！莉都！開いてみて！』

「ひ、開く！？どうやるんじゃ！」

『ええい！不便だなくそ！パカッとやんのよ！パカッと！』

パカッ！

「うお…光っておるぞ！ブルブルしておる！
どうにかせい！」

『一番左のボタン！じゃ…通じないか、ボタンって日本語でなんて
いうのよ…もう！』

えーっと…とにかく左のぼっちを押すの！』

「い、一番左のぼっちか…よし待っておれ」

ポチッ！

『OK！やるじゃない！』

『もしもし優かい！？』

「こ、声が聞こえるぞ！」

『電話なんだから当たり前でしょ！全く何年守護霊やってんのよ！』

「ふ、普段は寝ておるんじゃ……」

『優！？何をぶつぶついつておるんじゃ！』

電話の相手はどうかやら祖母の茜のようだ。

『転身の術を解いたら不味いわよね……。』

とりあえず、莉都！これだけ伝えて！

私は今、緋土京を追って、緒斗の森に向かっている！』

「私は今、緋土京を追って、緒斗の森に向かっている」

『なんじゃと！？優！やめるのじゃ！』

相手はお主程度で勝てる相手ではない!』

「…それは百も承知じゃ!それに…私とて、優を死なすわけにはいかん!

しかし、この娘は本気なのだ…」

『!?!?…優……どうしたのじゃ?』

「主が優の何かはわからぬが、私の命に賭けてもこの娘を護ることを誓おう。

それが守護霊である莉都の勤め」

『!?!?…守護霊……?まさか…転身しておるのか!?!』

「うむ。我は今、神谷という男に力を借り、優の肉体を借りて現世に戻っておる。

敵の男と自身の力を測った結果…恐らく勝負は五分五分か…もしくは分が悪いかもしれん」

『…莉都といったか…優を、孫をよろしく頼む…。

くれぐれも…死なせないでください…。

まだ齡16の小娘じゃ…死ぬには早すぎる…』

「承知した。必ず生きて戻る…優の祖母殿よ…」

『莉都!お祖母ちゃんに私は大丈夫って伝えて!』

「お祖母ちゃん、私は大丈夫！そう言っておるよ…祖母殿」

『さようか…こちらも皆無事という事と、
すぐにそちらに向かつと伝えてくだされ』

「優、祖母殿が皆無事だと言っておるぞ。

それとすぐにこちらに向かつてくれるそうじゃ」

『そっか…うん！よかった！
皆無事でよかった！』

ツーツー！

「ぬ？突然声が途絶えたぞ？」

『電波の状態が悪いのかも。
でも伝えたいことは伝えたいし、よかったわ！』

「うむ…お、いつの間にか人気の少ない道に入ったな」

辺りに民家が見えなくなり、自然が目立つようになってきた。

緒斗の森が遠くに見える。

「さて…どう戦つか…じゃな」

第38話 完

NEXT
SIGN…

第39話 雪月花 前編

S I G N 二章 - S e V e N ' s D O A -

第39話 雪月花 前編

森が見えている。
緒斗の森だ。

相変わらず人を寄せ付けぬ、ただならない雰囲気をかもし出している。

朔夜がいなくなり、徐々に瘴気は薄まったはずだが、まだ完全に元の森に戻ったわけではなさそうだ。

「優、奴が降り始めたぞ」

『そつみたいね。あそこでやるつっていうのね…!』

莉都は急いだ。

約5分ほどで森の中に入り、木々から開けた場所に出た。中央に不敵な笑みで立つ京が見える。

「よくついて来れたね。まずその点は誉めておこう」

「別に大した事ではないじゃろう。
それにしても、月明かりか。
森に入ったときは暗中での戦になるかと思ったが」

「俺はどちらでも構わないよ？
好きに隠れて奇襲するなり、罾を張るなりしても一向に構わない」

「余裕か。
じゃが、生憎その様な回りくどいやり方は好まん」

『でも、実際問題有利に戦った方がいいんじゃないの？』

「小細工は無駄だろうな…恐らく。
あの自信はそれに裏づけされておるんじゃない」

「ずっと違和感を感じていたんだが…。
君は”君”じゃないな？…別人格のように感じるが…霊でも憑いているのか？」

「まあそんなとこだよ」

「成る程。これで合点がいったよ。
急激な靈気の成長はそのせいか…。
で、今更だが戦うんだね？」

『莉都…ここからは私がこいつと話す。
だから私の言葉をそのまま伝えて欲しいの』

「わかった」

「あなたとは戦うわ。緋土京」

「そうか。所詮お前も下劣な人間の一人というわけだ。白凧優」

「あなたは一体何の目的で、あんな残忍な事をしでかしたの？
久木に何の恨みがあるのよ！」

「恨み…？勘違いするな。」

俺はこの地に特別な感情などない。

俺の目的は全人類を狂気の元、殺し合わせ…そして愚かなる人間
という種の血で

この星を染め上げる…それが全て！

この地は、その足がかりにすぎない」

「狂ってる…そんな事をして何になるの！？」

あなたはそれで生き残って…一人でこの世界に生きるといふの？」

「いや、全てが終わったら、汚らわしい人間の最後の一人として、
自ら命を絶つつもりさ」

「!…意味がわかんない!

一体誰がそれで得をするっていつのよ!？」

「少なくともこの星はそれにより救われるだろうな。

だが、俺は損得など頭にはない。

この星のために動いているわけでもない。

俺は人間が嫌いだ。それだけだ。

そもそも、人間など滅ぶべき呪われた種だと思わないか？」

『なん…ですって?』

「…」

「弱者を虐げ、殺し、喰い。

自然を壊し…この星をまるで自分の所有物のように好き放題弄くりまわす。

他の種からみても、人間はさぞ迷惑な存在だろうな」

「それは…」

「それは…何かな?仕方ないと?…くく。

まあ…もつとも、先に述べた様な愚行は俺自身もしていることだし、

そもそも、この世界の勝手なルールを作った先人共の問題であり、今を生きる人間にそれをどうこう言うのもおかしい話だ」

「…?結局何が言いたいの?」

「つまり一言で言えば”弱肉強食”ということだ。人間という種が余りにも強い…それ故に喰われ様が、壊されようが、

それが自然の摂理というわけだ。

ならば…この俺という種が、人間の上に立ち…滅ぼしてやると言っているんだよ。

この世界のくだらないルールに則ったやり方だろ？

強者が支配し、弱者は…ただただ強者に付き従うのみ…」

「ふざけるな！」

「誰もふざけてはいないがね。

まあ、君が思うとおり…理由なんてどうでもいいんだ。

先ほど言った事も単なる理由付けにすぎない。

俺は人間が嫌いだ。だから滅ぼす。

これが一番シンプルで判りやすい」

「お前の勝手な感情で滅ぼされる側はたまったものじゃない！

皆、一人一人…生きてるんだよ！

辛い現実の中でも、ささやかな幸せに縋って、生きてるんだよ！

お前にその人たちの幸せを…人生を奪う権利なんてあるのか！？」

「ないだろうな。

だが、そんなもの関係がない。

俺にとって他人とは家畜同然だ。

お前は家畜の将来や幸せを考えて生きているのか？」

ダメだ…こいつ。
完全に狂っている。

「どうしても人間を滅ぼす気にいるなら…戦う他ないわね…！」

「元よりそのつもりさ。理解など求めていない。
君の説得で傾くような人間らしい心は俺にはないんでね」

「戦う前に一つ聞かせてくれない？
なんであなたはそんな風になったのか…」

「…。
いいだろう。冥土の土産に聞かせてやるよ」

あれは6年前…高校3年の冬だった。

「京くん…！」

「…！…那由多か…？走ると滑るぞ」

雪の舞い散る通学路。

白い息を吐きながら彼女は駆けて来た。

「一緒に学校行こっ！」

「…ああ」

桂木那由多…同じ高校に通う幼馴染。

いつも、俺の後ろを追ってくる…そんな娘だった。

「今日も寒いね！」

「雪が降ってるからな」

俺はその頃、家のごたごたでかなり気を病んでいた。
そんな沈んだ心を癒してくれる存在が彼女だった。

「キャッ！」

雪道に足をとられ転ぶ那由多。

「…相変わらずドジな奴だな。

ホラ…手」

「…ありがとう…」

彼女のこの笑顔が好きだった。

ある日…

緋土家

「実際問題どうなんだ…京の奴は」

「あれはダメですな。才能が全くと言っていいほどない。
妹の綾芽は打って変わって天才だというのに…」

また聞こえてくる。

無能な俺と、天才の妹…それを天秤にかけ、かわされる会話。

「なんでよりもよって無能な京に靈王の力が授かってしまったの
か…」

他の4家に顔向け出来んよ」

「綾芽に能力が受け継がればよかったのに」

それは俺もそう思う。

こんな中途半端な俺に、なんでこんな能力を与えたんだ…。

いらぬ…俺には必要ないんだ…こんな力。

俺は今まで幾度となく自分の力を呪った。

なぜ俺なんだ？

なぜ…綾芽じゃないんだ。

もちろん最初は親や祖父たちのためにも血の滲む努力をした。だが、圧倒的に才能がない俺は、どんなに努力しても報われる事はなかった。

綾芽がいたことで、それはより一層にそう思うようになった。

俺が血の滲むような努力の果てに習得した力も、妹にとってはあっさりとなってしまう。

そして評価されるのはいつだって妹だ。

俺は…

俺は一生この敗北感を味わって生きていかなければならないのか…。

俺は呪った。

何度もこの現実が受け入れられずに逃げた。

家を飛び出しては近くの山の小さな湖で一人…時を過ごした。

音の無い…

この自然が俺の悲しみを紛らわせてくれたから。

走り去る俺をいつも妹は、哀れむような表情で見ている。

「兄さん…」

去り際にかすかに俺を呼ぶ声…。

妹は悪くないんだ…あいつはいつだって偉ぶったりしないで俺を気遣っていた。

それなのに、俺は…そんなあいつが憎かった。

羨ましくて疎ましくて…。

…あの日も、俺は家が嫌で飛び出していた。

雪が深々と降りつもっている…闇夜を必死に走っていた。

そして気づけば、いつもの湖に来ていた。

夜空には綺麗な三日月と星々が辺りを照らしていた。

「…」

俺は降り積もる雪の中に寝転んで、夜空を眺めていた。
何もかも忘れたかった。

家のことも…妹のことも…。

そんな中、頭に浮かんだのは那由多の顔だった。

すると不思議と、彼女の声が聞こえてくるような気がした。

『京くん!』

と、いつものように俺の名を呼んで駆けて来る彼女が思い浮かんだ。

「…くん…！」

「!？」

空耳なんかじゃない。

確かに聞こえる…彼女の声だ。

俺は起き上がると、来た道を振り返った。

「…なんで…」

見ると遠くに彼女の走る姿があった。

「那由多…！走ると…」

転ぶぞ！

そう叫ぼうとした瞬間、彼女はお約束のように転んだ。

「ぶっ…あはははは…！」

なんだろう……。
心が暖かい……。

「……！」

俺の頬に涙が伝っていた。
俺はすぐに目をゴシゴシとぬぐった。

人前で涙を流したことなど今までなかった。
だから余計に恥ずかしくて……。

「京くん！さっき転んだ時笑ってたでしょ！
まったく！……どうかしたの？」

目をこする俺を心配するように彼女が覗き込んでくる。
俺はすぐに彼女に背を向けた。

「な、なんでもないよ。
ちよっと……ゴミが入ってさ」

「……」

「まったく…お前が笑わせるからだぞ…」

「…」

ギュッ

「…！」

彼女が俺の背を抱いてくれた。

「泣いていいよ。」

私の前で…強がらなくてもいいんだからね」

その一言で堰を切ったように涙が溢れてきた。

「…ありがとう…。」

「ありがとう…那由多…。」

「…。」

しばらくして、俺は落ち着きを取り戻した。
彼女は湖を見ると言って先に駆け出した。

「綺麗だね京君！見てみて！お月様が湖面に浮かんでるよ！」

「ああ…綺麗だ」

この時間が止まればいいのに…。
そう思った。

二人は湖の前に腰をかけた。

「どうして…ここがわかったんだ？」

「綾芽ちゃんがね…教えてくれたんだ」

「綾芽が…？」

「うん。でもこの事は内緒だよ？
口止めされてるんだから」

あいつはあいつなりに…心配してくれてたんだな。

「悪かったな…こんな時間に…怒られるんじゃないか？」

「かもね。でもいいんだ！」

こんな綺麗な景色、今しか見れないし…

それに、京君が元気になったのなら、それでいいよ

「…那由多…」

「…色々さ、皆…色々抱えて生きてるんだよね…」。

京君も辛いかもしれないけど…綾芽ちゃんも一緒だと思うよ

…。

そっくだよな…。

俺だけが不幸みたいなの…そうじゃないんだよね。
多かれ少なかれ…皆背負ってるんだ…。

那由多も…綾芽も…。

「俺…もう少し頑張ってみるよ」

「うん！…愚痴ならいつでも言っただけね。」

私の前では素直でいてね」

ありがとう…君は俺にとって…

唯一の救いだ…。

第39話 完

N E X T
S I G N
…

第40話 雪月花 後編

SIGN 二章 - S E V E N · S D O A -

第40話 雪月花 後編

…ガサツ！

「！…」

「どづかしたの？」

湖面のそばに座る京と那由多。
突然の物音に京は辺りの木々に目を向ける。

「いや…何か気配のようなものを感じて…」

「？…」

「なんでもない。気のせいだ」

「…」

ギョッ

那由多が俺の手を握った。

「な、那由多…?」

ガサガサッ

『!?!?』

確かに聞こえた。

茂みに何かがいるようだ。

俺と那由多は立ち上がり、少し警戒をした。

凶暴な獣が出るような山ではないが、時間も時間だったので恐怖を感じた。

「那由多…そろそろ帰ろう。」

もう遅いし、送っていくよ。おじさんとおばさんには俺がちゃんと説明して謝るから」

「うん…」

「あ…！」「めん！」

俺は恥ずかしくなって彼女の手を離した。
そして少し前を走っていったんだ。

いつものように彼女に追われたくて。

「那由多ー！早く来いよー！」

「もう！京君の馬鹿…！」

「あはは…！」

「京君」

遠くで彼女は立ち止まったまま俺の名を叫んだ。

「ん？どうしたんだよ？」

「あのね…」

その瞬間だった。

ガサガサッ！！

黒い影が突如茂みから飛び出してきた。

そして、すぐ傍の那由多に飛び掛ったのだ。

「！」

「那由多あああッ！！！！」

俺は急いで彼女に駆け寄った。

謎の黒い影に襲われた彼女は何かに突き刺されたのか、左胸に傷が出来ていた。

そしてかなりの出血をしていた。

先ほどまで月明かりに照らされていた白銀の道は、朱に染まっている。

「那由多…那由多…ッ…おい！起きてくれよ！！
うっ…」

彼女の血を止めようと、必死に傷口を押さえた。

しかし、無常にも暖かい彼女の血はあふれ出てくるばかりだった。

「きよ…京…くん」

震える彼女の手は必死に血を止めようとする俺の手に触れた。
冷たい…。

さっき触れた彼女の手は冬の空気に触れて…冷たかった。
でも今は別の冷たさを感じた。

「那由多…！しっかり！」

俺は彼女の震える手を両手で掴んだ。

「京…くん…」。

あのね…」

「もう喋るな…！那由多…！」

「ずっと…京…君の…事ね…。
好き…だったんだ…よ…」

「…」

「…ごめん…ね…」。

京……君……泣かし……ちゃった……ね……」

彼女は震える手を俺の頬に当てて言った。

「……もういいから……」。

那由多……お前の気持ち……わかったから……」

俺は彼女の体を思い切り抱きしめた。

「あり……がと……う……」。

私………幸せだな………ゴホッ……はあ………はあ………」

「那由多……！？……那由多しっかりしろッ！

やだよ……俺を置いていかないでくれよ……！

俺はお前がいないと……那由多……！那由多………」

「……今まで………あり……がと………う……」

楽しか………ったよ………」

「那由多……？………おい……那由多………」

彼女から力が抜けていくのが痛いほど伝わってきた。

「ごめんよ……俺のせいで……。」

俺がここに来たせいで……お前を……こんな……。

うう……那由多……馬鹿だ俺は……那由多あああああッ！

「！」

「……」

俺は彼女と最初で最後の口づけをかわした。

彼女の血の味がした……。

「……少し待っててくれな……すぐ終わらせるから」

「……別れは済んだ？」

背後から聞こえてくる淀んだ声。

俺は立ち上がると、ゆっくりと振り返った。

「……くく……いい顔だ……。」

怒りと悲しみの入り混じった……そうそう見ることが出来ない最上級な顔だ」

「貴様は何だ…」

「何だ…か。察しはついてるんだろう？人間」

「妖か……この異形め……！！」

絶対に許さん…ッ！！」

目の前にいたのは人の形をした異形…妖魔だった。

俺は話に聞く程度で、実際に妖魔を目にしたのは初めてだった。

全身闇のように黒い肉体。

筋肉質だが、膨れてはいない…痩せ型とっていい。

だが、絞まっている感じはよくわかった。

顔は人間のそれとはまったく違う。

不気味で醜い…妖魔という名が相応しい。

身長はさほどでもなく170cmくらいか。

「心地よい怒気だ…」。

最高の餌にめぐり合わせてもらって感謝だな」

俺は自分を抑えきれずに、飛び出した。

奴に向かって突進して、思い切り顔面を殴りつけた。

「はぁぁあッ！！！！」

ドガッ！！

俺の拳は奴に当たった。

だが、それだけだった。

ダメージはおるか、その場から動かすこともかなわなかったのだ。

「…く！」

「ほら、もっと…もっとやってみなよ」

挑発されるままに俺は奴を殴りまくった。
だがやはり、まるで効いてはいない。

「…はぁ……はぁ……」

「終わりか…」。

お前の怒りはこんなもんなの？」

ビュッ!

目の前から奴の姿が一瞬にして消えた。

「何処だ!?!」

辺りを見回す京。

「いい〜〜〜…肌だなあ…人間は…」

「!?!?!」

声のする方に目を向けると、奴は那由多の手を自分の頬へ擦り付けている。

ブチッ!!

京の中で何かがキレた。

「那由多に…触るなああああああッ!?!?!?!?!」

「!?!」

ドガッ!!

一瞬にして妖魔の間合いに”現れた”。
そして同時に顔面への拳打!

先ほどと打って変わって、妖魔は激しく吹き飛ばされて山の茂みへと消し飛んだ。

「はぁ……はぁ……!!」
殺す……ぶっ殺してやる……ッ!!」

「……実にいいね……。
(凄い霊撃だ……纏っている霊気が先ほどとは天と地ほど違う。
まるで別人だな……)」

ザザッ!!

茂みから勢い良くかけてくる妖魔!

「だが、まだまだ温いよッ!!」
「!!」

ドガッ!!

妖魔の飛び膝蹴りを顎に食らった京は激しく吹き飛んだ。

「ぐはッ…！」

「くく…人間にしてはよくやったほうだよ。

君はそこで黙ってみてろ…俺はこれから食事とするよ…。
君の大切な…この子を…君の目の前で食べる」

「！…！」

「くく…！いい！今までで一番いい顔だよ…！」

「やめる…やめる…よ…。」

お前…いい加減にしろよ…何の恨みがあんだよ…。
お前ら…いつたい何なんだよ…。」

ブルブルと震えだす京。

「くくく！たまらんね。

この快感といったらないね！
だから人間は甚振りがいがあるんだよね…！」

妖魔が那由多の腕を持ち、自身の口に持つていこうとした時だった。

「!?!」

「その汚い手で那由多に触ってんじゃねえよ……このゴミが」

スパツ!!

那由多の腕を掴んでいた右手が勢い良く千切れ飛んでいった。

「…?!…え」

「貴様は何万回ぶっ殺しても殺したんねえよ…!!」

ドガツ!!!

妖魔には何が起きているのかも把握できない状況だった。

突然痛みが走り、目の前が暗くなる。

そして体は吹き飛ばされ自由が利かない。

「…ぐう!!!!」

ザッ…

「お前はタダで死ねると思うなよ？」

「ひッ…！」

（は、速い…！！なぜ一瞬で目の前に現れる…！？
それよりも…なんなんだ…この圧倒的な威圧感は…！
この俺が…妖魔が人間に恐怖を抱く…だと！？）

ドゴッ…！！

京は地に伏せる妖魔に容赦なく攻撃を加える！
妖魔の顔面を勢い良く踏み潰したのだ。

黒い血があたりに飛び散る。

「左手もいらねえよな…この手が、那由多を貫いた…！！」

ブチブチッ…！！

力任せに妖魔の腕を引きちぎる京！

「俺は……俺は何をやってんだ……」

京は自分の手を見た。

両手はおろか、体中が黒く染まっていた。

「……那由多……終わったよ……」。

帰ろう……」

京是那由多をおぶって帰った。

頭の中は真っ白だった。

気づいたら俺は家の玄関に立っていた。

「きよ……京!?!」

全身朱と黒に染まった俺を見た家族は俺を見て酷く怯えていた。

そこから俺の記憶は飛んだ。

気を失った俺が意識を取り戻したのは二日後の夕方だった。

「
…」

俺はひたすらに那由多の両親に頭を下げた。
正直二人の顔が見れなかった。

俺が殺したのも同然だからだ。

だが、そんな俺を二人は許してくれた。

抱いて…泣いてくれたんだ。

俺の心は少しだけ軽くなったような気がした。

俺はこの一件で、眠っていた力に覚醒した。

皮肉なものだ…大切な人を失って、
今まで必要にも感じず、呪うだけの力が目覚めてしまうなんて。

「那由多…俺はどうすればいいのかな…」。

君を失って…俺にはこの力だけが残ってしまったよ」

那由多の墓前で俺は尋ねた。

「正しいことに…使うべきなんじゃないかな」

「え…？」

綾芽が花を持って立っていた。

「兄さん…私は兄さんに、その力を正しい事に使って欲しいな。きつと那由多ちゃんもそう思ってるはずだよ…」

「綾芽…」

「正しいこと…か…」

俺に出来ること…」。

それはこんな悲しい思いを…もう誰にもさせないこと…」。

「そう…だな…」。

俺はこの力で…一人でも多く救ってみせる…それが君にとって

の償いになるなら……」

「兄さん……」

「俺はそれから、ずっと人のため……那由多のためにと、必死に戦ってきた」

「だったらなんでこんな……！おかしいじゃない！」

優は涙を浮かべながら叫んだ。

「……そうだな……」

真実を知らずに生きていれば……俺はこうはならなかったかもしれないな……」

「真……実……？」

「そうだ……」

聞かせよう……あの事件の真実を」

第40話 完

NEXT SIGN……

第41話 真実

S I G N 二章 - S e V e N ' s D O A -

第41話 真実

「真実を知ったのはつい最近だったよ。

今年に入ってからだ…丁度悩みを抱えてる時期だった…」

俺は力を認められ、親や祖父から蔑まれることはなくなっていた。

誰かのために…

そう心に誓ったあの日から、俺は疑うこともなく、幾人も助けけてきた。

だがいつからだろう。

俺は感謝される事よりも、化物扱いされている事に気づき始めた。

「どうした…？最近顔色が悪いな…京」

「…そうか？…実は最近、あまり眠れないんだ…」

彼は柳祐介…高校時代からの友人で、

卒業してからというものの、親友のような付き合いになっている。

祐介はわずかだが霊能力もあり、俺の数少ない理解者でもあった。

「悪い夢でも見るのか？」

「…どうだろうな…。」

あの時の夢を…見るんだ…」

「あの時…？」

「ああ…那由多が殺された…6年前の夢を…」

「…それは辛いな」

「…彼女に会えるのは嬉しい…」

「…ただ、いつも不甲斐ない俺は彼女を救えず…那由多は死んでいくんだ」

「…」

「それだけじゃないんだ…。
俺が今まで救ってきた人間達…：彼等の俺を見る目…
まるで化物を見るかのような目で俺を見つめてるんだよ…。
そんな夢を毎晩のように見る…」

「…京。お前疲れてるんだよ…。
少し休めよ。体を壊したら元も子もないぜ？」

「…そうだな…」

「何処か旅にでも行くか？」

「…旅か…それも悪くないかもな」

京は祐介に微笑みかけた。

「ん…なんだよ気色悪い笑みなんか浮かべて」

「いや…。ありがとうな…祐介。
思えば、あの頃塞ぎ込んでいた俺を救ってくれたのはお前だもん
な」

「あらたまつて言われるとなんだか照れるな。
まあ…困った時はお互い様じゃん？
俺等…親友だろ？」

「お前…たまにそういう恥ずかしいこと真顔でいうよな。
あはは！」

「う、煩いな！」

「はは…でも、お前にはほんと感謝してるよ…祐介」

心からそう思える人間は那由多以来だった。

ある日…

雨の降る夕暮れ時だった。

俺はファミレスを通りがかった時、珍しい組み合わせの二人を見かけた。

店内で真剣な顔で話し合っている祐介と祖父を。

「…？どんな組み合わせだよ」

祐介は高校を卒業してからも度々家に遊びに来ていた。だからお互いが知らない顔ではない。

だが、明らかにあの組み合わせは異様だった。

俺は気づかれぬようにフードを被り、店内に入った。

そして声が聞こえるように近くの席に座った。

「…彼が、いつか気づくんじゃないか…」

最近夢を見ている彼を見ていると不安で

「いや…たとえ気づいたとしても、君への接点はないんじゃないか。安心したまえ」

「…そう…ですよね…」

気づく…？接点…？

夢の話が出たから…俺の話だよ…な？

「とにかく、心配するな…。」

6年だ…もうそれだけの時間を誤魔化せてきたんだ。
今後何も無いさ」

「…だといいんですけど…。」

もしバレたら…俺…殺されちゃうかも」

「はは…考えすぎだよ。祐介君。」

あ奴は確かに強いが勘はすごく鈍い。

安心しなさい」

「…はい…」

…。

一体何を隠しているんだ…？

今の話から察するに…6年前のあの事件の事…だよな？

あの事件に俺の知らない事実があるっていつのかよ…

「それじゃ…俺いきますね…」

急に呼び出してしまつてすみませんでした」

「構わんよ。まあそんなに怯えんで、いつも通りの君を演じてれば
問題はない」

「はい…それじゃ」

祐介は祖父を残し先に出て行った。

俺は祐介に話を聞くためにあとを追った。

トンネルに入った時、俺は意を決して祐介に声をかけた。

「祐介！」

「！…」

ビクッと反応する祐介。
恐る恐る振り返った。

「な、なんだ…京か…。
どうしたんだよ、こんな雨の中、傘もささないで…
びしょ濡れじゃないか」

「…祐介…。
お前…俺に何か隠し事してるんじゃないか？」

「！！…な、ななな…何言ってるんだよ…。
俺がお前に隠し事…？そんなんあるわけないじゃん…」

「…6年前の秘密…。一体何なんだ？」

「！！…お前…それ何処で…」

「…やっぱり何か知ってるんだな？
教える祐介！！」

京はズカズカと祐介の元に歩み寄った。

「…俺は…俺は知らない！」

お前の祖父ちゃんに…祖父ちゃんに直接聞いてくれ…」

「なんでお前の口から言えない！？
言っただ…！！祐介！！」

京は祐介の胸倉を掴むと、そのまま壁に押し付けた。
祐介の体は僅かに浮かんでいる。

「く、苦しい…！きよ…京…！」

「言っただ…！」

「し…死ぬう…ッ!!」

ハッ!

京は我に返って、手を放した。

ドサッ!

「ゴホッ…ゲホッ…!!」

はあ…はあ…ッ…殺す気がッ!!」

「ち…違うんだ…俺は…」

「お前は…お前はやっぱり…化物だよ!!」

「!…」

「もう…俺に近づくな…ッ…いいな…」

そう言い残すと彼は一人で去っていった。

俺は…それ以上祐介を追求出来なかった。

「入ります」

ガラッ！

襖を開けると、腰掛ける祖父と目が逢った。

まるで化物を見るかのように怯えた表情をしている。

それもそのはず…その時の京はまさに鬼気迫るような表情をしていたのだ。

ゴロゴロッ…！

稲光が走ったかと思うと、すぐに轟音が鳴り響く。

「ど、どうしたのじゃ…その恰好は…」

「そんな事より…」

私に何か言わねばならない事があるのではないですか？」

「！？…まさか…気づいたのか…」

「…やはり何か隠してるようですね…。
洗いざらい話してもらいましょ…」

「…く！」

「嘘は…通じませんから……」

そのつもりで話してください……。

私はあなたの思っているよりずっと勘が効きますから」

「…わかった……」。

話そう…6年前のあの夜の真実を……」

あれはお前の友人…柳祐介君からの提案じゃった。

「お祖父さん…彼の力を上手く引き出す方法…」

一つあるんですけど」

「？…なんじゃと？」

「彼は優しい性格だから、きつと何に対しても遠慮がちというか…手を抜いて考えてしまっんですよ。」

相手のことを思って、知らず知らずに力をセーブしている」

「なぜそんなことが言える？」

「大分前に、俺が霊に襲われて、ほんとに命が危ない時があったんです。」

その時、普段とは比べ物にならない力を発揮したんですよ……まるで化物みたいな」

「ほう！……それが本当であれば……」

そこに力を引き出す鍵があるという事じゃな」

「ずばり、”怒り”……彼を怒らせるのがいいかもしれないなあ」

「しかし……怒らせるといつても……どうすれば……」

「同じですよ。」

俺と同じ状況を作ってやればいい……。

もっともつと大切な人を相手にね……！」

「大切な人が……」

あいつにそのような人間がいるのか？」

「いますよ……」。

あいつには好きな女の子がいるんです。

桂木那由多……幼馴染のね」

「なるほど……！その娘を襲わせれば、あるいは……！」

「きつと目覚めるんじゃないんですかね？
彼の中の化物が」

ニツと笑う祐介。

「わかった…手はずは全てこちらで行つ。
ありがとう祐介君」

「いえいえ…」

「それで…そんな事のために……那由多をダシに使つたというのか
…！…！…！」

「わ、ワシは別にあの子を殺すつもりじゃなかったんじゃない！
嘘じゃないぞ！わ、ワシは無実じゃ…！」

「ふざけるな……ふざけるなよ…
そんな…そんな理由で……那由多は…那由多は死んだっていうの
かよ……」

泣き崩れる京。

「ま、まあよかったじゃないか！

あの小娘一人の命でお前は見事に力を得た！！

そしてその力で今まで何十、何百と救ってきたじゃろ？

あの娘も本望じゃろて！」

「…まれ…」

「へ？」

ガシッ！！

京は祖父の口を右手で握り、塞いだ。

「黙れと言っている…ッ！！！！」

ビキビキッ！！

「ハフーツ！！フーツ！！」

「まさか…身内の仕業だったとはな…」。

俺はとんだ間抜けだよ……。
考えてみれば……そうだよな……。
あんな場所に自然に妖魔がいるのがそもそも不自然なんだよな……。
馬鹿だ俺は……」

「フーーーーッ!!!」

「祖父様……あなたには裁きをくだす……」

バキッ!!!

京は祖父の首の骨を力任せに砕いた。

ドサッ!!!

「貴様の死で彼女が浮かばれることはないが……
生き恥を晒すよりは、死が似合うだろ……下衆め」

プルルル

祐介の携帯に着信がある。

「…京からか…！」

ガチャ

「もしもし？」

『俺だよ…祐介』

「ああ。なんだよ？」

『謝りたいんだ…さっきのこと』

「…いや、俺も言いすぎた。
悪かったな…ちよっと気が立つちまって…」

『どうだ？これから飲みにでもいかないか？』

「…ああ。いいぜ。付き合っよ」

俺と祐介はそれから会い、2時間ほど酒を酌み交わした。他愛無い話をして、笑い…いつものように振舞った。

そして帰り道。

「はーいい気持ちだぜえ！」

「…」

「どうしたあ？暗い顔して」

「なあ祐介…お前、なんであんなこと祖父に話したんだ？」

「あああ？あんなことお？」

「桂木那由多を襲わせる…そう言ったんだろ？」

「…!!！」

その瞬間、祐介は完全に酔いからさめた。

「お、お前…なんでそれ…」

「信じたくなかったよ…俺はお前を親友だと思っと思ってたからな…」

「…ば、馬鹿！おまつ！何を聞いたのかしらないけど、それ作り話だって！俺を信じろよ！俺は親友だろ？な？」

「…俺は本当にお前を親友だと思ってたよ祐介…」

「な…なに…泣いてんだよ……。
やめろよ……」

「なんでだ……なんでそんな事…言ったんだよ…」

「…はッ！…この鈍感野郎め！！
んなこともわかんねえからそういう事になんだよ！！」

「祐介…」

「そうだよ！！俺だよ！！俺が指示したんだ！！
お前の祖父さんに言ったのも、綾芽ちゃんに那由多ちゃんを差し向けるように

それとなく指示したのも俺だよ！！」

「…なんでだ…何でお前がそんな」

「俺はッ！！！！…俺は…那由多がずっと好きだった…。」

高校1年の時からずっと想ってた…。
でも、アイツはお前が好きだった…判りやすいほどに…。
勝ち目なんて全く無い…これ以上無いほどハッキリしてた…。
にも関わらずテムエはその気持ちに応えようともしない！
頭に来るぜ…だからよ…！！
だから…俺の手に入らないんだったら…いつそ死ねばいい…！
…
そう思ったんだよ」

ニヤツと引きつりながら笑う祐介。

「そうか…」

「ふん！お前のせいだよ！！
全部お前のせいでグチャグチャだ！那由多も死んじまった…！」

「…そうだな…俺のせいだ…。
だけどな…お前は許せないよ…祐介」

ボキッ！！

一閃…

京の凄まじい蹴りが祐介の首の骨を一撃の元に砕いた。

俺は…なんだ？

一体何を信じて生きていけばいい？

助けた人間には疎まれ、家族に…そして親友に一番大切な人を奪われ…。

俺にはもう何も残っちゃいない…。

信じるべきものも…護るべきものも…。

じゃあ何のために生きてるんだ？

俺は何なんだ？

「そこからは憎しみの感情しか沸いてこなかった…。
あの時涙を全て出し切り…それ以降涙が頬を伝うことはなくな
った。

誰の死を目にしても悲しみの感情も沸かない…俺は完全に壊れた。だがな、別にそれに対して怨みはない…むしろ感謝している。いちいち苦しまずに済むからな」

「悲しい人ね…」

優は涙を流した。

「同情か？」

ふん！！下らんな！！貴様に何がわかる！？
全てを失った人間の気持ちなどわかるものか！！！」

「…そうかもしれない…。
でも勘違いしないで…可哀想なのはアンタじゃないよ…。
那由多さんだよ…。」

「！！」

「今からでも遅くないよ…やり直そう…。
あなたなら…それが出来るはずだよ」

「…知った風な事を…。
もう後戻りなど出来ないのだ…。
俺にはもう前に進む以外にはなし！」

京は靈気を高めて戦闘態勢に入った。

「優…おしゃべりはおしまいじゃ…。」

もうこやつは止まらんよ…。」

だから私等が止めるしかないんじゃ」

『うん…。彼女の…那由多さんのためにも…
アイツを止めよう…やるわよ莉都!!』

第41話 完

NEXT SIGN…

第42話 戦力差

S I G N 二章 - S e V e N ' s D O A -

第42話 戦力差

「それでいい…。」

俺を止めたければ、言葉ではなく力でぶつかって来い」

「…行くぞ!」

莉都は前方に両手を突き出すと、一気に左右に開いた!

すると突き出していた両手を中心に、光の陣が広がった。

まるで優を守る盾のようだ。

息をつく間もなく、陣から溢れんばかりの波動が放たれた!

まさに一瞬の出来事!

「!」

京はかわすことが出来なかった!

光の波動を受け吹き飛ばす京!

『やった!』

「やってなどおらんよ。

あれは単なるこけおどしにすぎない…。

はあああああッ!！」

莉都は靈気を高め始めた。

『早い!…一気に靈気が最大までに上がった!』

「絶対に接近戦に持ち込ませてはダメだ。

勝機があるとすれば、遠距離戦…外から攻撃を続け、弱らせる」

確かに、肉弾戦で勝てる見込みは薄いものね…。

ピカッ!

「ぬ!？」

前方が光った。

それに気づいた時にはすでに手遅れだった!

ドガアアアッ!！」

「!!」

先ほど京に対して放った光の波動。
それをそのままやり返されたのだ!

勢い良く飛ばされる莉都!

「ぐ…!」

木に打ち付けられ、なんとか吹き飛ばさせることはなかったが、
正直、この攻撃は想定外だった。

「くく…!俺を舐めるなよ?

接近戦に持ち込まずとも…この程度の芸当…出来ないとも思っ
たか?」

京が歩み寄ってくる。

「く…!!やりおるな!」

「今度はこちらから攻めようか…!」

ダッ!

京が全力で駆け出した！

足を踏み込むたびに地鳴りを引き起こしている！

あっという間に間合いを詰められた！

「死ね！」

ヒュッ！

京の手刀を危機一髪！しゃがんでかわした！

が、背にしていた木は今の一撃でスパッと切れて倒れた！
凄まじい切れ味だ。

「くくく！！首をはねたつもりだったかな…！
よく避けた…」

「はぁッ！」

腹を蹴り飛ばす莉都！

ズザザッ！と後ずさりさせるものの、やはり手ごたえは薄い。
京は不敵な笑みを浮かべたままだ。

「風華！雷華！」

シュバツ！

莉都の周りに二つの光る小鳥が現れた。

「！…ほう」

「私の契約している霊獣のうち最速の二羽だ…！
避けれるものなら避けてみよ…！」

スツ…！！

二つの光は瞬時に姿を消した！
キイイイイン…

甲高い音だけが辺りを包む！

「…」

（速いな…。目に映ることもないか…）」

バシュツ…！！

「！」

突然京の右腕に切り傷が走った。

「…見えないならば…術者を殺せばいい？
違うかな？」

ダッ！

二つの光などお構い無しに、莉都目掛けて走り出す京！

「そうくると思ってたわ！枷金エッ！！（カセガネ）」

莉都がそう叫ぶと、目の前に光り輝く巨人のようなものが現れた。
そして突進してくる京を受け止めた。

「枷金は最も力のある霊獣！」

そのまま押さえ込め枷金！！出来るならば骨の二、三本でもへし
折ってやれ！」

「ぐ…ぐぐ…！霊獣如きがああッ…！！
（なんとという力だ…ッ！身動きが…取れん…ッ…！！）」

ドスッ！ドスッ…！！

「!?!?!ガハッ?!」

突如京が吐血した。

背中から何かが京の体を貫通したようだ。

「…ぐ…ぐ!」

「よくやったぞ風華…雷華!

今の一撃で、奴はかなり消耗した…意外とあっけなかったな」

その瞬間だった。

パンッ!!

「!?!」

『枷金が…弾け…とんだ…?』

「…くく…!」

おめでたい奴等だな…今で勝った気になるとはな…」

京を包む靈気がドンドン上昇していく。

今までですら、かなりの靈気を発していたにも関わらず…更に高ま
っていく！

「これが本物の靈王化身だ…。
もう貴様等に生きる道は残っていないぞ」

「く…！桁外れだ…！
なんなのだ…！こいつ…！抱いておる怨念の量も質も半端ではな
い…！

あれだけの力を狂気に落ちずに支配しているとは…！」

『く…！なんとかするのよ！』

京を包み込む靈気が光を放つほど強力になっている。

「わかっておるッ…！風華！雷華ッ…！」

ヒュッ！ヒュッ…！！

「…」

パシッ！パシッ…！！

「な…んだと!？」

なんと京は神速で飛び回る風華と雷華を驚つかみにしたのだ。

「…ふん…止まって見えるわ」

グチャツ!!

風華と雷華を同時に握りつぶす京。

「…ここまでとはな…」

「死ね…」

京の拳が莉都を襲う!

「靈気全快!!!!」

ドッガーーーーン!!!

ただの靈気を纏った拳打に過ぎなかった。

莉都の体に触れる瞬間、陣による二重防御に加え、完全に - の靈気で体を覆った。

にも拘らず、莉都の体は今までの規模にないほど吹き飛ばされた！

物凄い勢いで飛ばされていく莉都！

「ぐ…グハツ…！！し…死ぬ…！！この勢いのまま…何かに衝突すれば…死ぬぞ…！」

吹き飛ばされながらも意識は保っていた。

だが、いかにせん体の自由がまるできかない！

もうどれ位吹き飛ばされているかわからないが、森を突きぬけたようだ。

所々枝には触れたが、幸い樹にぶつかることはなかった。

徐々に勢いが落ちてきた。

ドサッ！！

そして柔らかい土の上に背中から着地した。

「はぁ…はぁ…！助かった…！」

『莉都…やれるの?』

「正直に言おう…今の一撃でかなりの霊力を失ったわ…。

もはやあやつを黙らせるだけの霊力は残っていないかもしれないな

…」

『そんな…!』

「優……ここは苦渋の決断をしなければならんよつじゃ」

『…ぶっいっつとっ?』

「”逃げる”…それ以外にあるまい…!」

『そ、そんな!』

「甘かったわ…。

どうにかなる…五分五分等と…。

とんだ自惚れだったわ…。奴の本気があれでは万に一つも勝ち目は無いぞ」

『…』

「優…気持ちは判るが、逃げるのも勇気じゃ…。

引き際を誤れば…待つのは死じゃ」

『わかってるわよ…そんなこと！
でも…ここで私達が逃げて…それで、また関係のない人が命を奪
われるのは…もう見たくない！』

「甘ったれるな!!」

『!…』

「何もかもが己の思い通りになると思うな…。
人の力など微々たるものよ…思いあがるのも大概にするんじゃない」

『…私はまた何も出来ないっていうの…？
誰一人…守ることが出来ない…』

「…今は退き…力をつけ、それから奴を倒す以外ない…。
今は諦める…」

「その必要はない」

ザッ…

何者かが姿を現した。

『!?!?…勇…君?』

後ろを振り返ると、そこには天城勇の姿があった。

「遅れたことを詫びよう…。」

「どうやら相当の手練のようだ。」

「此れほどまでに邪悪な力は妖魔となんら遜色がないな」

「お主…さつき”その必要はない”…そう言ったか？」

「そう言った。」

「それがなにか問題でも？」

「…くく！いや…逃げる必要がないなら…何なのか聞きたいものだ。まさか”倒す”等と言わないでくれよ？」

「…そなたに無理だからといって、

それを我に押し付けるのはやめるがいい…。」

「…ほう…。」

「では見せてもらおうか…そなたの力とやらを。」

「丁度いい所に奴が戻ってきたようじゃぞ」

前方からゆっくり歩いてくる京の姿が見える。

「その様だ」

ザッ！

戒はそのままゆっくりと京の方へ歩みだした。

『勇君…』

「なんじゃ…優。

あやつはお主の許婚か何かか？」

『ちよ！ち、違うわよ！』

そんなんじゃない…！ふざけないで！今はそんな時じゃないですよ！』

「冗談じゃ。そこまでムキになることないじゃろっ…。それよりも奴が何処までやってくれるかじゃな…。」

「知らない間に仲間と合流したか…白風優」

「邪悪なる者よ…それ以上の歩みを進ませる訳にはいかな…。」

二人は足を止め、対峙した。
両者の距離…約5mほど。

「中々…強いかな？」

「どうだろうな……だが、自信がなければ、立ち向かいなどせんさ」

「つまり勝算アリ…と」

「…」

スパンツ!!

京の左肩を何かが貫いた。

血が吹き出ている。

「!?!…ぐツ!?!」

すぐさま傷口を押さえ、止血・治療を始める京。

「…」

一瞬だった。

戒が先に踏み込んだのだ。

体を捻り、腕を構え、足を踏み出すと同時に腕を振りぬく。

その型はまさしく居合い…。

しかし、天城勇の体を借りた戒は剣などもってはいなかった。

にも拘らず、京の左肩を貫いたのだ。

「…」

「何をした？」…そのような面持ちですな。

なあに…単純ですよ…踏み込んで…そして突いた…。

この靈光剣だね」

チリチリッ！

細かい音を鳴らしている光の太刀。

戒の右手にそれは握られていた。

「…靈剣か…」

（高圧縮された靈気の刃……靈撃力に特化する…という意味合いではなく…）

あれは殺傷力を目的とした武器だな…。

厄介な点は二つ…。

一つに、奴の動きを油断していたとはいえ、かわすことが出来なかつた点だ。

目で追う事は出来た…が、今の間合いでは恐らくかわせない…。距離をとる必要がある…。

さらにもう一点…あの刃だ。

靈気で出来ている以上…伸縮も自在…中々と厄介な代物だな…」

「…目つきが変わりましたね…。

ようやく敵として認識していただけたかな…」

「どうか…?」

不敵な笑みを浮かべる京。

「それは余裕ですか?」

「くく…!!」

ドンッ!!

京は間合いを取るどころか、間合いを詰めた!

「!!」

「はぁあッ!！」

ドガッ!!

京の上段蹴りをまともに顎に決められた戒!

クルクルと空中で2、3転、回りながら飛ばされた。

「く…!」

(やるな…。居合いは鞘に納まってる状態こそ危険だが…
今のように抜刀した状態では、あの迅さは出せない…!
それを見越し、自ら踏み込んできたか…!
中々と頭が切れるようだな…)

「はぁあッ!！」

「!?!」

ドゴッ!!!

いつの間にか、吹き飛ばされた上空に京の姿があった。

そしてそのまま空中から叩きつけるように京は再び蹴り飛ばした!

「ゲハッ!！」

ドッガーーーーッ!!!

地を挟りながら吹き飛ばす戒。

それを上空から見下ろす京…。

「そんなものか？くくく…！」

第42話 完

NEXT

SIGN…

第43話 再戦

S I G N 二章 - S e V e N ' s D O A -

第43話 再戦

優たちが京と戦いを繰り広げている頃、街では…。

Aチーム

緋土京がばら撒いた、怨霊たちは人間の負の感情に釣られ、人々に
とり憑き、
些細な事がきっかけで暴動が発生。

街は人々の暴動の真っ只中にいた。

そんな中、司とシロとポチのグループは順調に騒ぎを収めていた。

「ふむ…随分と倒してきたが…空を見ると憂鬱な気分になるな…」

人間の姿に変化したシロは上空を見上げて言った。
確かに上空には黒い怨霊の渦が変わらぬ規模で存在している。

「あれを直に被うのが一番効果的なんでしょうけどね…。
現状でそれが出来る人間はいないわ。高さもあるしね」

「問題は行き場を失った怨霊たちが融合して力をつけることだね…」

ポチが言った。

「どづいつこと?」

「怨霊は器に入ってる場合は、例えば器が壊れても動かすことは出来るんだ。

でも器が破邪を受け、気を失って動けない状況で新たな霊が憑依することは難しいんだ。

破邪効果が消えるまでは近寄らないはずだよ」

「確かに…そうなれば霊たちの融合が始まるかもね…。
早いとどづいつにかしないと…」

Bチーム

「はあ…はあ…！つたく…！次から次へと…」

「これじゃゾンビを相手にしているみたいじゃないか…！」

「悪いな…瀬那…」

「お前ばかりに負担をかけちゃって…」

新一と大樹が申し訳無さそうに俯く。

「気にすんなよ！まだいけるさ！」

「それに菅谷さんが頑張ってくれてるからな。」

「あの人見た目と違って、かなりやってくれる」

「はあッ！」

菅谷は一人で数人を相手に引けを取らず戦っている。

「かなり弱い体つきだが、こと霊撃戦においてそこは問題ではない。」

「相手がどんな大男であれ、格闘家であれ霊撃を打ち込まれば終わり。」

菅谷はほとんど一撃のもとに襲い来る一般人をなぎ払っている。時に拳や蹴りをあて、時には靈気を飛ばし…実に戦い慣れている。

「…ふう…もうこの辺りは片付きましたね…！
他の騒ぎを鎮めにいきましようか？…って雰囲気じゃないみたい
ね」

瀬那をはじめ、新二、大樹、… Bチームのメンバー全員がかなり消耗しているようだ。
皆息を荒げ、休む者もいる。

「菅谷さん…すみません…。
俺達足手まといッスよね…。」

「瀬那君…そんな事ないよ。
君たちはよくやってる」

「菅谷さん…」

「俺も最初はヘナチヨコで、よく周りに迷惑かけてたんだ。
まあ今もそうだけどね…大切なのは諦めない事…。
誰でも最初は上手くいかないさ。ようはそこで諦めるか否か…。
俺は諦めず頑張った…だから今がある」

「…ですよね。」

周りはどうでもいいんだ…俺は俺…！
皆凄い奴ばかりだから、何処か焦ってたのかも知れないな…」

「もう一つ大切な事は、仲間を信じることだ。
君とはまだ出会って間もないけど、俺を信じてくれ。
弱いなりに頑張っで見せるよ」

笑顔でそう言った。

「…その二人！休憩終わり！行くよ！」

さっきまでへばっていた一が、大樹、新二と一緒に立ち上がった。

「ち…ッ！偉そうに…！あはは！」

「よし！もう一踏ん張りだ！」

5人は別の騒ぎへと向かった。

Cチーム

「…シッ！」

片桐の蹴りが男を蹴散らす。

「いい感じじゃない。

この短期間で二人とも大分飲み込めてきたわね」

「…悔しいけど、お前のおかげだよ。まりあ」

不破まりあ、片桐亮、須藤彰の三人は苦戦する事もなく事態を沈静化していた。

霊撃が出来なかった片桐と須藤に対して実戦を通して学ばせた結果、二人はこの短期間で+属性の霊気を操る事に成功した。

元々の霊気の操作は出来ていたので、あとはコツを掴むだけだった。

「ま、調子が上がってきたとこ申し訳ないけど、あなた達もうガス欠みたいね」

まりあは須藤達の後方を指差して言った。

二人はゆっくり振り返ると、先ほど倒したはずの男達が起き上がってきている。

「代わるわ」

二人の肩をポンッと叩いて前に出るまりあ。

ヒュッ！

「…」

男達の間を素早く通り抜けた。

するとどうだ、二人の男がそのまま倒れて動かなくなったではないか。

「早いな…相変わらず…」

「それに加えて馬鹿力だからな…ほんと半端ない女だよ…」

「何か言った…?」

ピキッ！

彼女の笑顔の裏の、鬼の顔が見えた気がした。

『い、いえ…なんでも』

口を揃えて須藤と片桐は言った。

「さて、次の場所へ向かうわよ。

あの渦事態をどうにかできればいいんだけどね…」

「神谷さんに頼んでみればいいんじゃないか？」

「その必要はありません」

「！…神谷さん！」

なんとそこには神谷一騎の姿があった。

「街は酷い有様だね…」。

警官までが狂気に当てられてて厄介だったよ。

拳銃とか持つてるからね。

死人は出ていないと信じたいけど、これだけの大規模だと…」

「それより、あの二人は？」

守護霊転身はうまくいったんですか？」

「ああ。とっくに出て行ったよ。

会わなかったのかい？」

「ええ…私達は見てないですが…。

とにかく上手くいったならよかった」

「問題はボスだけじゃないようだね…」アレ”も厄介だ」

神谷は空を見上げていった。

「そうなんですよ…かなり抜ったのですが、あれでは焼き石に水…。憑依前に一気に消し去りたいんですが…神谷さんの力でどうにかなりませんか？」

「…あの規模を一度に消し去るのは無理でしょうね。

でも出来る限りやってみようと思うんです。

僕もいつまでも逃げてられないですからね」

須藤を見て神谷は言った。

「神谷さん変わったわ…。

あなたの一言が大きかったみたいね…彰」

「そ、そうか…？」

須藤は照れ臭そうにしている。

「皆さんは引き続き騒ぎの沈静化をお願いします。
来る途中で見かけたところは潰してきたつもりですが、
他の場所では、まだ被害が出てるところもあると思いますので」

「わかりました！二人とも行くわよ！
神谷さん！期待してますよ！」

「うん！皆も気をつけて」

三人は別の場所へ向かった。

「さて…どうするかな。
やる気は出たものの…あれだけ上空ですと、まず靈気が届かない
でしょうからね…。
何処か高いビルに登る必要がありますね…。」

Dチーム

「

（一人一人の実力は大了たことがないけど、

こつも数が多いと靈力がヤバクなりそうね…。

札でも持ってきてればよかつたわ）」

単独チームの鹿子流華は余裕で怨靈を祓っていた。

緋土京を捕まえるためにこの地へやってきた彼女は、

目的である捕獲作戦のメンバーに入れられなかつたことに苛立ちを覚えていた。

変な話、憂さ晴らしにはもつてこいの状況だつたようだ。

次から次へと沸いてくる怨靈たちをストレス発散に使うように片っ端から祓い続けていた。

「

（強い靈気がこちらに向かつてきてる…。

この気配…いいものじゃないわね…。

敵か…！）」

流華は構えた。

まだ姿は見えていないが、警戒に値するレベル。
今まで戦っていたような雑魚とは違う！

ザザザッ！！

「来たか…！！」

激しい地を蹴る音と共に敵は姿を現した！

「！…お前は！」

「くっくく…！！血を…血をもっと嗅がせるッ…！！」

現れたのは以前に戦った事のある少女だった。

秋月里子…S e v e n ' s D o Aの一人で別名・恐怖（F e a r
ノファイアー）。

「コイツ…完全に狂気に飲まれてる…！！
目が完全に逝ってるわね…」

「殺す…！！殺すッ…！！」

ダッ!!

流華に飛び掛る里子。

まるで猛獣のようだ!

小さい体だが、力強さを兼ねそろえている!

「ハッ!」

飛びついてきたところに容赦のない顔面への掌底突きが放たれた!

「へブッ!!」

勢いよく吹き飛ばし里子。

「…お前には一度いいようにやられたからな…。」

女だろつが容赦はしない!!叩き潰す!」

「くくく…!!」

前歯が折れながらも不敵な笑みを浮かべる里子。

スッ！

「!?!」

里子は流華の視界から一瞬姿を消した！

戸惑う流華だったが、その僅かに生まれた隙に彼女は容赦ない攻撃を加える！

ドゴッ！！

「グッ！！」

背中への跳び膝蹴りが流華を直撃した！

そのまま前のめりに地面に叩きつけられる流華！

「く…!!」

いつの間に…ッ…!!はっ…!!」

ドゴッ！！

なんと里子は倒れる流華の顔面を踏み潰そうとした！

影にすぐに気づき、なんとか回避に成功した。

「はぁ…はぁ…！」

（背中が痛む…！骨にヒビが入ったかも…！

油断したわ…まさかまだ靈気に余裕があつたなんて…！

こいつ…狂気に飲まれてるんじゃないの…？）

最初に流華の目の前に現れた時、里子の靈気は流華を下回っていた。だが、それは流華を油断させるための罠だった。

流華が彼女の姿を見失ったのは意識を奪われたためだった。

その時の里子の靈気は明らかに流華を上回るものだったのだ。

そして、そんな戦略を狂気に飲まれた人間に出来るのか…？

流華はそこに疑問をもった。

しかし流華の疑問はやがて核心へと変わるのだった。

「…なんだろ…頭がスッキリしてきたな…」

「…！」

（不安定だった靈気が徐々に安定を始めた…？

まさか狂気を逆に飲み込もうとしているの…？）

「…お前かぁ…私の前歯…折ったの」

「ハアツ!!」

流華は靈気弾を里子目掛けて放った!

そして同時に後ろへと跳んで間合いをとった。

ドンッ!

「え?」

何かにぶつかった感触!

流華は後ろを振り返った。

「ニイツ」

ドゴッ!!

なんとそこには里子がいた。

今の今まで目前にいて、流華の一撃を喰らったはずが…

一瞬にして流華の背後まで移動していたのだ。

そして流華が振り返るや否や、強烈な蹴りを放った。

しかし、そこは流華もタダで喰らうほど甘くはなかった。
しっかりと腕で蹴りをガードしていた。

「
…く！」

（なんて力…！これが狂気化を自分のものにした時の力…！）

流華のガードした左腕は痺れていた。

「さあ…もつと楽しませてよ？」

第43話 完

NEXT SIGN…

第44話 リベンジ

SIGN 二章 - S E V E N ' S D O A -

第44話 リベンジ

「…」

(動きがまるで見えない…。)

意識を奪われているのは間違いないわね…」

「あんたも同じ目に合わせてあげるよ…!」

ドスン!

「…! (迅い…!)」

流華は咄嗟に顔面を腕でガードした。

ドスツ!!

「ぐっ!」

「ばーか…！」

”同じ目にあわせる”

この一言で流華の頭には顔面への攻撃が予想された。

そのため顔面を咄嗟にガードしたのだが、里子は最初から顔面ではなく、

ガードがガラ空きの腹部への一撃が狙いだったようだ。

ガクツと里子の腕にもたれかかる流華。
相当のダメージのようだ。

「おっと…まだ寝るには早いよ？」

「あぁッ…」

里子は流華の髪を掴んで顔を起こさせた。

「女の子の前歯折るなんて…お前も相当イかれてるよ…。
くく！…喰らえッ…！」

里子が顔面を殴ろうとした瞬間だった。

ドガッ！！

何者かが里子を蹴り飛ばしたのだ！

「…？あなた……」

「大丈夫？」

助けに入ったのは不破彰人だった。

「なんでここに…」

「君の事が気になって様子を見にきたんだ…。
間一髪だったね」

「…別に…あんなの余裕で…」

ズキンッ！

「ぐ…！」

流華は腹部を押さえて座り込んでしまった。

「大丈夫…？無理はしないほうがいいよ」

「へ、平気よ…！ほつといて…！」

「ほつとける訳ないだろッ…！」

「！」

彰人が珍しく声を荒げた。

「君は一人じゃないんだ…。」

「君が傷つけば悲しむ人間だっているだろう！？」

「…私は…」

「とにかく君はそこで休んでてよ。」

「あの子は俺が倒す…！とっくに気づいてるんだろ？」

「そのツインテールの子！」

「くくく…！感動劇は終わり？」

吹き飛ばした里子が立ち上がった。

何事も無かったように服のホコリをはらっている。

「…あの子の霊気…わかるでしょ…!!
あなたが勝てるような相手じゃないのよ!?!」

「わかってるよ…」

(確かに普通じゃない霊気を感じる…デカさも俺や彼女よりも上だ。
でも、霊気の大きさが勝敗に直結するわけじゃない)「」

「クク…!!!!」

ドンッ!!

先に動いたのは里子だった!

彰人目掛けて一直線に飛び出した!

「消えた!!!?!」

流華にはそう感じていた。
だが、彰人は違った。

ガシッ!

「く…！」

（重い…！女の子のパンチじゃない…ッ！）」

なんと彰人の間合いに入り、かつ左からの拳打を

彰人は難なく片手の掌で受け止めている！

「…なん…だと…！？

（何故だ…意識を奪えなかった…？）」

「女の子相手に手荒な事はしたくなかったけど、ごめんね」

スッ！！

彰人は里子の拳を受け止めたまま蹴りを放った！

ドゴッ！！

「グッ！！」

里子の首筋に見事に蹴りが決まった！

彼女の軽い体は宙を舞ってコンクリート塀へと激突した。

「ぶっ…」

「あなた…何をしたの!？」

流華が不思議そうな顔で彰人を見ている。

「別に何もしてないよ？」

単純に俺には意識を奪う術が効かないだけ。

俺集中力と動体視力だけは並じゃないんだよね」

「集中力で回避できるものなのかしら…」

「ともかくにも凄いわ…」

「まあもちろん…この集中力を持続出来る時間は限られてるからね…。
早いところケリをつけないと…」

ドンッ!!

里子が飛び出した!

「無駄だよ…!俺には止まって見える!」

シュッ!!

顔面目掛けたアッパーも彰人の前ではアッサリとかわされる。

「!…ちいッ!」

「く…!!」

(動きは追えるが、俺自身の体がついてこない…!
次の一撃はかわせないぞ…!)

ヒュッ!

ジャンプアッパーがかわされ、着地…

そしてすぐ様体を捻り右の拳打を放つ里子。

意識云々ではなく、単純に動作のスピードが速い里子。
攻撃態勢に入った時、彰人の態勢はまだ崩れている!

パシッ!!

「…く…!!」

「…ッぶ…ねえ…!!」

間一髪!

彰人は里子の拳を掌で受け止めた。

もちろん、そのまま拳打をねじ込んだので、直撃ではないにしろ、
彰人に衝撃を与えることは出来た。

「…」

里子は一度下がり、彰人と間合いをとった。

「いたた…！なんてパンチ力だよ…。
それにしても判ったことがある…」

「何？」

流華が立ち上がって彰人の隣へやってきた。

「彼女は霊撃を撃ってこない。

常に…の霊気で体を覆っている…これは意識的なものなのか…」

「いえ…単純に使い方を知らないだけでしょ。

それに、人間相手だったら霊撃じゃなくても、あの圧倒的体能
力があれば事足りる…」

「ごもつとも…。

ところで体は大丈夫？」

「ええ…完全回復…とは言えないけど、
あの子を倒すぐらいには回復したわ」

「あ？私を倒す？笑えないわよ…？」

パアッ！

流華の靈気が急激に上昇を始める。

ほとばしる靈気は徐々に淡い赤の光を放ち、髪の毛を赤く彩っていく。

「これは…！」

「補助効果の陣を自分にかけたのよ。

これで彼女と靈気では五分五分でしょ？

もう意識も奪われないし、打ち合いでも負ける気がしないわ」

「ほざけええええッ…！」

激昂した里子は流華目掛けて走り出した。

「毎回毎回…ワンパターンなのよ！

イノシシかっつての…！」

流華はタイミングを合わせて前蹴りを放った！

ヒュッ!

「!」

当った感触がない…!

見ると里子の姿はそこには無かった!

「…意識は奪われていないはず…ならば…!」

上空に目をやる流華!

すると目前には彼女の姿というより、彼女の足刀が目に入ってきた。その距離10cmほどだろうか。

ドガッ!!

「…っわ…!」

彰人は目を覆った。

傍目から見たら、間違いなく顔面にヒットしていた蹴り。

恐る恐る目を開ける彰人。

「え…？」

そこには倒れる里子の姿があった。
予想とは反対の光景だ。

「く…！」

「あんな状態から…カウンターを入れるだけの速さだっていうのか…」

「時間がないから、とっとと終わらせましょう」

流華は靈気を一点に集めだした。

「すごい…！増幅された靈気を一点に集めて…あれは剣…？」

流華の右手には細長い靈気の刃のようなものが出来ていた。

「はあ…はあ……」

「鹿子さん…どうしたんだろう？
かなり苦しそうだ…髪の色も徐々に戻り始めてる」

「もう少し…もう少しで”出来る”…」

「…何をしようとしているのか…知らないけど…！
やらせるかよおおおッ！…！」

ようやく立ち上がった里子はすぐに流華目掛けて駆け出した！

「させないッ！」

すぐに間に入った彰人！

「どけえええッ！…！」

「…！」

（見えてる……見えてるのに……！！
これは完全に避けられない……！！）

スローモーションで襲い来る凶器の拳…！

頭では回避信号を出すものの、体がそれを受信してくれない。

徐々に顔面へと迫ってくる拳！

ドゴッ！！

喰らった。

そして彰人の体は宙を舞った。

女子高生が男子高生を殴り飛ばす奇妙な光景。

「…！」

里子の視界から彰人の体が上空へと消えていく。
そして新たに見えてきたものは…

光だった。

ドシュツ！！

「…！か…！」

流華の放った光の矢だった。

先ほど靈気を集中させ、作っていたのは剣ではなく、矢だったのだ。

光の矢は里子の体を貫いた。

「はぁ…はぁ…上手くいった…」

「何が上手くいった…だ！
痛くも痒くもないぞ！」

流華は完全に沈静化していた。
全ての霊力を使い果たしたようだ。

髪の色も完全に黒に戻っている。

「くく…終わりだよ…」。

「あんだ、もう何も出来ない」

「？…ほざけええ！！」

里子が駆け出した。

「え…？」

2、3歩だろうか。

里子が走った途端に勢いよく倒れ込んだ。

「な…にこれ…？」

ピクピクツと体中が痙攣している。

「実戦で使うのはこれが初めて…。
土壇場にしては上出来だわ」

ザッ…

顔を抑えて彰人がやってきた。

「いちち…奥歯折れちゃったよ…」

「イケメンが台無しね」

「勝負…ついたんですね」

「ええ。あなたのおかげよ…ありがとう」

初めて素直になった流華だった。

「…」

「な、何よ…！私がお礼を言ったらおかしいの？…フンッ！」

「い、いや…別にそんな。」

それより、どうやって倒したんですか？」

「破邪の矢を構築して打ち抜いただけよ」

「破邪の矢？」

「ええ。彼女の中にある怨霊を断ったわけ。」

破邪の呪印を矢に組み込んで打ち抜いたの。

彼女の中で発動するようにプログラムしてね。

呪印を彼女に打ち込んでも、彼女の・霊気の前に効果を成さないから、

その壁を打ち抜いて中で作用させる必要があったんだけど…

上手くいってほっとしたわ…ほとんど一か八かだったからね」

「霊気が少しでも劣っていれば、貫通出来ないですからね…。」

(簡単に言ってるけど、それって物凄い高度な技術じゃないのか？

矢を形作る・高速で放つ・呪印を組み込む…どれも難易度が高いよ…)」

「今は支えであった霊気を失い、体にガタが来ちゃったのね。」

暫くは激痛とのお付き合いな。ご愁傷様」

女は怖い。

改めて感じる彰人だった。
こうして流華は見事リベンジに成功した。

その頃…

神谷一騎はとあるビルの屋上にいた。

「うひゃあ…少しは届くかと思ったけど…

8階程度じゃまだまだ遠いなあ…」

上空の怨霊のうねりを見て呟いた。

「ここから靈気を飛ばしても届かないよねえ…
どうしたものか…」

第44話 完

NEXT SIGN…

第45話 闇の化身

S I G N 二章 - S e V e N ' s D o A -

第45話 闇の化身

「…中々面白い事になってるな」

「虫けら共が頑張ってるみたいね。

街の全壊には程遠いわ…私が一つひねって来ようかな」

ビルの屋上に佇む、若い男と女は遙か遠くの怨霊の渦を見て言った。

「やめておけ…俺達が表舞台に出るのはまだ早い。

まあ…決着如何では出ることになるかもしれないがな」

「あの子が負ける事はないと思うけど？」

「どうかな…。」

それよりも問題はこの硬直状態だ…。

面白みにかけると思わないか？

下でけなげに頑張る虫けら共に俺からささやかなプレゼントをしてやるっか」

男は何やら種のようなものをズボンから取り出した。

「それ…邪心の種？」

「まあそれに少し手を加えた特別なものだ。

あの怨霊共はこの邪悪な気を喰らいたくてたまらずに集まってくる。

そして全てがこれに食いついた所で術が発動する。

すると面白い事が起きる」

「面白いこと？」

「くく…まあ見ている。

闇の化身の誕生だ…！せいぜい頑張つてあげよ…人間共！」

そういつて男は種を握り締めると、気を高め始めた。

「さあ…飛んでいけえッ！！」

男は指で種を弾いた！

すると物凄い速さで種は飛んでいく。

邪悪な気を纏いながら。

別のビルの屋上

ビュンッ!!

「!…なんだ…?あの禍々しい靈気は…」

上空を見上げていた神谷は不信な気を感じ取った。
見ると怨霊の渦に何かが飛んで向かっているではないか。

「…?渦に突っ込んだ…?」

するとどうだろう。

渦に変化が見え始める。

「ん…?渦が…縮小していく?」

上空に円を描くように広がっていた怨霊の渦は広がりをやめ、
逆に中央に吸い寄せられるように縮小を始めたのだ。

「どうということだ…？」

誰かが何かしたのか？…いや…邪悪な靈気は未だに消えていない。
一箇所に集まっただけで消えたわけじゃない…！」

一箇所に集まり、上空一面に広がっていた怨靈は一つの球体に姿を変えた。

「…なんだ…？」

一体何が起きようとしてるんだ？」

すると、黒い玉は徐々に下降をはじめた。

「おいおい…降り始めたよ！？」

なんかやばそうだね…急いだ方がいいかもしれない！」

神谷はすぐにビルを降りていった。

上空の異常に気づいたのは神谷だけではなかった。

ほかのチームたちも異常に気づき、中央へ向かい走っていた。

そして一番最初に中央に到着したのは…

「…これは一体…」

単独で動いていた聖才雅だった。

黒い玉はすでに地上スレスレ、1mほど浮いてるに過ぎなかった。
玉の直径は1m〜2mくらいだろうか？

あれだけの規模がこれほどまでに小さく凝縮されたわけだ。
感じる霊気は凄まじいものがあった。

「！…なんだ？」

玉がうねうねと動き出したのだ。
もはや球体とはいえないような…色々な部分が突起している。

才雅は戸惑っていた。

このような経験がないからだ。

どうすればいいのか…頭の中で答えを探している。

「このまま放っておけば大変なことになるかもしれない……！
やるしかない……！」

才雅は覚悟を決めた。
そして霊気を高め始めた。

「色々な可能性が考えられる……。
ここはあえて全力を出さずに……はああッ……！」

才雅は何かあっても対処できるだけの距離をとり、
霊気の波動を飛ばした！

バチンッ……！！

「……！」

才雅の放った霊気は黒い球体に触れる前に弾けとんだ。
どうやら、球体の周りには防護壁のようなものが張られているよう
だ。

「…本気ではないにしろ、それなりの靈気をぶつけたつもりなんだけどな…。」

恐らく本気でやっても阻まれるだろうな…。」

どうすればいいんだ？」

その時だった。

黒い球体だったものは突然大きな動きを見せ始めた。

上下左右、色々な形に伸びたり縮んだり、凄い速さで動いている。

「…まるで生きているみたいだ…。」

才雅の言葉はまさにそのままを意味していた。
まるで鼓動を打つような…。」

そしてソレは徐々に落ち着きを見せ始めた…同時に形を形成しながら…。」

「あ…ああ……！」

才雅は驚きの余り2、3歩後ずさりした。

目の前にあった球体が、今では”人の形”を成しているからだ。
驚くべき点はそこだけではない。

その姿形は…まさに聖才雅に瓜二つだったのだ。

背格好から外見まで…。

ただ違う点は、髪の色、目の色…そして服の色だ。

才雅の明るい茶髪ではなく黒髪…。

そして全身白の制服だった才雅と違い、相手は全身黒い…。

「な、何故僕が…」

「…」

地に降り立った黒い才雅は掌を握っては開け、握っては開けを二、三度繰り返している。

「いい体だ…」

「！…喋った…！」

声まで僕にそっくりだ…」

「…少し待ってくれないか？

頭の中がまだ統一されていない」

黒い才雅はそう言うと立ったまま目を閉じた。

「…!?!」

(何だ…何なんだコイツは…?)

わからない…。だが、一つ言えるのは…今奴は隙だらけだということだ…!

奴が何故僕の姿かたちをしているのかわからない…でも奴は人じゃない!

だから容赦の無い攻撃をしても問題はないツ!」

才雅は一気に体を靈気で強化すると、黒い才雅に突撃した。

まずは跳び蹴り!

黒い才雅の首元目掛け、出来るだけ近づき、撓らせた蹴りを放った!

ドゴンッ!!

「!?!?...当たった?」

あまりに隙だらけ故、若干畏の予感をしていた才雅だったが、予想に反して蹴りは見事にノドを直撃した!

そしてそのまま地面へ叩きつけられた黒い才雅。

表情は全く変わってはいないが、口からは黒い血が伝っている。

「く…！」
（まだ目を瞑っている…だと…？）
一体何を考えているんだ…こいつは…）」

才雅は仰向けに倒れた黒い才雅の顔面をさかさず踏みつけようとした。

バシッ！

「！」

踏み込みにいっただ才雅の右足を顔面に当る寸前で、黒い才雅は受け止めた。
物凄い反射神経だ。

「…待つてはくれないのだな…。
容赦がない人間は好きだよ」

目を開けた黒い才雅は笑顔で言った。

才雅は急いで握られた足を振りほどくと、追撃を諦め間合いをとった。
すると黒い才雅はゆっくりと立ち上がり、口元の血をぬぐった。

「…相談は終わった。
というか、僕が勝った…生存競争にね」

「生存競争…？」

「色々と疑問が湧いていると思うから答えよう…。
まず僕はなにか？」

答えは簡単、怨念をもった死霊の混合体だよ。
理由は判らないが、一つに纏められたようだ…」

「…お前たち自身がそうなることを望んだんじゃないのか？」

「それは違う…と思う。」

一心生きてる意識たちから話を聞いてみたが、そのような話が出てこなかった。

皆が言うには力に吸い寄せられた…それくらいだ」

「お前は…なぜ僕と同じ姿をしている？」

「…そうか。」

僕は君の姿をしているのか…。
姿を形成する時に君が傍にいたせいで影響されたんだろうね」

「生存競争に勝ったと言ったな…それはつまり」

「そう…何万…何十万という数の意識たちの統合は無理…。
ならばどちらかが消えていくしかない。
その生存競争に僕が勝った…そして今は僕独りの体だ」

「…お前は…これから何をするつもりだ…」

「愚問だよ…」。

僕は闇より生まれた…まさに闇の化身だ。

心の中は恐怖・憎悪・嫉妬…様々な負の感情で溢れている。
中でも殺戮したい気持ちがあつとも…強い」

ビリッ！ビリッ！！

大気が張り詰める！

凄まじい威圧感と殺気だ。

「…ならば戦う他ないんだな…」

「そうだね…君が止めると言うなら、戦うしかないんじゃないかな？
だけど、少し待ってくれないか？」

「？…」

「僕には”名”がない…何かないかな…呼び名」

首をかしげて考え始めた黒い才雅。

「ふざけやがって…！」

才雅は飛び掛った！

パシッ！

「だからさ…君、少しくらい待って事しようよ。
短気は損だよ？」

才雅の拳を握りながら言う黒い才雅。

「クッ…！」

掴まれた状態で蹴りを放つも、軽々とかわされる。

「怨念…呪い…：呪 - ノロイ - か…」

僕には丁度いい名前かもしれないな…。

まあノロマみたいで若干気に喰わない点はあるけどね「

パッ

呪は才雅の手を離した。

「く…！」

「名前も決まった事だし、少し遊ぶか」

呪の表情が変わった。

「戦う気満々って顔だな…！」

(まともにもやり合って勝ち目がないのは先の動きを見れば明白…！
隙を見て逃げるしかない…。

とはいっても、それも難しいだろうな…。

せめて援軍があれば…：…はっ！…：…そうだよ…！

皆が無事で居てくれれば、異変に気づいてここにくるはずじゃないか…！

「ここは時間稼ぎを優先しよう」

「手は十分に抜いてやるから…：せいぜい楽しませてね」

とあるビルの屋上

謎の男女はまだ見物をしていた。

「あの人間じゃ遊び相手にもならないんじゃない？」

頭に手をかざし、遠くを見ながら女が言った。

「だろうな。闇の化身の力は、そこいらの妖魔を凌ぐ。
俺の部下に欲しいくらいに戦力だ。

この戦いが終わったら引き入れるかな」

「ふふ…あなたも物好きだね…。」

確かに強いけど、”私達”と比べたら雑魚に等しいじゃない」

「まあな」

ニヤッと笑う男。

「はあ…はあ………」

「どうした？まだ準備運動にもなってないよ？」

しっかり立って」

「…くそ…！！」

(強いなんてもんじゃない…！)

防戦一方でこの様だ…！！これじゃ皆が来てくれても勝ち目はないぞ…！！」

第45話 完

NEXT SIGN…

第46話 最悪の対抗手段

S I G N 二章 - S e V e N ' s D O A -

第46話 最悪の対抗手段

「君の力は人間にしては上位に値するものだとは思っよ？
でもそれじゃ僕の相手は難しいね」

「く…！」

（まだか…まだ皆は来ないのか…！

このままでは確実に殺される……！）

「聖才雅と怨霊の集合体…」呪ノロイ…」。

その実力差は天と地ほどの違いがあるようだ。

遊びにもなっていない現状に飽きを見せ始める呪。

「何か秘策はないのかい？

君も力を出し尽くさずに死ぬのは本望じゃないだろ？

待ってて上げるから力を出し切れよ」

「！…」

（待つ…か。これはチャンスかも知れないな…）

呪は大声で笑った。

「聖先輩…なんなんですか…この異常な状況」

まりあが質問を投げかけた。

当然の反応といえる。才雅にそっくりの人間が才雅と共に目の前にいるのだ。

「話せば長くなる…。かいつまんで言うと、あの男は先ほど上空にあつた怨霊の集合体…

名は”呪・ノロイ”。…訳あってあの姿だ…」

「…一つに纏まって手間が省けた…
そう思ったかったんだが…これはどう見てもヤバイ状況なんだよな…！」

片桐が言った。

「…奴から感じる靈気が今までに感じた事がないくらいデケエ…！
間違いなくヤバイな…」

「片桐君と須藤君の言う通りだよ…。
正直僕らのレベルでどうこう出来る相手じゃないようだ…。
さらに加えて逃げるに逃げられない…最悪の状況と言える…」

「…ついいかな？」

呪が瓦礫に腰をすえて言った。

「君たちの戦力…もちろんここにいない人も含めて…
君たち以上の実力者はいるかい？」

「…？…居る…！だが、それがどうしたというんだ…？」

「僕はまだこの肉体に慣れていない…。
それ故…試運転をするにも、そこそこ強い相手が欲しいんだ。
君たちじゃ僕の試運転の相手にすらならないからね」

「…その人間を渡せと言っているのか？」

「僕と戦って欲しいんだ。

もちろん僕より弱かったら殺すけどね。

ある程度満足させてくれたら、君たち全員助けてやる…どうだい
「？」

「ふざける…！ッ！！」

ふざけるな!!…そう須藤が怒鳴りつけようとしたのを、才雅が止めた。

「本当なんだろうな…」

「聖さん…本気かよ!!?」

須藤をキツ!と睨みつける才雅。
本気の眼に須藤は口を閉じた。

「くく…君は流石だよ。」

生き延びることを最優先に考えている。

それでいいんだよ。命は一つしかないんだ。大切に使わないとね」

「今この場にはいないが…必ずここに来る!

多分…今向かっている途中だ…」

「そうか…いいよ。」

その人間が来るまで一時休戦と行こう。

…だけどね、下手な動きを見せたら容赦なく殺すから…そのつもりだね」

ビリビリッ!

凄まじい威圧感をぶつけながら、呪は笑顔で言った。

「聖さんよ…。」

「なんであんな奴の要求を受けたんだよ！」

「やめろ須藤！…先輩の選択は正しいよ。」

「あのまま全員でかかったところでアイツには勝てない」

「すまない…。」

「だが…無駄死にだけはさせるわけにはいかないんだ…」

「聖先輩…。」

「ところで、誰があいつの相手を…？」

「ちなみに白凧さんと天城君を期待しているなら無理ですよ？」

「さつき神谷さんに会ったときに聞いたんですけど、」

「彼等は守護霊転身が成功してすでに動き出してるそうなんです…。」

「そうか…二人は上手くいったんだね…。」

「よかった。でも僕が想定していたのは彼等二人じゃないよ」

「え…？じゃあ一体誰を？」

「僕は神谷さんを想定して話したんだ」

『！』

一同驚いた。

「ん？不思議かい？」

「いや…そうじゃないんだけど…」

俺や片桐は神谷さんの実力をあんまり知らないし…
見た目は凄い大人しそうだからな…」

凄い術はあっても、戦う雰囲気がないっていうか…」

「…正直いけるのか…っていう雰囲気ではあるよな」

「…僕も彼と知り合って間もない頃はそう思っていたよ…。
でも彼はやる時はやる…」

「先輩…神谷さんに”アレ”を…」

ザッ…

「まりあが”アレ”と言ったタイミングで、男は到着した。

「来たようだね…彼等の希望とやらが…」

呪はそう言つてニヤリと笑みを浮かべた。

「…どつやら最悪の事態ではなさそうだね…」

皆が生きているのを確認し、そう呟く神谷。

『神谷さん！』

一同が彼の名を呼んだ。

「あれって…才雅君の双子のお兄さんか何か…？」

「いえ…あれは」

「冗談です…怨霊の塊つて所でしょうね…。
いやはや…凄い…。」

「こんな強い霊気、そろそろ拝めるものじゃないですからね…。」

「か、関心してる場合かよ！

神谷さん…正直どうなんだ？…アイツに勝てそうなのか？」

須藤の質問に神谷は黙って考え始めた。

「…んー…十中八九…勝つのは無理でしょう」

『！』

一同は僅かな希望を断たれた気分を下を向いた。

「…はあ…。」

もう絶対に使いたくないって思ってたんだけどな…」

「！………神谷さん！

ダメですよ…」アレ”だけは…！」

まりあが声を荒げて言った。

「まりあ！さっきから”アレ”ってなんなんだよ！？」

「それは…」

まりあが言葉を詰まらせた時だった。

「”アレ”は…僕の守護霊”灰閻”かいえんの事です」

「守護霊……」

「ええ。人の守護霊が見えて話せるんです。

無論自身のそれとも同じ事が出来て当然です……」

「強いのか……?」

「強いです……途轍もなく……。制御出来ない程にね」

「制御出来ないって……。」

さつきからまりあが止める辺り……なんか嫌な予感がするんだけど……」

「灰閻は”善”か”悪”かで言えば、恐らく”悪”でしょう。何より破壊を好み……血に飢えている。危なさがあるんです……彼にはね」

「……それ以上に神谷さんは使いたくないはずですよ……アレのせいで……沢渡^{さわたり}さんが……」

「いいんです……。」

過去はどう足掻いても変えようがない……。僕らは未来へ向かって生きていますから。生きるために……あの力が必要なら……使うしかないんです」

「…ごめんなさい… 私達が弱いばかりに…」

まりあは涙を流した。

須藤と片桐は事情を全く知らないが、この涙である程度理解した。

「涙を拭いてください…まりあさん。」

弱いのは僕も同じだよ…だから自分を責めないでください。

聖君…いいかな？」

「はい…」

まりあを才雅に引き渡した。

「皆さん…出来る限りこの街から離れてください…」

制御してみせる気ではいるんですけど…万が一もありますから

「それって…どういっ…」

「須藤君…頼む…」。

「ここは神谷さんに任せるんだ…！」

「悪いね…」。

もう…自分の手で仲間を傷つけるのは嫌なんだ…。

わがままだけど…聞いて欲しい」

「……神谷さん……死なないでくれよ……？」

「ああ……また会おう」

そう言って、聖達は走って去っていった。

「わざわざ待ってくれてありがとうございます」

「いや、彼等に興味はないんだ。
だからどうでもいいだけだよ」

”よっ”と瓦礫から飛び降りると、神谷の立つ場所へ歩み寄った。
その距離10m……。

「そうですか……」

それにしても……お強いですね」

「まあ君達人間から見ればそうかもしれないね……。
でも君は、この僕と……そこそこはヤレそうだよね……」

「判るんですか？」

「ああ……なにか”質”が違うよ……さっきの子たちとはね」

「一ついいですか？」

「何だい？…この期に及んで”やめましょう”はなしだよ？」

「いえ、僕が強くなるには準備が要るんです。その間待ってくれますか？」

「うん。そんな事だったら全然構わないよ。自身の中のベストコンディションを引き出してくれ。僕はさっきの子のように短気じゃないんだ」

「ありがとう…。」

(さて…：月が綺麗だな…：)

「こんな夜に死ねるなら…まあ悪くないかな…」

神谷はゆっくりと眼を閉じた。

「…」

(…：灰閻…聞いていたでしょう…)

「あなたの力を借りたい」

『くくく！…あれ程俺を憎んでいたというのに…結局また俺を頼るんだな！』

『一騎よ…』

「…」

（出来れば…こういう状況には、なりたく無かったんですけどね…。それも言ってもらえない…いわば窮地という奴なんです）」

『俺としちゃあ問題はないぜ…？』

『久々に血が啜れる！！くくく！！』

「！！…」

（灰閻…残念ながら、そうはいきませんよ…。
あなたの相手は…）」

『わああつてるよ…ちょっとカラかったただけだ。
俺は憎まれてるけどよ…一応テメエの守護霊なんだ…
たまには信用しろ』

「……そうですね。」

『じゃあ……行きますよ……灰閻』

『ドンと来いやッ！！』

「守護霊……轉身ッ！！」

握り拳を自分の胸に打ちながら、神谷は叫んだ。

ザワザワ…

「！……変わった…？」

「くっくっく………久々の外の空気だな…オイ…！」

『灰閻…敵は目の前の男です』

「るせええよ！！いちいち説明しなくてもわかんたよ…俺にはよ。アイツは”美味しい”ですってな」

「口調が変わった…？」

目つきも…靈気も…

穏やかな中に力強さを感じていた先ほどとは打って変わって…

なんとという刺々しく攻撃的な靈気だ…。

まるで…僕と…」

ド
ン
ッ
！
…

「…？」

「独り言の最中悪いんだけどよ……！！

一発やらせてもらっせッ！…！」

一瞬にして呪の隣に姿を現した灰闘！
そのまま細腕から強烈な一打が繰り出される！

ドガンッ！！

強烈な音と共に吹き飛んでいく呪！

「くく…！わるかねえ…！」

久々の上物じゃねえか…！」

第46話 完

NEXT SIGN…

第47話 狩る者、狩られる者

S I G N 二章 - S e V e N ' s D O A -

第47話 狩る者、狩られる者

「…不意打ちとはなかなか…」

灰閻の拳打は呪の顔面に当る寸前で、ガードされたようだ。

「くく…！いいねえ…！」

その調子で楽しませてくれよ？」

バチバチッ！

互いの高まる靈気に反応してか、足元の小さなコンクリートの破片
等が

弾け跳んでいる。

「んじゃ、続けていくぜ…！」

ドガンッ…！

灰閻の踏み込みの衝撃で足元が割れる！

凄まじい力だ。

「！」

ドガガガッ！

一瞬にして呪との距離を詰めると、すかさず殴りかかる！
ただ思い切り殴りつけるといった感じだ。

計算も何もない、ただ早く打つ。

何処に当たってもいいから、とにかく打つ。

ひたすらに。

「…く！」

「いいねえ！実がいいぞ！」

灰閻の乱打を呪はかわせないでいた。

全て拳で弾く手段を用い、直撃を避けている。

しかし、この拳で弾くという行為が、すでにダメージとなって呪を襲っていた。

一発一発が途轍もなく重く…痛みを覚える。

とてもあの細腕から繰り出されているとは思えない。

「!!!」

キツ!

呪は眼に力を入れて灰閻を睨んだ。

「ぬおツ!?!」

その瞬間…

一方的に攻めていた灰閻が突如吹き飛ばされた。

顔面に何かを食らったように、頭部から後ろに反れて吹き飛んでいった。

キキイツ!

すぐに態勢を戻し、足と片手を地につけブレーキをかける灰閻。

「…おかしな術を使いやがる…」

灰閻の鼻からは出血が見られた。

親指でそれをぬぐうと、すぐに構えた。

「…思った以上に肉体が強いようだね…」

呪は自身のボロボロになった両手を見て言った。
すでに両手は傷だらけになっていた。

「この体だから、この程度の力しか出せないんだ。
靈気で十分に体を守ってやる分、力が出し切れないんだ。
俺自身が生きてた時は、この数倍の威力が出るぜ？」

「くく…いやはや…すごいね。
準備運動どころか、これは本気を出さないと危ないレベルだ」

シュウッ…
呪の両手が徐々に回復していく。

「治療出来るんだな…素晴らしい。
これで何度でも遊べるってわけだ」

ニヤリと笑みを浮かべる灰闘。

「僕も少し本気を出しますか…」

フッ！

呪が音も立てず、その場から消えた。

「あああ？そこだろッ！！」

ドガッ！！

灰閻は誰もいない右側を思い切り蹴り上げた！
すると、何も無い空中で衝撃音が響いた！

「く…！」

「くく…ほらな…！見えてるぜ？」

蹴りは呪の両腕のガードに阻まれはしたが、呪の体を吹き飛ばすには十分だった。
後ろに吹き飛ばされた呪は、気を高め始めた。

「はあああああッ！」

「へえ…まだ霊気が上がるか。」

そこらの妖魔と引けをとらない凄まじい霊気だな…「オイ」

辺りが震えだす。

大地…そして大気もが呪の邪悪な靈気に反応している。

「くくく…！行くよ…！」

バツ！

先ほど同様音も無く消えた！

「！…」

（見えなかった…何処だ…）」

「後ろですよ」

呪の声にすぐに反応し、背後に回し蹴りを放つ灰閻。

「！！？…いない…？」

「嘘です」

ブゴッ…！！

「グフッ…！！」

灰閻の頭上に途轍もなく重い一撃が振り下ろされた。
両手を組んだ状態からの一撃！

灰閻は否応なしに前のめりになった。

そして次の瞬間眼に飛び込んできたのは呪の膝だった。

ドゴッ！！

容赦のない顔面への膝蹴り。

しかし、衝撃の規模は凄まじかった。

そのまま上空へと打ち上げられる程だ。

「……くくく！……いい……ねえ……」

「これで終わりじゃないから」

呪は上空へ手をかざすと、一気に靈気を放出した。

波動砲のような巨大な靈気砲が一瞬にして灰閻を飲み込んだ。

「くく……あっけなかつたな……」

これが僕のか……これだけの力があれば……

この世界を混沌へ導くことも可能……くくく……」

「何笑ってやがる…」

「!？」

呪が振り返ると、そこには衣服がボロボロになった灰閻の姿があった。

「…生きてたんだね」

「…つたりめえだろ…あの程度で勝った気でいたのか？
おめでたい奴だな…てめえ」

「くく…確かに…」

君を少々侮っていたのかもしれないね。
でも、そのナリを見れば判るよ…相当無理してるんでしょ?」

『まさか…灰閻が本気でやって…ここまで苦戦するとは…』

「おい…クソつたれ…誰が本気でやったって言った？
俺はまだ全然本気じゃねえんだよ…」

「?…独り言かい？」

「くっくっく…!?!?!どいつもこいつも…」

この灰閻様を舐め腐りやがって……いい感じに頭にきたぜ……
てめえ”ら”に地獄を見せてやるよ……」

「何を訳のわからない事を……!？」

(いない…?)」

「シッ!」

「!」

ドゴッ!……!

強烈な跳び膝蹴りが呪の後頭部へ直撃した!
僅かに反応はしたものの、完全に出遅れた。

直撃は避けられなかった。

吹き飛んでいく呪!

「俺は霊気なんてまどろっこしい真似は嫌いだね……!
徹底的に肉体をぶっ壊す!」

なんと灰閻は体に到底見合わない瓦礫を両手に担いでいる。
直径10mはあるだろうか、とにかく大きい!!

そして灰閻は吹き飛ぶ呪目掛けて投げ飛ばした！

「うおおおおおっりゃあああああー！」

ドッガーーーンッ！！

「くっくー！！潰れるー！！」

瓦礫は直撃したかに見えたが、余りの大きさを物陰になってしまい、その瞬間を目の当たりには出来なかった。

「…下手な芝居はやめろや！」

「靈気がまるで減っちゃいねえんだ！出て来い！」

その声に反応するかのように瓦礫から飛び出す呪。灰閻同様に衣服がボロボロになっている。

「…」

「どうした…怖い顔して…」

「俺がムカつくならテメエもガチで殴りにこいよ？」

「…キツ!」

「!?!」

ドンッ!!

いきなり灰闇の体が先ほど動揺に頭部を後ろに反りながら転がるように吹き飛んでいった。

二人の距離はかなり離れていた。

何かを飛ばしたりするモーションも無かった。呪が睨んだ瞬間に灰闇の体が吹き飛んだのだ。

「く…! さっきから…妙な術を使いやがる…!」

「もう手加減は止めだ…」

ザッ…

ゆっくりと歩いてくる呪。

「ようやくマジになったわけか…」

ツウ…

「ぬ……？血……？？」

灰闇の額から血が流れてきた。

先ほどの見えない一撃によるものだろう。

「！？……眼が……」

「……」

歩み寄ってくる呪の目が光を放っている……。

青白い綺麗な光だ。

『灰闇！……あの眼……何か危険な感じがする……！
見るんじゃない！』

「へ……もう遅いみたいだぜ……！
糞ツたれめ……！体の自由がきかねえ」

「僕にとつての試運転は終わった。
君は十分にその役をはたしてくれたよ。
だから君の仲間はいかしてやる……」

「ふん……知った事かよ！……俺は俺が生きていればそれでいいんだ
「！」

「くく…残念。」

君は殺させてもらうよ…今後僕の邪魔にならないとも限らない」

「殺せるもんならやってみるよ…！」

「動けない体で、よくまあ…そこまで強気な態度でいられるものだね。」

ある意味尊敬に値するよ」

バチンッ！！

呪は灰閻の頬をはたいた。

「どうした？今はかなりゆっくりと打ったつもりだよ？」

「…」

「ほら…僕は目の前だ。」

殴りたいだろうねえ……ほら、いいよ？思う存分殴れよ。

あーっはっはっはっは！ごめん！無理だよね！くくく……」

『いいぞ…もつと挑発しろ……』

灰閻を怒らせるんだ…』

「さっきの強気な態度は何処にいったんだろうね。
急に黙りこくっちゃって…」

ブルブルッ

小刻みに灰閻の体が震えだした。

「!…くく…!震えているのかい？」

強気な君が…僕に恐怖している…!これはとても気分がいいね!」

バチンッ!

呪はさらにもう片方の頬を張った。

灰閻の口元から一筋の血が流れる。

「あはははは!身動き取れないまま、いいようにされる気分はどう
だい？」

屈辱的だろうねえ…くく!こちらとしては最高の気分だけどね…」

クイツ…

呪は灰閻の顎元を掴んで自分のほうへ向けた。

「顔を上げたまえ…くく…いい顔をしているじゃないか!

屈辱に耐え…怒りを堪えている…。

先ほどの震えは恐怖じゃなかったか…これは失敬」

バゴンッ！！

呪のカカト落しが灰闇の頭上に落ちた！

「…」

「気に喰わないね…何故恐怖しない？

君は死ぬんだぞ？わかっているのか？」

「…くく」

「何がおかしい…！」

ドガッ！バキッ！！

呪は動けない灰闇を殴り続けた。

顔面から体から、目に付く部分を痛めつけた。

「はぁッ！はぁッ…！！いい加減判れよ…！」

死ぬんだよ…！貴様はッ…」

「ぺッ…！」

地面へ血反吐を吐く灰闘。

「何をそんなにビビってた…てめえ…」

「！…ビビってる…だと…？この僕が…」

「くく…可笑しいな…圧倒的優位な立場であるテメエが…
何故か震えている…顔色もひよっとして悪いんじゃないのか…？
みてねえけど…なんとなく判る…」

「ふ、ふざけるなあああッ！！！！！」

ドガッ！！！！

今までで一番強烈な蹴りが灰闘の顔面に放たれた。

「はあ…はあ…ッ…」

「…ちて…。」

俺も今の一撃でやっと…限界超えたわけだ…」

「ああ！？？」

ゆっくりと後ろに吹き飛ばされた顔面を前に戻していく灰閻

「…ひいつ…!!」

「ぶち殺すツ…!!…!!…!!…!!…!!」

眼があつた呪は、一瞬恐怖に慄いた。

灰閻の表情がまるで鬼のように怒りに満ち満ちていたのだ。

ブチブチッ…!!

「くくく…!!金縛り解けちまつたぞ…!!」

力でもって、自由を封じていた術を解いた灰閻。
もはや殺意の感情が大半を占めているようだ。

まるで獲物を前にした獣のようだ。

「く…くそつたれ…!!」

呪は向かってくることをせず、灰閻に背を向け逃げ出した!

「俺に背を向けるか…くくく…!!」
逃がすものかよッ!!」

第47話 完

N E X T
S I G N
…

第48話 真なる脅威

SIGN 二章 - S E V E N ' s D O A -

第48話 真なる脅威

「はぁッ…はぁッ…!!」

(何だアイツは…人間ではないというのか…?)

この僕が逃げる…?許さないぞ…あいつめ…ッ(「

全力疾走で逃げる呪。

「逃がすかよ…くくく…!!」

「はぁッ…!!」

ドンッ!!

爆発音を上げ、灰閻が走り始めた。

二人の距離の差がドンドン埋まっていく！
途轍もない速さだ。

「追いついたぜ…!!」

「く…!!」

呪のスピードに合わせて並走する灰閻。

『！！いけない……！前に人がいる！！
避けるんだ！』

「しゃらくせええッ！！」

ドガッ！！

灰閻は前方にいた人間をなぎ払って走り続けた。
恐らく今の一撃ではねられた二人は命を落としただろう。

『く……ッ！！貴様ッ……！！』

「黙ってるよ一騎……今いいところなんだ……はは……
最高に楽しい狩りだぜ……」

「くソッ！！」

並走する灰閻に対して靈気を放つ呪！
顔面に当るも、まるで動じる様子もなく、減速無しに並走を続けている。

「半端な攻撃は俺の怒りを買うだけだぞ…くく！」

「…はぁッ！！」

呪は一気にブレーキをかけ、減速した。

狙いは一気に切り返して、突き放そうという魂胆だったのだろう。

しかし…

キキイイツ！！

「無駄無駄無駄あぁッ！！」

んなもんで振り切れると思ってんのか？」

「チイイツ！！」

ドンッ！！

再び見えない衝撃波を放つ呪！

灰闇の顔面に直撃したものの、体は微動だにしていない！
首から上だけがわずかにのけぞった程度だ。

「だから…聞いてないのかよ…？」

中途半端な攻撃はすんじゃねえッ！！」

一喝！

その気合だけで前方の呪は吹き飛んだ！

「くく…！てめえの全力はそんなもんか？」

「ギッ…！」

呪は再び眼を光らせ、灰閻を睨みつけた。

「！……んなもんは…きかねえんだよッ…！！」

バチンッ！！

灰閻は気合で呪の術を弾き飛ばした。

「ば…馬鹿な…ッ」

「さあ…手は出尽くしたか？
だったらもうテメエに用はねえ…死にな」

「ふ…ふざけるなあああッ…！」

「ぬ…!?」

ドツガーーーーーー!!!

呪はありつたけの靈気を弾に変えて連続で撃ち出した!!
両手から次々に発射される靈気弾!

掌サイズのそれは、物凄い速さで灰閻を襲う!

灰閻はかわせないのか、全て被弾しているようだ。

「うらああああッ!!」

死ねえええッ!! まだまだああッ!!」

ドドドドドドドッ!!

止む事のない弾幕!

被弾している灰閻の周りは土煙に包まれている。

「はあ…!! これでとどめだッ!!」

ドッ!!!

得意の靈気砲が放たれた!

灰閻の体を丸呑みするほどの巨大な靈気砲だ!

ドツガーーーーーンッ!!!

灰閻に一直線に飛んでいく波動は見事に直撃した！

「はぁ…はぁ…ッ！」

終わった…くく！舐めるからそついう目にあつんだ…！」

ザッ…

「…ば…馬鹿な……………」

「くくく…効いたよ…。」

お前にしては上出来だ…だが…あの程度では命までは奪えなかつたな…」

土煙から姿を現したのは上半身裸の灰閻だった。

「く…！」

「無理はするな…もうテメエには戦う力は残ってねえよ」

呪に歩み寄る灰閻。

「殺すのか…？」

「ああ…殺すな…。
でもテメエは俺の”糧”になるんだ…光栄だろう？」

「糧…だと…？」

ビュッ！！

灰閻は呪に飛び掛った！！

ガブッ！！

「！！…な…」

「くくく！！…テメエは…俺の餌だ…。
安心しろ…残さず喰い尽してやる…」

なんと灰閻は呪の首筋に噛み付いた！
そして首を大きく振り、肉を食い千切った！！

「あ…あ…」

「黒血か…くく！

テメエ…人のナリしてたが…怨霊の塊か」

ドサッ

呪は灰闇にもたれかかるように倒れた。

「残さず…喰…え…よ……」

「ああ。テメエのせいでかなり消耗したからな…
遠慮はしねえぜ」

ガブツ！！

もう片方の首筋に噛み付くと、今度は”吸い”はじめた。
血を…靈気を……とにかく吸っているのだ。

するとどうだろう…呪の肉体は綺麗に消え去ったのだ。
まるで全てを吸い取られたかのように…。

「ふう……最高だ…。」

心地いい闇の靈気……素晴らしい」

『ぐ…ぐあ……！』

なんだ…この気持ちの悪い……感覚は…』

「一騎よお…あとはテメエだけだぜ…
邪魔者はよ…。」

『き、貴様……！』

「まあ今たつぷり奴の血を…邪気を取り入れてやったから…
てめえはおつ死ねや！あーっはっはっは…！」

『く…こんな…こんな所で負けてたまるか…！』

とあるビルの屋上

傍観者の二人はまだ見ていた。

「大番狂わせね。

負けちゃったわよ。あいつ」

「予想外ではある…が、面白い展開でもある。

まさか、人間が妖魔に等しい…いやそれ以上の怨霊を喰うとはな。

あの男…さらに化けるぞ」

「それってマズインじゃないの？

”あの子”を越えちゃうんじゃない？」

「ああ。恐らく実力的には緋土京を勝る力を手にする事になるだろ
うな」

「だったら、やっぱりマズイじゃん。
アイツあの子の敵でしょ？」

「…どうかな？」

「これはどう転ぶか…見ものかもしれないな」

クスツと笑う男。

「ほんとと…あんたって物好きよね」

『はあ……はあ……』

「しぶといねえ……一騎ちゃんよお。
俺に体渡して楽になんなよ」

『誰が…渡すか……ッ！』

「くく……！」

ザッ！

「…か、神谷さん…？」

目の前に現れたのは夕見司とシロとポチだ。

『く…!!…こんな時に…ッ!!…』

「くく…女か…。いいねえ…ちょっと遊ぼっぜっ。」

「…神谷さんじゃない…！」

「靈気の質がまるで違う…ッ！」

「司…下がりな！」

人間化したシロが言った。

「シロ…どうしたの？」

「凄い汗…！」

「こやつ…一体何なのじゃ…？」

「人間…なのか…？」

後ずさりするシロ…

「や…やばいよ…司ちゃん…シロ…ここから離れたほうがいい…」

「ポチまで…！一体何なの？」

「人間の司には判らないかもしれんが…
奴から妖魔に近い禍々しい何かを感じる…」

「確かに禍々しくて強い気ではあるけど…
手に負えないレベルかしら？」

「くくく…！その奇妙な女…それに犬…
てめえら何者だ？俺と同類か？」

「逃げるのじゃ…！司…！」

ドスッ

「え………」

「はい…一人」

灰閻は一瞬に間合いに入るとシロの胸を手刀で軽々貫いた。

「に…逃げるのじゃ…!」

ガシッ!

瀕死のシロは自身の体を貫いている灰閻の右腕を掴んだ。

「ほう…あくまでこの女を逃がすか…。
健気だな」

「に、逃げないか…司…ッ!」

「誰が…誰が仲間を置いて逃げれるかああッ!」

ドガッ!!

司は灰閻の背後から思い切り顔面を蹴り飛ばした!

「!」

(ビ、ビクともしない…!?) 「

「意気のいい女は好きだぜ?」

ブンッ!!

思い切り腕を振ってシロを引き離した!

そしてシロの血を払い、司へ近づく。

「つ…司あ…ッ！逃げろおッ…!!」

カブツ！

「ああ？」

「ハムツ!!ひやめろッ…!!」

灰閻の足にポチが噛み付いている。

「くくく！本気がよ？」

ブンッ!!

超速で蹴り上げると、勢いに負けポチは遠くへ飛んでいった。

「く…!!」

「俺を前にして、まるで臆していないか…」

その反抗的な目がいいね…どうだ？俺の女にならねえか？
お前を気に入った」

「誰が…アンタなんかとツ!!」

パシッ!!

司の放った拳は余裕で止められた。

「…お前のような女は好きだが、俺にも我慢の限度はある。
もう一度言おうか？俺の女に」

「嫌つつつてんだろ!!この露出変態野郎!!」

ピキッ…!

灰閻の表情が険しくなった。

「調子に乗るなよ?」

ポキッ

「…え?」

司の右腕が小枝を折るようにいとも簡単に折って見せた。
無造作に。

「聞き分けのない奴はこつなる」

「うあああああッ!!」

「くく…いい声だな…」

「興奮してきたぜ…」

ドッ!!

「きゃあッ!!」

司は押し倒された!

「はあ…はあ…!くくく…大人しくしてろ…」

「…さわんじゃ…ねえッ!!」

ドガッ!!

司は思い切り灰閻の股間を蹴り付けた。

いかに強いといっても所詮は男であった。

悶絶する灰閻を振りほどくと司はシロの元に駆け寄った。

「シロ…大丈夫…！？
酷い傷…！」

「ばか者…！我などに構っている場合か…！
早く逃げよッ！もうこのような機会巡ってはこないぞ！」

片腕をシロの傷口にあて治療を始める司。

「司…」

「ごめんね…私が不甲斐ないばかりに…」

「アホか…それは我の台詞じゃ…」

く…自分も腕を折っているというのに…」

「しゃべらないで…きつとどづにかなる」

「ぐ…くそあまぁッ…！…」

『もう貴様の好きにはさせん…！…！』

「！……一騎いいいい……貴様まだッ……！」

『……覚悟を決めた……やはりこれしかない……』

「！？……貴様何を考えている……」

『くく……すぐ……わかるさ……！』

「！……」

「どうした……まりあ？

急に立ち止まって……」

となりを走っていた須藤が声をかけた。

神谷の指示に従い、遠くに離れていた聖才雅、須藤彰、片桐亮、不破まりあの4人。

「……何か……嫌な予感がする」

「神谷さんのことかい……？まりあ君……」

「ええ……口では上手く言えないんだけど……
なんだかモヤモヤするの……なんだか……とても嫌な……予感が……」

まりあのこの予感は……

的中する事になる。

第48話 完 N E X T S I G N ……

第49話 別れ

SIGN 二章 - S E V E N ' s D O A -

第49話 別れ

「……き、貴様……」

「……な、なんで……神谷さん……」

司の目の前で予想外の事態が起きていた。

なんと神谷が自分自身の左胸を貫いているではないか。

スボッ

神谷は自身の腕を胸から抜きとると、そのまま前のめりに倒れた。

「……ば……馬鹿な真似を……」

『黙れ……貴様には好きにさせないと言っただろう……灰閻』

「まさか……貴様……！最初から……覚悟していたというのか……!？」

『……共に消えよう……』

『僕もお前も、この世界には必要とされていない存在なんだ』

「くそ…ッたれ…こんなことで…
俺の…夢が…」

『…これが死の感覚なのだろうか…。
意識が遠のいてくる…』

「……さん！神谷さん…！」

『…誰かが呼んでいる……？』

「くく……俺も観念してやるよ…一騎……。
最後の時間くらい……くれてやるぜ…」

灰閻がそう言うと、神谷の体に神谷の意識が戻った。

「…神谷さん…どうして…こんな…」

「夕見さん……すまなかったね……。
君には…怖い思いを…させてしまった…」

司は神谷の胸を必死に治療しようと両手で押さえている。
しかし血は一向に止まる気配がない。

「うう……血が止まらない……」

「……いいんだ……僕はもう……助からない……
だから……もう……」

神谷は震える手で司の手を握った。

「……うう……死なないで……！」

「……泣かないで……くれ……
君の……腕……本当に……すまな……かったね……」

神谷の目が徐々に閉じていく。

「か、神谷さん……！？だ……だめだよ……！
生きて……！しっかりして……！」

「……みんなに……ありがとう……って……伝えて……さ……さい……
それと……菅谷……つち……に……ごめん……って……おねが……い……し……
……」

神谷は全てを言い切る前に……事切れてしまった。

その死に顔は笑顔だった。

「か…神谷さん……。
そんな…そんな……うっ…うあああああああ！！」

司の泣き叫ぶ声は辺り一面に響き渡った。

ザッ…

「そんな……嘘……でしょ……？」

引き返してきた不破まりあは、倒れる神谷に縋り、泣き叫ぶ司を目にして崩れ落ちた。
全てを悟ったようだ。

「神谷さん…嘘だろ……そんな…」

「…須藤…」

「…神谷さん………すみません……。
僕らがあなたを殺してしまったも同然だ…」

聖才雅は震えていた。

神谷の死を悼む悲しみと、不甲斐ない自分への怒りに…。

ザッ…

「部長…これは一体…：…？」

瀬那が泣き叫ぶ司を見て呟いた。

続々と到着する仲間たち。

あまりにも衝撃的な結末に、皆呆然と立ち尽くすしかなかった。

”なんだかんだで、上手くいく”

そんな甘い考えを誰もが抱いていた。

”誰かがやってくれる”

”きつとまた無事にみんなに会える”

甘すぎた。

「かみやん…：…お疲れ様…：…。」

君はこの街を…：多くの人間を救った英雄だよ」

菅谷は涙を流しながら言った。

「…皆、辛いかもしれないけど…：まだ戦いは終わっていないわ」

皆が沈黙する中、流華が言った。

「お前……相変わらず冷静だな……」

俺達には悲しむ時間もないっていうのかよッ!」

「やめろ……須藤!」

感情的になって怒鳴りつける須藤を片桐が止めた。

「しつかりしなさい!

まだ戦いは終わっていないのよ……感傷に浸っている時ではないで
しょ……」

流華は司の目の前で叫んだ。

「……あなたには何も判らないですわ……」

彼は……私の目の前で死んだのよッ!」

「そうやって泣いていれば、あなたの気はすむかもしれない……。
でもそれで神谷さんは生き返るの?」

「……」

「今こうしている間にも、優や天城君が命がけで戦っている…
もしかしたら死に掛かっているかもしれない…！
あなた達は彼等まで失う気でのいるの？」

『！』

全員がはっとした。

「今は悲しむ時ではないわ…新たな犠牲を出さないためにも
前へ進むべきよ！彼だつてそれを願っているはずよ…。」

これは戦いなのに！時には非情にならないと…また死を呼ぶことにな
るわよ…！」

「…あなたは強いわね…流華さん…。
泣くのはしばらく…中止ね…。」

司は涙を拭いて立ち上がった。

「夕見さん…。」

「司でいいわよ…ありがとう流華」

「アイツは自分から悪役になって皆を立ち上がらせたんだ。
気持ち判ってやれよ…？須藤」

「…気持ちはわかってるさ…！
だけど、とてもじゃないけど…俺はそんなに簡単に割り切れない
…。
俺が神谷さんをやる気にさせちまったせいで…クソッ！」

「須藤…」

「…わあってる！今は優たちが心配だ…！
行くぞ皆！」

(神谷さん…：あなたには後で気がすむまで詫びさせてください…
それでどうにかなるわけじゃないけど…：俺にはそれくらいしか
できません…)

「でも行ってくて…何処に行けば彼等に会えるんだよ」

「が言った。」

「それは私めが教えるよん！」

「ポチッ！戻ってきたのね！」

先ほど灰闇に吹き飛ばされていたポチが駆けしてきた。

「司ちゃん…その腕…」

「いいの。それより、二人の場所を知ってるの？」

「二人かはわかんないけど…飛ばされた時…一瞬物凄い霊気を感じたんだ。」

「多分彼等じゃないかな？向こうだよ！」

ポチは短い手を北に指していった。

「そっちな…わかったわ！」

「北…ですね。今はその子を信じて行くしかないでしょう！
急ぎましょー！」

司達は北に向けて駆け出した。

「はあ……はあ……」

「なんと…強さじゃ……」

「くくく…！中々楽しめたぞ…お前たち」

莉都と戒のコンビは京と激闘の最中にいた。

しかし、京の実力は協力した二人を上回っていた。

さすがに無傷等ではないが、消耗具合で言えば圧倒的に二人のほうが消耗している。

833

「こうなれば…どちらかが犠牲になって奴を討つしかないだろうな…」

「うむ…莉都…そなたが奴の動きを止め…」

我が奴の心臓を抉り取る…それでいいな？」

「ばか者！逆じゃろ！」

私が奴の心臓を止める役じゃ！」

「冗談を…あなたには無理だよ」

『二人ともモメてないで！…はっ』

なんと二人がもめているのを見逃さなかった京はあっという間に、二人の目前まで移動してきていた！

「まずは一人だッ！！」

ドガッ！！

ベキッ！！

嫌な音を立て、戒が吹き飛ばされた！

そして岩肌に激突すると、そのまま奥のほうにめり込んでしまったようだ。

出てくる気配がない。

「くっ！貴様ッ！！」

ドガッ！

莉都の蹴りを食らい、吹き飛ぶ京！

「くく…！いいぞ！まだまだ動けるじゃないか！」

「はぁ…はぁ…！！」

『莉都の動きが明らかに鈍ってる…。
このままじゃ…まずい…!』

「優…お主の言う通りじゃ…。
もうチマチマやっている場合じゃない…」

『えっ…』

「お主に賭けるぞ…優」

フッ

「え…あれ?…嘘…私じゃん…これ…」

なんと莉都は突如転身の術を解除した。

「莉都! ちょっと!…どづいつ事よ!…?」

返事がない。

「?…何をしているんだ?
一人で騒いで…。」

(それにしても、極端に靈気が落ちたな…アイツ。
消耗ではない…何もしていないのに極端に靈気が落ちた)「

「く…あの馬鹿女…逃げやがった!」

「くく…!どうやらこの戦いもそろそろ幕を降ろす時間が来たとい
うわけだ」

ゆっくり歩み寄ってくる京。

「煩いわね…ッ!まだ諦めないんだから!」

優は靈気を高め始めた。

…?

あれ…?

なんかスムーズだ…。

いつもよりも早く靈気が最高まで高まった…?

「行くわよ!」

ドンッ!

優は京目掛けて飛び出した！

「くくく！来いッ！」

バババツ！

京に対して禁断の接近戦を挑む優。

予想通り、ことごとく攻撃をかわされる！

「くそ…！」

「はぁッ…！」

ドゴッ…！

京の強烈な拳打を腹部に浴びる優！

！！

何これ…！

気持ち悪い…！！

意識が吹っ飛びそう…。

足元がガクガクと震えだす優。
その衝撃の凄まじさを物語っていた。

「くく！おいおい！こんな手加減した拳で延びるんじゃねえぞ？
はぁッー！」

さらに同じ箇所の前蹴りを見舞う京！
優は吐血しながら吹き飛んでいった。

「う…う…え…」

何これ……死ぬ。
死んじゃう……。

殺されちゃう……！

死…死死死死……！！

「いやだ…死ぬのは……嫌だ……」

優は地を這いながら京から逃げようとしている。

「死にたくない……」

優の頭に響く声は、彼女に届くことはなかった。

「くく！恐怖で理性が完全に吹き飛んだか…。

このまま惨めな貴様を見続けるのも飽きた…。

せめて同族としての情けをかけてやるよ…。

一撃で苦しまずに殺してやる」

這い回る優の首を掴むと、一旦持ち上げ、更に地面に叩き伏せた。

そして優の腹部にまたがると優の腕を、自らの突きたてた人差し指で突き刺した。

「あああ……」

だらんと力が抜ける右腕。

そして続いて左腕も同様に突き刺した。

「さあ…これでいい。これで防御も出来まい…。

このまま肉体を壊してもいいが…貴様らしい最後にしてやるぞ。

お前の霊力の底を突き破り、永遠の闇へ葬り去ってやる」

「あ…ああ………」

「さらばだ…！
はぁッ！…！」

ドンッ！！

優の心臓に放たれた強力な霊撃！

凄まじい光を放ちながら優の胸を貫いた。

優の体は痙攣している！

「くく…！終わった…」

これで邪魔者は全て死んだというわけだ…！

心残りには全力が出せなかった事くらいかな。

紅雲の力を使うまでもなかったな」

第49話 完

NEXT SIGN…

第50話 二つの扉

SIGN 二章 - S E V E N · S D O A -

第50話 二つの扉

…

なんだろう…。

この感覚…。

何も見えない。

何も聞こえない。

触感も匂いも…

ありふれた感覚が…何もない…。

あるのは…闇だけだ。

私は死んだのか。

これが死…天国も地獄もないの？

あるのは無…か。

もういいや…何も考えたくない…。

これでよかったのよ…。

「さて…街はどうなったかな…。
ん…！？…どういうことだ！？」

京は上空を見上げて何かに気がついた。

「怨霊共の雲が消えている…だと？」

あの女の仲間か…ッ！

Seven's DoAの連中は何をしているんだッ…！

役立たず共めッ…！

…まあいい…物足りなかった所だ…。

俺自ら人間共に恐怖と絶望を味あわせてやるか…この紅雲の力を
解放してな…！

くくく…！」

『優……目覚めよ』

声が聞こえる……。

誰の声……だっけ……女の人の声……。

お姉ちゃん……？

お祖母ちゃん……？

……お母さん……？

誰だろう……わからない……。

『お前は靈王の転生体……唯一無二の存在……。
いずれこの地に復活せし終焉の王が齋さんとする世界滅亡を
阻止すべき存在……今死ぬ事は許されぬ』

そんな事言われても……私は何も出来ない……。
それにもう死んじゃったんだから……しょうがないじゃない。

『お前はまだ死んでなどいない』

え…嘘でしょ…？

現に私はもう闇と一体になってる…。

感覚がないもの…。

『確かに今お前は死にかけてはいる…。

だが、今ならまだ助かる事が出来る。

生きる意志があるのであればな』

生きる意志…。

『そうだ…。

お前は死にたくなかったはずだ。

まだ現世に未練もあるだろう？』

…未練…か。

もう…考えるのもしんどいよ…。

』…。

仲間はどつするのだ？

ここでお前が死に絶え…奴を野放しにすれば、
間違いなく仲間は皆殺しになるだろう』

…皆が…殺される…？

『お前は何のために奴と戦ったのだ？
守りたい物があつたからじゃないのか？』

守りたいもの……。
そつだ…私は…皆を…そして生まれたこの街を守るために…

『思い出したか…。
ならば、このような場所でいつまでも、もたついている場合には
なかる』

でも…

私が蘇つた所で、あいつには勝てない…。

莉都も力を貸してはくれなかった…。

『莉都はお前に賭けたのよ…。
お前の中に眠る霊王の力に』

無理よ…。

私にはそんな力なんてない…。

あいつは強すぎるわ…勝てっこない。

『…ならばどうする？』

やはり仲間を犠牲にするか？』

わからない！

…

…わからないよ…。

私は皆を守りたい…！
街だって救いたい！

あいつだって止めたい…！

でも…でもそれが出来なくて…どうしようもない気持ちで
苦しくて…！

私にはもう……どうしていいかわからない…。

『優…』

力が欲しい……。

相手を倒す力じゃない……。

大切なものを守る力が欲しい……。

『心から……そう願うか？』

正直不安でいっぱいだし……迷いもある。
私はとても弱い人間だから……。

でも……私の気持ちに嘘はないわ。

力があれば……守る力さえあれば……！
私はまた立ち上げられる気がする！

『……最初で最後……
お前に力を貸そう……優』

え？

『お前の気持ちに嘘がないのであれば……扉を開くことが出来るかも

しれぬ』

扉…？

『そうだ…霊王の力が眠りし二つの扉。
覇刃の扉…それは大いなる破壊の力。
守麗の扉…それは大いなる守護の力。
この二つの扉を開け…二つの力を極めし時…真の霊王としての力
を手にする』

ハジンと…シユレイ…。

『今のお前では、どちらの扉を開けることも叶わないだろう。
だが私が力を貸してやる…それで開けるはずだ…。
資格があればな』

資格……？

『先ほどの守りたい気持ち…
自分を犠牲にしてもなお、守りたいという気持ち。
そこに偽りなく…心の底より、それを願うのであれば扉は開く』

もし……なかったら……？

『その時は完全なる”死”が待っている』

死…。

『…故にお前の覚悟を聞いた。』

先も話したとおり、お前はまだ死ぬべき時ではないのだ。

私はお前を死なせるわけにはいかない…』

あなたが最初から力を貸す話をしなかったのは…

『そう…中途半端な気持ちのお前に扉を開かせるわけにはいかなかった。』

気持ちを聞いて、尚見込みがあると判断したから話したのだ』

…私やる。

まだ肉体も精神も未熟だし…怖い気持ちもある。

でも…失いたくない…！

守りたい！…心の底から願う！

『いいだろう』

ドーンッ！

暗闇の中に二つの扉が出現すると共に、自身に感覚が戻った。

『さあ進め…右の扉が覇刃の扉…左が守麗の扉だ。
間違わぬようにな』

ええ。

そうだ…教えて欲しい事があるの。

『なんだ？』

あなたの名前…なんていうの？

『私の名か…莉那^{りな}……莉都とは同じ精神を共有している存在さ』

え…？

『莉都と私は同時に存在することは出来ない。
あの子は先の戦いで消耗し…今は眠っている。
だから私がお前を導いた』

そっか…ありがとう莉那。
私皆を守ってみせる。

『その意気だ。
お前ならやれるさ…優』

優は左の守麗の扉に両手を添えて、扉を押し出した。

「きゃっ！」

物凄い光と衝撃が優を包み込んだ！

ドゥウウウウウウウッ！！

「！！？…なんだ！？」

京は突如轟いた音に反応して振り返った。

見れば優の体が光の柱の中で浮いている。

「…馬鹿な！」

奴の霊気は完全に途絶え、息も止まっていたはずだ！」

…あつたかい…。

何だろう…この穏やかな気持ち…。

優はゆっくりと目を開けた。

そして地に降り立った。

優を包み込んでいた光の柱が徐々に優の体に収まっていく。

「…」

「生き返ったとでも言うのか…？」

ふざけた真似を…ッ！」

「…」

優は黙つたまま京と目を合わせた。

「傷が癒えている…。」

それだけじゃないな…様子が先ほどと違う…！

（なんだ…あいつのあの目の光は…？）

霊王眼の力…？馬鹿な…あのような変化など聞いたことがないぞ

「

「緋土京…あなたの過去には同情するわ…。」

でもあなたがした事は間違っている！」

「はっ！今更その様な事をお前と論ずるつもりはないと言っただろ
う！」

俺を止めたければ、力で止めてみるッ！」

「…いやだ」

「ああ！？”嫌だ”じゃねえだろ！！」

出来ないんだよ…！お前程度の力ではなッ！

まったく分を弁えない女だ」

「私のこの力はあなたを倒すための力じゃない…。
皆を守るための力よ…！」

「くくく……この期に及んで、何を世迷いごとを……！
奇跡で蘇った位で調子に乗るなよ……？」

ドッ！！

京が駆け出した！

「もう一度……あの世に逝けええええッ……！！」

シュッ！！

優の首筋に向けて放たれる手刀！

優は反応できていないのか、微動だにしていない！

「終わりだッ！」

スッ

「……！？……何……？」

「……」

完全に首をはねた……京はそう確信していた。
だが、京の手刀は優の片手で止められている。

手刀を包み込むように……掌で。

「馬鹿な…！あそこから手刀を止めたというのか…？
いや…それよりも…！なぜこんな女に…しかも片手で…止めたと
いうのか！？」
俺の手刀が…」

シュウツ

「うツ…！？なんだ…この感覚は…
（力が抜ける…）」

「…もう止めましょう。こんな戦い…何にもならないわ」

バツ！

京は優の手を振り払い、間合いを取った。

「貴様…一体何をした!？」

これが私なの？

あの京の動きが手に取るようにわかった。

だから余裕で手刀も防げた。

それに何だろう…力がどんどん湧き出てくる…。

「くつく……見ていろ……！
紅雲の本当の力をな……！」

京は鞘から刀身を抜いた。

すると、その瞬間に禍々しい怨霊が姿を現す。
刀身に纏わりつく、それらの怨霊は黒く…歪んだ人の表情をしてい
るようにも見える。
まるで唸りをあげているかのようだ。

「なんて…禍々しい邪悪な気なの…！」

「くくく…！…すばらしいだろう…
さあ紅雲…俺と一つになろう…！」

ドスッ！！

「え…？」

なんと京は自分で自分の腹を紅雲で突き刺した。
刀は完全に京の体を貫いている。

「ゴホッ…はは…くつく…！」

さあ…紅雲…俺の血を吸え…美味いだろ…
そのまま俺の体の中に巢食え…そして一つになる…。
全部だ…全部俺の中に来いッ…！
うははは…！」

「く…！黒い靈気が京の傷口から体内に入り込んでいる…ッ！」

「あ…ああ……」

ドサッ

京は膝を折って倒れた。

ビクビクッと痙攣している。

「…禍々しい靈気が消えた…」

これって…まさか…死んだの？

第50話 完

NEXT SIGN…

第51話 最強VS最凶

S I G N 二章 - S e V e N ' s D O A -

第51話 最強VS最凶

「…痙攣が収まった…」。

本当に死んでしまったの…？」

自ら自分の腹を貫いた京は倒れたまま微動だにしない。

「…」

優が倒れる京に近づいた時だった。

「…！…何…？」

京の体から…霊気を感じる…！

弱々しいけど…とても邪悪な……」

スウツ

「！」

優は何かに反応するかのよう後ろに跳んだ。
だが、目の前に倒れる京に変化はない。

「何かすごく危ない気がした…。
一体なんだっていうの…？」

すると京の体が小刻みに震えだした。

「……くっくく…！」

「！……生きてる…！」

「…素晴らしい…まさか…ここまでとは…」

ザッ

京はゆっくりと立ち上がった。

「…やる気なのか…」

「呪い刀・紅囊…かなり厄介だったが、
ようやくすべてを食らってやった…！」

ズブッ！

京は自分の腹に刺さっていた刀を抜いた。
すると、見る見るうちに傷口が塞がっていく。

「呪いを喰った事で俺の力は想像以上に上がったようだな。
もうこの刀にも用はない。はぁあッ！！」

バキッ！！

京は紅雲に拳をぶつけて刀身を折った。

「さぁ…俺の力を感じろ……白凧優…」

京は靈気を全快にした！

その瞬間京を中心に凄まじい突風が巻き起こる！

「ぐっ…！！」

なんて靈気…！！

さっきとは比べ物にならない…ッ！

「くく…これだけの力に加え…
俺は100%の霊王化身が使える…
もはや勝負になるまい」

「ここで、あんたを止めなきゃ…沢山の人不幸になる…。
やっぱり避けられないのね…戦いは」

「そっだ…。」

もはや、どちらかの死をもつてでしか、この戦いは止まらない！
覚悟を決めろッ！！」

「私は勝つ…そして、あなたも救ってみせる！
はああああッ！！」

優は靈気を高めた！

「何が救うだ…！！
くっ…！それよりも、何だ奴のこの靈気は…！
さっきまで見せていた力が限界ではなかったのか！？
これでは…俺と変わらないではないか…！！」

ドッ！！

優は飛び出した！

体が軽い…！
一瞬で間合いに入れた！

「はぁッ…！」

ドガッ！！

優の蹴りが放たれた！

しかし、京の腕に攻撃は阻まれたようだ。

「…！ガードした！？」

「ふん…！当たり前だろ！
はぁッ…！」

京は優の脚を掴むと、思い切り振り回し、勢いをつけて投げた！

「…っく…！」

空中で身動きが取れない優！

「くく…！滅びの波動を喰らうがいい…！
冥王波ぁぁッ…！」

ドウッ！！

吹き飛ぶ優に向けて放たれた漆黒の波動！
凄まじい速さで優へと向かっている！

「ぐっ！」

ドッガーーンッ！！

「はははッ！！」

並の一撃ではないぞ…！精神を蝕み…闇へと誘う！
呪われるッ！！」

「…危なかった…」

確かに物凄い威力だわ…ガードしなかったらヤバかったかも」

「な…なんだと…！！？」

無傷…だと…？…馬鹿な！？」

咄嗟に靈気を高めたら靈気の防御壁が目の前に作られた…。
すいっ…。

今の私は靈気の性質を切り替えるスピードも、
どの箇所にとれくらい力を出すかとか…頭で思い浮かべるだけで
実現できる…。

靈気を上げるスピードも一瞬な上、強力な一撃を放った際の
靈気の乱れがまるでない…。
常に安定して最高の一撃が打てる…。

靈力も相当に上がってるのか…底を感じない…！

それに…何もしていないのに、力が上がっていくこの感じは一体…？

これが…これが靈王の力…！

凄まじい…。

私だけではこの域に到達なんて出来っこなかった…莉都…莉那…あ
りがとう。

私はこの力で彼を倒す…。

それが皆を守る事に繋がるならば…力の使い方…間違っていないよ
ね？

「さあ…今度は私から行くわよ！」

両手に靈気を集中していく優！

ポウツ！！

「ええ…！？何…これ…」

優は自分で出した狐火に驚いた。
今までのような淡い紫の炎ではない…薄く蒼い…それでいて力強い。
両手の炎は一つでも以前の両手で作り出した炎より大きく猛っている！

「ふん…！そのような、こけおどしが通用するとも思っているのか？」

「通用しないかどうか、試させてもらおうわ！
いくわよ…！双…ツ炎玉ツ…！はああああッ…！」

優は両手の炎を掛け合わせ巨大な玉にして解き放った！

ドンッ！

「うわッ！」

あまりの衝撃に放った優が後ろにのけぞった！
だが炎の玉は上手く発射されたようだ！

京目掛けて飛んで行く！
しかし、若干スピードが遅いか…！

「ふんッ！確かに凄まじい靈気を感じるが…！
当たらなければ意味はないぞ…！」

バツ！

京は余裕で上空に跳んで避けた！

「でしようね…。」

そう避けるように仕向けたのよッ！

「なに！？」

「弾けるッ…！」

優が叫んだ瞬間、巨大な炎玉が破裂した！
そして拳大のサイズの炎の玉が辺り一面に飛び出した！

「ぐうッ…！」

トトトトトトッ…！

上空にも向けて炎弾は飛び掛る！

京は炎の弾幕に襲われた！

ドサッ！

「はあ…はあ…」

（馬鹿な…！なんとという霊撃力だ…！）

あんな小さい弾の一つ一つに、あそこまで凄まじい霊気が込められていたというのか…！）」

「凄い…京は完全に…の属性霊気を全快にして防いでいたのに…それを貫いてダメージを与えた…」

凄い力だ……。

「うおおおおおおッ！！」

全力だああああッ！！！！！！」

黒い霊気が京を包み込む！

見る見るうちに髪の毛までが漆黒に染まって行く。

「く…！凄い……！！」

あれが本家本元の霊王化身なの…！？」

「殺すうづつああッ…！！」

バシユツ!!

京が弾ける様に飛び出した!

「!」

優が反応した頃には京の姿は目前まで迫っていた!

そして優の顔面に向けて京の掌が迫る!

スッ!

優は身をかがめ、なんとかそれをやり過ごした!

「!!!」

しかし、続いて下から突き上げるアツパーが襲い来る!!
ドガツ!!!!

優は自分の顎下に両手を置いてクッションに使ったが、
おかまいなしに京の強烈なアツパーが決まった!!

宙に浮く優の脚をすぐさま掴み、下に引っ張る!

優は勢いよく地面に叩きつけられた!

京の猛攻はまだやまない!

続けざまに優目掛けて漆黒の波動を放つ!!

ドッガーーーーーン!!!

凄まじい爆音を上げ、あたり一面の地面が吹き飛んだ!!

「…何処だ？今の攻撃で終わりじゃないだろう？」

辺りは土煙が立ち上り視界が利かない。

「はあッ!!!」

「ぬ!!!」

ドガンッ!!!

煙に乗じて飛び掛る優だったが、京の反射神経はそれを上回った！
死角からの攻撃にも関わらず、逆にカウンターを浴びせられる優！

裏拳が優の顔面を貫いた！

ドッガーーーーーン!!!

再び爆音が上がる！
吹き飛んだ優が岩壁に激突したのだ。

「くく！…俺は強い…！！」

土砂の中

「はぁ……はぁ……」

強い…！
あれが本気の京…！

余裕で倒せると一瞬でも思った私が甘かったわね…。
京の本気があそこまでとは…。

私の方は…
靈気の消耗は感じない…でも体力はそうでもないわね…。

傷は瞬時に治るけど…体が言うことを利かないし、反応も鈍ってる

…。
このままだとヤバイのは私のほうだ。

何か対策を考えなくちゃ…。

「…？」

まただ…力が溢れてくる感じ。

私の靈気の最高値がグングン上昇している。
最高まで高めた状態でも、時間がたつにつれ限界を超えて行く。

これって何なのかしら…？

靈気を上げ続けて行ったら…どうなるの？

「試してみるか…！」

はあああああああああッ！…！」

優は靈気を上げ始めた。

「…！靈気が高まって行く…。
くくく！そうでなければな…！
…！…？…どういうことだ…？
先程までの靈気を越えた…まだ上がっている…！」

ゴゴゴゴゴゴッ…！

優の靈気に反応して大地が揺れている。

「くっ…！…まだ本気ではないというのか…！？」

とあるビルの屋上

「…これは予想外の展開だな。
まさか”王の力”が覚醒したのか？」

「…だとしたら…あの子に勝ちは無くなっただんじやない？
あの力はそこらの怨霊・妖魔相手に使うような代物じゃない。
ましてや人間など」

「確かに凄まじい力ではある…が、まだ未完だろうな。
せいぜい…お前と同等程度の力だろうな。
亞砂^{あすな}」

「言ってくれるじゃないさ。
私をあんま甘く見ないでくれる？
いくらあんでも口が過ぎると…殺すよ？」

凄まじい殺気が男に向けて放たれる。

「冗談だ。本気にするな。
それよりも、移動するぞ。
奴らの戦いも、もうじき終わる」

「決着がつくってわけね。
どっちが勝つのさ？」

「決まっているさ…あえて言うことはないがね。
まあ、向こうについてから確かめるといい」

「けっ！天牙^{テンガ}のケチ野郎！」

二人はビルから空を飛び移動を始めた。

「く…まだ上がっている…!!
一体何が…!!」

ピタッ…

大地の揺れが収まった。

「止まった…」

スタッ…

優は京の目前に降り立った。

「!…お前…」

「さあ…はじめようか…」

優の雰囲気明らかに違う。

髪の色・目の色が薄い緑色に輝いている。

さらに額には見慣れぬ紋様が浮かんでいる。

そして体には靈気の衣のような、何か普通ではない光を纏っている。

「くっ…！そんなこけおどしッ…！！」

「食らえええッ…！！冥王波あああああッ…！！」

漆黒の波動が至近距離から優に向けて放たれる！
避ける素振りもなく波動は優に直撃した！！

ドッガーーーーンッ…！！

「ふん…！油断するからだ！馬鹿めッ…！！」

「馬鹿…？」

黒煙から優は無傷で姿を表した。

第51話 完

NEXT SIGN…

第52話 衝撃の結末

S I G N 二章 - S e V E N ' s D O A -

第52話 衝撃の結末

「…そ…そんな…！」

「馬鹿はあんただよ…緋土京。

この靈気を感じれば解るでしょ？

もうあなたは敵じゃない」

優に直撃したはずの冥王波。

しかしかすり傷一つ負ってなどいない。

「…く…！！馬鹿な…！」

こんな異常な靈気…存在するはずが…！」

「最後通告だ…負けを認め…

罪を償つと誓つんだ！そうすれば、これ以上あんたを攻撃しない」

「例え…勝ち目がなかつと…！」

俺は俺の選んだ道に後悔などないッ！！

殺すなら殺せッ！！」

「馬鹿：ツ！！なんで解らないのよッ！！
はああああああッ！！」

優の掌から物凄い波動が放たれた！
大人一人を丸々飲み込むほどの波動！

避ける間もない！

「…俺は…！」

ドッガーーーーー！！！！

辺り一面が光に包まれた。

「はあ…はあ………！
終わった………今度こそ本当に終わった」

優の変化が解けている。

全ての霊気・霊力を使つての一撃だったのだろう。

凄まじい一撃だった。

辺り一面が吹き飛んでいる。

市街地から離れていたのがせめてもの救いか。

「…あつちね」

優は吹き飛ばした京の元へと急いだ。

京は地面を抉りながら巨木のふもとまで飛ばされていた。
地に腰をすえる形で止まっている。

「…ゴホツ……………はぁ…はぁ……………」
まさか…この俺があんな小娘に…ボロボロにされるとはな……………。
こんなはずじゃなかったんだ…」

ザッ！

「はぁ…はぁ……………」
よかった…生きてる……………」

「お前の勝ちだ…白風優……………」
俺の全てを滅ぼすという邪悪な心は…
お前の皆を守るといふ強い気持ちには勝てなかった」

「…緋土京…もつと別のやり方はなかったの…？
こんな悲しいやり方…やっぱり駄目だよ」

「…わかっていたさ…」。

俺がこんな事をしても那由多は生き返らないし…
過ぎ去った過去は変え様がない…でも仕方なかったんだ…
俺にはもう…冷静な判断力よりも…
人間に対する怒り…憎しみ…それしか出てこなかった…」

優の目から一滴の涙が毀れた。

「…」

「泣いているのか…」。

一体なんの涙だ…下手な同情はいらない…
…殺せ…俺は罪もない人間を沢山殺した…！
もはや償いきれる罪ではない…」

「だからといって…私にあなたの命を奪う権利はないわ。
それに…たとえ権利があったとしても、あなたを殺すつもりはな
いわ…」

それじゃ私に力をくれた人を裏切ることになる…。
第一私は普通の高校生よ…？人殺しなんて…そんなこと出来るわ
けないじゃない」

「…そうか…ならば俺自ら…」

幕を降ろすとするか…」

そう言つて京が立ち上がろうとした…
その時だった。

「その必要はない」

『！！』

突然の声に優は振り返つた。

目の前には見た事のない男女が立っている。

「…誰！？」

「さあ…誰だろうな？」

今は貴様に用はない…後ろの男に用がある」

「緋土ちゃん負けちゃったみたいねえー！だつさあ」

「く…俺を始末しに来たというわけか…！」

「当初の予定とは随分狂いが出たようだな…京。
もつとも…それはこちらも同じだ。

”王”の復活のためにも貴様は生かしておくつもりだったが…

もうその必要が無くなった」

王の復活…？

こいつ等一体…何者なの？

特に普通の人間と大差ない…霊気もほとんど感じないし…。

でも…威圧感だけは感じる。

危なさも…。

「俺が必要なくなった…だと？」

「ああ。この女が変わりに封印を解いてくれそうだからなあ」

私！？

封印って何のことなのよ…！

「その女では無理さ…くく！

確かに恐るべき力があるのは認める…！

しかし、その女は貴様たちに協力するはずがない！」

「うむ。そうだろうな…まあ問題はないだろう？」

力は足りているのだから。

協力する、しない…やる、やらない等と…この女の意味などどう

でもいいのだ。

”やらせるからな”

ゾッ！！

優に鳥肌が立った。

凄まじいまでの殺気…！！

「とりあえずだ…俺たちがここに来たのは、貴様の始末ともう一つある」

その瞬間だった！

ドンッ！！

優が男に飛び掛った！

バシッ！！

「…く」

死角からの優の拳は男の人差し指一本で止められた。
しかも視線は京を向いたままだ。

「女…お前は大切な”鍵”の一つだ。
自分の力は十分に引き出せるようにしておけ」

男は指で優のから空きの懐をちよいつと押した。
その瞬間優の体が勢いよく吹き飛ばされた！！

ドッガー…ッ！！

木を二、三本へし折りながら、ようやく勢いが殺され、地面に倒れた。

「弱すぎ！何あれ！」

「そう言つな亞砂。
力を全て使い切っているようだからな。
さてと…遅くなったが死ぬ覚悟は出来たか…京」

「…俺が死ぬ事は構わない…！
しかし…俺が死ぬ事で…白凧優が背負わずにすんだ運命を…背負
わせるわけにいかん…！」

京は立ち上がった。

しかし、足元はふらふらだ。

「無理をするな…貴様程度が俺たちに勝てるわけがないだろう？」

「そうそう。京ちゃんは雑魚なんだからさ。」

死ぬときはアツサリ死にましょ？ね？」

「あいつは…あの女はこんな風になった俺のために泣いてくれた…
唯一の女だ…！」

俺に全ての罪を償えるとは思っていない…！しかし…せめてもの
罪滅ぼしだ…！」

貴様らを殺すッ…！」

京の靈気が上がっていく！

「きよ……京…！だめ…ッ…！
逃げてえええッ…！」

遠くから叫ぶ優の声は京の耳には届かなかつた。

「や…やらせるもんかあああッ…！…！…！」

その瞬間優の靈気が異常なまでに膨れ上がった。
先ほどの変身を遂げた優は男目掛けて駆け出した。

「！…ほう…！」

間近で見れば…確かに大した力だ。

だがやはり未完成だ。亞砂！」

「あいよ…！さっきのアンタの言葉…！」

私があいつと同等っての…改めて訂正させてやるぞ！」

亞砂が飛び出した！

「うあああああああッ！」

「きゃはっ！少しは楽しませてよ！」

ドッガーーン！！

二人が衝突した瞬間、凄まじい光が辺りを包み込んだ！

ポタ…ポタ…

「…ちい…!!…危なかつたじゃないの…!!」

「あ…あぁ……………」

亞砂の右腕が優の腹を貫いている。
逆に優の拳は亞砂の頬を掠める程度だ。

「馬鹿者め…下手をすれば死んでいたぞ…亞砂」

「るせえよ!これが結果でしょ!!」

「私がこんなシヨンベン娘に負けるかよ」

ズブツ!

優の腹から腕を抜く亞砂。
その拍子に優が倒れた。

変身も解けている。

「…で、どうしよう?」

「このままにしてたら、この子死んじゃうんじゃない?」

「そうだな。」

「お前が負傷させたのだ…責任を持って治療しろ。」

「この女が”鍵”の第一候補である以上…死なせれば……わかるな?」

「へいへいー」

「いや…待て。どうやら、こいつ等の仲間がそこまで来ているようだな。」

俺たちはさっさと、アイツを始末して引き上げよう。

丁度彼も来たようだしね」

ザッ…

突如倒れる優の前に姿を現した男がいた。

「…」

「…ゆ…勇君…！」

無事だったのね…！」

天城勇だ。

「…酷い傷だね…」

少し待っててください。あいつ等を片付けますから」

優の傷口を見て言うと、男たちの方へと歩みを進めた。

「だ…駄目ッ！…ゲホッゲホッ…はあ…はあ…はあ…逃げて…！
あなたじゃ勝ち目は…うう…」

体が動かない…ッ！

「心配ないですよ…」俺”は強いですからね

男たちに向かって駆ける勇！

ドスッ！！

「え…？」

勇が自らの手刀で突き刺したのは…

目の前の男…天牙でもなく…亞砂でもなかった。

「が…がふっ…！！」

心臓を貫かれて吐血する京。

「これで…よかったんですよね？天牙さん？」

「上出来だ」

「ど…どうして…どうして…！」

優が倒れながら吼えた。

「どうして…？何を言ってるんです？」

彼は元々俺たちの敵でしょ？」

「あなた…一体誰…！？」

勇君…じゃない…！」

「…その体で…あまり無理をすると死んじゃいますよ？
優さん？」

笑顔で返す勇。

「ふ…ふざけないで…！
あなたは一体…！」

「俺は…琉屍…勇君じゃないんだ。」

「ごめんね…くっく！あーっはっはっは！ー！」

「一体何を…言っているの…？」

「鈍いね君も…。」

俺は天城勇じゃねえっつってんだよ！」

！！

「そ…そんな…！」

「俺は、邪悪で呪われし者…人間でも妖魔でもない…。」

そんな俺は一度死に…その魂だけを”あるお方”に救われた。

そしてこの男の…天城勇の体を巢として俺自身の成長・回復と…この器自身の成長を待たっただけだ」

「…いつ…いつから…そんな…」

「てめえら…数ヶ月前にここ…緒斗の森へやってきただろ？」

その直前さ…くく！

それにしてもついていただけ…神谷だったか？

奴のおかしな術で…守護霊の霊気をモノに出来ただけじゃなく、器の…天城勇の魂までも始末できたんだからな！」

「そ…そんな…勇君は…もう…いないの…?」

「ああ。綺麗さっぱり…消えちまったぜ！
ひゃああっはっはっは！！」

「う…嘘…」

「絶望しろ…いい顔だ。

つと…長居が過ぎちまったみたいだな」

ザザザッ！！

現れたのは白凧茜、緋土綾芽の二名だ。

「こ…これは…一体…どついう状況じゃ…!」

「…!!兄貴…!」

綾芽はすぐに倒れている京に気づいた。

「…どつする?天牙さん。

全員殺しますか?」

「いや。奴らはまだ利用価値がある。

今失うにはおしいな。引き上げるぞ」

「んふ！またいずれ会う日まで人生桜花しなさいね！
んじゃねえっ！」

そう亞砂が言い放つと、天牙、琉屍の三人は姿を消した。

「…そんな……勇君が……」

勇の目から光が消えていった。

第52話 完 N E X T S I G N ……

最終話 閉ざされた心

SIGN 二章 - S E V E N · S D O A -

最終話 閉ざされた心

「優……！……これは……酷い傷じゃ……！」

茜は優の傷口に手を当てると急いで治療を始めた。

「死ぬな……ッ！死ぬでないぞ……！」

「兄さん……」

「綾……芽……か……」

「私よ……綾芽……！」

（！………心臓が貫かれてる……息があるのが不思議なくらい……！
でもこれじゃ……もう………）「」

「……すまなかつた……。
俺は……馬鹿な……兄だった……」

「もういい……！もういいから……喋らないで……」

「がはっ……はぁ……はぁ……。
最期に……お前に……会えてよかった……よ……。
お前に……渡すものがある……んだ……」

今日はフラフラと手を突き出した。
綾芽はすぐに両手でその手を掴んだ。

「何……？渡したい物って……」

「俺の……霊王眼……の……力……。
お前に……託す……」

「託すって……そんな事が可能なの？」

「……判らない……だけど……出来る……そんな気がするんだ……。
頼む……受け取ってくれ……」

京の目から光が消えていく……。

「兄さん……？……兄さんッ！」

「やっと……そっちに……逝けるよ………那由多……」

そう言うと京は完全にその瞳を閉じた。

口元には笑みが広がっていた。

「……うう………にいさああああああああん！！！」

綾芽の悲しみの詰った叫びが漆黒の森に響き渡った。

あまりにも悲痛な叫びだった。

茜は何も声をかけることが出来なかった。

こうして一連の戦いは幕を降ろす事となった。

最悪とっていい結末だった。

頭の何処かで

『犠牲者は出ない』

そう誰しもが思っていた。

しかし、結果的には神谷一騎が死に…
敵の首謀者である緋土京を死に至らしめるという結末をもって幕を
降ろす結果となった。

そして…

あの戦いから1ヶ月程が経過した

白凧家・客間

「皆お久しぶり。粗茶ですが…どうぞ」

お茶を運んできたのは白凧亜子だ。

「ありがとうございます。いただきます。

それにしても…こうして集まるのは…かみやんの葬儀以来だね」

菅谷浩介が言った。

「私たちは学校で顔を合わせる機会は…まあありますけどね。
白壁の菅谷さん達とは久々ですわね。
元気でした？」

皆が黙る中、重苦しく気まずい空気を夕見司が切り開いた。

「はい。僕らの学校も街も、政府の支援やボランティアのおかげで随分と復旧しました。こちらも以前と比べ、随分持ち直したようですね」

「聖先輩は生徒会長つてこともあって、随分頑張っていたのよ。
皆に指示を出したり、大人顔負けだったわ」

「ちょ…まりあ君！僕は別にそんな…」

「皆はどうなの？見た目は元気そうだけど」

不和彰人が聖ヶ丘メンバーに聞いた。

「…何時も通り…と、言いたいところだけど、
正直まだ心から笑える雰囲気じゃないんだ」

須藤が言った。

「じゃあ…まだ彼女は…」

「ええ…。まだ引きこもって出てこないわ。

あの一件以来…酷く落ち込んだみたいですよ…」

聖の確信を持った問いに司が答えた。
どちらの表情も曇っている。

「無理もないんじゃないんすか？
勇が敵についちまったんでしょ？」

「おい瀬那っ！」

瀬那稔が口をついた瞬間に日下部新一が語気を強めて言った。

「…まだそうとは決まっておらんよ。
それに…彼は…本当に天城勇だったかも怪しい」

茜が言った。

「でも…
去っていく敵らしき奴らと一緒にいたのは見たんでしょ？
本物の勇じゃないってどういう事だよ？」

片桐が質問した。

「優からはあの場の話はいまだに聞けていないから…確証はないが…。
おそらく守護霊に体に乗っ取られたか…あるいは、それに類する
何かに陥っているか…。
私はそう睨んでおる。

…あの感じ…：…普段の彼ではなかったように感じたからの」
「何にしても姿を現さない以上…判断できないし、
論じるのも無駄だわ…」

鹿子流華が言った。

「何か手がかりみたいなものはないのか？」
「あの事件以降目だった動きも事件も発生していない。
この辺りだけじゃなく、日本各地を探ってみてるけど…僕のデー
タ収集では何も掴めていないよ」

岡島大樹の問いに椎名一が答えた。

「とにかくじゃ。」

日本全体の規模に至らなかつた事だけは不幸中の幸いじゃった…。神谷殿の事は悔やみきれないし…感謝しつくせぬ。

生き延びた我々が彼に対して何かしてやれるとすれば…

彼が命を賭して守つたこの国を…これからも守り抜いていくことじゃな。

それがせめてもの彼に対する手向けじゃろう…」

「そうだな…。」

バアさんは…いや、他の皆もだが…、

やっぱり脅威は完全に去つてないって考えているんだよな？」

「可能性はある。」

あの状況から察するに、逃げた二人と勇君…いずれかが緋土京にとどめをさした。

何があつてそうなつたのかはわからん…が、少なくとも何らかの繋がりがあったと考えるのが

妥当じゃろうな…。」

敵か味方か…そこもまだ確信を持てん。

じゃが、緋土京を倒したという事実は間違いない。

つまり…それだけの力を持つ者がいるという事じゃ…」

「もし敵であれば…それは今まで以上の脅威ですね…」

聖が唇をかみ締めた。

「今回の戦いで俺たちがいかに非力だったかは身にしみた……。いつ来るか…本当に来るか…それさえもわからない脅威だが、修行しておいて問題はなさそうだ…俺はやるぜ！
こんな惨めで悲しい思いは…もう沢山だッ！」

須藤が自分の拳を自分の掌にぶつけて言った。
神谷のことで相当に自分を責めているようだ。

「須藤…」

「まあ…おぬし等はまだ若い…今は学業が本分じゃ。
そちらを疎かにしてはだめじゃぞ？」

「わかってるよ…でも…！」

「須藤…お主の気持ちは判るが…私ら大人の力も
もう少し信じてくれんかの？」

「バアさん…」

「今回の一件で緋土家や九鬼家など、他の四家とも協力をしなければならん事を

痛いほど判らされた。意地や体裁など気にしておるからこのような結果を招いたのじゃ…。

私は立ち上がるよ。

だから…頼む…もう一度私ら大人にチャンスをくれないか？」

茜の言葉に黙って頷く須藤。

「あ！そう言えば葵さんと和馬さんと由良葉君から手紙が届いてたんだったわ！」

亜子が急いで手紙を取りに行った。

「あいつ等元気にしてるのかな？」

「はは。元気だけが取り得の連中だ。心配ないさ」

須藤の問いに笑って答える片桐。

「帰るといえば、あなたは帰らないの？流華」

「帰らないわ。まだ胸の支えもとれてないしね…。

何より…この街も…この連中も……す、好きになっちゃったのよ」

クスッ

司は笑みを浮かべた。

「な、何よ！悪いの！？」

「ううん……。あなたも可愛い所あるなって思ってね」

「ポチ…あれが”シンデレ”という奴らしいぞ。覚えておくといい」

「へえ…シロは物知りだなあ！」

「くらあッ！…そのフワモコ二匹！

今何が言ったかしら？だ・れ・が……シンデレですって？」

ぬいぐるみのシロとポチに立ちはだかる流華。

「ひいー！」

『あははー！』

逃げ惑う二匹、追う流華、笑う仲間たち。

そんな声を、遠く…自室から聞く優。

コンコンッ！

「優入るわよー」

亜子が優の部屋に入った。

「やだ！相変わらず電気消して…
もう夕方よ？電気つけなきゃ」

「やめて…！」

暗闇の中、声を上げる優。
ベッドの片隅に座り込んでいる。

「放っておいて…！」

「優……皆来てるのよ？」

「知ってる…！」

「会わないつもりなの…？」

「うん…！」

「なんで…？どうしてなの？」

「お姉ちゃんには判るでしょ…。
大切な人を失う気持ち……………」

「勇君の事が……………」

亜子はゆっくり優の隣に座った。

「…もう嫌なの…。
…信じて裏切られるのも…置いていかれるのも…。
…皆大切な人は私の前から消えちゃうんだ…私を置いてきぼりにするんだ…」

「…大丈夫…皆はそんな事しないよ」

亜子は優の頭を撫でながら言った。

「…怖い…失うことが…
…大切なものを失うことが…こんなに辛く悲しいことだなんて…判らなかつた…。
…もう誰も失いたくない…！でも…私の力じゃ…何も守れない…
…何も変えれない…！」

「そんな事はないわ。
あなたの頑張りがあつたからこそ…救われた命もきつとあるはず
よ」

「ごめんね…お姉ちゃん……。」

私、まだ笑えない……皆と一緒に…楽しめないよ……」

「優……。」

わかつたわ……。けど一つ覚えておきなさい。

あなたは一人じゃない。仲間がいる…家族もね。

だから一人で抱え込まないでね」

「うん……」

「じゃあ…行くね。

手紙持っていくね」

ガチャ…

亜子は部屋をあとにした。

判ってる…。

こんな事してたって何も変わらない。

逃げてるだけなんだって。

でも…

まだ私には全てを受け止める事が出来ない。

無理をしてみれば…壊れてしまいそうだから。

勇君…君がいないんだ。

いつも受け止めてくれる君がいない。

だから…怖くて…壊れて自分を見失うのも怖くて……私は…一体どうすればいいの…？

『優…』

！

…司の声だ。

『こうやって部屋の外から声をかけるの何回目かしらね。

この1ヶ月…何度かこうしてあなたに会いに来たけど…今日で最期にしますわ』

え…？

『あなたは私のライバル…白風優よ。
私の知っているあなたはこんな事に入こたれるような子じゃない
ですわ』

…。
違うよ司…私は弱い…。

あなたのいうような…強い子じゃないわ…。

『あなたを信じて待ちますわ…いつまでも。

だから…ゆっくり休んだら戻ってきなさい。

ま、私はどんどん先に突き進むんで…あんまりのんびりはしない
ことですわ…

そ、それじゃあ…失礼するわ』

涙声でそう言うと、司は去っていった。

司…ありがとう…。

気持ち伝わったよ。

「駄目だったか？」

須藤の問いかけに司はこう答えた。

「ううん…きっとあの子は立ち上がりますわ。

誰の力でもなく…あの子自身の力で！

それが私のライバル…白凧優よ」

「そうだな…。待ってるぞ…優」

こうして厳しい戦いは幕を降ろした。

これから後…しばしの安息が彼らに訪れる…。

もちろんトラブルは絶えないのだが…。

それはまた別のお話。

次章『SIGN 二章 - GHOST BREAKER - S -』へ
続く…

最終話 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3238i/>

SIGN 二章 - SeVeN's DoA -

2010年10月9日10時36分発行